
超心理的青春

ryouka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超心理的青春

【NZコード】

N0675D

【作者名】

ryouka

【あらすじ】

ある双子のもとに超有名進学校の推薦入学の誘いがきた。2人は入学することになるのだけれど、その学校には日常ではありえないクラブが存在するのだった。

その1 始まる以前（前書き）

高校に入学してからと「うもの、ろくなことなんてない。何が有名進学校だ。裏を開けてみればこの通り、命の取引を繰り返す日々だ。

今だつてこんなこと考へてる場合“じやない、鳴り止まない銃声、張り詰めた空氣、弾薬の匂い。ここにいると、この国が平和を唱えている”ことが嘘のように思えてくる。もつすぐ僕は死ぬのかもしれない、天照もはぐれてしまつたし、他のみんなはどうなつたか知らない。探そつと思えば超心理の加護で見つけるんだろうけど、もう疲れたよ。この1年、僕は何をしてきたんだろう。死ぬ前にそれくらいは知りたいよ。

那実、お前ならこの状況どうする？

その1 始まる以前

僕、伊佐^{イサナギ}雑はもつすぐ高校生になる。

現在、中学3年生で、まさに今、高校生になるために受験校へ双子の兄と向かっている。

その学校は日本でも有名進学校で、普通に考えれば僕たちが受験するようなところではなかつた。

1ヵ月前のある日、封筒が届いた。送り主は「京都文化芸能大学付属高校」文章の内容はこんな感じだつた。

「あなたを『特別能力開発学科』へと推薦したいと考えています。もし進学校を決定していないのであればこちらにご連絡ください」とのこと。

いきなりのことだつたので、わけがわからず、双子の兄である那^ナ実に相談することにした。名前は女っぽいけど、どこから見ても男である。外見内面どちらから見ても、双子の弟の僕が言うんだから間違いない。

「那実、ちょっと相談があるんやけど」僕がそういうと、いつもより速く反応して、「俺もや、ちょっと聞いてくれへん?」

那実から相談とは珍しいことだ、いつたいどういう相談? 恋愛方面は勘弁で。

「雑に恋話しても無駄やろ」悔しいけどその通り。

「もつと別なことや・・・進路のこと」もしかして、那実にも同じ封筒が届いたのか?

「京都文芸高から封筒がきたんやけど」やつぱり。どういう偶然だろ、話にしては出来過ぎてるし。

「おかしいな、僕にも届いたよ。その封筒」

「そりやびっくりだ。で、どうする?」那実はどうするんだ?

「俺は一度高校に連絡するべきだと思つけどな」まあ一般論だね

「で、どうこうつもりか聞かなかん」

早速を電話するべきだと思い、部屋に取りに行こうと思つと、那

実がもう通話中だつた。相変わらず行動が早い。僕が遅いだけか？

「もしもし、京都文化芸能大学付属高校でお間違いないでしょ
か？ ハイ、特別能力開発学科について封筒が届いた伊佐那実とい
います。なぜ僕に推薦の封筒を送つてきたのか気になります……

ハイ、……ハイ

どうしたんだろ？ さつきから「ハイ」しか言つてない。

「ちょっと待つていただけますか？ ……電話中や黙れ！」

そんなに怒らなくともいいだろ。早く通話が終わればいいのに。
内容が気になつて仕方ない。

「わかりました。そちらから伺つていただけるならうれしいこと
です。では後日、ハイ、お手数かけました」

那実の中途半端に丁寧な敬語がやつと終わつた。こいつがこんな
話し方すると虫唾が走る、半音高い声も。

「今度の土曜日、家まで来てくれるやつて

「どうこう」と？

「俺が、詳しいことを聞かせてくれ言つたら、電話ではなんの
でこちらから伺わせてもらいますやで。親にも話があるよつやし、
それが手つ取り早いと思つて。これでええやろ？」

確かに来てくれるなら、それにこしたことはないけど。

「お母さんに言わなあかんのちやうの」

「そうやな、土曜日に推薦校の先生来るから空けとけつてな。俺
が言つといたるわ」 そう言つと、封筒を持つて、うれしそうに駆け
出しながら、母のいるキッチンへと向かつて行つた。

何故、あんなにも楽天的なんだろう？ 裏があるようにしか僕に
は思えなかつた。

「京都文化芸能大学付属高校」略して「京都文芸高」は日本でも
指折りの進学校で、毎年、東大や阪大、京大など、偏差値の高い大
学にたくさんの生徒が進学するような高校である。そのような高校

に何故、僕のような特別勉強が出来るでもない、運動で田立つた活躍もない、芸術の才能に秀でたわけではない、のに、どうして推薦が来たのだろう。

特別なことは、人とは少し違う境遇で育ってきた、ということだけだ。

じぱらぐして、お母さんが慌しくノックし、返事をする間も無くドアを開いた。

「あんた京都文芸高から推薦つて凄いやないの…… 今日ははい」駆走や「そう言つとすぐドアを閉め、一皿散で買い物へ出かけていった。

母も浮かれ気味のようだ。那実も受験勉強をしないで高校にいけるので、上機嫌である。僕はといつと少々不安だ。上手い話には裏がある、そういうことだ。

回転寿司にしても安さの理由は奇形魚やその類であり、安い野菜のほとんどが中国産だ。何事もなればそれで良いのだけど……。そう思いながらも、久々の駆走に舌と腹を満たしたのは事実だった。

けれどいのときはまだ思ってもよらなかつた、そのよつな類の学校が本当に存在するところといひ。

その1 始まる以前（後書き）

「始まる以前」を読んでいただきありがとうございます。

第一章は伊佐兄弟の過去のことを重点に話しを進めますので、知りたくなれば第一章（その8）に飛んでいただいてもらつても結構です。気になればまた見返してもらえればそれでうれしいです。

もしよろしければ、小説の評価をいただけるとうれしいです、どんな適当な言葉でも良いですので、それがわたしのやる気に繋がりますので。おねがいします

その2 日常と非日常を分ける土曜日

そして土曜日になつた。

僕の心理状態といふと、初めは不安だつたけどやはり根は楽天的なのだろう。すぐに良い方向へ心を転換させていた。おめでたい深層心理だこと。

太陽が空の天辺で止まつたよつた午後についに訪れた。「ピンボーン」「ふざけたチャイム音と共に」。

お母さんは丁寧にドアを開け、深くお辞儀をしリビングへ案内した。京都文芸高の先生と思われる、その女性は長身でスラッシュしたモデル体系で、黒いストライプのスーツがよく似合つ、教師にしておくにはもつたいたいほど綺麗な人だ。後ろに束ねた髪型がまた似合つてゐる。

僕たち兄弟は話を聞こうと思い、一緒にリビングへ向かつたが、その綺麗な先生に、「先にお母さんと話をするので、君たちは部屋に戻つてくれるとうれしいな」

とまるで幼児を扱うかのような口調で、（今思つと腹立つけど）そのときはこれ以上に丁寧な言葉で、それでいて優しい発音はあるのだろうか、と感じてしまい考えることもなく、僕らは部屋へ戻つて行つた。

それから20分が過ぎ、ようやくお母さんがリビングの扉を開ける音がかすかに聞こえた。

「お母さん買い物行つてくるから、その間に先生の話を聞いときなさい」

そう言つと、まるで鼻歌が聞こえてきそうな歩調で買い物へ出かけていった。どれほどの好条件だつたのだろう？ 余計に不安がよがる。

そして、待つてましたと言わんばかりに那実が口を開いた。

「いきなりやけど、何で俺らをそんな進学校が、推薦までして欲しがるのか理由を知りたいな」やっぱり気になつてたんだ。

「推薦する理由?」

初めて聞いた優しい声質とは違つた。

何が変わつたといわれても良いにくいけど、声に深みが増したといえбаいいのだろうか。

「もちろん、嘘はナシや。まあ時と場合によるけど、今は真実を語るときや」威勢良く、胸を張つてそう言つた。まるで演劇会のバ力な王様役のように。

「では、話すとしますか」

深く息を吸い、吐いた後、ドラマのワンシーンのようなマシンガントークが続いた。

「この間、学校でIQ測定をしたわよね。学校からの通知では那実さんは110で雑さんは103で したよね。しかし本当のところ、2人共IQが170を超える天才なワケ」

どういうこと? 僕らは凡人じゃなくて、天才だつたつてこと?

「あなた達に受験してもらおうと思う『特別能力開発学科』では、そういう、『超』の付く天才を集めているの。実際はIQ170以上の人間なんてほんの一握りだからね。あたし達の学校は、国からの指示を受けて『特別能力開発学科』を作成したの。基本的にどんなことをするかというと」

ここまで来てやつと説明に入るのか、よく喋る女だ。

「簡単にいうと『アイデアマン』を作る学校ね」

やつと、合いの手を入れる間を与えてくれた。

「アイデアマン?」

15歳にもなつて「いないないばあ」されたような顔をして那実はそう言つた。

「いつだってそう、歴史は一人の天才によって動かされてきたわ。簡単にいえば天才的なアイデアや発明が必要だつたの。そういうの

は結局みんなの力ではなくて一人の力でしょ？ それを鍛える学科なの」

確かにそう言わると、その通りだ。もしエジソンがいなければ、ここまで便利な生活は出来ただろうか？ 坂本龍馬がいなければ、今の日本はなかつたかもしれない。

「現在の日本では、偉人と呼べる人間はほぼ皆無で、本当にバカな人間が増えてきましたわ。そこで国が危機感を覚えて、我が校にその学科を作ることにしたの」

那実が戸惑いを含んだ表情で、「なんでIQが高いことを隠したことですか？ 別に本当のことを教えてくれればよかつたじゃないですか」

確かにその通りだ、なぜ嘘の結果発表をしたのだろう。

「IQ150なんて、実際にいれば凄い問題になるの、週刊誌に載つたりTVに映つたりするかもね。そういう危険性を考えて、えて嘘を表記したのよ」 そんなに高い知能指数を僕達は持っているのかな？

でもそれほど希少価値な人間が1クラス作れるほどいるのだろうか？

「今のところ、この封筒を送つたのは17人よ。ちなみに毎年約20人ほど入学者はいるわね。今年は少し不足みたい。」

そつか中学校みたいに何人以上いないとダメとかじゃないのか、義務教育じゃないもんね。

と頭の足りないことを考えていると、那実が入学を決めたような顔で質問した。

「寮とかあるの？ 学費とかも免除なんかな？ ほら推薦やろ」「えらく現実的な質問だな…。

けれど、確かに一番重要なところだ。僕らの住む町から京都文芸高は電車で約2時間程かかるし、通学には不便だ。

すると、待つてましたといわんばかりのセールストークにも似た口調で話し始めた。

「もちろん学費も免除よ、ちなみにこの学科は全寮制だからね。お金の心配は無用！ 国民の血税から頂いてるから、君達がお金の心配をするのはお小遣いだけよ」

そりゃお母さんも浮かれるわけだ。2人同時の入学は経済的にかなり負担だし、つるさい息子2人が出て行くし、最高じゃないか。おまけに超一流進学校。おまけとしてはでかすぎるけどね。

まあ、ただひとつ気になるのが税金にお世話になるつて口づくらいか。

一通り話を終えると母が帰ってきた。

「じゃあ、私はこれで失礼します。あなた達が我が校の門をぐぐるのを望んでいるわ。それじゃあまたね」

「またね」の言い方がまた幼児のように扱われている感じがしたが、なぜか心が和らいだ。

玄関で母とすれ違ひ様、少し会話をして「おじゃましました」と深くお辞儀をして京都文芸高の先生と思われる女性は帰つていった。

そういえば、名前とか聞いてなかつたなあ。

と思うと机の上に上品な名刺が置いてあつた。どうやら和紙で作られてているようだ。

「京都文化芸能大学付属高校 特別能力開発科教師 沖田馨」

その沖田先生が帰るとき、すれ違ひに何を話したのか気になつて、お母さんに聞くと、「せっかくだから、晩御飯を食べて帰りなさいつていったのよ。まだ仕事があるので、つて断られちゃつた」

そりゃ断るだろ。初対面でしかも仕事先で、飯をじ馳走になれるわけがない。そうお母さんに文句を言いながらも、僕の脳内は京都文芸高でいっぱいだった。

その2 日常と非日常を分ける土曜日（後書き）

「日常と非日常を分ける土曜日」を読んでいただきつれしいです。

見切りをつけないでその3も読んでいただけるコトを願います。

沖田先生はいかがでしたか？

もしよろしければ評価をお願いします。

その3 青天の霹靂の雑

沖田先生が来た日の事を思い出しながら、電車は京都へと向かう。

今は2月、ハツキリいって寒いとしかいいようがない季節だ。

寒いのは嫌いだけど、冬の凜とした空気は好きだ。隣に座る双子の兄弟の那実はどう思つてるか知らないけど。

忘れるかもしれないけど、僕と那実は受験校である京都文化芸能大学付属高校へと向かう途中だった。

何だかんだ言つて、僕も受験勉強をしなくて良いといつ楽な道を選んだのだ。

クラスにいて思つたけど、あのピリピリした空気はなんともいえないものだ。あんなつてしまふのなら、少々危ういけども超有名校に推薦入学した方がましだと考えた。

まあ言い訳だけど。

駅から徒歩10分。京都文芸高は驚くべきところに所在した。

あの世界遺産、東寺から直径200mにあるのだ。ハツキリいつて丸見えである。こりや寺マニアとかにはたまらない学校だ。僕はマニアじゃないけど。

京都文芸高は、校舎も変わつていて、おそらく周りの景色に溶け込むためか、和風で、寺や神社のような形をしていた。簡単にいえば3階建ての平寺院鳳凰堂みたいなやつ。10円玉に書いてるアレね。校内もやはり変わつていて、坊さんになつた気分がする。でも制服は普通の学ランとセーラー服だった。

そんな校舎なのだから、迷つてしまふかもしないと不安に思つたけれど、面接をする教室の案内図が貼つてあつたので簡単にいけることが出来た。

教室の前には、数人の生徒が座つていた。特に緊張の面持ちは無

い様に見えた。僕もそれほど緊張してない、落ちる事の無い受験だと知っているからだ。

推薦なのに落ちるわけがないよな、ただの顔見せ程度の面接だろう。

今日の予定は、先日送られてきた「推薦入学者受験日予定表」に記させていた

（午前9時30分面接開始、それを終えると健康診断を行い、午後からは保護者説明会を行う）

学力テストもなしが……。本当にエ〇〇が高くてだけで合格なんだな。でも健康診断はするんだ、まあそういうことしないと保護者とかうるさいしね。

面接はなんてことはなく、中学の思い出や、この学校の印象を聞かれただけだった。面接の先生はフランクな方で話しやすかったし、沖田先生の姿もその中に見えた。あまり話してなかつたけどね。

そして健康診断へ那実と共に向かった。そこで身長、座高、体重、内科検診、心電図、脈拍、採血、最後に最近この近所で流行っているらしいインフルエンザのワクチンを打つてもらい、健康診断を終えた。

午後から行われた保護者説明会の内容は、先月、沖田先生が話してくれた内容に、この学校の校風などの説明を付け足したものだつた。知らない間に、ここ最近で最も強い眠気に襲われて眠ってしまった。

目覚めた頃にはもう終わりかけで、お母さんに、「兄弟そろって寝てるんちゃうわ」と吐き捨てられた。

那実も寝ていたのか。そりや一緒に話を2回も聞くと眠くなるよな、そこまで興味もないし。

4月まで用のなくなつた、これから我が母校になる京都文芸高を一瞥して、こんな変わった校舎もありだと考えていると、どこかで見たようなやせ気味でちょい幸薄そうな顔の中年男性が前から歩い

てきた。

やけに田に付く人と考えるのは当たり前で、この中年男性は今日の面接官だった先生だ。確かに名前を本居って言つたつけ？

「わようなら」と挨拶をしようとする刹那、その声はまるで底のない沼のようで暗く、僕達兄弟にとって最も聞きたくない、日常会話で使用する頻度は0に等しいその言葉は、僕の心臓を打つ脈よりも確かに鼓膜に響いた。

「腹違ひの双子」

その3 青天の霹靂の雑（後書き）

「青天の霹靂の雑」を読んでいただきありがとうございます。
その3まで読んでくれてうれしいです。

このタイトルは「青天の霹靂の素」だったんですけど、「その4」
が「那実」と言つことなので、「素」から「雑」に変更しました。
もしよろしければ、小説の評価をお願いします。
指摘などでもうれしいです。

その4 青天の霹靂の那実

眠い……。

すっかり寝息をたててしまつた保護者説明会のせいで、頭がボーッとする。そんな眠気眼の脳みそにも、この状況は理解できた。と、いうより肌で感じたと言つた方が良いだらう。その空氣の違いに。いつも温厚な雑が凄い形相で睨みつけている。

その辺にいる不良のメンチが微笑みに思えるほどだつた。誰を相手にそんな目つきで見ていいるんだ？

どうやら相手は今日、面接官をした先生だ。名前はなんだっけ？ そんなことはどうでもいい、おかんがおる前でそれはあかんやろ。てか何でそんな怒つてるんだ。こいつ尋常じゃない顔してるぞ。

「やめる」と声をかけようとすると、かすかに雑の声がした。

「誰に聞いた」

何を？

「何でそんなことをお前が知つてる」

だから何を。

意味不明な問いを受けている先生を見ると、不敵な笑顔。

その瞬間、一気に目が覚めた、というより脳みそが目覚めた。もしかして、あのことを言われたのか？ 先生の顔はそのことを物語ついているかのようだつた。

雑が先生の腕を握るうとした瞬間思わず声が出た。

「おい！ 雑、どうした」

その声に我を取り戻したよつて、雑は自分の手を制服のポケットに入れた。

よく見ると体が震えている。

「先生、俺ら兄弟に何の用や」

このおっさんが何を言つたか多少の予測は出来るけど、何故この

タイミングで言つたのだろう、そして何故この事実を知つてゐるんだ。考えすぎた脳みそに、普段映らないような美人が映つた。ああ沖田先生か。

「すみません伊佐君。本居先生！ なんで言つたんですか！ 取り返しのつかないことを……」

すごい勢いで走ってきて、すごい勢いでキレる沖田先生に圧倒された。当事者のおっさんはまだへらへらしてやがる。

待てよ、このことを何故、沖田先生が知つてゐるんだ？

「沖田先生は何故このことを知つてゐるんですか？」

と質問をしたと同時におかんがこっちに歩いてきた、いつまでた

つても進もうとしない双子に注意と、先生にあいさつを、つて所か。「はよせなバス行つてまうやないの。先生、これからお世話になります。ほら行くで」先生に軽くお辞儀をしながらおかんは、俺ら二人の手を引いた。

この歳になつて手を引つ張られると思つてもなかつた。耳元で難に問いかけた。

「偽者つて言われたんか」

「よう似たことや…。腹違いやで」

もう一度と言いたくないという言い方と、これ以上ない無表情に、その先の話はしなかつた。

後ろを振り返ると沖田先生が100人中90人がわかるようなジエスチャーで「ごめんね」と「電話します」をしていた。にしてもその姿が可愛い。

俺が手を振ると、優しく手を振つてにっこり笑つてくれた。惚れても良いですか？

何とか、あかんにこのことは悟られることがなく、事なきを得た。

それだけでも十分だらう。

それだけは俺達も避けたかつたことである、本当に。

この学校の推薦を取り消されることよりも避けたかつた。

それにしても、学校に行つてからやけに体がだるい、色々ストレスもあつたんだろう、雑もあれから全くしゃべつてない。聞いた言葉は「いただきます」くらいだ。「うかがひされめ」も言えての。もういいや、大分早いけど寝よ。

その日の夜、留守電に沖田先生からメッセージが入つていた。
「明日の5時、駅前の喫茶店でまつてます」と。

その4 青天の霹靂の那実（後書き）

「青天の霹靂の那実」を読んでいただきありがとうございました。

那実くんはいかがでしたか？変な奴、設定なんんですけど・・・伝わってるかな？

でも意外と常識人だつたりします。

もしよろしければ、あたしへの褒美として小説の評価をしていただくとうれしいです。

その5 水も滴るいい女は沖田櫻

留守電のことを那実から聞き、朝から少し憂鬱な気分になつた。そら見る、こいついう日に限つて雨が降る。

雨は嫌いだ。なんといっても気持ちがどうしようもなく暗くなつてしまつ、それに僕のテンパが余計激しくなる。

気分の盛り上がらない学校は、時の流れを遅くする効果があるらしく、登校3日分の疲労感が降りかかる。その上、あの怪しげな学校の先生と会わなければいけないとは、正直しんどい。昨日、あんなことがあるんなら、あの道は通らなかつたし、面接にも行かなかつたのに。

未来はいつも僕の期待を裏切る。早くタイムマシンが出来れば良いのに。

それはどんな想いよりも切実だ、好きな人に好きと言えないもどかしさに似ているかもしれない。

「タイムマシンなんか完成したら、世界は終わるで」

そんなことないだろ？ 未来がわかればどんな災いも未然に防ぐことが出来るんだ。これほど素晴らしいことはない。

子供を見るような目で那実はこいつを、「そんなん作つたら、みんな自殺するわ」

何を言つてるんだ？ 人を救つのになんて自殺しちゃうんだよ、わけがわかんない。

そんなことはいいとして、遅い。待ち合わせをした当事者が遅れるとはどういうことだろ？あの先生は本当に。まだ綺麗だから良いものの、もし森三中みたいな不細工だつたら、説教してさつさと帰つてやるのに。

「森三中やつたら帰つてるわ」と那実が鼻で笑つた。

たしかにそうだな、ここに来た理由は第一に先生を見ること、その次に昨日の話をするために来たんだから。まあ僕は第一に昨日

のことだけだ。

それにしても本当に遅い。猫舌の僕だけど、コーヒーを半分は飲み終えた。那実は一杯目を注文しようとしている。

すると、「ガシャーン」という破壊音と共に、髪と足元がかなりの速度を誇る美人が現れた。誰か言わなくともわかるだろう。

「ごめんなさい、遅れた」

そんなこと言われなくても、時計を見れば遅れた事はわかる。にしても良い大人だなと思った。どうしようのない大人なら、ここで謝らずに言訳から入るだろう。一応礼儀として遅れた理由を聞いておこう、肩で息をしたからには、相当急いできたんだろう。責める気はないですよ。

「学校でトラブルが起こっちゃって、でも急げば時間には間に合いそうだったから連絡しなかったの、でも駅までついたら道に迷っちゃって」

いやいや、道に迷うって、ここ駅前だから。迷う意味がわからないし、ここに来いって言ったのは沖田先生だろ？

「わたし、ちょっと方向音痴で、一度来ただけじゃ道を覚えられないの」道を覚えるとか方向音痴とかそういう問題じやないだろう。この人とともに話は出来ないな。

さつさと事を済ませたいので、昨日のことを聞いてみる。僕が聞くんじゃなくて那実が聞くんだけど。

「昨日のことなんですけど、あれ……、先生が僕達に対して知っていること、全て言つてもらえますか？」

「でも、ここは人が多いし」

確かに人が多い、ここのお店はコーヒーが美味くて有名だから、いつも結構込んでる。その上、今日は雨で、家からの迎えを待つたサラリーマンや高校生でにぎわっていた。

「いけますよ、こんなに人がいて騒がしかつたら、俺らの声なんて聞こえてませんし」

逆転の発想か

「そうですか……では、あの、話しますね」 そう言つておどおどする沖田先生は小動物みたいで可愛い。

「あの……あなた達2人は、本当は双子じゃないってこと、お母さんが違うのよね。那実さんのお母さんは今一緒に住んでいる人で、雑くんの母さんは産んだ後亡くなつて」

そして大きく息を吸つて、唱えてはならない呪文のよつて、僕達に聞こえるギリギリの声量で話す。

「たまたま同じ日に生まれて、顔も似てることで、親戚が双子だつて勘違いしたのが始まり。あたしが知つてるのはここまで。あつてるかな？」

意外とよく知つてゐるので正直驚いた。でも、僕らが産まれた頃のことしか知らないのか。

「他に聞きたいことありませんか？」なぜか半泣きの沖田先生がそう言つた。

何で泣きそうなんだ？ 僕達の話つてそんな可愛そうか？ といふかここで泣かれるのはまずいんだけど。ファッション雑誌から出てきたような美人が双子の中学生に泣かされている図を想像する。思つた以上にやばい。

またそうやつていらないうことを考へてゐるうちに那実が結論を出した。

「ありがとうございます。これでスッキリしました」

それは誰が聞いてもスッキリ、といふる声質だった。那実はこのとき炭酸飲料を越えたね。

「よかつた……」

カウンターに千円札を置いて、慌しく、帰る用意をする沖田先生。もう帰るのか？ 来てから二十分も経つてないよ。

「ごめんね、学校にまだ仕事残してるの。ここはあたしのお GIRL にするから、今日のお礼も込めて」

そして口元に人差し指を伸ばした仕草で、「それから今日のこと

は絶対秘密。お願い」

おそらく、その仕草と話し方で秘密をバラす男性は世の中にいない。それくらい素敵だった。

そうやって一度店を出た沖田先生が、すぐ戻ってきて、出入り口付近から、思い出したといわんばかりの大声で、ひとつと書いて帰つていった。

僕達は沖田先生が帰つてからもしばらく話を続けた。内容はもつぱら、沖田薫が最後にした可愛らしい仕草についてだった。でも気になるところがある。

先生が最後の最後に慌てて叫んだひとつと、先生からすれば結構重要だと取れる言葉だと思う。那実に聞いても意味がわからないらしい。

「ヤギにはならないでね」

その5 水も滴るいい女は沖田薰（後書き）

「水も滴るいい女は沖田薰」を読んでいただきありがとうございました」といふやうなま

す。

その5まで読んでくれて、あなたはすっかりはまつてゐる気がします。
そのままの思いでいてくれるところが嬉しいです。

沖田先生のことを見つめたりすることを考えた話です。

もじよろしくれば、小説の評価をお願いします。

その6 伊佐兄弟の過去

喫茶店の帰り道、まだ雨は続いていた。

空は田中よりさらに暗くなり、気温も下がり、雨が肌に当たり、いつもより寒く感じる。風に肌を引っ掛けられながら、歯を「ガタガタ」幼児のように震わせながら、家路へ向かう。

沖田先生に過去の話しこそしたせいで、脳内を巡るのはあの日の事ばかり……。嫌な日には、嫌な思い出が泡のようになに溢れ出す僕の性格を恨んでみる。

恨んだって何も変わらない、僕の性格も、今日のことも、そして過去のこと。

僕の唯一の肉親である父が亡くなつたのは今から六年前。

父は家に帰ることがめつたになく、1年に1度帰つてくれれば良いほうだった。幼い頃からずっとなので、僕達は顔も覚えていない状態だった。そんな父が、家にいることの方が不思議で、特別番組のような頻度の一家団欒も、家族が揃つたといつに居心地はよくなかった。

彼はもう父とは呼べない存在だつたのかもしれない。家族とも。

帰つてこない理由を幼いながらの僕は、お母さんに聞いかげたときもあつた。さすがに年に一度しか帰つてこない父親は不自然だか

う。

理由は仕事が忙しいから、それだけしか言わなかつた。

お母さんはその話しさをすると、どこか寂しげにうつむき微笑む。

僕は本当に仕事なのか疑つていた。でもそれ以上は聞けない。お母さんを悲しませることは、牢獄に入れられるよりも重罪に感じていた、まあ言えば死刑だ。

父が帰つてこない理由が「単身赴任」に切り替わつたある日の事、今から六年前。いきなりお母さんに起こされ、向かつたのは葬祭会

館だった。

どうやら父が仕事の最中に事故で亡くなつたらしい、僕達家族は特に悲しい表情をせず、それこそ無表情で、周りから見ると悲しさのあまり表情を失つてゐるところのくらいだつた。僕ら兄弟が悲しむ理由などなかつた。

初めてからいはかいなかわからぬ存在だし、話したことも記憶にない人が亡くなつた事にたいして、涙など流せるわけがなかつた。飼つてゐる金魚が死んだ方がよっぽど悲しいよ。

それから四年後お母さんは再婚した。

父が亡くなつてから三年間は何の音沙汰もなかつたけど、その後は何か吹つ切れたようにお母さんは恋に没頭した。その相手が僕の現在の父であり、心から家族といえる初めての父親だ。

どうやらお母さんは狙つた獲物は逃さないようで、仕事も出来て容姿端麗で家族思いの男性を手に入れた。そのときのお母さんの喜びようは異常で、十年越しに咲いたひまわりのような表情をしていた。余程うれしかつたのだろう。まあ前に愛した人がどうしようもない人で、先立たれたなら、気持ちもわからないでもない。

それにお母さんは僕達の妹を身ごもつていていたしね。

僕の苗字が「伊佐」となつてから、半年が過ぎた日の事。本当の悲しみを知る日が訪れた。

「伊佐」となつてからの家族は本当に幸せな一般家庭で、毎晩一家団欒の夕食をとり、週末には遊園地やら水族館で、家族サービスも欠かさなかつた。僕達にとつて初めての喜びでもあり、この頃に兄弟の絆は深まつたのだろう。

でも、長くは続かなかつた。
妹は生まれてこなかつた。

お母さんは流産をし、これから的人生、子供を産めない体になつてしまつた。女性にとつての存在意義を剥奪されたお母さんは、目が死んでいた。

よく先生が「お前達の母は死んでる」とか言うけど、あんなのまだ輝いてるよ。そんなこと言つ教師は本当に母が死んでいる人を見た事ないだなつて嘆きたくなる。

まああんな顔、見ないほうが人生楽しく暮らせるだらうね。

でもどれだけの悲しみが降り積もるのだろう、僕は想像が出来ない。本当に愛した男性との間に生命を宿せなかつたことを。お母さん、ごめんね。

父さんも悲しそうだつたけど、その悲しさを見せないよう、気持ちを隠すために、その悲しみの十倍の暖かさで母に接した。

お母さんが退院する田途が立つた日の事、僕達兄弟はお母さんに呼び出された。

この日初めて、兄弟は腹違いで、僕は母さんと血が繋がつていなことを知らされた。僕はその日まで気付かなかつた、この人が僕と血の繋がりがないつことに。お母さんはまるで、人を七人殺した罪を償うくらいの涙を流しながらこう言つた。

「わたしあはずつと難を恨んできた、前の父さんとの浮氣相手の子供やし、それを黙つて育ててる自分自身にも。でもあの子、あなた達の妹、私達の娘が亡くなつて教えられたわ。……ごめんなさい。これからはちゃんと那実と同じように、それ以上に愛するから許して」

そう言つと僕を抱きしめ、声を出して泣いた。

泣き声は波音のように僕の心に響き、ふつて出た僕の悲しみを包み込み流してくれた。

心の中で、僕は言わなければわからなかつたのに、と考えていた。それほどお母さんは僕に対しても完璧なる愛情を注いでいたのだろう。もしかすると僕があまりに嫌な思い出だつたから忘れ去つたのかもしれないけど。

僕達家族はそれからも幸せな家族を築いた、でも何か失つた感は否めない。

木の枝が折れたほどの違和感だけど、それはもしかすると家族には

大事なことなのかも知れない。そんな日の事を僕は思い出しながら玄関のドアを開ける。

あと何度もこの言葉をお母さんに言えるだろ？

「ただいま」

その6 伊佐兄弟の過去（後書き）

「伊佐兄弟の過去」を読んでくれて本当にありがとうございます。

この話は、この物語の重要な部分ですけれど、つましく表現でき
たか不安です。

なかなかヘビーな環境でしょう、伊佐兄弟。

もしよければ、小説の評価をお願いします。

少々面倒だと思いますが、その面倒が、あたしの原動力となるのは
間違いないです。

その7 那実と香美にひとますの別れを

『汚れちまつた悲しみに
今日も小雪の降りかかる
汚れちまつた悲しみに
今日も風をへ吹きすがる……』

中原中也の詩が頭を巡る。俺と薙は明日、この住み慣れたと言つていいのかな、まあ十数年も暮らしてきた街と、共に過ぐした仲間に別れを告げる。少し心残りもある。

でも京都なんてそれほど遠くないし、会おうと思えばいつでも会える距離なので、そんな汚れるほど悲しみではなかつた。けれど、そう思えたのは昨日までだつた。

寂しさや悲しみというものは、夕立のように現れるけど、夕立のよつに素早く去つてはくれない。本当に面倒だ。

出発前夜ということで、前々から遊ぶというか、お別れ記念とでもいうのかな。彼女の香美と会つ約束をしていた。

出会いは中一の頃だつた。

同じクラスとなつた香美は、隣の小学校だったので、見たこともなかつたし聞いたこともなかつた。けれど、なかなか、可愛い顔をしていたので俺達の間で話題になつたりもした。でも俺は香美的顔がそれほどタイプではなかつたので周りの男子のように一目惚れはしなかつた。

しかし運命とは皮肉なもので、神様は香美的席の隣をその男子達には『えず俺に』と言えた。

せつからくだから話をしてみると、顔に似合わずズバットものを言う奴でそこがおもしろい、授業中や休み時間によくじやれあつたり、話しをしたりした。

「僕」はんも一緒に食べることがあった。

まあさすがに一人で吃べるのは恥ずかしいし、周りから勘違いされても困るので、他の友人と交えて食べた。

このときは香美に對して、おもしろい奴以外の感情はなかつた。

それから一年と二ヶ月が経つた初夏のこと。香美は家庭科の授業で作つた蒸しパンを俺にくれた。

「これ食べてよ。余分に作ったのよ、那実のために」

俺はその蒸しパンを口に入れる前に友人を呼んで、みんなで食べた。理由は簡単、おいしそうだからみんなで分けた方が楽しいし、香美もその方が喜ぶと思ったから。

でも実際は違つた、みんなで分け合ひ「うまいなあ」なんて言つてゐる俺達を見て、香美は少しうつむきながら悲しそうな目をして微笑んだ。その瞬間フラッシュバックといつのかな、あの日の事が浮かんだ。

小さい頃、父さんが帰つてこない理由を聞いたときのおかんの顔に。

今、思えばなんて俺は鈍感だったのだらうと思ひ。おかげでその日から香美が俺に対して口を開くことはなかつた。

その頃、香美と席が前後ということで、その気まずさは限度を超えていた。本当に早く夏休み来ないかな。

全然来なかつた、夏休みまで残すところあと二日と二つのに、時間が全く進まない。香美と仲が良かつたときは、それこそあつとう間で、一日が三時間ほどしかないと感じれるほど楽しかつた。

そんなことを考えている間に夏休みは訪れ、終わり、二学期が始まつた。

香美の席は隣ではなかつた。神よ仏よ心からありがとう、毎日仏壇に祈つたかいがあつたよ。そして十月を過ぎた辺りのこと、俺は悲しみに汚れた。

妹が生まれてこなかつたのだ。

学校を二日休んだつて、何の気休めにもならなかつた。黒い幕を覆つた俺に、久しぶりに会つた友人達は優しさのつもりなのか、関わるのが面倒なのかはわからないけど、近寄つてくる奴はひとりもいなかつた。

友人と話すという日課を忘れかけた日の事、机の中に今朝配られた学年通信が折りたたまれて入つていた。何か書いてるのかもしれない、そう思い開いてみる。

ただひとこと、「校舎裏に来てください」と書かれていた。名前すら書いてない。

最近、無愛想だったから、仲間にでもリンチにあうのかなと考えながら校舎裏に足を運んだ。

校舎裏に着くと意外な奴が話しかけてきた。

「那実、最近元気ないやん」

香美だ。話すのは何ヶ月ぶりだらう。というより話したい気分じやないんだけど。

「すっかり心が悲しみに覆われたんや、それだけのこと」俺は吐き捨てるようにそう言う。

「何? 中原中也のパクリ?」香美は本当に驚いた顔をしてそう言った。

誰だ? 中原中也つて。

俺はその頃、その詩人の名を知らなかつた。もちろんその詩も。だからパクッタなんて気持ちはなかつた。

ただ、あの頃は本当にそういう心境だつた。

「知らないの?『汚れちまつた悲しみに』」

「しつこいなあ、だから知らんて」

「しうがないからあたしが朗読してあげよう、今の那実にぴつたりやで」そう言つと手をつむり、デコに手の甲を当てる、苦しそうな顔で朗読し始めた。

「汚れちまつた悲しみに、今日も小雪の降りかかる。

汚れちまつた悲しみに、今日も風さえ吹きすぎぬ……」
後から聞いた話だけど、香美はこの日のためこの詩を覚えてきたらしい。

「汚れちまつた悲しみは、例えば狐の革衣。

汚れちまつた悲しみは、小雪のかかつて縮こまる。

汚れちまつた悲しみは、何望もなく願うなく」

これこそ一生懸命と言つんだな、と感心した。

「汚れちまつた悲しみは、けだいのうちに死を夢む」

香美の気持ちは、何よりもまっすぐで、純粹で、それなのに傷つくことを恐れない。そんな気がした。

「汚れちまつた悲しみに、痛々しくも怖氣づき。

汚れちまつた悲しみに、なすとこもなく口は暮れる……。おしまい。どう、よかつたでしょ」

そんな今まで生きてきた幸福を全て集めたような笑顔をされると笑うしかないだろう。

でも実際の俺は泣いていた。

何で泣いていたんだろう？ 本当は凄くうれしくて、素晴らしい詩に出会えたことも、香美の優しさにも。

「普通こういう時つて、励ましの詩を聞かせるんぢやうんか」泣きながら言う俺に説得力はゼロだった。

「でもよかつたや。やつぱりぴつたりやつたわ」 そう言つてまた笑つた、でもその目には涙が潤んでいた。

香美のそういうところが好きなんだ。

「香美もやで」

いきなり意味不明な言葉を発する香美に驚いて涙が止まつた。

「何が？」

「那実、今、香美に対して好きって言つたやんか」
どうやら知らないうちに言葉に出していたらしい。

そう言わると体中が急激に暑くなつた、その暖かさは風邪をひいた時とは違うどこか心地いいものだ。

「顔めっちゃ赤いで」これこそ悪戯な笑みといつだろ。でも香美、お前も顔が赤いで、多分俺より。

俺がそう言つと香美は自分の顔に手のひらを当てた。

「ほんまや。香美たちアホみたいやな」

「ほなら、付き合つか」

「うん。ハイ、握手」

そう言つと、手を前に出して、さらに顔を赤くした。もつ絞りた

てのトマトジュースより赤いなこれは。

仕方ないので、握手をした。ただ、それだけじゃあれだったので、抱きしめた。香美の思った以上に線の細い体を。あの頃は、キスとかそういうことを、ちゃんと知らなかつたからアレが限界だつたのだろう。今思い出しても恥ずかしい。

「ありがと「いじやいましたあ」

いつも行かないような店で俺達は少し高い夕食を済ました。せつかく、最後の晚餐だといつのに（別れるつもりは無いけど気分的に）香美は、いつもみせる縁日の金魚みたいな元気良さは無かつた。しうがない、あのときのお礼に小話でもしてやるか。

「人間で、何から出来たか知つてるか」

少し考えてから、ひらめいたという表情で、「骨と肉と血」まあそりやそうやけど、そんな簡単な問題を出すわけないやろ

「宇宙のチリからできたんや」

明らかに誰が見てもちんぶんかんぶんな顔をしている。といつり、この子頭がおかしくなつたんじゃないの？　的な顔だ。こいつ殴つてやろうかな？

「地球や、その他の動植物や空氣も、チリからできたらしいで、TVでどつかの教授が言つてた」

だから？　見たいな顔しやがつて、全部は言いたくないんだ、恥ずかしいから。でも仕方ないか。

「俺達は、例え血の繋がりがなくつたて、存在した時から繋がつて

るんだ。それこそ、俺達が生まれる以前から、考えられないほど古代からも。だから、そんな五十キロや百キロ、それに三年間離れるくらいで暗い顔するな。この空気を俺と思え、隣の人を俺と思え、そこらにある木を俺と思え、なんなら香美のペットも俺と思え。いいな」

俺がそう言つと、香美はやつと笑つた。

その笑顔は縁日の金魚とこりよりひまわりに似ていた。

「意味わからへんけど、まあなんとなくわかつたわ」

なんとなくでいいと思つ。

一人が好き合つ理由も、生きる意味も、中原中也の詩も、世の中、判つきつた事ばかりじやおもしろくないしな、香美。

とつとつ出発の日が来た、俺と雑は京都駅に向かう電車を待つていた。実際三回ほど乗り継がなきやいけないんだけど。本当にめんどうかい。もちろん見送りには香美もいた。ついでに友人も。

昨日あんなこと香美に言つときながら、やつぱり寂しいな。なんか、こりう、香美にひとこと言わないと物足りなくなつてきた。

「一番ホームから普通、天王寺行き、天王寺行きが四両で入ります」

別れの時間が近づいてきた。香美にいつも言いたくて言えなかつたこと……。

これだ！

けれど、こんなこと、みんながこりうるといひで言つのか？ 地元に帰れなくなるかもしけない……。でもここで言わなきやいつ言つんだろう。

俺はジェットコースターの安全バーなしに乗るよりも思い切つて言つた。

最近、好みになつてきた香美の顔を見て、「香美、今まで言われへんかつてごめん、なんか言つてもうたら、気持ちが減つてしまつよな気がして言われへんかつたけど」

まだ、ジオットコースターは発車しない。

「なによ？」

生涯で何度も氣持ちを込めてこの言葉を言えるだらう……。

「好也だ」

その7 那実と香美にひとまづの別れを（後書き）

「那実と香美にひとまづの別れを」を読んでいただきありがとうございました。
ざいます

大好きな作家さんの詩を物語りに入れました。
ちょつと冒険でした。

これで第一章を終えます。
次からは高校生です。

第一章からが始まりですので、お楽しみに。

ここまで読んでくれたことに感謝をいたします。
もしよければ第一章の感想をいただけるとうれしいです。
節田ですので、お願いします。

その8 天照沙希と黒猫（前書き）

ここから高校生編です。

お待たせしました。

やつと物語に進展が出てきます。

伊佐兄弟は巻き込まれていきます、何に？ 読んでください（笑）

その8 天照沙希と黒猫

桜の花が新入生を手招きするかのように、綺麗に彩った桜並木道。そして、この日を待つてましたといわんばかりに桜がよく似合う東寺。その隣になぜか、僕が通う京都文化芸能大学付属高校が、東寺という神聖なる場を汚さぬように所在している。本当に、何も知らない人が見ると、学校には見えないその外観は、寺に近い形だった。全てが色濃く見えたって言えば大袈裟になるかもしないけど、最初で最後の入学式を終えてから1ヶ月以上も経ち、桜は乙女チックなピンクから青年の凜々しさを感じる緑へと変化していた。変化したのは桜だけではなく、僕の日常はそれ以上に大きく変わった。

ピンクからまたピンクになるくらいだ。いや桜が梅に変わるくらいといった方が正しいのかな？
どうあれ、僕は変わってしまったのだ。
あの女と関わってから。

初めて自分の教室に入ったとき、少しだけど違和感を感じた。違和感というより、安心感？一体感に近いものを感じ取れた。それは僕だけではなく那実もそうらしく

「この学科ってE.O.が高い奴ばかり集まってるから、そんな気がするんとちやうん？」と軽く流した。

いつも那実はこうだ、何か不安定要素を感じると話をそらす、まあこの態度が正解って事なんだろうけど。

まず最初に入学式の後のHRで何をするかといえば、やつぱりメインは自己紹介でしょ。

心のどこかでE.O.が高い奴ばかりだから、自己紹介も堅い内容で、みんな真面目君みたいな顔してるんだろうなと思っていたけど、実際、中学のときと雰囲気も容姿も、それほど変わりはないように見

える。表面上は。

そんな中、1人だけ明らかに違うオーラというかそんなような物を感じれる奴がいた。

そいつは日本人みたいな顔してるけど、顔の所々が外人っぽい。例え、目の形が少しだけ外人らしいとか、顔の骨格が少しだけ日本人ではないとか。鈍感な人ならハーフと気付かないだろう、俺もその鈍感の1人だけ。

そんな鈍感野郎でも明らかに日本人と違うとわかるのは、目の色と肌の色だ。

目は完全に青かかり、海の色に似ていて、肌は北極から来たの？って言うほど白く、ほぼ絵の具の白色だ。

「初めてまして、天照沙希です。出身は神奈川県で、見てわかるようになたしの祖母はイギリス人です。けれど父と母は一応日本人です。これから3年間、よろしくお願ひします」と清楚で普通といつちや普通だけど、それが上品さを漂わす自己紹介を終えた。

第一印象は、クラスメイトになつたことで、人生の半分の運を使つたのではないかというほど、綺麗な人。

沖田先生がファッションモデルなら、この方は若手女優つて感じがする。双方捨てがたいが、高校生の身分としては後者を選んでしまう。どのくらい綺麗かというと、人形みたいなんてありきたりな表現もアレだし、整つているなんてもつとありきたりだ、そうだなあ、理想の女性を思い浮かべて、それよりもワンランクくらい上かな？ オードリーにはかなわないか？ いや21世紀のオードリーと言われても否定は出来ない、それくらいの美顔だ。

後々気付くことには、人は見た目が4割なんて言葉があるが、こいつほどそれを実感し、その言葉を破壊させた奴はいないだろう。学校に慣れ始め、兄弟で昼ごはんを食べることがなくなり始めた、入学式から3週間目。ある出来事が起きた。

その日は、いつもなら寮から一緒に学校へ向かう那実も、今日は少し寝坊していたので、僕だけ早く家を出ることにした。たまには

1人で登校するのもいい、町の景色をゆっくり眺められるし、色々な考え方も出来るし、今日は時間に余裕がある。それに那実は歩くのが遅いから、あわせて歩くのが疲れてしまう。

これからも1人で登校しようかと考えていたら、いきなりすごい音がした。車がぶつかったのかな？前を見ると200m程先に黒い動物が倒れている。しかも歩道の真ん中に。もしかして、車が猫をひいたのか？ つたくひき逃げなんてするなよ。しかも歩道の真ん中だからすごく目立つし。処理してあげたいけど朝からあんなグロテスクなもの見ていたら、今日一日が最悪だ。

なので、前方に手を合わせてお悔やみをして、道路を横断した。これで一応の心残りもなく立ち去れる。猫にはかわいそうだけど、これも運命だ。

そう思つて歩いていると、僕の横を風を切るカマイタチ並のスピードで横切り、引かれた猫へまっしぐらに女子高生が走つていく。よく見るとうちの制服だ。しかもあの後姿……誰だっけ。道路を横断する刹那、すごく白い横顔が見えた。

天照さんだ。すごい慌てた顔……もしかして飼い猫なのか？僕も少し心配になり、彼女に付いていった。彼女はすばやく血にまみれた黒猫を抱えて、すぐ隣の公園へ運ぶ。それにしても全く追いつかない、あの娘、走るの速すぎだろ。

肩で息をしながら公園に入ると、端の方にある木の近くで彼女を見つけた。三角座りして何かを見つめている。

さつき引かれた猫を埋葬しようとしてるんだな。なんて心優しい人なんだ。学校から『猫を供養したで賞』の賞状を全校集会で授与すべきだよ。

そんな彼女の優しさにふれた僕は、手伝おうと思い彼女のそばに近づく。

しかしその光景を見た瞬間、そんな妄想は全て消え去る。天照さんが木の棒で、死んだ猫をつづいていたのだ。

これは見なかつたことにようと思い、彼女が振り向く前に全力

疾走で公園から逃げ出した。何だあの娘は？ 異常者なのか、何フエちなんだ？ 死んだ猫を棒でつづつくために朝から全力疾走したのか？

考えると、ヒツカがおかしくなりそうだ。もうよれ、あの事を思い出すのは、綺麗なものには毒があるといつじやないか、そういうことにしておこう。

「雑、どうしたんや、そんな顔して、お前、先に家、出たんちやうんか？」

びっくりしたあ、なんだよ那実か。天照さんと思つたじやないか。それにそんなこと言われても、あんな光景を目にしたらそんな顔にもなるわ。でもあの事は言わないほうがいいな、彼女のプライベートだし。

「いや別に、お前もえらい速いな、走ってきたんか」何とか話をいゝまかそうとする。

「遅刻しそうやからな、あと5分で本鈴なるで」

本当に？ それはやばい、走るぞ。

「わかつてるわ、お前に言われらんでも」

僕達はなんとか遅刻することはなく、席に付くことが出来た。けど天照さんはまだ来ていない。次の教科の先生が来る間に、遅刻しないように走つた汗を、せめて顔だけでも流そうと急いでトイレにむかった。だけどその途中、嫌な奴とすれ違つ。

本居先生だ。

あんな奴先生と呼ばなくともいい、これからは心の中では呼び捨てだ。本居め……。

あの面接日からどうも氣に食わない。ヒツカとすれ違つたびに、駅にある改札口を通りに、通れるか閉まつてしまつが、みたいな、ドキドキ感を味わつてしまつ。よつは心が落ち着かず、イライラして、また何か言われるんじゃないかつていうストレスに襲われる。

そんなことを一日に5回以上しているので、精神的にかなりきている。朝のあの光景も付け足して。

けど実際は何も言われることはないんだけどね。でもなんか嫌だ。あいつには気持ち悪いオーラが漂っている。

下校時、いつもなら一緒に帰るはずの那実がなぜかいなかつたので、隣の席の小野君と帰ることにした。那実の奴、最近どこか変だ。深夜に物音はするし、こきなり「ヒヤッ」って驚いた声とか出すし、本当に変だ。

今日は、もしかして香美ちゃんとデートするのか? 習についたらそのことも含めて聞いただとしてやる。

しかし、そんな気合を發揮することなく、もう夜の9時。時間が経つと共に上がる僕のボルテージ。結局那実が帰ってきたのは10時半過ぎだつた。

俺は今までためていたボルテージを吐き出すように、隣の那実の部屋に向かい叫ぶ。

「こんな時間まで何してたんや、言わなもつと大声だすで」

すぐにはドアが開いた。

「うるさいな、沖田先生に呼び出されたんや、お前のことで」

沖田先生が?

しかも僕のことだ?

何でお前に?

「明日きけや、結構おもろい事するなお前。俺はもう眠いから。おやすみ」 そう言つてドアを閉め、その不機嫌な音が廊下に響いた。なんだろう、僕のこと呼び出しがされるなんて、何も悪いことなんかしてないのに…。

もしかして今朝のこと? そんなわけないか。でもそうやつたら嫌だなあ。一緒に天照さんの性的異常を治すの手伝つてとか言われたらどうしよ?。

考えるまでもないか、断固拒否だ。

昨日、色々あつたからか目覚めがよかつたのは僕だけではなく、那実も同じらしく、今日は一緒に登校することになった。昨日みたいに遅刻ギリギリではなく、引つたくりに遭遇しても追いかけて捕まえられるほどの時間の余裕だ。

そんな少し機嫌のよかつた俺を、いきなり未知の感情へと落とし込む事件が起きた。

昨日、猫が引かれた場所付近を通り、少し憂鬱な気分になる俺は、いきなり叫んでしまった。

「どうしたん? いきなり大きい声だして、みんな見てるで」「確かに登校をしようとしてる生徒、会社に向かうサラリーマンその他諸々の人々が僕を見てる。しかし俺は見ていた、視線をそらすことなくただ黒く動く生物を

「猫がある」昨日の黒猫に似ている、見間違いか?

「そりやおるやろ猫くらい、野良犬やつたらちよつとびつくりやけど、まあ朝から黒猫なんかちょっと縁起悪いけど」

『縁起が悪い』で済むならいい。どこからどうみても昨日の猫だ。その証拠に、体に傷が付いている。しつかり見ないとわからないけど確かに傷はある。

おかしなことはそれだけではなかつた。

それは2時間目の社会の出来事だ。今日の授業内容は前に行われた実力テストの返却が主らしい。

「伊佐薙くん。ハイ、おもしろい結果だったね」

沖田先生は今にも噴出しそうな顔で僕の目を見てそういう、けど一瞬、ほんの一瞬だらうか? 真剣な顔になり、「おめでとう薙さん。羊さんでしたね」と耳元でささやいた。この先生はいつも意味のわからい言動と行動をするので、特に気に留めないで席に着いた。テストの点数は42点。ギリ補習を免れた。

つてあれ? このテストすごく自信あつたのに。テストが終わつた後、自己採点したんだけど70点はあつた気がする。

その後、先生が答えの解説を進めると同時に僕の顔色も青くなつていいく。そのありえない現象に。あれ…なんで？ こんなケアレスミスありえないぞ。見直しも2回したし、答えを全部埋めていたのに。

その現象は30問ある問題の15問目から起きていた。

「問題と答えが全く違つ」

その8 天照沙希と黒猫（後書き）

「天照沙希と黒猫」を読んでいただきありがとうございました。

僕は授業が終わると、すぐに沖田先生の元に駆け寄った。

「先生！これはどういふことなんですか？僕のだけ問題が違つてたんじゃないんですか？」

それしか考えられない。なぜ30ある問題で15問田から全くの見当違いの答えを書くんだ？ 意味がわからぬ。僕はそんなボケてなんてない。

だいたいそこまで難しい問題じゃなかつたはずだ、テストの問題を思い出してみたけど、一番難しい問題が『クロマニヨンとアウストラロピテクスの違いはどこですか』位のレベルで、それに僕は答えた。「絵を描くか書かないか」だ。改めて、携帯で調べてみたけど正解だった。

「雍くん、まあ落ち着きなさい」にっこり微笑むその笑顔は園児をなだめる保母さんのそれとよく似ている。

僕も園児と同レベルなのか、その顔を見ると黙るしかなかつた。「今は心理的に不安定なようね、放課後もう一度きてくださいね」なんだよそれ、種明かしは放課後つて事？そんなに待てない。

と思いながらも、放課後は結構な速さで僕の足元に寄ってきた。職員室のドアを開けると、沖田先生は待つてましたといわんばかりの目でこちらを見つめる。誰かがドアを開けるたびにこんな目してたんだろうか？

「あの、テストのことなんやけど」

「このテストはそんな重要じゃないのよ。そんなことよりこのテストの方が大事よ」

いきなり何言つてるんだ？ しかも教師の発言とは思えないし。

妙に力の入つた言葉から、用意されたのは1～25問まで書かれた問題用紙だ。さつきのテストより5問少ないのか。沖田先生は優しい、もう一度テストをさせてくれるのだから…。そう思ったのが

間違いだつた。

先生はトランプによく似たカードを引き出しから取り出しつらに顔で、「ここにある25枚の『薰透けないカード』を今からよく切るから、その順番を当ててみて。カードの裏には数字が書いてあるから、問題用紙に薙くんが思い描く数字の順番を書いてよ。はい、スタート！」

そのなんだ『薰透けないカード』つて？ 变な名前だし、さつきのテスト関係ないし。

でもおもしろそう。

じついう未知なるパワー、第六感的なものは好きだ、せっかくだから全部当ててやる。

僕は思いついた数字を問題用紙に書きなぐつた・・・。

「はあー終わったあ

「じつは苦労様、よく集中がきれずにできたわ。みんな始めての頃は半分くらいでやる気なくしてたのに」

僕も危うくシャーペンを置くところだつたけど、みるみる数字が浮かぶから、置く暇がなかつたんだ。てか僕以外の誰かもこのテストやつたんだ。

「では、結果発表」

勢いよく先生がそう叫びにも近い大声を出し、先生が手に持つ、よく切られたであろうカードの一一番上をめくつた。少しへキドキする、これで当たつたら25分の1だよな...結構すじこよな。

「まず最初は8。どう薙くん？」

「あー、違います、僕は6つで書きました」ちょっと期待した僕がバカだつた。

「残念、まあ全部合つことなんてめつたにないからね」

全然残念そうに見えず、どちらかといえば「落胆」に近い声色だ。それからも次々とカードをめくつしていくけど、ことじとく外れていく、これでもか、つてほどに。

「はい、2」

「僕は9です」

初めと違つて少しづつテンション下がってきたな、沖田先生。俺が悪いのか？ てかそんなバンバン当たつたら気持ち悪いよ。

「12問までいって正解〇とは前代未聞よお、あたしでも1枚は当てるわ」

こんなのに、「あたしでも」は関係ないだろ。誰がやつても一緒に運だろ、運。

13問目にやつと一枚当てた僕だつたけど、その後はまた、スカの連続で結局、「25分の1ねえ・・・まあ1枚当たつただけましかな？」

マジビリヒのよう、このテストにビリヒの意味があつたのか僕は知りたいよ。

「いずれわかるときがくるわ。・・・ヤギならわからないけど」
わけのわからない言葉はさておき、とりあえず1週間このテストを続けば、テストの点数の見直しを考えてくれるそうだ。先生の趣味に付き合つてテストの点が上がるなら、これ以上の好都合はない。

職員室を出ると、前方から天照さんがこっちに向かつってきた。職員室に用でもあるのかな？

昨日のこともあり、僕は気まずいのocopilotして、職員トイレに行くフリをした。あくまでさりげなく、彼女に気付かれないように、自分で最高のコターンを決めて、トイレに向かつ。

しかし彼女は職員室の入り口を素通りして、僕の方へ歩いてくる。俺に用なのか？

落ち着いた雰囲気で穏やかに話しかけてきた。それは一国の姫が家来に話しかけるような感じでもあつた。

「何で避けるんですか？ まあこけらにしても避けてくれた方がうれしいけれど」

バレバレだったか。それより矛盾したこと言つ。まあ、この人

は行動も奇怪だからな。

「いや、避ける気はなかつたんやけど、トイレ行きたくなつてな」「まあどちらでもいいけど」

「うでもいいんなら言つくな。

「昨日のネコのことは誰にも言わないので下さい」

「誰にも言つ氣はないよ、天照さんが死んだネコを棒で突ついたなんて・・・」

僕は今朝のことを思い出す、というかあまりに嫌な出来事だつたから脳が勝手に忘れさせようとしたのかも知れない、あんなこと忘れるはずがないのに。

「あのネコに似たやつ、今日見かけたけど氣のせいかな?」

「ああ、知らないわ。それよりキミは何か人と変わつた体の部分はある?」

いきなり何を聞くんだ?

「目が大きいとかかな?」

「そういうことじゃなくて、大袈裟に言つと指が6本とか」

そういうこと?何があつたけなあ・・・、思い出した。

「確か歯医者に行つたとき、歯が普通より2本少ないって言われた」

「やつぱりね、ありがと」

なんて事務的な「ありがと」なんだろう、感情の「か」の字もない。それにやつぱりってどういう意味だ。

「歯が2本少ないこと聞いて意味あるんか?」

「ああ? ... いづれキミにもわかるときがくるわ、あなたはあたしと同じオーラがするから」

なんだそれ? 沖田先生と似たようなこと言いやがつて、それにいつからお前はスピリチュアルな人になつたんだよ。

彼女はそれだけ言い残して、最小限の足音と最高速の徒步で、僕の前からさつそうと消えた。一体何が言いたかつたんだあの人は? それにしても、トイレの前まで来たらなんだか用を足したくなつ

てきた。

用を足しトイレから出ようとした瞬間、ガラスが割れるくらいの声が聞こえた。

「私に触れるなっ！」

思わず声の元へ走る。そうしたのはその声が彼女に似ていたからだろうか。職員室方向の最初の曲がり角を右に行くと、やっぱり彼女は居た。

天照さんと制服を着崩した男がにらみ合っている。よく見ると男の頬が赤く腫れている。一体どうしたんだ？

あの男は一体何したんだ？ 僕がトイレに行っている間に、人の持つ怒の感情をあれほどまで引き出すのは簡単じゃないはずだ。

男は情けない声で、くだらない青春ドラマのちょい役の如く、「おぼえてやがれ」と言つて去つて行つた。

あんなへぼい奴が不良だつたら、不良の価値が下がる、と訳のわからないことを考えながら、激昂する天照さんへ近づいた。

「どうしたんや？ そんな怒つて、変なことされたんか？」

「告白されただけです」

酷く興奮しているようだ、体が震えている。

「告白されただけでみんな声出せへ」

「あいつが私の肌に触れようとしたから」

僕が全ての言葉を言い終える前に声をかぶせてきやがつた、どれだけ興奮してるんだこいつは。

「まあおちつけよ」

「わ……に……な」

小声すぎて何を言つてるのかわからない。耳を近づけた瞬間。

「私に近づくなっ」

落雷のように響き渡る天照の声。鼓膜は破れる一歩手前で耐えてくれた。結局なんなんだあの女は？

天照は昨日の見とれるようなフォームではなく、運動が苦手な女

子のような走り方でその場を去つていった。それは変な走り方なのに速かつた。

それから1週間がたつた

1週間のうち変わったことといえば、天照が死んだ黒猫をつづいていた公園で、のら黒猫に餌付けしているくらいかな？ それと5日間行われたカード当てが今日でやっと終わること。これはうれしい！僕は、「よくきつたカードの順番当て」をやり続けたけど、結果は1枚正解のみ。あたらなすぎてイライラするだけだ。たしか1回だけ2枚成功があつたっけ、あの時はうれしかつたな。

そして最後のカード当てが終了した。結果は… 1枚だ。

「はあー、今までありがとうございました。薙くんオカルト的なことあまり信じないみたいね」

「どうなんでしょうかね？ 好きは好きやけど」

「好きと信じるは違うわ」と沖田先生は不機嫌に答えた。どうやらテストの結果に満足行かなかつたようだ、まさか社会のテストの約束なしにするつてことはないよな。

「那実くんとは違うみたいね」

「那実がどうしたんですか？」

「なーんでもないのよ、とりあえずお疲れ様、社会のテストの件は覚えてるから安心して」

沖田先生はそういうと机に顔を引っ付けて、呼吸をする頻度でため息を吐き続けた。どれだけ不服だったんだ？ なんか僕が悪いことしたみたいだ。

放課後、校門近くで那実がいたので一緒に帰ることにした。

「今日も天照さん黒猫にエサあげてるんかな？」

「さあな、それよりエサつて言い方は良くないやろ」

どうしてダメなんだ？ 動物に与える食事はエサつて辞書にも書いているぞ多分。

「Hサツていう響きは奴隸という言葉に似てる気がする」
「ですか、勝手に言つてください、君の戯言はもつといよ、
那実くん。

「だからヒトも動物な訳やん、なら黒猫にも食事つて言つたほう
がええやろ」

もう一回言つて。

「だから『猫に食事あげてるんかな』が正しいんちゃうかなって
ことや」

そうやつて差別差別言つてる奴が一番差別してる気がするのは気
のせいかな。そんな話しをしていくうちに黒猫がいる公園に着いた。

「誰かおるで」

天照さんと違うの？

「いや、ちゃんと見えへんけど男3人と女1人、それにうちの制
服や」

頭にふと、思いがよぎった。

もしかしてあの時、天照に告白した不良が「おぼえてやがれ」を
実践しにきたのかもしれない。そう思つと、駆け出さずにいられな
かつた。

どうか勘違いでありますよつに。

その10 ルールと夕陽

公園の近くまで駆け寄つて見てみる。やっぱり天照だ！

確実に助けを手伝つてくれるだらう人間を呼ぶ。

「那実、やっぱり天照さんや」そう言つて振り向くが彼はいない。
「…。どこじつたんだ？」

見つけた。

なんと那実は走ることもなく、いつもの下校時と変わらない速度で寮の方向へ歩いている。こいつは何を考えてるんだ？僕は怒りのオーラをまとい急いで那実に近づく。

「何考えるねん？早せな天照さんボコボコにされるぞ！」

「それよりもやっぱりコトされるかもな。それには俺も興味あるし影から覗こつかな」

「冗談を言つてる場合じゃない、なぜこいつがこんなに悠長なのか意味がわからない。」

「あの男、前に雑が言つてた、天照沙希に振られた不良もビキやう？」

「そいや、だから助けたらなあかんやろ」こんな話しがしている場合じやない、1秒を争うんだよ。

「天照沙希が悪いんや、この際、あいつの変な性格を治してもらうべきや、自業自得」

その言葉を聞いたときに思い出した。あれは確か中学2年のころ、2人で電車に乗つて服を買いに行つた帰りのことだ。

その日の電車は日曜の夕方だといつのにやたらと混んでいた。

確か終着駅の近所で有名歌手のライブがあるとかそんな感じだつた。

そのとき那実は、運良く座席に座ることが出来たけれど、その日の前には年老いたおばあさんが、四方八方から押し寄せる人の波に

埋もれて、苦しそうに、「うう・・・」とうめき声を上げている。その姿は、弱り、年老いた野良犬がエサを求めているようにも見える。

「那実、席ゆずれよ」僕は、一般的な優しさを示す方法を、那実の耳元で囁いた。

すると那実が、憤りを感じさせる表情で「この席は俺が手にしたんや」

何言つてるんだこいつは？

「この電車に乗ったときから、イチバン最初に降りるかもつて奴に目をつけ、それが当たつて手にした座席や、何で譲らなあかんねん」

おばあさんがしんどそうにしてるからだらう。誰が見たつてそう言つよ。それに年寄りだし。

「年寄りやからつて、優遇なんて氣に食わん。自分の体が不自由と思うんやつたら、人が減るかもしだへん次の電車に乗るべきや、それかタクシーか何かに乗るか。あのおばはんは自分でこの満員電車に乗ることを決めたんや」

そのおばあさんの勇気に免じて席を譲つてやれよ。僕がそう言つと、那実は「こいつはバカなのか」といつ曰つきで

「甘やかしたらあかんやろ、そんな甘えに浸つてたら、いつか偉い目にあう。難が言つてることは嘘の優しさや。そんなこと言つてから戦争が起こるんねん、差別がなくならんのや」

最後、話しが飛びすぎだらう？

今まで教えられた道徳を、正面から崩す、那実の言葉は耳を離れることがなかつた。2年経つた今も。

「天照沙希なら大丈夫や、お前が行つても無駄なだけ」

こいつに何を言つても無駄ということを思い出し、僕は公園へ走り出した。

公園に近づくとわずかに声が聞こえる。男子生徒が何か言つてる

がよく聞こえないので、走りながらも耳を澄ます。

「この前のことを謝れよ、さもないど、この黒猫どうかしてまつ

ぞ」黒猫が無邪気に「みやー」と鳴く。

あいつら、黒猫を人質にとるなんて。どうしようもない人間だ、一緒に種族だということに悲しさを覚えるよ。天照も黒猫が気がかりなのか、声を出さずに男子生徒を睨んでいる。

すると、また男の表面から悪意がかもし出される声で、「上の服脱げよ、ほら、ほら、早くしないとこの猫、踏みつけるぞ」

あいつらはそういうと氣色の悪い高笑いを響かせた。マジで最低だ。

でもプライドの高そうな天照のことだから、脱がないだろ、と思つてはいる。肩にかけているカバンを下に置き、制服の上着に手をかけた。

僕はさらに加速する。そんなことをすれば相手の思つ壺だ。これでも那実は傍観者でいるつもりなのか？

そんなことを考え、後ろを振り返ろうとした瞬間、天照が思いがけない行動を起こした。

反撃開始。

まず足元に置いてあるカバンを思い切り蹴つて、左にいる男子生徒の股間に命中させた。当然そいつはうづくまる。そして手にかけていた制服の上着を、あの日天照に振られて、今は黒猫を抱いている生徒の頭に投げつけ、そいつが上着を頭から取ろうとする隙に黒猫を奪つた。

まるでアクション映画のようだ。

すると那実が駆け寄ってきた。今更なんの用だ？

とりあえず僕はキャミソール姿の天照を助けるために近づく。その距離残り10m。もう少しだ。

しかし、先ほどかばんを股間にぶつけられた生徒が怒りを前面に

押し出し天照に襲い掛かる。すると天照は左右にステップを踏み、構え、黒猫を草むらに放つた。・・・どこかで見たことのある構えだ。その構えはどんな攻撃もかわしてしまつ氣がするほど隙のないよう見え、何よりも綺麗だった。

思ったとおり、襲い掛かつた生徒が繰り出した大降りの右ストレートは空を切り、空振るコトで前のめりになつた生徒に、天照はすごい勢いのアッパーを繰り出した。そしてすぐ隣にいるもう一人の生徒を回し蹴る。その回し蹴りは相手のこめかみを見事にヒットさせ、一撃で気を失わせた。

強すぎる。現実に起こっている出来事とは思いにくい。

しかしそれは実際に起きていて、僕はあまりの華麗さに見とれて足を止めていた。ただキャミソール姿というのが少しおかしかったけど。

最後の一人は殴ることをせず、相手の繰り出す蹴りを見事に左へ受け流し、軸足に足払いをした。

それは気持ち良いくらいの勢いで決まり、「ゴン」という尻と地面がぶつかる音が響く。

「天照沙希のやつ、パンツじゃなくてスペツツかよ」

何だいきなり？ そう思い振り返ると那実が不謹慎なことをつぶやいた。いつの間にそこにいたんだ？ 那実を一瞥して、天照のほうを見る。

まだ止めを刺していないのか？ 僕は思わず言葉に出でしまう、「マウントどれよ！ はやく

しかし一向に相手を覆いかぶさる様子がない。

それは一瞬のことだった。

相手は刃物を取り出し天照の体にぶつかつていった。天照の腹部にはナイフが刺さつていてる。赤い血が噴出する。

滴り落ちてなんていなかつた、ドラマのように衣服ににじむこともなかつた。噴水のように噴出す血液がこれほど綺麗だと思つたことはない。

僕はあまりの衝撃にこれ異常ない程の声で叫んだ。

「おい！ 雜、 どないしたんつ」

那実のその声で気が付いた。 瞬時に那実に問いかける。

「天照はどうなったんだ？」

不思議そうな顔で那実が言う

「まだマウントも取らんと相手を睨んでるで、 見たらわかるやん
どうなってるんだ？」

正面を向くと確かに天照が、 1週間前に交際を断り、 黒猫を人質に取つた生徒を睨んでいた。

すると、 またさつきの走馬灯に似たものが思い出される。 もう声に出さないでいられなかつた。 というより勝手に出た。

「天照！ そいつナイフ持つてるで」

僕が精一杯の声で叫ぶと生徒は立ち上がり、 一度こっちを見て仕方ないなという手つきでナイフを取り出した。

その瞬間が命取りだつた。

天照はそれはそれは綺麗な曲線を描く一本背負いによく似た投げ技を繰り出し、 止めを刺した。

投げ終わつた瞬間、 天照は携帯を取り出し、「すみません、 洛南公園まで来て下さい。 襲われました」

その落ち着きようは襲われた奴の言うセリフじゃなく、 いたずら電話に間違われても仕方がないほど感情の変化はなかつた。

「天照沙希はボクシングと何やつたけなあ？ イギリスの伝統ある格闘技を習つてるんや」

まるで自分のことのように言つた那実を見つめた。 なんでこいつがそんなこと知ってるんだ？

「グリマよ、 それに人のことをどうのこうの勝手に言わないでくれる？」 電話を切りすぐに、 那実を睨みつける。

「そや、 レスリングみたいな奴やろ？」

「もういいわ

那実の言葉を一蹴する。それはさつきの回し蹴りより美しい。
僕はひとつ気になることがあった、「どうしてマウントを取らなかつたんだ?」

そうすれば一瞬で勝負は決まっていたのに。

「グリマのルールでそういう行為は反則とされているの」

そう言って、地面上に落ちている上着を2~3回手ではたいて、また着た。

「今は試合じゃないだろ?」「ひい

これは正当防衛であり、悪く言えば喧嘩だ、そんなのにルールがあるなんて聞いたことがない。

「確かに試合じゃないわ、でもそういうてる人はみんな弱いのよ。彼女にそう言われるとそうかも知れないという、妙な説得力があるのは、さつきのボクシング兼グリマの試合というか、一方的な展開の喧嘩を見たせいだろうか。

「もうすぐ警察が来るわ、あなた達、巻き込まれたくなかったら早く帰つた方が良いわよ」

天照はそう言つと草むらに投げた黒猫を拾い上げた。

最後に何故、主犯格と思われる告白をした不良に手を上げなかつたのか聞こうと思つたけれど、色々事情があるのだろうと思いやめた。

それに僕達は面倒事は嫌いなので(特に警察)さつと立ち去ることにした。天照も、もう大丈夫そうだし。

僕が背を向けると、天照が忘れ物を拾つよつた声で、「なぜあいつがナイフを持っていることがわかつたの?」

そんなこと僕も疑問だよ、本当のこと言つても信じてもうれないし。とつと過ぎて言訳が思いつかない。

5秒くらいの間が空いて、感だよ。と言つのが限界だった。

すると天照がほんの少し微笑み

「そう、・・・そうしたら月曜日の放課後、空けといてくれるとうれしいわ

特に断る理由もないし、彼女の初めて見せる笑顔に思わず、ＹＥＳを出してしまった。これが過ちだったのかもしれない。

僕らは、天照を公園に残し、寮へ帰る事にした。

「だから大丈夫って言ったやろ？」那実の顔は少しこわばつて見える、気のせいか？

「ホンマに強すぎやろ？ あんなＴＶみたいなん初めて見たわ」「僕は少し興奮をしていた、そりやあんなアクション映画もどきを目の前で見れば誰だつて昂ぶるだろう。

「にしてもなんで、那実が何で天照が格闘技強いつて知ってるんや？」

一瞬考えたような顔をした気がしたけど、いつもの変に自信のある声で、「俺を誰やと思ってるんや？ クラスの情報通やぞ」「本当にこいつは・・・またつまらない事を言つて、しかしその言葉は同時に安心感を与えた。

思い出したように後ろを振り向くと、天照が腰を曲げ、深くお辞儀をしていた。

「あれもグリマのルールのひとつか

「そうかもな」

そう言って那実は夕日を見つめた。その眼は夕日より遙か先を見つめているようにも見えた。

その11 七不思議と真実

いつもの登校時、よりも少しテンションが高めなのは、那実が寝坊して1人での登校を楽しめるからではなくて、先週の金曜日、天照から放課後の約束をされたからだろう。

今でもはつきりと思い出せる。約束を承諾したときのあの微笑。よほど僕と話がしたかったんだと思う。

クラスでも人気があつて、いつも友人が取り囲んでる状態だから、このことを伝える時間がなかつたのだろう。

それとも助けてくれたお礼に放課後遊びに行きませんか？ とか言われたりして。

あんな綺麗な女の子に好かれるなんて、僕にとつては奇跡的だよ。きつと僕はある程度は好かれているんだろう、那実と僕との態度の違いを見れば、一目瞭然だよ。

それにしても那実は何でアレほどまで嫌われているんだろう？ まああいつの変に理屈っぽいところは妙に鼻につくし、脳につく。僕も好きじゃない。

この調子で告白されたらどうしよう……。

返事は間違いなくNOだ。

別に彼女のこと嫌いではない。華麗だし、綺麗だし、猫の死体で遊ぶ変体チックな所も僕にとっては少し好印象だ。

けれど僕には好きな人がいる。

そう強く胸に刻み、10m先の花屋を見つめた。いや、花屋ではなくそこで店の手伝いをしている少女に。

見た感じ中学生の彼女は、朝から汗をかき、店内と店の前を行き来している。

ずっと見すぎたのか、目が合ってしまった。

彼女は僕に営業スマイルという言葉を知らないような微笑みを繰り出し、思わず僕も微笑み返す。

きつと気持ちの悪い顔になつてただろうな、彼女の心を暖めるよ
うな笑みとは違つて。

彼女はすぐに作業に戻り、いつもと同じように、忙しなく店内に
ある花達を店の前に並べている。開店準備を手伝つてゐるんだろう。
朝もゆつくり寝ることも出来ず、家の手伝い。僕には出来るわけ
がない。それに清純度MAXの仕事つくり。

いつか話せる機会があればなあ。

いつもの眠たい、しんどい、だるい、の三拍子が揃つた授業を終
えて、僕は放課後、天照との約束を守るためにあの黒猫公園へ急い
でいた。

本当に天照は変わつた奴だ。

あの日、場所の指定をされていなかつた僕は学校に行けば、下駄
箱や机の中に手紙的なものを入れられてゐるのだろうと思つていた
けど、そんなものは一切なく、不安になつて天照に聞くことにした。
移動授業のとき、彼女が1人になる隙を狙つて。

「天照さん、放課後はどこに行けばいい？」

長い髪を丁寧に耳にかけて、「あなたの机に書いたはずよ？」そ
う言つて天照は、すばやく僕の元を立ち去り、音楽室へと向かつて
行つた。

いやいや、書いた場所を教えるんなら、待ち合わせ場所をここで
言えよ。

教室に戻り、自分の机を見てみると確かに書いてあつた。右下の
隅に小さく上品な字で「黒猫のいる公園」と。

これが机じやなくて、せめて紙に書いてくれれば絵になつたかも
しれないのに。まあこれはこれで芸術的か。

放課後、授業終了のチャイムが鳴ると同時に公園へ向かつた。の
は僕ではなく天照であつて、僕はいつもと同じペースで向かつた。

公園に着くと天照がベンチで座りながら、あの黒猫とじやれてい
た。

天照は右手にねこじゅらしを持ち、ひざの上にいる黒猫は必死になつてそれを引っかこむとしている。2人とも幼稚園児のように無邪氣で、声を上げて遊んでいる。普段のお嬢様的風貌を纏っているの彼女が嘘みたいだ。

これはこれでいい構図なのかもしれない。僕に絵をかく才能があれば、ここで黒猫と天照をスケッチするだらうな。

けれど、僕にはそんな才能も道具もないので、無邪氣に遊ぶ黒猫とお嬢様もどきに近寄る。

「もう来たの？ 人がせつかく楽しく遊んでいたのに、楽しそうだつてのは万人が見てもわかるよ。それに僕はそんなの見に来たんじゃない。

「それより話つてなんや？」

出来るだけ自然に話しかけた。心臓はありえないくらい縮んだり膨らんだりを繰り返してるけど。

「あなたは知つてるかしら、この学校にあるフ不思議のひとつで、特別能力開発科にいる生徒の半分が行方不明または死んでしまう、という噂を」

「聞いたことはあるけど、そんなんどうせ噂やろ」

入学してから1週間後くらいに、その噂はクラスで話題となつた。自分の属する学科にそんな不吉な噂があるとなつたら話題にもなるだろう、でも今じやみんな忘れてる。そんな流行が過ぎた話しながら聞きたくないんだけど。

「今の3年生は10人しかいないのよ、初めは18人の生徒がいたのに」

それも知つてる。噂を確証したい奴が言う決め文句だつたつけ？

「そのことをクラスの奴が先生に聞いたら、勉強についていけずに転校や退学しつたつて言つていたで」

そのことが、クラスに知れ渡つたことで、そのフ不思議は影を潜めたんだ。そのこともクラスで知らない奴はいないだろ。それに、うちの学科は天才を養成する学科だから、授業内容も難しい、大い

に納得できることだ。

「それが一般生徒の答えね。ありがとう」

普通の生徒よりも、僕はこの件を知っている方だと思う。何でって？ この噂の真相を突き止めたのは那実だからな。よくあいつにそのことについて色々な話しを聞かされたよ。本当にあいつは生糞の噂好きだ。何か秘密を知れずにはいられないのだろう。

「まあいいわ、このことはいづれ知る日が来るでしょう」

全然知りたくないんですけど、そんなおつかないことの真相なんて。

天照は黒猫をひと撫でして、僕の目を見た。

今思えば、今日まともに目が合ったのは初めてだな、こいつずっと猫見てたし。

それにしても嫌な予感がする。背中が冷たい。冷氣を吹きかけられてるみたいだ。

なんだこいつは？ その眼はなんなんだ？

「あなた今、すごい悪寒がするでしょ？」

何でわかつたんだ？

僕は鳥肌が止まらない。

「その表情を見るとあつてるようね、やっぱりあなたは」天照が少し緊張した表情を見せ、さらに僕を睨みつけた。その顔は、初めて人を殺す表情に似ているのかもしれない、と何故だか思つてしまつた。

「あなたは超能力者よ」

僕は緊張の糸が切れた。

何だこいつ、やっぱり頭がおかしいだけか、こいつの脳内を見てみたいよ。

僕のどこが超能力者だ？ 意味不明だ。

「テレビの見すぎだろ？ ほな」

僕はもつ、こんなアホと話すこともないので、アホと黒猫に背を向けて、公園を出入り口へ足を進めた。

「理由を言うわ。何故あなたはさつき、悪寒や鳥肌が止まらなかつたの？」

「お前が怖い顔するからや」

「いいえ、違う。あなたは私が何を言つたか直感的にわかつて、それを聞くのが怖かつたからよ」

後ろを振り向けば、必死な表情をしてるんだろうなと、天照のその顔を想像して、こりゃ振り返つたら帰れないなと思い、さうに足を進める。

「これが決め手よ」

決め手も何もないよ。

「何故あなたは、あの日、あいつがナイフを持つているかわかつたの？」

そんなの知るか。また嫌な予感がする。僕はいつの間にか早歩きになつていた。

「見えたんでしょう」その言葉に思わず振り返つてしまつた。

何でこいつが知つてるんだ？ あの時、僕は確かに天照が刺された映像のようなものが脳内に流れた。でもそのことは誰にも言つてないはず。それは那実にも。

その驚いた表情を見て天照は言つ

「これから、薫のところへ行くけど、あなたも来なさい」

天照はそういうと黒猫を膝から下ろし、公園の裏口から学校へ歩いていく。

思わず僕も彼女へ付いて行く。この胸騒ぎを抑えるにはこれしか方法はないだろう。

天照は僕の顔を見ず、前を見たまま、「本当にあなたはヤギなんか羊のかよくわからないわ、まあ信じるも信じないもあなた次第だけど」

と、どこかのお笑い芸人の決め文句に似たようなことを言った。

天照はその長い足を器用に使い、訓練されたみたいにキレイなホームで、競歩並みのスピードで歩いていく。そんなに早く歩いて疲れないのか？ 僕も歩くスピードについては定評があるので（自分で言うのもなんだけど）天照に追いつくためにフルスピードで足を動かすことにした。

僕は男のクセにデカイ尻をしているなあと言われる、たまにその尻を見て「良い野球選手になれるよ」とまで言う奴がいるけど、良い野球選手は野球の練習で鍛えられて良い尻になつたのであって、勝手に大きくなつた尻を持つ僕が良い野球選手になれるわけがない。実証するように僕は90kmのバッティングマシーンを全部空振りした実績もある。長くなつたけど、この尻は、野球のためでなく、早く歩くためにあるのだと自負している。この尻には早く歩く筋肉が詰まっているのだと。

けれど甘かった、女だからすぐに追いつけるだらうと思つたけど、この俺の競歩とここまで良い勝負する女子がいたとは。男子を一気に3人も片付けたことがつなづけるよ。歩いて1分程過ぎたけれど、全くその差は縮まらない。僕と天照はほとんど同じスピードなのだろう。

しかし、このままじゃ一向に追いつく気配がない、仕方がない…。
・、最終手段だ、少しプライドが傷つくけれど。

走るか。

僕は天照の真横に並んで歩くような形をとり、これから何をするのかたずねてみた。

天照は僕の方へ顔を向けることもなく正面を見て、表情を変えず、「あなたが超能力者であるとこう確信が持てたから、薫に伝えるの

よ

「何で沖田先生に言わなあかんねん、てか僕は超能力者ちゃうわ！」

何故、超能力のことと沖田先生が関連するんだ？　彼女はやはり何か隠してたのか？　あの実験も何かのため？

「あなたは超能力者よ。昨日でやつと確信が持てたんだから」えらく自信があるように見える横顔とその声は、少し投げやりな感じにも聞こえる

「私の言つことが信じれなくても薫がちゃんと立証してくれる、安心しなさい」

「そんなこと言われても安心できるか！」

僕の会心のツッコミにも天照は肩ひとつ動かさず、僕の方を一度も見ることなく、その会話を終了させた。

もういいや、こいつと話していくても全く信じるとかそういう気になれないし、本当のことには近づけない気がする。沖田先生に聞けば早いことも事実だ。あの実験のことも気になるし。

僕と天照は、歩くといつことを超越した速さで、学校に着き、そのまま職員室に向かった。

と思ったのだけれど、天照は職員室を素通りする。いやいや、沖田先生はここやろ？

「着いてきて、薫は今そこにはいないから」

何か他の仕事でもしているのだろう、職員室にいるだけが教師の仕事じゃないし。

天照が職員室の隣の教室のドアを開き手招きをする。

案外近かつたんだ。僕は校舎中をくまなく探す覚悟をしていた。何ていつたつて沖田先生だ、どういう行動をしているか思考をしているのか、全く予測不可能な人だからな。

教室へ入ろうとドアに手をつけた瞬間、体中を電気が流れるような感覚にあり、一瞬目眩がした。さっきの公園で出たような鳥肌も、僕自身が鳥になつたんじゃないかと錯覚するほど出た。

公園とは明かに体の示し方が違う、体全体が教室に入るなど危険信号を出しているみたいだ。これが虫の知らせとうものなのかな？ けれどそれを認めてしまうこと＝自分が超能力者だと認めてしまった気が何故かしてしまい、僕は教室に足を踏み入れた。

自分がそんな能力を持つていないとと思うために、誰かに否定してもらうために。

教室を見渡すと沖田先生がいた。彼女は机の上に座つて腕を組み、こちらを見ている。

それ以外に人がいる気がしたのでもう一度見渡してみるけれど、僕と天照と沖田先生しかいない。

「来てくれたのね薙くん、ありがとう。あなたの性格、じゃ来てくれないって思つていたけど。うれしい」

机を椅子のようにして座り、キレイで長い足を地面に伸ばす沖田先生は、満面の笑みで、それはそれは、心がうれしいで埋め尽くされたような声色で僕に言った。

それにしてもこの美女2人は何を隠しているんだ。嫌な気がしてならない。教室の空気も最高に悪い。

中学校の受験前の寒々と緊張が混ざった教室の空気の方がまだマシだ。沖田先生がどれだけ自分の周りに花を浮かせても変わることなどない。

天照は沖田先生に背を向け、黒板の方向を見てドライアイスのように冷たい声で、「薙、早く彼に説明して、彼はものすごく頭がいい人だから、あたしがどれだけ理解させてあげようとしても全くダメ」

なんだ？ 沖田先生を下の名前でしかも呼び捨てにしてるから、仲が良いと思つたけど全然そうは見えない。逆に嫌つてるように見える。

「そうね、それじゃ早速本題に入りましょつか」

沖田先生の顔が強張り、眉の位置がセンターに少し寄つて、眼の色が変わったような雰囲気がする。

「あなたは超能力者なの、わかる？」

「そんなことはさつき聞きました。ていうかわかるもクソもないですよ」この人は何を突拍子もないことを言い出すんだ？

「そりや そうよね、いきなり言われてもわかるわけないか」

口を手で押さえて、笑いをこらえるように喋る。

「一体何がおかしいんだ？ あんたの方がよっぽど面白いよ。

「これは前に雑くんにやつてもらった実験の結果よ」

そう言つて僕に解答用紙を渡す。

「何もなかつたんやろ。先生落胆してたやん」

「あの時は気付かなかつたのよ、でもこの実験結果を本居先生が見ておかしいことに気付いたの」

おかしいこと？ それより何故あの恵々しい本居の名前が出てくるんだ？

「本居先生が関係してんですか？」

「それもあとでちゃんと説明するから」と子供をなだめるような

言い方と声色を沖田先生にされる。

「実は言つとあの解答用紙の答えだけ、5日中3日は全問正解だつたのよ」

とここで天照が口を挟む、もちろん黒板を見たまま。

「ある意味よ、ある意味全問正解つてこと」

「ある意味つてどういうことなん？ 僕も解答用紙見たけどあつたの1問か2問やつたで」

「今から説明するわ」

沖田先生は自分が発見したような者の言い方で僕に説明をする。

「まず1日目の回答結果を見て13問目だけあつてるでしょ」

その通り、全25問中13問目だけが正解したんだ、確かにそれは最終日も同じだった気がする。

最終日も同じ？ 偶然にしては凄い確立じゃないか？

「雑くんは1問目の解答欄に25問目の正解を書いたの、そこから順に2問目は24問目、3問目は23問目、4問目は22問目、5問目は21問目、6問目は20問目、7問目は19問目、8問目は18問目、9問目は17問目、10問目は16問目、11問目は15問目、12問目は14問目、13問目は13問目、14問目は12問目、15問目は11問目、16問目は10問目、17問目は9問目、18問目は8問目、19問目は7問目、20問目は6問目、21問目は5問目、22問目は4問目、23問目は3問目、24問目は2問目、25問目は1問目」

と永遠に「何問田は何問田の答え」と続く気がしたので、僕は「10問田は16問田の答え」を言つて、先生の言葉を止めた。

「もうわかつたよ先生、よつするに正解と問題を逆の順番で書いてたつてことやろ?」

「わかつてくれた? それじゃ、わかつたでしょ、あなたは超能力者なの」

「わかれへんよ。そもそも偶然やろこんなこと?」

言つている自分でも矛盾していることはわかつて、いた。こんな凄い偶然が何万分の一なんだろう、でもそれにかけてみたい。

「一回そんなことあつただけで超能力あるなんて決めつけるんやつたら占い師は超能力者やないか

何故この結果を見て信じないの? と呆然として田が点になる沖田先生。

彼女が黙ると教室は静かになり、時計の秒針の音だけが響く。この空気どつにかしてくれ。

すると天照が平坦沈着な声と表情で僕を見た。

「まだ信じないの? 往生際が悪い」

そう言つと沖田先生が持つもう一つの解答欄を持つて続きを話した。

「2日田はハズレ、3日田は無理やりつなぎ合わせた感じだけど言葉で説明するのがめんどくさいから黒板に書く」

そう言つて黒板に白いチョークで数字を書きなぐる、速い割に上手な字を書く。沖田先生の字よりも明らかに上手い。

天照は黒板にはこう書いた。ピンクのチョークで書いた部分は正解しているところらしい。

1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・
14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・
24・25

12・24・23・22・21・20・19・18・17・16・
15・14・13・1・2・3・4・5・6・7・
8・9・10・11・25

「ちょっと不規則になつてるのはあなたの心理状態のせいかもしないわ、けれど法則性はある。4日目はハズレで5日目は・・・あなたが考えてみて、わかるでしょ」

問題用紙を見て少し考えなくともわかつた。1日目の結果と一緒にだつた。もうなんと言つていいのかわからない。

こんなことが實際にあるんだろうか？僕は目ではなく自分の脳と記憶を疑つた。

「その表情を見ると、答えはわかつてゐるよつね、沖田先生、彼は納得したみたいよ」

「違う！この結果は認めるけど、僕が超能力者になつた経緯とかが全くわからん。せやから認めへん」

いきなり目覚めるなんてそんな理不尽なことありえるのか？どこかにきっかけがあつたのか最近の記憶を探るけれど見当たる気配すらない。いたつて普通の日常を過ごしてきましたぞ、僕は。

変なことといえばこの学校の推薦届けが来たくらいだ。

「薰、止めを刺して」そう言つた天照の顔は、あきれた顔の代表として、記憶に留めたいほどだ。

「はーい。じゃ薙くん、いきなりだけど、あなた面接の日、健康診断でインフルエンザの予防注射されたわよね

確かにされた。それがどうしたんだ？

「あの注射には超能力に目覚める素みたいなのが入つてゐるの」

「なんやねんそれ？」

天照が掃いて捨てるように言つ、「詳しく言つてもあなた理解できないでしょ、脳内のシナップスを活性化させるのよ」

「活性化させたら目覚めるんか？」

「人の脳は80%は眠つた状態、それで一生を終えるわ。でもそ

の眠った脳内に超能力があるという実験結果が出たの。それはもう半世紀も前のことよ。それから研究を重ねて、その眠った部分を起こしやすくする薬が開発されたってわけ

「その薬を僕は注射されたのか

「難くんだけじゃないわよ、天照さんも含めて特別能力開発科の生徒みんな

「なんでや？ 僕らのIQが高いからか？」

「あなたまだそんなこと信用してたの」

「えつ？」

僕はもう何が何だかわからない。もしかしてだまされたのか？この学校に。

「IQはあなた達のよつな一般の生徒を入学させるための口実よ、だから嘘」

「うめんね難くん、嘘ついたらちやつて

「うめんで済むか」

僕は沖田先生が、何故この話をへらへらして話しているのかわからない。イライラが積もる。

「人は死に直面したときに風景がスローになる。走馬灯が見えたとか言うでしょ？ あれも一種の超能力なのよ、でも死に直面するときにしか能力が発揮されないんじゃ命が何個あっても足りないでしょ？」

「僕は死にそうじゃないのに能力が使えたで？」

「それはそうしているからよ難くん。集められた生徒はIQが高いいんじやなくて、心に傷を負っているの、深い深い。普通の日常じや考えられないほどの深いトラウマを持つてるのよ

「もしかして」

僕はやつとつかめてきた、この能力が使える時が。

「死とトラウマは似ているのよ。その心の衝動を脳が勘違いして超能力を引き起こせる。まあ死に値するトラウマを持った人間なんてそんなにいないのよね、それにそれを頻繁に思い出せるメンタ

ルもないわ、けど雑くんはそれができるのよ

「じゃあ、天照も」

「私は、別よ」

そう言つと逃げるよつに教室を出て行つた。

過去のことは聞かれたくないのか。

「天照さんは少し違うのよ、まあ私の口からは言えないわ」

ちょっと引っかかるところがある。何故僕はこの問題をしているときはトラウマも思い出してないのに、能力を発揮できたんだ?

「私もその薬を注射したのよ、するとそういう超現象を引き寄せやすくする能力が身についたの」

「その、身につく能力って人それぞれなんですか?」

「そうよ、あなたの心の傷の一一番深い記憶のときに強く望んだものがあなたの超能力になるのよ」

つてことは、この人は超現象を引き寄せる能力が欲しかったのか。やっぱり変な人だ。

けれど少しづつこの能力のことがわかつてきた。

あれ? 知らないうちに僕は信じてしまったのか、このありえないことを。でも先生が言つてることは間違つてるよつに見えないし、それに俺の能力も恐らくは・・・。

自分の能力が何か考えていると、教室のドアが開いた。

ふと、目をドアの方へやる。

那実ともうひとりは...通学路にある花屋の女の子だ。

どういう組み合わせ? てかこの教室にこのタイミングで来たつてコトは.....。

その13 崎野心花と黒い夢

開かれたドアの先には、驚いた顔をする僕によく似た顔と、毎朝花屋で見かける小さな顔に大きな目をして艶やかな唇をした中学生がキヨトンとしていた。

空気は沈黙。

僕も驚いて声が出せないでいる。何故奴がここにいるんだ？ いや考えなくともわかることだけれど、一応確かめてみよう。そう思い口を開けようとした瞬間。

「うつそお？ 涙いわあ

鼓膜が痺れるほどの声で、桃の花びらのよつな顔をした中学生が言つた。どこからそんな声が出るんだ？

「なー君、いつからそんな超能力使えるよつになつたん？ 分身の術つて忍者みたい」

そう言つて腹を抱え、涙を流す。大爆笑だ。それより『なー君』とは那実のことか？

「そんなすごい能力使えるなんて知らんかったわ。コノ力を驚かすためなん？」

笑いをこらえながら必死で話すけれど、たまに堪えきれず唇から空気が漏れる。

そこに那実が空気を元に戻すかのよつ冷静に、「ちやうよ、これは兄弟の雑や」

「兄弟？ つてことは双子やつたん？ 初耳やあ

そう言つて彼女は僕の顔をまじまじと見る。そんなに凝視されると照れてしまつ。

「ほんまや、ちよつと顔違つ。」めんなさい笑つたりして

そう言つて斜め45度くらいに背中を曲げて、お辞儀を慣れたようにする。いつも店の接客でやつてるからなれでいるんだろう。

「いーにおるつてコトは・・・」

彼女はそう言つと沖田先生に田配せをした。恐らく僕が超能力者かどうか確認を取つてゐるんだろう。

「超能力者なんや、あ、これからよひじへく

そう言つと僕の方に一步近づき、

「あたしは崎野心花。れいぜいのいののかよろしくお願ひします」

そう言つと営業スマイルとは別の、親しみが伝わつてくる笑顔を僕に向けた。

照れ隠しに僕は、「花屋でサキノつてなんかネタみたいやな」何を初会話の人に失礼なことを言つてゐるんや僕は。

僕はパニックになると、後先考えずに出てきた言葉を口から発するタイプの人間のようだ。

しかし彼女はそんな言葉を気にすることなく、

「でもなんか運命みたいやろ? 花屋をする運命に生まれたつて気がして。あたし、生まれたころから花が好きやから、やっぱり運命かなつて思う」

今の一言で何回、運命つて言葉を使つたんだろう。それほど日常会話に出てくる言葉じやない気がするんだけど。

と、ここで薙が割り込んできた。人がせつかく崎野心花と話してるので、邪魔するなつての。

「お前ほんま、何でここにあるねん」ここにまつつきの話しが聞こえてなかつたのか?呆れる奴だ。

「だから超能力があるからここにあるんや」

「それはわかってる」

なんだとこいつ、わかってるんなら、そんな質問するなよ。

「俺は何でお前がここにあるんか聞いてるんや」

つたくめんどうかい奴だ、いちいち説明するのがめんどくさいけれど、こいつがこんなに興奮しているのはあまり見たことがない。仕方ないのでここまで来た経緯を説明した。

「そうか、そうやつたんか」そう言つとつむいて落胆の表情を映す。

なんだこいつ。わかつてるんなら、そんな質問するなよ。

「天照沙希が、やつぱりあいつが要注意人物やつたんか」

「どういう意味？」

「俺はお前を超能力を持つてることに気付いて欲しくなかつたんや」

沖田先生は那実を試すよつな声色で言つ

「あら、それはどうして？」

少し口をもじもじさせた那実は言つ。なんだ？ そんなに言いにくいくことなのか。

「嫌な雰囲気がするんや、この組織には、先輩とかもだんだん・・

・「おつと那実くん、言つて良いことと悪いことがあるわ」

沖田先生はいつもみたくのんきな声で言つたけれど、その中に明らかな怒りを感じた。

那実はなんて言おうとしていたんだ？

「那実、その組織つて何なん」

「まだ聞いてなかつたんか」驚きと、やつてしまつたといつ声が聞こえてきそくなぐらいの表情をしてそつ言つた。

「今から説明するわ、薙くん

いつもの雰囲気に戻る沖田先生。凄い感情の切り替えだな、やつぱり女性は怖い。

「この学校では、あの薬を打たれた生徒の中で超能力に目覚めた人に限り、ある活動をしてもらつの」

「ある活動つて？」

「国を守つたり、悪い人を捕まえたりするの」

そんなことをするの？ ていつか、「そんなこと警察に任せればいいじゃないですか」

「出来ないから言つてるのよ」

どうこつことなんだ、警察が解決できないよつなことを僕らがやつて言つのか。出来るわけないじゃないか。

「裏の警察つて『トト』。警察は市民のためでしょ」

そりやそりだよ。

「で、私たちは、国を守るためにがんばるの」

国のために僕達が、何をどうがんばれるのが全くわからないんだけど。

「簡単に言つちやえれば、国にとつて邪魔な存在を消してしまつの

「

暗殺者つてこと?」

「まあよく似てるけど、殺すことまではしなくていいわ、その手伝いをしてもらうだけ」

「例えばどういうことするんですか」

それは正義なのか悪なのか、ちょっと微妙だぞ。邪魔な奴を消すつて言つところが怪しい。

「うーんとね、最近、有名な映画監督が脳卒中で倒れたわよね」確かに、ニュースでも取り上げられて、監督の作った映画の出演者たちが、メッセージを送る映像はよく流れていた。まあ彼らが本当に心配しているかじうか気になるところだけれど。その監督とどうつて関係あるんだ。

「あの人は脳卒中で入院してなくて、死んでいるわ」

どうこうこと、ニュースじゃ病氣と言われて、最近近じや、監督は容態も回復してきて、朝のニュースで生電話もしていた。もしかして、この組織にはマスコミを動かすほどの力を持つてゐてコトなのが。

また沖田先生のちんぶんかんが飛び出したのか、本当のことを言つてゐるか気になつて、斜め後ろにいる2人を見たけど、2人は俯いたままだ。

「那実、どうこうことなん」

僕は出来るだけ、落ち着いた声で言つたつもりだけれど、実際、声はビブラーートしたみたく震えていた。

「俺は何にもしてないで、先輩達がやつたことや

決して目を合わせようとしない、こういったときの那実は高確率で嘘をついている。けど、今の空気は問いただせるようなものではない。

「能力が発覚して半年は研修期間だから、難しい事件には関わらせないようにしていいわ、極力」

極力ということは、関わることもあるっていいことだよな。
それよりももっと気になることがある。

「何故、その映画監督を殺したんですか」

「私たち、組織のことを感じさせるメッセージを含んだ作品を作ったことと、国民に対し不安を与える物語だったからよ」
日常会話のように言う様子に、人を殺すという罪は全く感じられなかつた。

もしかして本当にやばい組織なのかな、誰か冗談だと言つてくれよ。

「大体わかりました、ほな僕はこの辺で」
もうこの場にいたら頭がおかしくなりそうだ。そう思い右足を前に踏み出した瞬間。

壁や那実たちがゆがんで見える、沖田先生の声が機械音のように、一定の高音を鳴らし続けている。どうしたんだこの教室は。もしかして、他の超能力者が僕を教室から出さないようにしているのか。負けじと僕は左足を踏み出した瞬間、バットで殴られたような感触が後頭部に響き、目の前が真っ暗になつた。

そこは何よりも暗く、暗闇なんかよりずっと暗く、太陽が消えた世界。

僕は不安になつて光や声を探すけれど見つからない。

その不安はどんどん膨らんでいつて、それを抑えるために僕は走り出した、走れば何も考えずにいれると思って。

けれど、そんなことで断ち切れなかつた。5分ほどするとまた次の問題が発生する。

「一体どこまで走れば、家や電柱なんか見えるんだ？」
周りを見渡しても、何もない。あるのは黒、見えるのは自分の体だけ、でもあるという実感がない。

僕は何か叫ばずにはいられなくなっていた。

「誰かおるんか？ おるやろ、返事して」

ひたすら繰り返すけれど何も聞こえてこない、自分の声すらも聞こえてこない。

不安は積み重なる一方、今は何時なんだ、時間は進んでいるのか、一生このままなのか？

このままなのか。

その言葉を脳内で浮かべた瞬間、叫んだ。

それは泣き声にも似ていたのかもしれない。響かないから聽こえないけれど。

しばらくして、叫ぶことに疲れた僕は、つづくまつて何も考えず、ただ暗闇を眺めていた。

すると何か聞こえた気がした。

白い靄がかかつたような声で、しつかり聞き取れない、もしかしたら幻聴かもしれない。

けど次の瞬間、しつかりとした声に暗闇は包まれた。

「崎野はもう帰り、夜も遅いし」

那実の声だ。

その声は僕の脳内で何度も何度も巡り、脳内がその声で埋め尽くされた瞬間、崎野さんの顔が見えた。僕は驚いて反対側に顔を向ける。

って、ここはどこなんだ？ そう思い僕はすぐに体を起こす、その瞬間、頭に軽く電流のような痛みが流れ、僕は痛みよりも驚きで「イタつ」と言つてしまつた。

「大丈夫う、雍くん」

最初に声をかけてくれたのは崎野さんだった。次に、「いきなり

倒れるからびっくりしたけど、仕方ないか」何が仕方ないんだかわからなければ、それよりここはどこだ？

周りを見渡しても見慣れない場所だ、ベッドや消毒液、何かの錠剤が見える、保健室なのか？ けれど、定番の体重計や人体模型やら、学校にある保険の道具が見当たらない。

「ここはどこや

考えても答えにたどり着けないしこれ以上考えると頭が割れそうなので、那実に聞いてみた。

「ここは組織のためだけの治療所や、まあ学校の中やけどな」

そうなのか、組織のための・・・って保健室のほかにこんな部屋があつたのか、学校に。

そういえば、沖田先生は？

「仕事で大阪にいったよ」

「生徒が倒れたのに看病もなしが」

「よくあることなんや」何がよくあることなんだ？ 主語を言え主語を。

「沖田先生が出張によく行くことと、超能力を使いすぎる、脳に負担がかかつて眠つてまうことや」

強制終了つてわけね。

「ほなお前も目が覚めたことやし帰るか

「すまんな心配かけて。崎野さん、夜遅いのにごめんな

「全然ええよ、コノカも心配やつたし」

そう言って、微笑む姿を僕は一生忘れないように田たてに焼き付ける、あの暗闇の中でも見えるようだ。

帰り道が一緒なので3人横に並んで歩く。真ん中に崎野さん、その左に僕、空いた所に那実というポディションだ。

那実がいなければ最高の帰り道になつたんだろうけれど、3人で他愛のないことを話す帰り道もそれはそれで楽しかった。天照だとこうはいかないだろうな。

「僕、最近やけど崎野さんを登校時に見かけるで」

「え？どこですかあ」いやいや、その質問はおかしいやろ？

今朝だつて笑いかけてくれたじゃないか。

「今朝、花屋で見かけたんやけど」

「そうやつたんですか、ごめんなさい、あたし仕事中は仕事しかしなくて」どういう意味？

そんなこんなで話しているうちに、こつの間にか崎野さんの家である花屋の前辺りまで来たので、サヨナラを言おうとしたとき、「月曜日からよろしくお願ひします」そう言つて、手を振りながら笑顔で、店じやなくて家の方に走つていった。

「どうこつこと那実」

「どうもこつも、彼女は来週から別の学科に転校していくんや」

「崎野さんつて高校生やつたん？」

「そうやで、飛び級とかじゃなく純粹な高校生や、まあ間違えても仕方ないやろ」

僕の目がおかしいのかもしれないと思い、振り返つて崎野さんを見た。

手を振りながら僕らを見送る彼女は、高校生と認識してもやっぱり中学生にしか見えなかつた。

双子のフリをして歩く帰り道、那実の言葉を右から左へ受け流し、

僕は暗闇の夢のことが頭から離れなかつた。

その13 崎野心花と黒い夢（後書き）

「崎野心花と黒い夢」を読んでいただきありがとうございます。
組織についてはまだまだ秘密はたくさんあります。

もしよろしければ小説の評価もお願いいたします。

その14 滅亡と唐突

衝撃的な出来事の帰り道。僕はまだ錯乱状態ということを知つてか、那実は話しかけてくる。頭痛もする、頬むから少し黙つてくれないかな。

「お前は薰ちゃんが本当に超能力あると思つた」僕の顔を見ず、どこか遠い目をして那美は言った。

「あるつていつてたじやないか。超現象を自分の身に起こりやすくなる能力やろ」沖田先生はそう言った。嘘をついてるようにも見えなかつたし、間違いはないはずだ。それにそれが嘘とわかる根拠なんてどこにもないはずだ。嘘発見器的能力が、もあるなら人間不信になつて、今頃、僕は火に焼かれて小さい箱の中だよ。

「嘘なんや、薰ちゃんの言つてることは」だから、「根拠なんてどこにもないやろ」

「お前はわからんのか?」本当に深刻そうな顔をして那美は言つた。

「薰ちゃんには超能力者特有のオーラが感じられへん」またわけのわからないことを。そういう靈的な話しばかりしてると頭が可笑しくなつてくるぞ。つてもうおかしいか。

「お前はまだ能力に目覚めたばかりで気付かんだけやけど、いつかは気付けるはずや『こいつはなんか違う』っていう雰囲気に」

それは、動物にある危機察知能力に似ているものなのかもしれないと那美は言つた。

「なんで沖田先生はそんな嘘をついたん?」そうだよ、すぐにばれる嘘を。そんなことを言つて超能力者になれるわけではないし、信頼を得れるわけでもないし、逆に不信に思つてしまつだろ。本当によくわからない人だ。

「俺にもあの人人の真意はわからへんよ。でもお前も超能力が身についてよかつたよ本当に『屈託のない笑顔で僕を見る那美。わから

ないことがあるとすぐ話を帰るのはこいつのクセだ。

それにしてもどうしたんだこいつ？ 放課後の時は「なんでここのおもんや」って迫ってきたくらいなのに、今じゃその笑顔かよ、お前もやっぱり変な奴だよ。

「夕方はあんなけ拒否しといて今じゃ大喜びか。ホンマに『ロロロロ変わる奴やな』

「それは組織の集合場所にあつたから言つただけや。超能力が身につくのは大賛成やで」そういうて那実は落ちていた空き缶を蹴つた。空き缶はクルクル回つて車道に出て行く。

「超能力が身につくのが何でそんなにいいこと何？」僕がそう言った瞬間、那実が蹴つた空き缶が車の車輪に見事衝突して、ペシャンこにならずにこちらに跳ね返つてきた。

僕は何も出来ず、ただその缶を眺め「あの缶、アルミじゃなくてスチールだな」くらいしか考えられなかつた。あまりにも唐突過ぎて。しかし那実は驚くほどの反射神經と冷静さで、時速80キロはある空き缶を華麗にカバンで弾いた。曲芸すぎる。僕はただ呆然とするしかなかつた、あわや顔面流血になりかねないその出来事を、花を摘むように簡単に防いでしまつたこと。ただ、ただ、驚愕のひとことだつた。

これがお前の能力なのか那実。

「と、まあ訓練すればこいつことでもできるようになるねん、あともうひとつは・・・」呆然としている僕をそつちのけで話しが続ける。「地球がもうすぐ死ぬんやつてさ」

何と大それたことを日常会話みたいに言つんだ？ またいつもの冗談だ。

「冗談ちやうよ、ホンマのことや。あと約10年後かな？ これは裏社会では常識らしいで」

「つてことは、僕らの寿命もそこまでつてことか」あまり信用しない方がいい、こいつは恐らく夢で見た出来事と現実の出来事を区別できない人間なんだから。軽く聞き流す程度に・・

・しておきたいけど、『裏社会』てのが気になる。

「誰からそんなわけのわからんこと聞いたねん」

「薰ちゃんや」

また沖田先生かよ。一体あの人は何者なんだ。

「組織の幹部で俺たちの指揮官的存在やで」

「だからあの人は僕が超能力者になったことを喜んだのか、コマは1つでも多い方がいいもんな」その一言がいけなかつたのか、那実は僕をにらみ付けた。何を怒ってるんだこの野郎。

「薰ちゃんはそんな人やない、お前の人見る目のなさには驚きやわ」

それは『苦労なこと』だ。勝手に驚いてくれ、世の中にはもつと驚くことがあるだろ？　スイカが野菜っていう方がまだ驚けるよ。

「まあ薰ちゃんのいい人具合はこれからわかるやろうな、いくら人間不信のバカヤロウでも」僕のこと言つてのかこいつ？

「そんなことより、お前が超能力者であることに喜んだ最大の理由それは・・・」那実は不敵な笑みで僕の顔を見る、そんなに僕の驚く表情を拝みたいのかこいつは。仕方ないか、今日は色々面倒かけたから、誠心誠意を込めて演技してやるよ。感謝の意を込めて。

「超能力を持つ人だけが、宇宙に脱出できるんや」

僕は驚くフリが出来なかつた。あまりにも意味がわからなく唐突すぎて。もうなんだか唐突なことばっかりだな今日は。恐らく僕が無表情だつたからだろう、もう一度那実が言つ。

「だから、超能力を持つ人だけが爆発する地球から逃れられるんや」

いい加減慣れたいものだ、こういうとんでも発言には。けど何度も聞いても慣れる兆しが見えやしない、ここから富士山を見ようとするくらいに慣れることは無謀かもしけない。そんな気がする。

僕は息を整え、やつと一言口にする。「なんで超能力を持つ人だけなん？」

「全国民を乗せれるような口ケツトなんか作れるわけないやろ。

だから特別な能力がある俺たちに行く資格があるらしいで

なんだか納得いかないけど、そういうことなんだろつきつと。とい

うか納得なんてしたくないけどな、こんなことじ。

「まあ詳しいことは明日、薰ちゃんに聞きや

「明日会いに行くんか？」

「そうや、朝から行くで、だから今日は深夜番組なんか見てたらあかんで、遅刻したら怒られるからな」

それはそうだな、人を待たすのは最低なことだし、けど沖田先生が遅れてくる可能性はかなり高いよな。まあいいか。ていうか、朝からなのか。先生の都合もあるんだろつきつと、休日くらい午前中は布団の中にいたいよ。

「何をだれしたこと言つてんねん、高校生がそんなこと言つたらあかんやろ」

誰がそんなこと決めたんだよ、そんなことを言つ高校生の方が圧倒的多数だと思うけど、まあこれ以上反論しないでおこうつ、頭も痛いし、それに何だかんだ言つてこいつはこいつになりに僕のこと気にかけてくれてるんだな。

満月が照らす帰り道、その不気味な輝きを忘れて僕の心はまだ高鳴っていた、これから出くわすであろう、非日常な日々、漫画やドラマや小説の出来事のような世界が本当にあるんだとこいつに、ただ、心が満たされていた。崎野さんのことを見れるほどじ。

その14 滅亡と唐突（後書き）

これにて第一章が終わりです。
読んでくれて本当にありがとうございます。

その15 那実の角（前書き）

いじから第二章です。

その15 那実の角

僕は何かおかしな夢を見ているんだろうつか。

そうとしか考えられない。一般的の高校生が、訳のわからない薬剤を投与され、そのお陰で超能力を身につけ国を守ってくれだとさ。僕らが戦隊ヒーローっていうのか？ 本当に馬鹿げている。どういう社会の仕組みでそういう組織が生まれたのかイマイチわからないし、なぜ、僕らみたいな少年少女に、そのような危険な真似をさせるのかもわからない。別に自衛隊か何かそういう組織の大人達に任せればいいものなのに、全く答えが見えてこない。

それは今、この状況にしてもだ。

照りつける朝日の中、僕と那美はバス停の前にいた。

こんな快晴は久しぶりだらう、完璧な行楽日和だ・・・そう、行楽。

朝早く那美にたたき起しきされ、寝ぼけた体に担がされたバトミントンセットとビニールシート2枚。

「沖田先生と話が出来るって言われたから来たのにこれはどういうことやねん」

昨日の頭痛もまだ治つていないのに、何故休日の朝7時に起きてピクニックに行かなきやならないんだ。せっかくの休日くらい寝かせろって言うんだ、せめて10時までは。

「いつも授業中寝てるやないか、何を偉そうなこと言つてんねん」確かに那美の言うとおり、僕は授業の7割は寝て過ごしてゐる、けど、そんなことはどうでもいいんだよ。問題はそう・・・

「ピクニックってなんやねん？ てか僕とお前だけなんか？ 何が悲しくて兄弟でそんなことしなあかんねん」

「ホンマに誰も来えへんなあ。集合の8時までもう5分前やで」

僕の話しを聞き流すように那美が言つてすぐ、東方からものすごい

い勢いで走つてくる人が見えた。朝日のせいで姿がたちをよく確認できないけれど、その横を走る小動物を見ればわかることだ。

「やつと来たか、意外と時間にルーズなんやな」と那実がどうでもいいことを言う。

「黒猫も一緒に、やつぱり変な女や」と僕もどうでもいいことを言う。

それにしても、何故黒猫も一緒に来てるんだりう?

天照は僕らの前まで来て急ブレーキをかけた。徐々にスピードを落とせばそんな忙しなく止まらなくて済むのに。

彼女はあれだけのスピードで走つてきたのに息も切らしていないし、汗もかいていない。流石と言つべきだろう、黒猫ですら息が上がりつてゐるのに、恐るべし体力だなこいつは。

「すまない、少し起きたのが遅れたから遅刻してしまった。いや、ギリギリセーフか?」

「残念ながら、ギリアウトやで」と僕が言つと、天照は肩を落とし、もう一度僕らに謝罪をした。

すると微笑みながら那実が天照に尋ねた。「なんで遅れたんや」

「だから言つたじやない。寝坊だつて」そう言つて那実を凄い剣幕で睨んだ。どうやら天照は『僕ら』に謝罪しているわけではなく、僕に謝罪していたようだ。

「寝坊?」そう言つと那実は不適に笑う。天照も不安になつたの

か、少し恐れるような顔になる、けれどそれでも那実を睨み続ける。

「何よその顔は」

「天照沙希、その長い髪に付いた物はなんや?」今にも噴出しそう言つた。

それを聞いて僕も天照の髪を見ると、木の葉が付いている。さうに服を見てみると、木の枝が引っ付いていた。続けて那実が訊ねる。

「その黒猫はどうしたんや、何でついてきとんねん」

「たまたま公園を通りかかつたら付いてきたのよ」

そりゃそりゃ、わざわざ公園で飼つてている猫をピクニッケに連

れて行くような女じゃないだろう、この女は。けど……。

「それやつたら何で木の葉や木の枝が天照沙希の体についてんねん、ゴミをひきつける能力でもあるんか？ そつやつたら人間掃除機とでも呼ばしてもらおか」

「私をからかってるの？ それ以上言うと痛い目合うわよ」冗談と思つて、2人の会話を聞いていたが、天照の表情を見ると、その考えが甘かつたと気付かされる。衝突間近だ。

けど、想像してみると偉く滑稽だ。わざわざ公園に寄つて、体に枝やなんやら付くほど、黒猫を探し、そのせいで遅刻するなんて。子供みたいにかわいい一面もあるんだな。本当にガキっぽい、けどそのガキっぽさには共感が持てる。

天照の弱点を握つて上機嫌に「ラヘラしている那実の電話が鳴つた。

「もしもし、伊佐やけど……あつそうなん？ OKわかつた、ほなまた」

「一体誰からだろ？ といつかこのピクニッケに誰を誘つたのか気になる。」

「コノカは後から来るつて、ほんと沖田先生も一緒にくるみたい」つてことはこの3人で、しばらく過ごさなくてはいけないのか？ それは気まずいぞ、「何時くらいに先生らは来るん？」

「現地に行つといて言われたからなあ、でもあの2人弁当係りやから昼までには来るやろ」

それじゃ、長くて4時間はこの3人でいなきやならないのか。一気に時間の流れが、飴を溶とすように遅く感じる。

「あれ？ まだ来てないんじやない」

「せやで、先輩のクセに遅刻やて、情けない」慌てて僕は聞き返す。

「まだ誰か来るの？」一体誰なんだろう？ 先輩？ 何の先輩なんだ？

「俺ら1年の教育係みたいな人やな、あの人のことを知る為に呼んだんや」

口を尖らせて、天照は「無理に決まってる」と断定の言葉を吐いた。

「電話してみるわ、まだ寝てるかもしれんし」そう言つて、那実は僕らより5歩くらい離れて

いった。

ふと、天照を見ると、スカスカのリュックを背負つていた。やっぱり那実の言うことは間違つてなかつたんだな。そう思つと、あの天照の態度がやけに可笑しく見えて、笑いをこらえることが出来なかつた。

「電話中やぞだまつとけ」

「私を見て笑つてるの？ ちょっと失礼すぎるでしょ」そんなこと言われたつて、つぼに入つたんだから仕方ないだろ、人の感性をくすぐるものがどこにあるのかわかつたもんじやないよ本当に、それより、「どこまでピクニック行くか聞いてる？」

あきれた表情の天照が猫を抱き上げながら言つ。

「目的地も聞かされずによくピクニックに行こうと思つたわね」

だから、僕はピクニックに行くことを知らなかつたんだよ。

「あなたはそこまでバカじやないと思つてたけど……。行く場所はあなたがよくご存知の場所よ」

つて遠まわししないで言つてくれよ、いちいち回つてびつてやつだな。

「少しは考えるつてことを知らないのかしら、行く場所は……と睡を飲む天照。

「引つ張りすぎだろ？ 早く言えよ。

「大仙公園よ」

ああ、あそこね……つて遠すぎだろ！……てか地元じやないか！ 一体、那実は何を考てるんだ。

あいつの思考を理解することは特殊相対性理論を理解するよりも難しいのかもしれない。

第三の男を待つこと、はや30分。

いくら先輩だからといって、これだけ遅刻すると許されるものではない。ほら見る、天照も平常心で黒猫と戯れているように見えるが、時々表情に苛立ちを感じ取れる。那実にいたつては10分ほど前から貧乏ゆすりが止まらない。

「ホンマに。電話したとき、今家出たから言つてたのに。どんどんけ遅いねん」

あまりの遅さに我慢できず、那実はジーンズのポケットから携帯を取り出し不機嫌にリダイヤルを押した。

「先輩？ 遅いんやけど。は？ もつおる？ どこに？ 隣？」

電話と話す那実は、困惑を隠しきれない表情で周りを見渡し始めた。どうやら先輩はもう来ているようだ。

「どこですか？ もう時間だいぶ過ぎてるから変な小細工やめて早く来てくださいよ」 那実がそう言つて電話を切った瞬間、「キヤツ」という声がした。

その声の主は…天照だ。いきなりどうしたんだ？

「何するんですか、猫を離してください」

その声を聞き、天照の方へ振り返つた。あの黒猫は首元を持たれ、力が抜けたような目をし、タラーンとして動かない。てか誰だお前は？

黒猫の首元を持った人物を僕は見たことがなかつた。と言つても、その男はマスクとサングラスをして汚らしいつなぎを着ていて人物を特定できる服装ではなかつた。ホームレスかな？ 懐かしい。大阪に居た頃は目にすることがあつたけれど、京都に来てからはじめたにその姿を見ることがなかつたからな。

「おっちゃん、その猫はこの子のや、返したつてくれへん？」 僕はそう言いながら、ホームレス男へ歩み寄つた。すると、そのホー

ムレスはポケットから光る物を取り出した。まさかこんな朝っぱらからそんな物見るなんて思つてなくて僕は歩み寄ることをやめ、息を呑んだ。黒猫がやられる。

「やめて！！」天照がそう言つてパンチを繰り出そうとしたけれど、一足遅く、その光物は黒猫の背中に刺さつた……。

鈍い音がした。それは光物が黒猫に指された音ではなく、天照が握つた拳によるものだつた。そのホームレスは軽く3メートルは飛ばされた。黒猫は空中で一回転を決め見事着地。

着地？

どうしてだ？ 明らかに包丁のようなもので背中を刺されたぞ？

すると傍観者と化していた那実が声を上げた。

「先輩遅いって」

「どこにいるんだ？ その先輩つて。

「今、天照沙希が殴り飛ばした」

えつ！？ どういうことだ。

すると、殴り飛ばされたホームレスはゆっくりと体を起こし、サングラスとマスクを取つて、「今のは時速120kmを越えていたよ、さすがだね。けどおもちゃだよ」と気味の悪い笑みを浮かべた。どうやら、あの光物はおもちゃのようだ。猫にも傷は付いていないようだし。

「つまらない冗談をするからです」そう言つて天照は黒猫を抱え駅の方向へ歩いていった。

「猪だね」と訳のわからないことをつぶやき、その先輩は僕の方へ歩いてくる。

彼は表情を無にして言つた、「伊佐那実のアメーバかい？ 私は上筒乃雄。カミツツノオまあ名前なんてどうでもいい、ホモ・サピエンス・サピエンスと呼んでくれてもかまわないよ」

「何自己紹介してんすか？ それより遅れたこと誤りよ」那実は怒りを抑えきれず、刺々しい声を出した。それもそうだろう、乗るはずのバスを3本見過ごしてゐるんだからな。それより天照の奴ど

「行くんだ？」バスはあと2、3分で来るので、僕は慌てて天照を追つた。

「上筒先輩だつて？ 本当に変なやつだ。何がホモ・サピエンスだ？ 訳わかんないよ、それにホームレスの変装で黒猫を殺すフリをするし、あれに何の意味があるつていうんだ、ただ場の空気を悪くするだけじゃないか、ただし那実を除いて。」

「天照さん、もうバスが来るから歩く方が時間かかるで」そう言つて、彼女の肩に手をかけた。

「いちいち私に触れるな！」どうやらまだ彼女の怒りは収まつていないようだ。僕は適当なことを口にする。

「上筒先輩やつたつて？ 彼にも何か意図があつてそうしたのかかもしれないし、だからゆるしてやんなよ」

「意図？」天照はしばらく考え込み、「そういうことね、あたしがバカだつたわ。けれど、許す気にはなれない。だからあたしはバスには乗らないから。この距離なら走つた方が速いし」

そう言つて天照は走り去つて行つた。仕方ない、バスに乗るとするか。彼女の足についていける自信など毛頭ないからね。

バスに乗り込んだのはよかつたけれど、思った以上に人が多く、座ることが出来ず。僕らはつり革に身を任せることになった。

そして、バスの中でも上筒先輩の謎発言は止まらなかつた。

「君が噂の時速30万キロメートルか」な、さつぱり意味不明だろ？

「はあ、そういうことですかね？ でも噂つてどういうことですか」意味不明な部分は省いて話すことにして、この人とは。

「おじべのよつて」

もう話にならない。那実、解説を頼む。

「噂？ 徐々に広まつてることちゅうん？」

「誰に」

「クラブにや」

僕のことがあの国専用警察というとんでもない場所で広がつてゐる

つてことか。

「そこにはどれだけの人があるん？」

「1年が俺らを含めて4人、2年が多分6人で、3年が3人かな？」

「自信なさげやけど、つて在学生しかおらんの？」

「卒業したらそのあとは知らん。俺かてみんなと会つたことないし、基本的に秘密主義やからね、あそこは。なあ上筒さん、」

「私は知らない」

とまあこんな感じで、会話が成立することなくバスは京都駅に到着した。

天照が本当にバスよりも早く着いてるのか少し不安だつたけれど、そんな感情は無駄なようで、彼女は京都駅のバス停の前で息を切らさず汗もかかず佇んでいた。

「上筒さん、先ほどは失礼しました。私が浅はかでした」と彼女は先輩に謝罪をし、一同はホームへと向かつた。天照の言った「浅はか」というところが気にかかるけど、あいつも変な奴だしそこまで気にすることはないか。

電車内では三者三様を終始続け、終着駅へ向かう。

天照はリュックを前に背負い、少しだけ開けたチャックに片手を入れて「こそこそ」としている。知らない人からすれば、この人は何をそんなに「こそこそ」して探してるんだろう、探しにくいならチャックを全て開ける。と思うだろうが、僕達には何をしているのかわかる。恐らくリュックの中にいる黒猫とじやれているのだろう。

上筒先輩は何やらぼそつぶやき続けている。気になつて耳を澄ましてみると「節足動物、軟体動物、うーん…やはり空気圧が大切だ」なんのこっちゃ。

那実はといふと、つり革にもたれかかりずっと眠つたままだ。よくそんなに揺れるのに眠られるな。少し感心してしまつ。

そして1時間20分の静寂の中たどり着いた、最寄り駅。久しぶりに見た、見慣れた光景は少し僕の心を浮つかせた。さて、行くと

しそうか。と公園の方へ足を踏み出した瞬間、肩に何かを担がされた。自分の荷物くらい自分で持てよ。僕は考えることなく、そりしだ奴の目を見た。『こんなことをするのほ』のメンバーでお前しかいない。

「那実、ラケットくらい自分で持てよ」

「すまん、俺は特別ゲストを呼びに行つてくるわ。先行つといて「特別ゲスト? まああの機嫌よさそうな顔を見れば、誰だかわかるけどな。」

ゲストなんてどうでもいい、それよりこの『まよ』の『まよ』に空気をひとつかしてくれないか。

そして、どうすることも出来ず、一同は、足音だけを鳴らし、公園へと向かった。

もう溜息も出やしない。

その17 知らぬが雑

大仙公園は向かうとこうつほび、駅からそれほど遠くはなく、徒歩5分程度の場所にある。

踏切を渡ると、公園に行くルートが二手に分かれている。そのまままっすぐ行って一つ目の信号を左に曲がると、仁徳陵古墳を見て公園に行くことができ、踏み切り沿いの道を行けば、7分程度で駐車場から一番近い公園の入り口へ行くことができる。

どちらのルートがいいか一応先輩に尋ねてみたが、案の定無言。仕方なく天照に聞くと、「どちらでも変わらないでしょ？」一応言つておくれど、あたしは別に古墳なんて見に来たんじゃないから「駐車場のある入り口から行けばいいじゃないと、どうして素直にいえないのだろう。聞かないで自分で考えた方がよかつたかもしれない。

時より横切る新幹線の風を感じながら、僕らは大仙公園へ向かった。

かれこれ何分間沈黙が続いているのだろう、そんなこと気になつても仕方のないことだけれど、あまりに誰も話さないので僕から話題を振ろうと試みる。けれど、残念ながら、言葉が見つからない。僕は小さい頃からずっと聞き役で、話し役ではなかつた。なので突つ込むことに対しては人並み以上に出来ると思つてゐるけれど、いや、ボケとなるとそれは3級品どころから5級品あればいいところだらう。

たまには話し役もするんだつた。と過去の自分を責める僕に、やつと恵みとなるであろう携帯電話の着信音が鳴つた。公園の入り口は田の前だ。

「はい、雑ですけど、もう着いた？」通知者表示は「崎野心花」。この人が来なければ僕はこのピクニックに参加してなかつただろう、これは絶対だ。

「雑くんですか？ ロノカ達はこっちですよ」って言われても、場所を言ってくれなきゃ わからぬだろ。相変わらずの天然さんだ。

「すみません崎野さん、『いひち』って言われても場所言つてもらわなわからんよ」

「あつ、そか、『めんなあ。あはははは。えつと…多分右かな？ 手振つてるからわかると思つで』」

なんだか雰囲気がピクニックぽくなつてきたな。やっぱりあちらと向こうでは華やかさが違う。まさに陰と陽だよ。

「えーっと右…」

いた。

小さな体を精一杯伸ばし、そして手を左右に大きく振る少女の姿が見えた。その横に女性の姿も見えるので、多分それが沖田先生だろ。僕は見つけたという合図を込め手を振る。

僕らはその微笑みのある方へ歩み寄つた。

「なー君はどこじつたん？」と崎野さんは落ち着きなく周りをキヨロキヨロしながら言つ。恐らく彼女は初めてこの公園に来たのだろう、けどそんなに珍しいのかな？

「那実？ あいつは特別ゲストを呼びに言つたで」

「ええ？ 誰やろちょっと楽しみ。もしかしてなー君の彼女さんかな？」

意外と鋭いな。ボケッとした雰囲気だから、そういう感も鈍いと思つてたけど。

「そうでしょうね、そのときは仲良くしてあげてください」

「何をそんなま改まつてるん？ 当たり前やん、ロノカはもう高校生やで」

そういうことに高校生も小学生もないだろに。まあこの人に関してはそれほど不安は感じないけれど、問題は天照だ。こいつは何をするのか分かつたもんじやない。

「ところで雑くん。ここは遊べる場所はないのかな」

そういうのは、一本ねじの外れた天真爛漫、容姿端麗、沖田先生だ。20代だと何をして遊ぶと楽しいのだろう？

「バーミンガムやつたらできますけど」やつまつて僕は、ラケットを振る。

「あたしは場所を聞いてるの」

「そつか、ほな子供が遊ぶ遊具ならありますけど」

「観覧車とかそういうのはないの？」

何を言つてゐるんだろう？ 公園と遊園地を勘違いしてゐるんじゃないか、この人は。

「先生、ここは公園やで？ そんな機械仕掛けな物、置いてませんよ」

「やうなの？ つまんない」子供のよつこ、転がる石を蹴つてそう言つた。

どうやら機嫌を損ねてしまつたようだ、その年になつて拗ねるなよ。

僕は仕方なく沖田先生が楽しめた提案をした。何度も行き、そして何もない所の代名詞とでも言おうか。

「仁徳陵古墳に行くつてのはどうですか？ 今10時過ぎやし、ゆつくり行つて戻つてくれればちょうどお昼くらいですよ」

「あ、やうか、古墳あるんだよね仁徳のー」仁徳つて、あなたの友達か？ 仮にも天皇やで。

「そうですよ、世界三大古墳ですよ。どうします？」

「もちろん行くわ！ みんな拒否は許さないよ」

そう言つと、沖田先生は誰の意見を聞くことなく歩いていった。まあこのメンバーで反論する奴なんていないか。

「なあ、雍くん。その古墳で確かめつちゃ大きかったでなあ」と崎野さんが上目使いで言つもんだから少し頬を赤らめてしまった。

いつも思つけど、何故女性の上目使いには心を揺さぶるものを持つてるんだろう。もしもそれが男性だったなら明らかに威嚇しているとしか取れないのに、性別によつてこれだけ変わるんだから、性

別つて不思議だ。なんてこと考えてないで早く答えないとな。

「大きいって言うか、でかすぎて何が何かわからんくらい」

「へえー。すごいなあ昔の人って」彼女はそう言つとあごに右手を添えて考えるそぶりを見せた。

一体何を考えてるんだろう？ 古墳の作り方かな？ それとも大きく作った理由かな？ まあどちらにしろ僕の脳内にインプットされてないから答えることは出来ないけど。

「2人ともベチャついてないで早く！ てか薙くん！ あなたがいないと場所、わからないんだから早く来なさいよ」といつものおつとりした雰囲気を忘れさせる怒号で、沖田先生は僕らを呼ぶ。思わずビクついて駆け出してしまった。

走りながら崎野さんは「冗談を言つよつに言つた。少し唇を尖らせるフリをして。

「薙先生つて自分の好きなことだと何フリがまわないよね」

「本当。自分勝手な大人だよ」

「でも、コノカ。ああいう人に憧れるな」それは少し分かる気がした。

前列に左から崎野さん、僕、沖田先生と歩き。その後ろに自由気ままに天照さんと先輩が続く。ついでに黒猫も。

後ろの2人と1匹は知らない間に消え、知らない間に戻ってきたり、幼稚園児のようによくわからない行動を繰り返していた。忙しないのでここに来たときと同じように黙つて着いてきて欲しいんだけど。けれどそれを言つと天照がどうせやかましいので、言葉をガムのようになみ込む。

仁徳陵古墳へ出発してから5分程度過ぎた頃、久方ぶりに天照が声をかけてきた。

「古墳を見に行くのはいいけれど、アイツはどうするの？ きちんと連絡した？」

そうだった。特別ゲストを呼びに行つた僕の兄弟、先輩的に言つとアメーバー。そのことをすっかり忘れていた。アイツはこういう

ことにほつるさいつてのに、ござといつ時に僕の脳内は小休憩を入れるものだから困つたものだ。と自分の脳に責任転嫁しても意味があるまい。仕方なく僕は、携帯を取り出し生涯でもつとも話してであらう人物にダイヤルする。

「おう、難か。もうちょっとで着くから。今どこにいるん?」いかにも元気ハツラツな声で那実は電話に出た。

久しぶりに彼女と会うから機嫌がいいのだろう。しかし、それを少しでも損ねてしまふとこいつの場合どうなるか分かつものじゃない。

「そのことなんやけど、沖田先生が仁徳の古墳見たいって言つたら。そつち向かつてるねんけど」僕は、またしても怒号を聞くことになるだらうと決意して言つた。

「一分一秒でも惜しいのにどこの行つてんねん! あんな森行つてもしゃあないやろ! とめらんかいアホ! はよ引き戻せ!」

と聞こえたのはあくまで妄想であつて、実際は、「そななん? ほなしゃあないな。俺と香美は適当に暇潰すから、森林探索楽しんできて。公園に戻つてきたら電話くれよ」と軽快に電話を切つた。

「あとから連絡頂戴つてぞ」と業務連絡のように伝えた。

「そう。ありがとう。」無愛想にそう言つて天照はすぐ側を歩く黒猫を抱いた。

もうここいつの無愛想なところにもなれてきたので、いちいちイライラすることはなくなつたけれど、やっぱり少しだけ腹が立つ。どうすれば天照に嫌がらせを出来るだらうと考えると、今度は沖田先生が話しかけてきた。と言つよつは、延々と独り言のようにな古墳の説明を始めた。

「仁徳陵古墳に行く前に知識を詰えてあげるわ。これも勉強のひとつよ、心して聞くように」

初めだけでも聞いてるフリをしようかな。

「仁徳陵古墳に眠つてゐる仁徳天皇は古事記と日本書紀で第16代天皇と伝えられて、本名は大雀オオサザキつて言つの。仁徳天皇と言つのは

8世紀頃につけられた、死語に送る称号だから本当の名前じゃないの。そこは重要よ」

それほど重要とは思えないけど。ていうかその説明要るか？

「この人すうじく長生きさんで、古事記じゅ 83歳で亡くなつて書かれていて、他の説じゅ 143歳まで生きてたつて言われてるのよ。どちらにしろ当時じやありえないくらい長生きよね。

それに彼は天皇としても立派に仕事をして、一般の民にも色んな良いことをしたから、聖帝セイジヘイジノミカドつて称えられて、理想的な天皇つて言われてる。そんなすうじい人の古墳なのよ。覚悟して拝みなさい！」長い長いセリフの結論はしつかり見なさうってことか。律儀に聞いてしまつたのはどうやら僕だけらしく、天照は黒猫と戯れ、先輩はまた失踪。崎野さんは遠くを見つめながら田を輝かせている。一体どうしたんだ？

「ちよつと聞いてるの？」ノホリカサスガの沖田先生も彼女の異常に気付いたらしい。

「聞いてたよちゃんど、仁徳天皇つてすうじいね」と、どんな質問にも当てはまるよつたな答えを崎野さんは言つた。見た田よりも彼女はしたたかな様だ。

「そんなことより先生、もしかしてあの森つちいのが仁徳さんのお墓？」

「え！？ どこのどこの？」首を縦横無尽に振り、辺りを見渡す沖田先生。そんなに首を動かして筋肉痛になつても知らないよ。僕はこのままじゃ明日筋肉痛で首が動かなくなる沖田先生の首を守るため、古墳の方向を指差した。

「あれやで沖田先生。木がいっぱいある」

そうすると「キャーーーー！」と発狂しながら、手を回して仁徳陵古墳へ走つていった。ビューやうとうとうと脳内の興奮メーターを振り切つたらしい。

僕らは彼女に慌てて着いて行くこともなく、のんびり向かつた。もう先生に付き合つのも疲れた。それは満場一致だろ？

森としか捉えられない程大きな仁徳陵古墳。なぜ昔の人間はあんなにも大きな墓を作ったのだろう。権力の大きさを示す為だとは言うけれど、それにしても少しやりすぎやしないだろうか？きっとこれを作る為に何人の命が失われたのだろう。そう思うと尊くて仕方がない。

「力があるものが力を示す。それのどこがいけないと言つる」

「いや、別に悪いとは言わないけれど、やりすぎじゃないかなと思つだけだから」この女の沸点はどこにあるのかさっぱりわからない。

「弱肉強食よ」

「確かに天照さんの言つとおりだけど。ねえ先輩、先輩なら僕の言つてること少しばかり理解してくれますよね」知らない間に戻つてきました先輩に、僕はしばらく会話をしないことを気遣い少し強引に話しせを振つた。

しかし「平和」と、これまた無表情で言つ上筒先輩。

この人の言動にいちいち脳内を働かせていると、いくらカロリーがあつても足りやしないので、僕は、「そうですね」と適当に相槌を入れる。今日で「そうですね」は何回だろ？彼と話すたびにその言葉を口にしている気がする。つまり話しても無駄ということだ。

「本当に大きい。ちょっと予想以上やわ」

やつと普通に会話できる人間が口を開いてくれた。仁徳陵古墳を30秒ほど見つめながら口を意味もなく開かせて、無駄に目を輝かせていた彼女がまともと言えるかわからないけれど。

「ありえへんやろ？ 中学の頃はよつこの周り走られたわ

「へえ、なんかロマンチック

果たしてそれがどのように『非現実的で甘い美しさ』なのは地元民にはわからない。というよりそれをロマンチックと感じるのは崎野さんだけかもしない。

超巨大古墳へ走り去った沖田先生を追うのではなく待つことにし

た僕らは、自然の成り行きでそれぞれ時間を潰すことにした。

僕と崎野さんは、バドミントンを。天照と黒猫はベンチに座りじやれ合い、先輩はずつと空を眺めている。もつ彼のことは深く考えないことにしよう。

崎野さんは見かけによらず、なかなか運動が出来るようで、どれをとっても平均的にスポーツをこなす僕と同等の動きを見せた。女子の方じや明らかに上手な方だろう。

戯れも束の間。先生は5分もしないうちに戻つて来た。腕を組み頬を膨らませながら。

「何あの大きさ？ 信じられないわ。もうお腹空いたからお昼にしましょ、少し早いけど」

完全無欠な気分屋発言をし、沖田先生は先頭を切つて広場へ歩き出した。

僕は当然のように着いて行き、それと同じように、携帯を手に取る。

「那実やけど、もう古墳巡り終わつた？」

「そうやな、沖田先生腹減つたみたい」

「そりなんや。ほな今から向かうわ。場所はカラス広場でいい？」
カラス広場は本来、大芝生広場と言つ名前だけれど、あまりにカラスが沢山いる広場なので、僕らの間ではカラス広場と呼ばれている。芝生が広がっていて、昼ごはんを食べるにはうつてつけな場所である。カラスがいることを除けば。

「ええよ」しかしカラスのいない場所などこの公園にないと言つても過言じやないくらいたくさんいるので、そのことは反対の理由に含めないので当然OKだ。

僕は久しぶりに会う香美ちゃんを想像した。

高校に入ることで何かしら彼女は変わったかもしれない。それは化粧の濃さであつたりファッショソンであつたり髪型であつたり。それが間違つた方向に進んでいいだろか？ 彼女の誇るべき清潔さはまだ健在なのか、なんて答えのないことを考えながら、カラス

広場へ向かった。

しかし変わってしまったのは香美ちゃんではなく僕の方だとこのときは気付かなかつた。僕らといつほつが正しいだろつ。

そう、僕らは超能力者なんだ。

その18 天照も氣を抜けば唐に当たる

カラス広場には見知れた男女が向かい合い笑っていた。僕らが來たことにも気付かず。それは幸せそうに、心を満たすような微笑ましい光景であった。にじみ出るような仲のよさだ。この2人に遠距離だとか中距離だとかそういうことは関係ないのだろう。そんな非現実的なことを現実に思わせてくれるのがこの2人。

伊佐那実、横前香美。

2人は本当に仲が良い。それは付き合いだしてからずっとだ。

那実と香美が付き合い始めたのは中学2年生の頃。

恋愛に対して幼い考え方を持つ僕は、一体中学生同士の恋愛にどのような必要性があるのだろうと、悩み倒していた。しかしこの2人の醸し出す幸福感はそんな僕の悩みをうやむやにさせるくらい奇跡的なものだった。そりや喧嘩だって、しただろ。いや、ショッちゅうだつた氣もする。那実の機嫌がすごぶる良いときはほとんど香美ちゃんと喧嘩中といふ合図だった。少し変わっているが、那実はそういう男なのである。どこかで幸せと不幸を零にしないといけない性分というかトラウマに近いものがあり、機嫌がいい日は携帯の着信音は鳴ららず、また今にもハッ当たりしてくるのではないだろうかという目をしている時ほど、携帯の着信音は頻繁に鳴るのだ。そのことを考えると香美ちゃんと付き合つてからの約3年は、いい日が5割、悪い日が2割、残りの3割は普通つてとこだ。

2人はどれだけ喧嘩の数を重ねても別れることはなかつた。

いつか忘れたけど、あんまりにも機嫌のいい日が続いたので僕は那実に、そんなに喧嘩するのなら別れればいいじゃないか、と無責任なことを言つたことがあつた。

すると那実は、「嫌いだから喧嘩をするなんて、お前はバカか?」と呆れ顔で言つた。

今思うとあのときの僕は本当にバカだつたと自伝にも書いていい

くらい今は認めている。

なので僕は恋愛対象外ってわけだ。この場合は、恋愛が僕を拒絶するという意味だけだ。

そんなのでもいい思い出はこいつらの結婚式の祝辞まで置いて、久々に会う香美ちゃんに挨拶と、変人達の紹介をしないとな。

「久しぶり香美ちゃん。元気してた？」

「もちろん！ そつちこそ元気そうやな」とニマーと笑う彼女。オレンジのキャミソールにハーフのジーンズを履いて、薄めの化粧の彼女は、どうやら見た目は中学卒業後とそれほど変わりない様に見えた。もう少しきらいに変わっていてもいいだろうと思う反面、ほつとしたのも事実。変化したのは艶のいい黒髪が肩辺りまで伸びたくらいだ。

香美ちゃんは左手を変人達に向け、「その人たちが学校の友達？ 那実の彼女です、ってこんなこと言つのも恥ずかしいな。どうもよろしく」と浅く頭を下げた。

「紹介するわ。この人が崎野心花さん」そう言つて、すぐ斜め後ろにいる彼女を右手で示す。

「よろしく。これまた可愛い人やな、ちょっと驚いたわ、へへ。今日一日よろしくね。といふか仲良うしてなあ」崎野さんは右手を差し出し、それに香美も答えるように左手で右手を握り、「そうやね、よろしく」と、愛嬌よく答えた。

「そんで、この黒猫と戯れるのが天照沙希さん、そしてその横が上筒先輩、そんであのお姉さんが歴史を担当してた沖田先生」と崎野さんの紹介より簡潔に行つたことをわざわざ説明する必要があるだろうか？ 答えは否だ。

「今日はよろしくお願ひします」

そう言つたのは香美ちゃんではなく、意外な人物、天照だ。

先ほどまでローテンションガールっぷりを發揮していたのに、今では気持ちのいいくらいの笑顔で香美ちゃんを見つめている。一体どういうことだ？ サツキまでの仮頂面はどこいったんだ？ お前

の表情はそれじゃないだろ、はやくのつぱらぼうの面を被れつての。でも空気が和やかになることを、僕はガリガリ君が当たるくらいには望んでいたことだし、意外や意外だけど、取り越し苦労だつたところなら、そんな苦労は昼食前に無くせてよかつたよ。

でもなんでだろ、天照は那実のことを相当嫌つてゐるはずだ。それならその彼女のことも嫌うだろ。なんて考へは安直過ぎたか。さすがにそんな精神年齢の低い高校生はいないよな。

「今日は保護者としてきたけれど、堅いことは言わないわ、お酒でも何でも飲んじやいなさい、つてな感じの先生だけじょろしくね、えーっと……、『めん何ちゃんだけ?』

さつさと自己紹介されたのにもう忘れたのか? それとも聞いてなかつたのだろうか。ねじの一本外れた人間の考へることが僕にはわからないので、この二択じやないかもしれない。

「面白い方ですね、初めまして香美と呼んで下さい、沖田先生」そう微笑みながら返す香美ちゃんは人として出来てるなと改めて感じさせる。

「『じつめんねえ、名前忘れちゃつて。良い名前だね香美ちゃん、よろしくねえ』

良い名前なら忘れるなよ。少しくらい香美ちゃんのこと見習え、どの部分でもいいから。

「ところでもうあたしあ腹空きまくつなの、香美ちゃん? ちょっと早いけどお昼にしない

「ええ、いいですよ。けど他のみんなは」

「もう許可はもらつてるの。まあ食べましょ! 薙くんブルーシート」

はつ! 殿。てな感じで右手に持つていていたブルーシートを広げた。そのブルーシートは文字通り青く、かわいいモンスター やうさぎや猫、犬など描かれてはいない。いわゆる安物だ。

けれどそのブルーシートは安かつたわりに大きく、今いる7人ちょうど座れるくらいだ。もちろん弁当を真ん中に広げた場合。

「ナイスシートだね雑くん！」

「いや沖田先生、それ選んだの那実です」

「そう? どっちでもいいや。グッジョブ!」と親指を突きたて
ナイスガイなポーズをとった。

僕的には猫なで声で一言「うれしい」とかなんやら可愛く言つてくれる方がよかつたりするのだけど、そんな器用さを持ち合わせていないのが沖田薰。そこがよかつたりもする。

「はい、たーんとお食べ」とさつきまで僕が背負つっていたリュックから、崎野さんはノートパソコンサイズのお弁当を2つ取り出した。これが遅刻するほどの力作か。少し、いや大分楽しみだ。

ふたを開けると、一つ皿のお弁当箱にはおにぎりがビシッと敷き詰められていて、もうひとつにウインナーやら玉子焼き、ミートボール。日本人が選ぶ弁当のおかずランキングがあるとするならば、1位から10位までを引き抜いた。というくらいありふれたおかずだった。

現在の風習で個性的なものが、意味もなく評価される場合があるけれど弁当は別だ。そこに意外性は一切不需要なのだ。もしも白身のフライの変わりに鯛の御頭焼きが弁当に詰められていたらどうする? プチトマトではなく普通のトマトが丸ごと入つていればどうする? ゆで卵ではなく生卵が入つていてどうなる?

どうもしない。ただ周りの人間から家庭事情について不信に思われ、そして笑いものになるかあるいは引かれるかどちらかだ。

なので世界で弁当ほど普通を愛される代物はないだろう。

そういう考えの持ち主なので、ついつい言葉に出てしまった。

「ここまで完璧なお弁当は久しぶりに見たで

「えへへ、そうかな? そこまで言われると作りがいあるわあ。
ありがとう」

少し褒めすぎたかな? 崎野さんは真っ赤な顔で満面の笑みを向けた。

「沖田先生と共同作業?」

僕が崎野さんに尋ねると、崎野さんは沖田先生と顔を見合させて、「それは言われへん」と悪戯な笑みで2人は僕を見つめた。

その言葉の意味を考えてみるが、想像がつかない。この弁当に何か裏があるのだろうか。弁当に裏？ そんなの存在するわけがない。毒味かもしれない、けど2人が作つたのならそんな必要はないだろう。もうよう、そんなことを考えながら食事を行つと八百万の神に罰を与えられそうだしな。

僕らはそれぞれ、適当に弁当を囲んで座つた。

僕から時計回りで、崎野さん、上筒先輩、那実、沖田先生、香美ちゃん、黒猫、天照。あ、黒猫は余計だつたかな？

俺以外は何故恋人同士の那実と香美ちゃんは隣り合つて座らないのだろうと、ちょっと疑問に思つただろう。普通に考えれば、恋人ならそうするだろう。いや、そうしないと2人は喧嘩、又はそれに近い状態ではないだろうかと考えてしまう。しかし、この2人にはその事柄が当てはまらない。2人は普通ではないのだ。2人で遊ぶときはその世界を大事にし、第三者の侵入を許さないけれど、多人数で遊ぶ場合は、その世界を壊し、那実と香美ちゃんは友達同士に戻る。それがポリシーのらしい。理由は聞いたことないけれど。

崎野さんがお箸と皿を配り終え、「いただきます」

その直後、一番早く弁当に箸を付けたのはこれまた意外な人だった。結構な勢いで口の中にウインナーやら玉子焼きやら何やら放り込んでいる。

僕は崎野さんに出来る限り小さな声で訊いた。

「先輩つて食に執着する人なん？」

「えつ！？」

僕の声が小さすぎたようだ、それにカラスの声のお陰で聞き取りにくいやうだ。

「先輩つてよく食べる人なん？」

「声小さいよ雑くん。もつかい、言つて」と、崎野さんが普通の声量で言うもんだからみんな僕の方を見てしまつた。崎野さんには

空気を読む能力が欠けているのかも知れない。

すると、隣からボソッと、「いつもはそんなんじゃないわ。ゆつくり食べる人よ」と天照が答えてくれた。続けて、「それに崎野心花が知つていいはずないわ。彼女はまだ関わりが浅いから」

「関わり？ 何の？」

僕がそう言つと、天照は上から覗き込むよつた視線で睨んできた。何か悪いこといつたか僕？

「呆れるわ」

そう言つと天照はおにぎりを手に取つた。

何が呆れるんだろ？ 崎野さんが何かとの関わりが浅いことを、僕が知らないことで何で天照に呆れられなきやいけないんだ。まあいいや。

僕はお弁当箱の中で一番大きなおにぎりを手に取る。

やつぱり米がなきや食事は始まらない。米を食べなきや食事をした気にならないしな。

僕は勢いよくかぶりついた。

「ガリ」

何か米粒とは違つた感触が歯に響いた、その瞬間、口の中全体に嫌な辛味が広がつた。

「誰や、おにぎりの中に唐辛子入れたの」

恐らく僕は涙目だろ？ そして汗もかいてるだろ？ 顔も真つ赤だろ？ そんな気がする。

すると

「あつたりい、「ノノつち。じつやらあたしが先抜けだよ」と沖田先生は大笑いしながら言った。

やられたか。たちの悪い悪戯だ。

「早く飲み物、飲み物は無い？」

「あれー、どうやら飲み物は忘れちゃつたみたいだよ」と明らかに探すフリをしてわざとらしく言った。

このクソ教師め、その年になつてこんな幼稚な悪戯するか？

僕は呆れて物も言えず、（といふか辛さで舌が回らないから何も言えないんだけど）振り向き様に靴を履きダッシュでトイレに行くことにした。あそこなら水がある。

「いつてらっしゃーい

後ろに田が付いているわけがないので沖田先生の顔は見えないけど、恐らくものすごく輝いた笑顔で見つめているだろう、そして周りは状況を読み込めずポカンとしているはずだ。

「あなたもなの？ バツカねえ、いつてらっしゃーい」という沖田先生の声が聞こえた。すごく上機嫌な声だ。きっともう一人僕と同じ目に遭つたのだろう。

そんな気の毒な奴を確認する為に後ろを向くと、
天照だ。

これは意外、あいつもキャラに合わないことをするもんだ。

「早く行きなさい！ もう追いつくわよ」

必死の形相でものすごいスピードを出し僕の方へ走つてくる。
慌てて僕もギアをフルに入れなおす、が、ものの数秒で追い抜かれた。

「走りながら道案内して、あたし道わからないうから」

どうやら僕を待つほどの余裕はないらしい。

「そこまつすぐ行つて左行つたらあるから

天照はさらにスピードを上げてトイレに向かつて行つた。もちろん僕も。

この公園にあるトイレは比較的キレイなので、口をゆすぐことにそれほど抵抗は感じなかつた。というか、清潔かどうか選ぶ余裕なんてなかつたけど。

口の中に水道水を放り込み、音を立てながら水を混ぜる。吐く。
その行為を10回ほど繰り返すと、やつと舌の痛みが和らいできた。
戻つたらなんて言つてやる？ 怒つたフリをするのもいいかな
？ それともジユースでもおごつてもらおうか慰謝料として。

そんなことを考えながらトイレから出ると、頬に水滴が落ちてき

た
「ちゆ」

その19 香美は思案の外

「何が、『雨だ』よ。口をすすぐだけなのに時間かかりすぎよ」
そんな2、3分程度のことで怒ることでもないだろ。お前は知らないだろけど、俺はすぐ辛さに弱いんだよ。一味唐辛子なんて調味料を食卓で利用したことがないくらいにな。辛さだけでなく、そういう刺激物的なものは全てダメなんだよ、からしやわさびも。レモンは好きだけど。

なんて僕の好みなど、天照にとつて乾燥注意報並にどうでもいいことだつてことはわかつてるので、その言葉を脳内で留めた。ついでに謝つておこう。

「うめんやで、ほんま舌、やばかって」僕はその「やばさ」を少しでも伝えようと、舌を出した。

「見てわかるわけないじゃない」少しへらじ舌がどうなつてるか見てくれてもいいだろ？ 見向きもしないでそっぽを向くとはなんて冷たい奴だ。「どうでもいいから早く行くわよ。みんな帰る用意してあるだろ？」

本当、冷たい奴。

天照があせる理由はよくわかる。だんだん雨足を強め、さつきまでのピクニッケ田和とは打つて變つて天氣は早変りした。

山の天氣ならまだしも、こんな平地で天氣がすぐ変わるなんて、たゞが五月雨だ。

「五月雨はそんな意味じゃないわよ」と、的確なツッコミを受けた僕とした天照は、突然の雨に打たれ必死に片づけをしていくであろう、安いブルーシートの元へ急いだ。

そういえば、ひとつ氣になることがある。恐いから心をもやもやさせていたのはこのことだろ。彼は普段とは違い（らしい）、必死になつて、おじぎせりやりついナーを口の中に放り込んでいた。

もしかすると、「上筒先輩は、雨振るつて知つてたんかな?」

「……」

無視かよ!

「あたしに言つてたの? 独り言かと思つたわ」

「独り言だと声がでかすぎるだろ」

なんて突つ込みを見事にスルーして天照は、

「あいつの能力はそんなんじやないわ」とぼやいた。

「能力? 能力つて何?」

「あんたつて本当にアホなの?」

「質問を質問で返すなんて、会話の基本を知らないのかお前は「軽蔑するような目で僕を見つめ、しばらく時間をおき「超能力」と言つて溜息をついた。

超能力。

超能力。

……そうだ、僕は超能力者だつた。

あまりにも今日が普通の日常過ぎて、そういうことを忘れていた。僕の3級品以下の思い出で、唯一希少価値のあることを忘れるなんて、僕もどうかしていた。そりや関東人に「アホ」なんて言われるよ。

けど僕はイマイチ自分の能力を実感した覚えがない。スプーン曲げとか、ああいう判り易いのなら僕も自覚できるだろうけど、そういう能力じゃないしな。といつてもスプーン曲げは超能力ではなく、力学を上手に利用した科学マジックということを現在では小学生でも知つてることで、約16年生きてきて、スプーン曲げをリアルに超能力だなんて認識している人間と出会つた事がない。そんなことを言つと、世界的有名なポケットモンスターの名前とよく似た人に訴えられるかもしれないけど。

なんて失礼なことを考へている僕はありえない光景を目にした。片付けをしているであろう那実達は僕と天照の予想に反し、口の中をもじもじさせていた。

僕はこんな体を張つたボケをしているのだから、精魂込めた突込みをしないと失礼だと思い、全身全霊で突つ込んだ。

「何で、食つてんねん、雨降つてんやん！」

僕の声は広場に響いた。が彼らに聞こえなかつたようで、僕を一瞥すると、雨に濡れた弁当に向かい、箸をいつもの2倍速で動かし始めた。

天照は僕の肩を軽く2回叩いて、

「あなたは出来る限りのことを頑張ったわ」と言つた。

天照よ、その言葉はもつと先に取つておいた方がいいと思うんだけど。

結局僕の力では手に負えないと思い、天照に助けを求めようと田をやるが、そこに彼女はいない。この一瞬でどこ行つたんだと、思い、ふと弁当の方へ目をやると……。

僕は一瞬目を疑つた、けれど何度見てもその光景は変わらない。香美ちゃんが玉子焼きを口に含みながら「ないうんもほあ、ほいいしいで。すてたらもつたいたいある？」

そんな幸せそうな顔をして言われると行儀が悪いなんて言えないじゃないか。

天照も食つてないで何か言つてやれ、といつと思つたが、この集団で一番、箸と口を動かしてるのがこいつなのでこいつにも言えやしない。

「ね、おいしいでしょ天照さん？」

「おいしいわすっ」「ぐ

嘘つくなバカヤロウ、そんなびしょ濡れのおにぎりやウインナーがおいしい訳ないだろ？一体どうしたんだ？いつものお前なら「こんな雨なのにノホホンと食つてないで早く片付けなさい」とか言つて、ブルーシートを引つこ抜くはずだろ？何を一緒になつて食つてんだ？しかもおいしいだつて？……おいしいのか？

果然と立ち尽くすこと早2分。脅威のスピードで弁当を食べ終えたバカ共は、すばやく片付けを済まし、ブルーシートを傘代わりに

して、その場を後にした。

薄暗い空。音を吸い込む雨。染み付く泥。それらは憩いの場で公園を不気味なものに変える。それよりも不気味なのは、ブルーシートを獅子舞のように覆いながら全力疾走する僕らなんだろうけれど。

雨のお陰といったてはなんだけど、行きは5分以上かかった駅までの道のりも、帰りは2分程度で着いた。周囲の視線が痛かったけれど。お世話になつたブルーシートはそのままゴミ箱へ。

羞恥心をありがとう。

香美ちゃんは駅のホームまで見送つてくれた。

まあ思いの8割は那実に向けてなんだろうけど。それは嫉妬することもない。

電車に乗り込む那実を見つめて、香美ちゃんは今にも泣き出しそうだった。僕らの前では明るく振舞つていたけれど、本当はずつと悲しい思いをしていたのだろう。それは那実と離れる寂しさなのか、正直に泣けない自分の心を嘆いた思いかどうかわからないけれど、胸を引き裂くような想いとはこのことを言うのだろう。恋愛経験値の低い僕にはよくわからないけれど。

ホームに響く電車の発進音、そして駅員の声。別れは目前だ。なんだか、3月のことを思い出し、僕まで泣きそうになつた。誰とも別れるわけではないのに。変なの。

発車まで残り10秒ほどだろう、いよいよさよならといつ場面で、香美ちゃんの目から涙が流れた、それは雨ではないかと思うくらい自然に。

思わず香美ちゃんはドアのギリギリまで近づき、「抱きしめて」という田で恋人を見つめる。もちろん彼もそれに答えるように近付く。

「今日で最後なのに」とささやく声が聞こえた。

その瞬間、僕の背中から鳥肌が一瞬で広がり、邪魔だといわんばかりに押し出された。

想像しえなかつた。

彼女は那実の首に手をかけ、華麗に唇を奪つた。那実は微動だにしない。

彼女とは香美ちゃんのことではない。
天照だ。

天照は口付けを終えると香美ちゃんに向かつて、

「残念だけどあなたは前の女なの、これでわかつたでしょ」

閉じるドア。

立ち尽くす横前香美。
誇らしげな天照沙希。

どうしてお前なんだ？ このまま那実と香美ちゃんが抱き合つてドアが閉まれば、ベタではあるけれど、どう考へても幸せなラストシーンだったのに。どうして……。

僕は過ぎていいく香美ちゃんを見つめて、もつとしつかり立つていれば押し退けられずこんなことにはならなかつたのに。と、どうじよつもないことを考えていた。

その20 心花が万事

今起こった出来事が気のせいならいいのに、ドッキリだつたらいいのに、なんなら夢、妄想の類ならもつといい。なんて考えたところで、プラカードを持った芸人が出てくるわけがない。押されたときには残つた、天照の手の温もりがしつかりと感触にあるので、そんなことは毛頭ない。なら残つた選択肢は二つだけ。

昨日、天照と不良がケンカしたときを見た幻想、いわゆる自分の持つ超能力が危険を察知してその光景を見せたのか、あるいは現実か。

どちらも認めたくない事実だけれど。

でも、そんなことは考えなくとも僕には答えがわかっている。こんな余計なことを考えているのは、ただ、現実逃避をしたいだけなんだ。いつも現実は卑怯なくらい、思つたとおりに進んではくれない。

乗り遅れた電車、テストの日に限つて遅刻、好きな人に恋人がいる事実、自分の才能がわからない苦悩、いざという時に發揮できな超能力。

最愛の人との間に授けなかつた命。

その言葉が脳内に巡つた瞬間、僕は正氣に戻つた。

ただ驚いた。自分の行動に。

右手と左手で天照の胸倉を掴んでいた。

どうやらこの状況を見ると、僕は無意識のうちに天照を殴りつけようとしていたらしい。

その行為だけみれば、自分の温厚な性格からすると驚愕な事実であるけれど、この自体の重さを感じれば別段驚くこともないだろ。むしろ必然だ。

今更後には戻れないので、僕は天照の体を両手で力いっぱい前後に揺らした。天照の表情は『無』意外何も無い。

「何でこんなことしたんや！」僕は結構冷静だった。後日談でこんなこと言つと信じてくれる人は少ないだろうけど、ここまではそうだった。

表情を変えずに天照は答えた。

「仕方のないこと」そう。ただ、その一言が許せなかつた。

僕は、彼女の胸倉を掴んだまま電車の端へ追い込み、閉じたドアに体を押し付け、右手を強く丸めた。

心の隅でこいつなら避けてくれるだろうとか、ガードしてくれるとか、あるいはカウンターなんて決めてくれるかもしれない。なんて奇妙な期待をしながら右手を振りかぶつた。

しかし、僕の予想に反し、その右手は見事に天照の頬を打つた。殴つた。

その瞬間、彼女の頬の骨、柔らかい感触が手に響き、刹那に鈍い音が電車内を覆つた。

どうやら僕の渾身の右ストレートは天照にヒットしたらしい。でも本当に当たつてしまふなんて思つてもなかつた。多分みんなも驚いてるだろう、けれど僕が一番驚いていると自信を持つて言える。ほら、情けないことに足が震えているし。

不良を三人まとめて退治する程の武術の腕前を持つこいつなら、僕のパンチをかわす事なんてバナナの皮を剥くくらい簡単だろう。けれどどこいつはそれをしなかつた。

天照は唾を吐くようにして口内に溜まつた血を吐き出した。

「これで十分？ もつと殴りたいなら殴りなさい」
まだ言うかこの女。

僕は再度胸倉を掴もうと天照の側に寄りうつと右足を踏み出した瞬間、右後方からタックルさながら、腰を両手で押さえつけられた。

「やめて、もうやめてよ、一人とも！」

どうやら僕の暴挙を止めてくれたのは崎野さんようだ。その声を聞くことで、やつと正気に戻れた。

「酷い色してる。薙くんもなーくんも沙希ちゃんも。だからもう

やめて」

そう言つて崎野さんは両手で顔を覆いながら泣き止みつた。……

色?

「Jの中で一番悲しい思いしてるの薙くんでもなーくんでもないの」

「天照さんが一番辛いっていつんか?」

僕が尋ねると崎野さんは涙を流しながらうなずく。

「なんでそんなことがわかるねん?」

誰がどう考へてもこの中では那実が一番心に傷を受けたつて考へるだろ。だいたい天照は加害者だ、何故加害者の方が辛いんだ?いつも奈落の底に落とされるのは被害者の方であつて、突然の不幸を起こす加害者が辛いはずはない。

「それは……あたしの……」

崎野さんが何か言いかけるのを遮るように沖田先生が、「J、こんなところで何をぶつちやけようとしてるの? 公共機関の中じやそういう話は禁止よ」

「大丈夫です、もう車内に人はいません」とテンポよく、そして久しぶりに上筒先輩が口を開いた。

「どうやら先ほどの騒動のお陰で少ない乗客が隣に移動してくれたようです。さあどうぞ、続きを」

上筒先輩はあくまで冷静に、そして冷徹な目で崎野さんを見つめた。

当然、両手で顔を覆つて居る崎野さんはそんな彼の目には気付かず、ただ、「ありがとうです」と。

「あたしの能力は……、人の心の色が見え……るの。うれしい気持ち、悲しい気持ち、そういうのが色で表されるの。……どれだけ隠しても」

そんな超能力を聞いたことがない。テレビショーンや千里眼、ハンドヒーリング、あるいは念力なんかはTVや漫画なんかで見たり聞いたことはあるけれど、人の感情を色で表す超能力なんて……。

「今、雑くんは灰色。沙希ちゃんのことが憎くて許せないみたい」「ピンゴだよ、崎野さん。でもそんなのこの状況を見れば誰だってわかるだろう。

「なーくんは…」こんな色初めてみたよ。でもわかる、うん。黒と黄色が混ざった色。でも本当キレイに混ざってるの、ありえないけど

そりゃそうだよな、ありえない。白以外の色は黒が入ってしまつと完全に混ざり合つことは無理だ。黒は全てを飲み込む。

「なーくんは、どこか諦めた感じ。これが正解やつて無理やり思い込もうつてしてるけど」「ホンマか？ 那実」

「コノカの能力を信じてないのはこの中でお前だけや」と虚うな目を向けた。

すごい。まるで占い師だ。

「沙希ちゃんは…」

「や、やめて。言わないで」

と天照は崎野さんの心理診断を遮つた。酷く怯えている様子だ。

「これはケジメなんだ」天照をかばうように、渋々那実はその言葉を吐き出した。

「何がどうケジメなんだよ？」

「超能力に目覚めたら、組織に関わつたら俺自身に危険が迫ることは承知や」

そんなこと、僕は承知した覚えがないんだけど。

「でも危険は俺に親しい人にまで及ぶんや」

「なんで？」

「理由なんて要らんやろ？ それだけ危険やと思われてるんや、俺たち超能力者は。平和の源を潰したいんやろ」

平和の源か。

そんな大それたもののかな超能力つて。

「だから天照沙希はああいう行動をとつたんや。俺が甘えてしまつたんや。すまんな天照沙希」

「なんでいいことしたのに誤られなくちゃいけないの？ 良いことしたのに、そういう時あります。でしょ」

「ありがとうございます」

那実は丁寧な礼をした。

「言われてから言つたんじゃ意味ないわ、それにこいつの誤解を解くなんて行動しなくていいからね。ただあたしがあなたに好意を寄せてないってわかればそれでいいんだから」

こいつって僕のことか。別に誤解なんて解かれたつてお前への評価は変わらないけどな。

するとドアが開いた。つて駅に着いたら開くに決まってるよな。僕らは快速に乗り換えるためその駅で降りることにした。

マークの後ろに並ぶ僕らを尻目に、天照はスタスタと駅の改札の方向へ歩いていく。

僕は思わず上筒先輩に訊ねた。

「天照どこいくんですか？」

「この空氣じや一緒にいると疲れるだろ？ だから私たちとは別で帰るんだよ」

確かにそうですが、もしかして先輩も、「そなんですか。つて先輩もなぞなぞみたいに話さなくなりましたね。疲れました？」

「君があまりにも難しそうな顔をするからね。それにそんな状況じゃないだろ、今は」

なるほど、意外と常識をわきまえてるんだなこの人。たしかに那実は最愛の人と別れ、柄にもなく酷い落ち込みようだ。崎野さんもさつき能力を使つたのでお疲れのようだし、天照に限つては言つまでもない。まともに話せるのは上筒先輩と沖田先生か。ん？ 沖田

……先生？

「沖田先生つて車で来たのに何で電車で帰つてるんですか？」

僕がそれに気付くと同時に沖田先生は駆け出し、

「本當だ、あたし車だつたよね。やつちやつたよ。あとよろしくね上筒くん」

答えるよつに上筒先輩は左手を肘から上で振つた。

そういうことだったのか。

何だか全てがキレイに廻つてゐる氣がする。

これから天照はきっと沖田先生の車に乗つて帰るのだろう。

先輩のホームレスのフリ、天照が黒猫を連れて來た理由、遅刻した崎野さんと沖田先生、スペシャルゲストが香美ちゃん、合流時間が遅れると言つて怒らなかつた那実、香美ちゃんと合流してから急変した天照の態度、崎野さんと沖田先生が車で帰らなかつた訳。そしてピクニックの場所が大仙公園だつた理由。

つまり、僕だけが最初から知らされてなかつたのか、このこと。何だか除者にされたみたいで嫌だけど、この集団ならいくらかその気持ちも和らぐ。

わからないことは、おにぎりに唐辛子が入つてたことくらいかな？僕は何だか忘れてゐる氣がしてならなくて、胸をモヤモヤさせながら愛しき故郷へ別れを告げた。

理不尽な運命によつて引き離された恋人。

僕はまだ他人事だつた。例え兄弟であつてもその辛さを知ることは不可能だ、想像してみてもそれは所詮妄想と同じことであつて、現実の出来事には程遠い。

思いを巡らせるうちに、電車は京都駅に到着した。

上筒先輩は帰り際に最後のひとことだと言つて咳き、微笑んだ。
「アメーバは時に失明させる危険性もあるのだよ」

その20 心花が万事（後書き）

第三章の終わりです。

もしよろしければ感想などいただければうれしいです。

その21 ウノゼロの狭間の三月美代（前書き）

第四章突入です。

以後よろしくおねがいします！

その21 ウノゼロの狭間の11月美代

五月蠅い。

ひるさことこつ字はどひして五月に蠅と書くのだろう。五月に蠅が多いからか？ そんなこともないだろう、七月や八月の夏場の方がそういう害虫が多い氣がする。

なんて考えても考え方ないことをまた考えてしまった。いや、考えは付くだろうが何よりも面倒だ、睡眠欲には勝てない。

鼓膜を微妙に響かせる音楽のお陰で、下らない事で脳を働かせてしまった。

僕は布団を頭まで深くかぶり、音を遮るようにした。

日曜日だつてのに、誰だ？ こんな朝早くから、電話なんて。僕の携帯の日覚ましは十時に設定している。ひりつと掛け時計を覗いたけれどまだ七時過ぎだ。

昨日は色々あつたからまだ眠つてみたいのに……。

？

七時過ぎ？

僕は何か違和感を感じた。眠気の詰まつた思考回路で。

確かに昨日もこの時間に起きたよな？ 起きたというか無理やり起きた氣がする。どこに行くために休日なのにそんな早い時間に起きたの？

？

そうだ、ピクニックだ。

こんなデジャブが起きるなんて、もしかすると、昨日のことは全て僕の超能力によつて見た幻影だつてことは考えられないだろうか？ つまりピクニックに行き、天照によつて関係を悪くされた那美と香美ちゃん、それと僕が天照を殴つてしまつたこと、あの最悪の出来事は夢、幻だつてことだ。

さつとそつだ。あんな冒ドラチックな出来事が高校生といつ身分

で体験できるわけがない。いや、わけはあるだらうけど、身近にそういうことが起きるとは考えにくい。

よつてその最悪を塗り替えるために今日があるんだ。だから昨日とこうか幻影の中じや、僕は先の出来事を見れなかつたのだ。その世界 자체が幻影だつたんだから。それならすべて納得がいく。

僕は気を取り直して布団から身を起こし、昨日起こつた出来事を思い出しながら行動することにした。あと少しで携帯を鳴らしても、起きない僕を起こしにドアを叩くだろう。チャイムではなくドアを。僕は思い出しながらドアに近づく。

すると予想通り、けたたましいドアを叩く音が部屋と廊下に響いた。

「雑！　はよ起きれや。間に合わんぞ」

やつぱりな。僕は恐らくにやけていただろう、そして今まででも味わつたことのない幸福感に浸つていただろう。

未来を予測でき、それを変換できるなんて最高じやないか。タイムマシンなんて存在しなくとも、僕は嫌な出来事を事前に察知し、その最悪に触れることで最悪を防げる。ということは僕の世の中に失敗なんて無くなるのだ。対策さえ立てれば、まるで答えを知っているテストを解くようなことだ。

僕は意気揚々とドアを開けた。

「よお那実、おはよう。今から用意するからちょい待つ……て？」
僕は直感的に、那実に可笑しい箇所を見つけたので、幻影と現在の那実の姿を照らし合わせた。

服装が違つた、それにラケットを持っていない。

幻想ではジーンズに上着は白シャツとジャージ的なものを羽織つていたけれど、今日の那実の格好は、

「何で制服やねん」思わず突つ込んでしまつた。

「当たり前やないか？　学校行くんやぞ？」那実はわけがわからぬという目で僕を見つた。

わけがわからないのは僕の方だ。これから大仙公園にピクニック

へ行くのだろう？ なら学校の制服なんて着る奴がどこにいる、お前は修学旅行生か？ 確かにこの時期、世界三大古墳のある大仙公園にも、そういう生徒を見かけるけるかもしれないけれど、お前は修学旅行生じやないんだから着る必要ないだろ。

つてこんなダラダラ長いソシ「//」をしていたら、『生涯突込』の烙印を押された僕の名が廃るのでの口に出して言わないけれど。つてこいつ何か余計なこと言わなかつたか？

「どこ行くつて？」

「学校」と言つて僕を睨みつける。

学校？ ああ京都文化芸能高校だつけ？ なんか違うような気がするが、眠気眼の僕にはあの長い学校名を思い出せる気がしない、まあいいや京都文芸高に行くんだよな。

だから何で？

「何でもくそもない！ めんどくさい奴やな、ええからはよ用意せえ！」

朝から怒鳴り散らす那実のせいで、まだまぶたの重い鼓膜は悲鳴を上げた。この場合耳たぶが正解なのか？ そんな鼻で笑われるような冗談は頭の隅の隅の隅に置いといて、僕は言われるがままに制服を着た。

どうやら未来は変わってしまったようだ、私服でバス停に行く予定だつた幻想とは違い、現実は制服を着用して学校に行くらしい。でも何度も学校に行く理由が見つからない。

「どうして学校に行くん？ 別にバス停でもええやんか」

「沖田先生と心花が待つてゐるからや」 唇を尖らせながら那実は言った。

そういうことか。バスで行くのではなくて沖田先生の車で大仙公園まで行くんだな。なるほど、天照と先輩は後から来るというパターンでも十分こいつらの作戦に差し障りはないだろ？ 僕が着替え終わると同時に那実はドアを慌しく開き走つていつた。騒がしい奴。僕は幻想で起きた出来事を頭に叩き込み、それに対する対処法を

必死に考えていた。そして、そのことよりも必死に足を動かせていた。

那実が言つには、どうやらこのままだと遅刻らしい。

僕は息を切らしながら問つ。

「何時に学校集合なん？」

那実は左手で汗を拭いながら、「七時四十分！　ええからはよ走れ」

那実はそう言つと、あきれたという顔で僕の顔を一瞥して、ペースをさらに上げ走つていった。眠気満載の僕の体ではとてもじやないがそのスピードについていけないので、差はどんどん広がつていき、気づいたときには百メートルは離されていた。

今のところ、現実の方がよっぽど疲れる流れになつてゐるな、このペースで僕は公園までたどり着けるだろうか。

僕は那実に追いつくことを諦め、体を冷やすため近くの自動販売機でスポーツドリンクを買うことにした。それだけの理由じゃないんだけどね。

自販機の前には文芸校の制服を着た女子が立つてゐた。セーラー服なので女で間違いないだらう、といつたか男だとしたら大問題だよな。

朝日に反射して艶よく光るストレートな黒髪、そして後ろから見ても惚れ惚れするような体のライン。これはきっと美少女に違いない。これは一度顔を拝めておかないと、神様に失礼だ。という本能丸出しの理由だけ。

僕はまずセーラー服の襟元を見た。真つ青のラインが襟元を彩つてゐる。

青色といつことは一年生か。

いつもやつてうちの学校の生徒の学年を調べるときは、女子なら襟元のラインの色、男子は残念ながら制服で見分けることができず、名札の色で判断するしかない。ちなみに一年は白で二年は青、三年は緑だ。

ともあれ、こんな普段の通学時間よりも早く学校に来るなんてお疲れ様だ。クラブか何かだらうけど、休日なのにこんな朝から練習することもないだらう、つくづくクラブに入らなくて正解だつたよ。まあ今はもつと厄介なものに肩入れしているけれど。

彼女は僕が買おうとしていた百二十円で五百三つのスポーツドリンクを購入した。

「あつ！！」

僕は思わず声に出してしまつた。不幸もいいところだ、タイミングよく彼女が購入した分で売り切れたようだ。ボタンのところにうつすらと赤く『うりきれ』と「寧にひらがなで光つてゐる。

彼女はその声で僕の存在を気づいたらしく、ジューースをとひつと屈みながら僕の顔を見た。

矢を射抜くように目が合つてしまつたので、思わず僕は視線を鼻辺りにそらす。

一瞬見ただけだが、思つた以上のビジュアルではないようだ、まあ平均を超えてはいるが、天照と比べると月とスッポン、は言いすぎだから、小惑星くらいだらうか？ まあ比べる相手が間違つてゐるか。

彼女はジューースを右手で持ち、僕の正面に立つた。

僕は何を言われるんだろうかと少しドキドキしながら彼女の第一声を待つ。

彼女の大きな瞳が刹那に開き刹那に開いた瞬間、僕の手にジューースを握らせ、

「相当な汗ね、仕方ないから譲つてあげます」彼女は微笑んだ。
なんていい人なんだろう、僕は心の底から感謝を示し、それだけじゃ伝わらないのは百も承知なので、快活に、「ありがとうございます」と言つた。

すると彼女は上品に手を口に当て笑いながら、思つてもいなことを言い放つた。

「どうしたの、那実さんらしくもない」

「えつ！？」

「いつもあなたなら二カ一つと笑つて、ありがとうす、とか
言つて一氣飲みしそうなに」と嬉しそうに話す。

ありがとうす、と言いなれていかない言い方がなんとも可愛らし
いことは置いといて、那実を知つている他学年の生徒つてことはも
しかして、

超能力者？

「何当たり前なことを言つてゐるの？ おかしいわね」彼女は不安
そうな表情で見つめた。

もうそろそろ『彼女』という表記にも飽きてきた、そろそろお名
前を伺うことにしよう。

「どちらまでしたつけ？」

すると彼女はあっけにとられたように田と口を大きく開けて、

「変な那実さんね？ 三月よ、私は三月美代。^{ミシキカヨ}この間まで覚えて
らしたのに、本当に大丈夫ですか？」

どうやら現実と幻想は大きく違い、僕は新たなる超能力者である
う三月美代という女性と出会つた。

今の僕はきっと右手に持つた缶ジュースよりも汗をかいているだ
ろ？ 大げさではなく。

その22 ノンワイヤクション（前書き）

2月21日に三円さんの設定を少し変えました。
21日以前に読まれた方は申し訳ないですが、もつ一度確認してください。

その22 ノンフィクション

僕は考えた。

このまま、三円さんに自分は那実じゃないです、雑なんです。と伝えるかどうか。上手にいけば、彼女に恥をかかすことなく、変な空気になることもなくその場を後にできる。

でも、嘘をついたところで、その先の先に何があるのだろう。何もないに決まってる。

いつもこうやって嘘をついてごまかすのは僕の悪い癖だ。確かにその方が楽だらうけど、人は楽に流されるだらうけど、そういう当たり前はもうやめようかな？ 高校生になつたきつかけとして。そしてこれが新生伊佐雑の第一声だ。精一杯作り笑いして言つてやる。

「僕は那実と違いますよ、雑です。名前も顔も紛らわしくてすいません」

僕は、彼女が当たり前のように驚いた顔をするのだろうと思つたけれど、実際は違つた。

「那実さんが言つていたこととは違うみたいね」

へつ？ 僕は恥ずかしくも、おどけたような声を出してしまつた。けれど決して本当におどけたわけではない、ただ彼女が感情表現するだらうことを、自分がしてしまつて驚いただけだ。

「何もそんなに驚くことはないのでは？ 雜さんることは那実さんから伺つたことがありますよ、楽な方へ楽な方へ逃げたがる性格だと」と彼女は微笑を含めて言つた。

さつきの新生伊佐雑の第一声は撤退だ。まさに正直者が馬鹿を見るだ。それにしても那実の奴、言つてくれるな。お前も人のこと言えないだろ、この学校の推薦だつてほとんど即決だつたじゃないか。それに三月美代さんだつ？ 初対面の人にそんなこと言つなんて感じ悪い人だ、愛想笑いもそこまでにしろよな。

「実際は違いましたね、本当に逃げる性格なら『どうせ』で済ま

せてしまえばいいはずですから。薙さんは苦しみから逃げない良い心の持ち主です」手で口を押さえているけれど、わかる。今度は本当に笑った。

前言撤回。

三月美代さん、あなたは感じの良い人だ。いや、良すぎる人だ。僕はあなたの期待に応えるため、これからも嘘をつかない人生を目指します。

「薙さんも今から学校へ？」

「ええ、何故だかそういうことになっちゃいました」

本当はバス停へ行つて駅に直行して大仙公園というパターンだつたのに。

「三月さんもこれから学校へ？」

「そうよ、人がせつかく総長の散歩を楽しんでいたのに呼び出されてしまったの」

そしてイレギュラーな登場人物。いつたいあの幻想はどうなつてるんだ？

結局先輩はジュースを買わぬで自販機を後にした。

そして何も話さないまま学校についてしまった。

僕には他人に話題を提供する余裕なんてなかつた。この現実が一体どうなつているのか、それだけで頭がいっぱいだつたからだ。三月さんも微笑を浮かべたまま口を開かないし、どうやら口数の少ないおしとやかな性格のようだ。まあ雰囲気でなんとなくわかつたけれど。

僕は校門をくぐった瞬間、大事なことを思い出した、いやそれほど大事でもないか。

さつきのジュース代を渡しそびれたこと。それと、

「三月さん、あなた僕を騙しましたね」

「騙す？」正面を向いたまま質問を返す。

「僕が那実じゅないってことに気づいてたのに、三月さんは気づ

かないフリしたじやないですか」僕は百一十円を彼女に差し出す。

「あら、それは「ごめんなさい。気にしていたのね」彼女は小銭を僕の手のひらからとり、「それではこれが賠償金でいいかしら?」

彼女は口を開じながら笑い、僕の手のひらにもう一度置いた。

「そういうことなら、ありがとうございます」僕は百一十円を握り締めた。

あなたのその笑顔と込みならお釣りが出るくらいです。

なんてエセ一枚目のようなことは死んでも言えないのに、心の中にどめておく。

そのやり取りを終えると、三月さんは少し表情を曇らせて零すように言った。

「でもせっかくの日曜に呼び出しだなんて、あたし達はついてないですね」

「そうですよね」

「そうですよ。」

「そうですか?」

「そうなの?」

この場面では「え~っ」と叫ぶべきなのだろうナビ、生憎驚きすぎて声は出なかつた。

さてはまた、騙そうとしているんだ、と彼女を疑い、僕は携帯電話で曜日を確認した。

「日曜日だ」

といふことは、昨日起こつた最悪の出来事はすべてノンフィクションであり、実在する人物、その他団体とは一切関係あります、つてことか。

笑えないよ。

僕の超能力で見た幻影じやなかつたことか。

「何が超能力なの?」

「い、いや、ただの独り言です」とつさに僕は答える。

あまりに衝撃的過ぎて思わず声に出してしまつた。危ない危ない。

もう考へることはなくなつたけれど、僕はまた三月さんと話すこともなくただ彼女の左斜め後ろをついて歩いた。どうやら彼女は黙つて歩くことにそれほど抵抗がないようだ。

やつとの思いもせずにたどり着いた職員室は、休日のおかげか、いつもより静けさを増していてどこか僕の心を嫌な気分にさせた。嫌いな場所が静かだと余計氣色が悪い。

沖田先生は職員室にはいないようなので、とりあえず隣の教室、いわば超能力者の集う場所へ行くことにした。

三月さんは、それでは、と言つて足音も立てず階段を登つていつた。何だ、沖田先生に呼び出されていたわけではなかつたのか。ちょっととした落胆を抱え、教室のドアを開けるとクラッカーのような騒がしい声がした。

「雑くん遅いよお、まあ別に良いけど、先生の言うことは聞いてくださいね」大して思つてもいないうな言い方で沖田先生は注意した。

「すみません、新たなる超能力者に出会いまして」

「一体誰のことだろ? ハヤハヤかな?」

「いやハヤハヤではなくて、三月さんです」にしても、ハヤハヤ何て絶対呼ばれたくないな、たとえ名前に由来したあだ名だらうど。こんな良く晴れた日曜日に一体何のようなんですか? と聞こうとしたが、言つうまでもなく向こうから言つてくれた。

思つても、望んでもいなことを。

「まあハヤハヤでも何でもいいつか。それじゃ、今から君達伊佐兄弟のお引越しするから、がんばりましょう」

もう一度聞いても良いですか、誰の引越し?

「ついでにコノカつちも」

どうやら僕はどこかに引越しをするらしい、本人の了承もなく。

その23 その姿勢（前書き）

2月24日に大幅修正しました。
お手数ですがその日以前に読まれた方はもつ一度読んでいただける
とうれしいです。
すみません。

「一体どうしたことだ？」不可解極まりない沖田先生の発言に僕は戸惑った。

僕と那実は学校の寮で生活をしていて、そのことに對して何の不満もないし、満足しているくらいだ。寮母さんのご飯はおいしいし弁当も作ってくれる、それに寮にはクラスメイトしか住んでいないから気も楽だし、楽しいし。理由によつては沖田先生のお言葉を却下させていただこう。

崎野さんに至つては、引っ越すことでも学校から遠くなるだらう。崎野さんの家は学校から約五分、それよりも近い寮を僕は知らない。那実も不安そうな顔をしているだらうと思い、顔色を伺つてみると、さぞ納得したような、決め事を当然のじとく果たすような表情をしていた。また僕だけ除者か？

「」のまま僕だけ知らないのも癪なので、

「どこに引っ越すんですか？」と当たり前の質問を沖田先生にした。

「薙くんも一度は聞いたことがあるでしょ？」ていつか、説明会の日に聞いたかな？特別寮のこと」ととも常識のようになつた。はて、『特別寮』？一体何のことやら。聞いたことがあるようなないような、というより説明会はほとんど寝ていて話を聞いてなかつたからなあ。

でもそれは那実も同じことだらう、あいつも寝ついていたのだから。それなのになんで知つているんだ？

「話の要所を見極めて寝るのが本物や」と那実は大して自慢にならないことを誇らしげに言つた。何に対しても本物かどうか少し気になるところだけど、構わないでおこう、こいつのためだ。

それにしても本当に僕だけ知らないみたいだ。知らないと恥ずかしこのような空気がしたので僕は知つたかぶりをすることにした。

「わわり程度には知つてゐるけど、詳しく述べてくれたうれしいです」と語ると、沖田先生は教師らしからぬ「えー、面倒くさいわ」と問題発言をした。この人がこの言葉を口にすると、話してもうえる確立はほとんど皆無だ。諦めるか。

「理由なんてなくてもやらなきやダメなものはダメなの。さあ早く引越しましょう!」そう言って沖田先生は僕らを教室から追い出し、鍵を閉め一目散に駆け出していった。どこに行くんだ? 口に出さず心で突つ込みを入れた瞬間、心を読んだかのように「裏門で待つててね」とやまびこの様に廊下に響いた。ああいう天然タイプの人間は静かに日常を過ぐとして欲しいものだ、忙しないとなると他人にまで迷惑がかかつてしまつ。まあそこを憎めないのが天然の利点なのかも知れないけれど。

「お前に似てるな」

「何が?」

「沖田先生のああいうところ」那実はうれしそうに、ひひつと、悪戯に小さく笑つた。

僕と沖田先生のどこが似てゐるんだ? ああいうところっていうとこの話の流れからくると、僕が天然で人に迷惑をかけてるつてことか?

んなアホな。

「マイナス十点。突つ込みが遅い」

そんなことはお前に言わねなくてもわかつてゐる。それにさつきのは突つ込みの部類に入れてもらつては困る。つてそんなことよりもつと話すことがあるだろ? この馬鹿。

「引越しつて何やねん? それに特別寮もようわかつてないんやけど」

「やつぱりさつときの『わわり程度』つていうのは嘘やつたんやな。

説明会のときグッスリ寝息立てたもんな

「わかつてゐんやつたらはよ教えるよ、いちいち回りくどい」

「お前こそいちいちしようもないことで見え張つて。知らんかつ

たら知らんつて言つたらいいのに

「うつさ

」

いや、このままこいつのペースにつられると言が先に進まない。悔しいけど折れるか、元はといえば僕が聞いていなかつたのが悪いんだし。

「わかつたわかつた。すみませんが教えてください

「まあ全部話すのは面倒やから、大まかなことを言つと

「言うと？」

「認められたつてことや。組織から晴れて仲間として、そんで超能力者としてな」

「というと、今まで認められてなかつたつてこと？」

「簡単に言うと、そやな。何年か前に裏切り者が出て、組織がかなり弱体化したらしい。そつからこの特別寮制度、それに超能力者の情報が秘密とされることになつたらしいで」

なるほど。だから先生や超能力者本人は、会うまで能力を隠していたのか。ババ抜きのときに手持ちのカードをさらけ出すと勝てるものも勝てないしな。

特別寮については？ と那実に訊こつと思つたけれど、その声は携帯の着信音に消された。

「はい、那実やで。あー、ごめんごめん。すぐ行くからおいて行くんといてなあ」と手短に通話を終え、「沖田先生がはよ来いつてお怒りや、はよせな置いてくぞ、やつて」そう言つて那実は廊下を駆け抜けていった。

やれやれ、どうも僕の周りには忙しない奴が多いようだ。
仕方なく僕も那実の背中を追つた。確か裏門つて言つてたよな？
と言つことは職員専用の駐車場か。僕は考えることをやめて走ることに集中した。と、いつても大して速度は速くならないけれど。

少し息を切らしながら駐車場にたどり着くと、思つてもいな光景を目についた。

一台の車が門をぐぐろうとしていた。僕はまさかそんなわけはないだろうと思つて運転席を確認すると……くつそ、あの天真爛漫女め。那実の奴ももうすぐ来るからつて引き止めてくれればいいものをつてやつても無駄だらうな。あの人の場合は。

傍若無人が良く似合う。人としてはどうかと思つけれど。

僕はそんなことを考えながら、ゆるいスピードで発進したばかりの軽トラックのドアを開け、飛び乗つた。

溜め息なんてついていたせいで危うく置いていかれそうになつた。恐るべし沖田薫。

「つてお前どこ座つてるねん」

「考えなくともわかるやろお前の上や」

この車は引越しをするためか、軽トラックなので、言わなくともわかるように座席は一つしかない。

運転席の沖田先生の上に座るのもそれはそれは魅力的なことではあるだらうが、命にかかる。ということでお前の上に飛び乗つたわけだ。

「そんなこと言わんでもわかつてるわ！ 後ろにスペースがいっぱい余つてるやんけ」

そう言つて那実は親指を立て後ろを示す。

「アホなのかお前は。警察に捕まるやんか」

「あら？ あたしことこなら別にいいのよ」沖田先生はポケットから学生証のようなものを取り出し「これがあればちょっとした法律違反は何てことないのよ」と言つてそれをしまつた。

そんな行政の権力を握るような、怪しいものを使うのは、少しながら恐怖を覚えるので僕は先生に突つ込むことなく無言で那実を椅子にした。どうやらせつきの先生の言葉を聞いて那実も納得したようだ。

車内にはラジオなどは設置されていないので、エンジン音と横切る風の音が流れていた。いつもは無駄に口ばかり動かす一人も、何故か話す気配を感じないので、僕は感じていた疑問を口に出すこと

にした。

「沖田先生」

「なあに、雑くん」先生は運転中にもかかわらずこちらに顔を向けた。すかさず「いや僕のほうを見なくていいですから、前見て」僕が慌てることなく落ち着いて言つと「ごめんね、癖なんだよ」といつて頭をかきながら正面に向きなおした。

沖田先生のことだからなんとなく、話しかけるとこちらを向く気はしていたけれど、癖？ 一体何の癖なんだ？ つていちいちこの人の言動に頭を働かしていたらシナプスが足りなくなる。僕は沖田先生の言葉を記憶の奥の奥の奥にしまい、気を取り直して、「組織の裏切りつていつあつたんですか」

「えつ！？」

またこっちを向く……。今に事故するぞ。

ガタン。と、鈍い金属音を鳴らし、車は左斜めに停車した。

「何してるんですか先生」僕は呆れた感情を押し出した。

「タイヤ落つことしちやつた」

そんなことは言わなくともわかつてゐるよ。僕は何でこんな一本道でタイヤを落つことすようなドジをしているのですかと？ 聞いてるんだよ。と言つても仕方ないので僕は車から降り、車を持ち上げることにした。 がそこであること気に付いた。

「左側のタイヤ、全部落ちてるやん」前輪か後輪だけなら持ち上げてアクセルを踏めばどうにかなつただろうけど、さすがに左の前輪後輪が制御不能だとコースインできないだろうな。

「どうするんですか」

「大丈夫よ、安心して」そう言つと、沖田先生はかばんから携帯を取り出した。恐らく保険会社か自動車連盟にロードサービスでも頼むのだろう。もし僕がこんなまつすぐの道で脱輪なんてしたら人を呼べる度胸はないな。かといって乗り捨てる度胸もないけど。

「ごめん、ちょっと助けてくれないかな？ エフ！？ 場所？

裏門からスーパーとまつすぐ行って五分くらいのところ

そんな適当な説明でわかるほど日本のロードサービスは発達しているのか？でもこの人は常連さんっぽいから向こうもリストに載せている可能性もあるか。

沖田先生は、あと十分もあれば来てくれるって、そう言つながらステップを踏み運転席に戻つた。少しも自分のミスと実感していない、この様子だと。僕は再び那実と肌を合わせることはせず、壁にもたれながら外の風を感じていた。

こうして春の生暖かい風が肌を抜けるとともに幸せな気分がする。夏のようになく快な湿気を背負わず、冬のようにも肌を刺すわけでもない。かといって秋だと少し風は冷たい。冷風じゃない温風の春風が一番体に優しい。

春の穏やかな午前半ばに感謝しつつロードサービスを待ちながら景色を眺めていると、遠くの方で人影が見えた。そりや、ランニングくらいする人もいるだろうと思ひ氣に留めないようになつて思つたけれど、ついその服装に目がついてしまつた。

「制服？」

約二〇〇メートル向こう先に見えるのはわが高校の制服……しかもセーラー服。

沖田先生はバックミラーでその姿を捉えたのか、車から出て大きく手を振り、こっちだよ、と近所迷惑な声量でセーラー服を呼びかけた。言わなくても世の中でストレートの道に脱輪する人はあんたしかいないよ。

彼女はどんどんと距離を縮め、すぐ顔を捉えるほど近付いた。まあ確認しながら誰だか大体見当はついてるけどね。

確か今朝会つた。

「みよっぺ！ ありがと。よくぞ駆けつけてくれました

「いえいえ、こちらこそ少々時間がかかってしまい申し訳ありません」彼女は深々とお辞儀をした。何だか立場が逆なような気がするが、しかしこんなか細い、しかも少女がこの問題を解決できるようと思えないけれど。

「先生、この人でどう脱輪を解决出来るんですか?」

「決まってるじゃない、ねえみよっぺ」

「ええ、決まっていますね」と微笑を浮かべながら「これは先程ぶりですね、那実さん」

「からかつてます?」

「その通りですよ」そう言って彼女はさらに微笑を続けた。

沖田先生は「早速だけど」と三月さんに拝み、彼女も「御安い御用です」と制服の袖をまくつた。何が御安い御用なのか、そのことを思い知るまでに五秒もかからなかつた。

三月さんは軽トラックに近づき、まるで鉛筆を拾つよつに軽い手つきで、片手で持ち上げた。

何を?

軽トラック以外ないだろ?」

僕は自分に言い聞かせるが、いざ目の前に超現象を目にすると疑いたくなる。そりや誰も超能力を信じないわけだ。御船さんを疑つた学者達の気持ちもよくわかる……猛烈に。

気がつくと僕は、自分の引越す理由を三月さんに聞きながら引越し作業をするという不可解なことをしながら、段ボール箱に衣類積めていた。

車内(正確に言つと荷台)で聞いた話だと、どうやら引っ越しする理由は、僕が超能力に目覚め、この組織に入ったから(本人の了承なしに)、身の安全を確保するためらしく、そして。

「その引っ越しを正当化するために、特別寮つていう制度ができるのよ。一般の生徒には特別寮とは、すごく学力の高い生徒、もしくは先生に特別な才能を認められた生徒に限る、ということになつてゐる」と常識はずれにも程があることを話すには最も似合わない、『淡々』という喋り方をした。

「特別寮の場所は知つてゐるでしょう?」

「いいえ? 全く」と答えると三月さんはあからさまに常識知らずな人を見る目で見て、「文芸高の敷地内にあるわ

そりや呆れるわけだ。

ところで那実と沖田先生はといふと、僕らと同じく隣の那実の部屋で引っ越しの準備をしている。

那実も引っ越すと知っているなら、準備していればよかつたのに、そしてそれを僕に教えてくれればよかつたのに。

「急遽決まったことらしいわ。私もいきなり呼び出しだつたんだから」と少しふくれてみせた。

そんな無表情でふくれられてもおどけているようにしかおもえない。

それから四五分後、僕の梱包作業は終了した。この部屋に来てまだ一ヶ月程しか経っていないので、荷物も思ったより少なく、早い時間で終わつた。まだ隣の部屋から物音がするから、那実の部屋は終わつてないのだろう。

隣の部屋も手伝わないといけないんだろうけれど、久々に引っ越し準備をしたので少し疲れた。ちょっと休憩ついでに三月さんと会話することにしよう、準備優先でほとんど話さなかつたからな。

「今日は手伝ってくれてありがとうございます」

「あら？ 私はまだ何もしていないわよ？」いやいや、脱輪を直してくれただけで大仕事ですよ。

「まだ運ばないといけないですよね？」この段ボール達を「僕はそれらを見つめ溜め息を吐いた。

「そう憂鬱にならないで、私がいれば薙さんたちは軽いものを持つていただければ大丈夫なので」

「どういうことですか？ 沖田先生のトラックまで三月さんが運んでくれるんですか？」

ここへは沖田先生が軽トラックを運転して來たので、新しい寮まで運ぶ手間はさすがに省かれるけど（というかそんな手間があつたなら引っ越しへ中止だ）、ここは3階で、しかも寮にはエレベーターが設置されていないから、机やら物置などを持ちながら三月先輩はトラックまでの距離、約100mほど移動しなければならないこ

とになる。けれど彼女なら容易だらうな。

「そろそろ休憩を終わりにしましょ、次は隣の部屋の手伝いをしなければいけないわね」

「そうですね」

「じゃ、私も箱詰め手伝いますね」

「お願いします」

僕は三円さんと那実の部屋の手伝いをするために、隣の部屋に移つた。

ざ・つと、那実の部屋を見渡たすと、どうやらまだ作業は半分も進んでいないようだ。そのくせ一人とも中学の卒業アルバムを見て雑談してゐるのではないか。本当にこいつらはなんてマイペースなんだ。

「僕の部屋は終わつたで、そんなもん見らんではよ作業進めよ」不機嫌な僕とは裏腹に、一人は實に「機嫌のようだ。余計イライラする、そんなに卒業アルバムが面白いか?

「すつごい泣いちゃつて、可愛いところもあるのね雑くん」

ためらつともなく、「うら、返せ」と言つ前に僕はアルバムを引つたくつた。

そのアルバムの五ページ目には、卒業式で泣きじやくる僕の顔が携帯電話くらいの大きさで写つてゐる。僕の人生で消しておきたい物の一つだ。

「返せって、これは俺のんやぞ」

「だまれ、弟の恥を兄がさらすな！」

「ふふ、恥ずかしこじじゃないわよ、逆に良いことよ、卒業式で泣けるなんて」

「うるさい、泣き顔を見られたい奴なんてお涙頂戴なTVに出てるタレントか俳優だけじゃ」

本当に見かけによらず性悪だ。といふか綺麗なものには毒があると言つのだから、見かけによるのかもしれない。天照なんて言わざもがな性悪の固まりだしな、ということは崎野さんも性格が悪いと言つことになるのか？いや、彼女は例外だらう、世の中何事にも

例外はある。

なんて、都合のいい解釈をしながら、僕は那実の引っ越し準備を進めた。

しかしこいつの部屋は物が多い、何たってこんな物が増えるんだ？一ヶ月やそこらの量ではない、僕だと半年過ぐさないとこれほどまで増えないぞ。ボーリングのスコアやらレシートやら学校で配られたどうでも良い内容の学級だより。こんなもの僕なら即ゴミ箱行きだ。

「物より思い出なんて言うけれど、あれは嘘や。物あつての思い出。人の記憶なんてしようもないもんやからな」

というポリシーを持つ那実なら仕方のないことか。

それから四五分かけてやっと梱包作業は終了した。

これからまだ荷物をトラックに乗せて、それから……。もう考えたくもない。

いくらなんでも三月さんが全て荷物を荷台に載せてくれるとは限らないし。

疲れた疲れた疲れた疲れた疲れた疲れた疲れた疲れた疲れた。

「薙くん、うるさい。言つたところで疲れはとれないでしょ！」

なんてまともなことを言つんだ、沖田先生らしくもない。

「ここからは楽なはずよ、特別に美代つべがまた能力発揮してくれるから、ね、美代つべ」

「はい、発揮しますよ」と輝いた目を沖田先生に向け、前髪を搔き上げた。

どうやら超能力を身につけてしまつと人は変な方向に向かうらしい。

その24 十三人の異端者

僕と那実は沖田先生に言われるがまま一階と二階に配置された。
「誰か来ないかちゃんと見張つといてね。こんなとこ見られた
らみよつペ大変だから」

引越しするだけなのに何故そんなリスクを背負うのだろう? 普
通に僕と那実が運べば時間はかかるだろうが何の問題も生じないは
ずだ。

「だつて超能力、見たいじゃない?」……あんたのわがままかよ。
こんな個人の欲望のために危険を犯して能力を使う三月さんを哀
れに思うよ。

「僕たちが運びますから三月さん。超能力はやめましょよ」
「大丈夫ですよ。那実さんがそう思つてるならきっと大丈夫よ」

「難です」
「わかつてゐるわよ」

こいつ、わかつてゐならわざと間違えるなよ。だんだん突つ
込むのも嫌気がさしてきた、こんな奴もう知らない。

僕は怖いもの見たさといふか、何といふか、先ほどの光景を思い
出すとちょっと胸が高鳴つた。

何故だろう? 目に見て取れる超能力を見たのは初めてだからだ
らうか?

テレビに映る、マジックともつかない超能力」ことは違う本物
を見たからだらうか?

世の中にはそういう不思議なものが存在する、と言葉を認識して
も、事には認識できないのが大抵の人間、というより一般大衆だろ
う。どつちかというとそんなもの信じる方がどうかしている。でも
それは僕の目の前で実際で起こつた。

トラックを持ち上げるくらいの筋力を持つ人間も少ないけれど存
在するだろう。けれどそんな人間があんなか細い一の腕を所持して

いるわけがない。少なくとも四倍は必要だろ。

それに彼女は『少女』なのだ。

しばらくすると、勢いよく僕の部屋の扉が開いた。そこにいるのは間違いない三月さんで、その両腕には間違いない僕の部屋の荷物が持たれていた。

僕は慌てて自分の部屋を確認した。……まさか。

「もしかして三月さんあの荷物、全部持てたんですか？」

「何を不思議がってるの？ さつき私はあなたの前で軽トラックを浮かせたじゃないですか？ そんなことができるのならこれくらいのことは容易ですよ。不思議なのは薙さんです。あなた仮にも羊なんでしょう？」そう言って彼女は、天井ギリギリまで積まれた荷物を持ちながら、器用に階段を下りていった。

確かにあなたの言つてることは間違いないけれど……。誰でも驚くだろ。

それあとも三月さんは手際よく荷物を荷台に載せ、僕らの監視も、何事もなく終わった。

引越し一人分の荷物をたつた三分で……。僕はただ息を飲み、頭にその光景を詰め込んだ。そうしないと飛んでしまいそつだから。

無事に荷物を積むまでの作業を終えた僕らは、歩いている。行きは車で来たのに歩いている。

「お前が『こちや』『こちや』した小物ばっかり持つてるからこいつたんやぞ」僕は不満をこらえきれず那実を睨んだ。

「なんやねん。確かに俺のせいやけど、ええやん歩いて一〇分くらいなんやし」

助手席には那実の所持するガラクタ共が乗せられることになった。荷台に乗せると飛んでいくのでそこしか場所がないのだ、かといって荷台には三人も乗るスペースはない。だから徒步。まあこの季節の正午辺りというのは散歩にはちょうどいい気温だ、走るとなると

汗ばむけれど。まあ、そんなことよりも、

「詫びる。僕はともかく三月さんに詫びる」

「あら、いいわよ私なら。ちょうどよかつたんだから」三月さんは足を前に踏み出し僕らよりも先に歩き出した。

「何がちょうどよかつたんですか？」僕が三月さん訊くと、少し目を俯かせて、結局「なんでもないわ」と言って歩みを速めた。

「そうや難。美代大先生はこの組織をかなり詳しく知ってるで。なんか訊きたいことあつたら聞けば？」

つてなんでお前はそんな偉そつなんだ？　お前の知識じやないだろうが。

「いいのよ、そこが那実さんのいいところなんだから」

どこがいいのか全く理解できないけれど、当の本人が許可してくれたのだからまあいいのか。僕はあごに手を当て、胸の引っかかりを探した……。二二一、一ヶ月と半分で疑問に思つた組織のこと……。

多すぎてわからん。これが新入社員が口にする聞きたいこともわからないです、ってことか。しかし、それじゃ折角の機会がもつたいない、もう少し考えてみよう。

そのまま何の会話も交わされることなく一〇〇メートルほど歩き、やつと一つの質問が浮かんだ。

「この組織には確か三年生が三人、二年生が六人、それと僕ら含め一年生が四人いるんですね」

「そうよ」三月さんは僕の目をじっと見つめ「それがどうしたの？」

「あの、もしよければその人たちの能力とか教えてくれません？　ちょっと気になるので」

「うーん……。そうね」と言いながら目を瞑りながら右手で首を添えた。しばらく考えた後、

「いいわ、あなた達二人が特別寮に移るつて事は、身の回りの調査を終えて問題ないつてことだから」

なんか色々突っ込みたいところがあるけれど、変にそうしてしまふと貴重で異常な話を聞けなくなるので、落ち着くため、僕は心中で三回ほど同じ突込みをした。

「折角だし、フルネームもつけて教えてあげましょ」

「そうですか？ ありがとうございます」

確か総勢十三名だよな？ 時間的にちょうど学校に着くくらいかな。

「まず三年生。彼らは超非三猿と呼ばれているの」

「三猿って、見ざる聞かざるとかいうあの？」

「そうです。上筒乃雄さんは約百キロ先の遠くの物まで見えるらしいです」

「はあ」余りに非現実過ぎて僕は声にならない声でうなずいてしまつた。ていうかあの人そんな能力を持つていたのか。

「中津夏平さんはどんな声でも出せるの。大きい声も超音波もそして声質も変えるわ。大底都斗さんは犬並の聴覚。簡単に言うと人の四倍の聴力があるわ」

なるほど、だから超非三猿か。確かに彼らは見えるし聞けるし言える 異常なまでに。けれどその例えはちょっとかわいそうな気もするけれど……。と新しい呼び名を考えてるうちに三月さんは話を進める。

「一年生はあたしを含め六人いるわ。どんな衝撃も吸収する大名鳴弥くん、透視ができる稻生橙芽さん

透視！？ リアルにそんな人いたのか！

「ちなみにいのうさんって方は……」

「女やで。何を期待してんねんアホわ」

那実に言われると余計腹が立つ。期待してたさ、何が悪い。つていうかお前も期待していたのだからそういうこと言えるんだろ！

三月さんは僕らの言い合いを、ため息をつくことで收め、残りの超能力者の名前と能力を告げた。

「神尾尚さんは全く寝ない能力を持つてるわ

それは不眠症とかじゃないのだろうか？

「そして灘梓玖、彼女は言葉では表しにくいけれど絶対的な直感を持つているわ」

「何だか僕のと似てません？ その能力」

「あなたは自分の能力にまだ気付いてないようね。今説明してもいいけれど、自分で実感したほうがいいから説明しないけれど、いいかな？」

「そのほうがいいなら」

本当は知りたいて気持ちが強いけれど、それよりも怖さのほうが強い。まだ僕は認めたくないのだ、異端者だつてことを。

「じゃ、続けるわね。竹須佐速雄、彼は一般的に言うサイコキネシスの使い手」

そんな言葉ゲーム以外で始めて聞いたよ、なんか便利そういうでいいな、その能力。

「そして私は筋力のリミッターを外せる能力を持つてるわ」「筋力のリミッター？」

「そうです。通常の生活では必要のない力を脳が制御しているのですが、私はその制御を意のままに操ることができるので」

「でもそれって骨や筋肉に支障はないんですか？ あるから制御してるんでしょ？」

三月さんは軽く鼻で笑うと「人間と言つるのは不思議なもので、繰り返すことで慣れていくのですよ」

「そんなものなんですか？」

「そんなものなのですよ」と微笑と話を続けた。

「一年生のお名前はご存知なんですね？」

「ええ」

「ちなみに誰の能力はご存知で？」

「一くん、と考えなくともわかつていただけれど、その場の流れでそういう素振りをしてしまった。

「崎野さんは感情を読み取る能力。で、天照は蘇生ですよね？」

僕がそう言つと、いきなり那実が吹きだした。今のところで笑う場面なんてなかつただろう？ 笑うならもつと別なところだらう、全く寝ない能力とかの方が面白いだろ。

「蘇生つて…。そんなアホな能力あるかい」今までの能力も十分馬鹿らしいぞ。

よく見ると三月さんは口に手を当てて笑つてゐる。
すく腹が立つ。二月は真剣に言つてゐるのに。

やつと笑い終えた三月さんはその理由を説明してくれた。

「神様じゃないんだから。蘇生までいかないわ。でも治癒能力は持つてるわ」

「でも僕、車に轢かれた猫を天照が生き返らせていくところを見ました」

「じゃ、その猫さんは死んでなかつたつてことよ」

まあ、そうだろうな。それしか答えは見つからない、それに死んだものを生き返らせれるなんて馬鹿なことだよな。僕がどうかしてた。

淡い期待つてやつか。

「にしても、雑さんは面白いです」

だから、もうからかうのはやめてください。と言おうと思つたけれど、そんなうれしそうに見つめられると文句を言つ氣も失せてしまう。これだから女つてのは……。

「どこ行くねん、雑」

その声に僕は気を取り戻した。あれ、もう学校着いたのか？

「明後日の方向見てボーッとしてんちゃうで」正門を通り過ぎた僕に那実はため息交じりで言つた。

そうか、まだそんなこと考えていたのか僕は。

僕は頭をかきながら、申し訳そうなフリをして校舎へ向かう一人を追いかけた。

その25 ナチュラルトリックスター

校門をくぐり、体育館を通り、中庭を超えて、そこから少し歩くと特別寮があつた。やはり寮といふこともあつてか、他の施設からは離れた場所に配置されていた。

沖田先生はもう「到着のよう」で、車の姿はここから見えないが、エンジン音が響いていた。恐らく特別寮の裏に車を止めているのだ。

「おーい、雑くん

と和みを含む、軟らかいintonationで僕を呼ぶ声がした。

この声は、

「崎野さんですか？」

「そうやでえ、こつちこつち

だから、こつちつてどいだよ……。僕は辺りを見渡すけれど、どうも姿が見えない。

「お前は天然か」と那実は溜め息交じりで突っ込みを入れた。そして特別寮の方を指差し、「あそこや、どいつ考へても寮の方から声してたやんけ」

「うるさい！ それくらいで人を天然とか言つな

「あら？ 天然も一つのチャームポイントじゃないですか？」

「生憎、僕はそういうキャララじゃないので」

「それは手痛いな、男の天然なんて可愛くないし」

こいつはいちいちと、……人が気にしていることを言つなよ。それに僕が天然だつたとしてどいがチャーミングなのか全くわからないです三月さん。

僕はうなだれながらも先生の車が止めてあるだろう、特別寮の裏へ回つた。

そして呆氣なくも目を疑つた。光の屈託により映し出す世界を僕

は疑つた。

全身が恐怖に包まれた。なんだかジェットコースターの急降下のような気分だ。

余りに驚きすぎる人は声が出なくなるんだと、このとき初めて知つた。これぞまさしく、

絶句。

「 なんで？」

目の前には風船のように、ゆらゆらともふらふらとも形容しがたい動きでダンボールが浮いていた。すかさず僕は三月さんに答えを求めた。

「どうなつてるんですか！？ これ

「あ、あ…………これが俗に言ひポルターガイストと呼ぶものかし、

三月さんの声はどこか上ずつていて、いつもの凜とした綺麗な声ではなかつた。明らかに恐怖している、どことなく体も小刻みに震えているし。

もしかすると、これが僕ら超能力者達の敵なのか？ 目に見えない存在。まさに超心理、超現象だ。そしてこれから、こういう得体の知れないものを相手にしなくてはならないのか 不安というよりも……死という言葉を浮かべるよ。

「三月さんは離れてください、今のうちです！ 早く！」 僕はもしかするとこちらに突撃してくるかもしないダンボールから、彼女をかばうため目の前に立ち、近くに落ちていた箒を咄嗟に拾い、見よう見まねで武士のように構えた。なんとなく箒を斜めに持つているのは強そうに見えるからだ。

僕はもう一度、気を引き締めるために箒の柄を強く握つた。

「ははっ、こりや傑作だ」と高らかな笑いと共に僕の斜め後ろ辺り、寮の屋上から、ハキハキした朗らかな声が響いた。

何が傑作だ！ と突つ込むよりも先に僕は斜め後ろに構えると、その朗らかな声の持ち主は僕の眼を見つめた、自然と視線が交わり

あう。

妙に眼力があるそいつは、少し短めの茶髪をした、僕らと同年代くらいの少年に見えた。赤いTシャツがなんともお似合いだ。

この雰囲気からすると、どうやらこいつがポルターガイストの元凶か？ 確かテレビか何かでポルターガイストは、その言葉通りの意味の心霊現象とは違い、人が引き起こす第六感という説もあると聞いたことがある。

「お前は何者や！」僕は声を荒げて叫ぶ。

すると芝居染みた風に「お前こそ何者だ 、聞かなくてわからぬがな、超能力者よ」と力強く答えた。

何？ アイツは僕の正体を知っていると言つのか？ それもそつか、この特別寮にいるつてことは僕らを襲いに来たつてことだよな。僕は一瞬だけ三月さんの顔を見る、俯いたままの震える彼女は絶望の淵にいる。そんな雰囲気が漂つてている。

ここは僕が何とかしないと。

「俺は見ての通り魔法使いさ」そう言つて奴は七色に光る、赤色のステッキのような物を持ち出し僕を指した。

さしづめ超能力者対魔法使いか……。異種格闘技戦とも呼べるがどこか似た感じもする。超能力とは自分のエネルギーで超現象を起こすもので、草木や他の生物から力を分けてもらひその力を使えるのが魔法使いだと言う話を聞いたことがある。

「さあこの平成のトリックスターに勝てるかな？」そう言つて彼は屋上から飛び降りた。

僕は心臓が激しく跳ねるのを感じた、正確に言えば胸の辺りなのだろうけど、その胸をグッと握り締められるような感覚に見舞われる。こんな五メートル程の高さから飛び降りて無事で済むわけがない。

しかし、そこはさすが魔法使いと言つところか。地面とぶつかる寸前で、煌びやかに輝くステッキを地面へ向けると、トランポリンで弾んだように体は軟らかに空中を跳ね、何事もないようにならかに着地し

た。こりや思つてはいた以上に強敵だ。

僕はこれから約三年間、こんな得体の知れない相手と戦いながら高校生活をしていくのか。さじすめ、『超心理的青春』と言つたところか。

魔法使いは高らかに笑い声を上げながら、ステッキを上に掲げ、一回、三回と大きく振り、「ダンボールアタック！」と安直な技の名前を叫んだ。

その名の通りダンボールが僕をめがけ飛んできた。僕はどうもすることもできず、余りの恐ろしさに眼を瞑つてしまつた。きっと第八ら構えていないだろう。

すると、瞬間的に風の音が耳元を鳴らした。その風の音を鳴らしたのは先程まで震えていた三月さんだった。

人間の走力を超越した速さで魔法使いに向かつて行き、飛び交うダンボールを華麗なステップでかわし、その勢いのまま魔法使いの顔面へ飛び膝蹴りを食らわせた。

魔法使いは三メートルほど吹っ飛び、「ぎゅあ」と間抜けな声で無様に着地した。いや着地じゃないか。

「いつてえ。何すんだよ三月」とうめき声を上げながら魔法使いは三月さんの名を呼んだ。

どういうことだ？

もしかしてこの一人はグルだつてことか？ そういうばさつきから那実の姿が見えない、目を離した隙に三月さんにやられたのかもしれない。くそ、これは絶体絶命だ。けれど何故三月さんは魔法使いを吹つ飛ばしたんだ？ 余りにもあいつの手際が悪いからなのかな？

いや、違う、多分ダンボールアタックを繰り出されると、自分にも危害が加わると思ったからだ。十箱以上あるダンボールが空中を舞うと、寮の裏という狭い空では共倒れの可能性もある。さすが三月さん、頭が切れる。

せめて崎野さんだけでも逃がさないといけないと思い、一人を背

にし、寮の入り口へ向かおうと地面を蹴った。

「調子に乗るのもいい加減にしなさい」

どうやら魔法使いは三月さんに叱られているようだ。

そりゃそりゃ、あんな場所を考えない攻撃をすれば、叱られても仕方がない。

「途中まで付き合つてあげたけれど、おふざけが過ぎます」

うんうん、敵ながら納得だ。こんな間抜けな奴と組んでいればいつか痛い目に遭うだろう。そもそも屋上から飛び降りるなんて子供が喜びそうな演出なしで、屋上からダンボールを操れば安易に僕を撃退できたはずだ。ここまで僕らを誘導した三月さんの苦労も考えてみろっての。

「ちよつとふざけただけじゃないか、あいつもノリよかつたしよ」
「ちよつとどじろじやないだろ。いちいち突っ込ませる奴だ。つてノリ? 何を乗つてたんだ? その直後、僕は忌まわしき言葉を耳にする。

「あの子は天然なの」

「違ーう! 僕は天然なんかじゃない」

やってしまった。一人が揉め合つてゐる隙に崎野さんを助けに行こうと思つていていたのに、思わず突つ込んでしまつた。何をしてるんだ僕は、こんな非常事態にいちいち突つ込んでるからだ。口に出さなくとも心の中で突つ込めば集中力が欠けるに決まつている。

三月さんは少し強張つた声で僕に尋ねた。

「じゃ、この男は何者ですか?」

そんなこと愚問じやないか。一+一や一の段よりも簡単だ。

「魔法使い」

「 天然」

今日はやけに天然という言葉が僕の耳を通り抜けるけれど、天然物のうなぎや鮎は確かに魅力的だが、僕の辞書では、人を天然にするとその言葉の対義語は馬鹿者だ。

「誰が天然なんですか? もう怒り心頭や、どつからでもかかつ

て来い」僕は足元に落としていた箒を拾い上げ、さつさと回じょつに構えた。

「こいつ本当に俺を魔法使いだと思つてゐるのか？」

「みたいね」

「傑作」そう言つて彼は力行を巧みに使つて笑い転げた。

何がそんなに可笑しい、僕はもう真剣そのものだぞ。というより何だこの温度差は？ まるで赤道直下と春の風のようだ。三月さんは北極なんて比べ物にならないくらい冷たい目で僕を見つめている。これが人を殺そうとする眼なのか？

「もういいです。一度氣絶させちやつて、ハヤ。そうすると頭も冷えるでしょ」

ハヤ？ 僕はその名前の主を思い出す前に、ダンボールアタックによつて打ち伏せられた。

ものの見事な瞬殺劇。

眼が覚めると僕は布団の中にいた。

眼が覚めたといつても、まだ眼を開くまでは至らない。辺りは何故か騒々しい。

「それでもホンマに大助かりやつたでえ。ハヤくんには感謝やわ」

「これくらいなら御安い御用。いつでも頼つてくれよ」
毎日耳から離れない声と忌々しい声とが重なり合つて、輪唱して
いるようだ。まあダンボールを思い切りぶつけられたら脳震盪くら
い起こすだろ？ その後遺症が輪唱か。

……ダンボール？

僕はその言葉を脳内にインプットすると同時に掛け布団を勢いよ
く舞い上げた。

「お前！ まだおつたんか！？」

僕は眠気眼なのに鋭く睨みを利かせる。どこのか矛盾している気が
するのは僕だけだろうか。

「やつと起きた。よつ！ 特技は一次妄想さん」

「誰が一次妄想や！ てかどういう意味や」

「それでもツツコミのつもりか？ 大阪はお笑いの町と聞いたけ
ど大したツツコミしないね、知識も足りないし」

こいつは僕にダンボールをぶつけた拳銃、唯一の特技であるツツ
コミまで侮辱するのか。

「せやでな、雍くんはどっちかと並つヒツツコミよりボケやでな

あ

崎野さんまで僕のことを……。同じ関西圏なら僕のツツコミのす
ばらしさを理解してくれると思ったのに。つて僕は生まれてこの方、
ボケたつもりなど一度もないのだけれど、それはどういう意味だ？
「つて、こいつはどじや、最も重要なことをすっかり忘れていたよ。

きつとあれから僕と崎野さんはさらわれて、この部屋、つまり魔法使いの秘密基地に収容されたのだろう。そして僕らの持つこの特殊能力はこれから色々な悪事に利用されてしまうのだろう。例えば地球征服だと、宇宙征服だと、なんとかに。

「お前も大体わかつてはるはずだろ？ 僕は魔法使いだぜ」 そう言つてニヒルな笑みを浮かべた。

やつぱりそうか。

「いい加減にしなさいと何度も言えばわかるの？ この馬鹿」 その声が鼓膜に響いた瞬間、ピシャンと、肌と肌が触れ合つ高い音が響いた。触れ合うという表現を間違つてることは言つまでもない。

「また殴つたな」 先ほどのニヒルな笑顔はどこへやら、涙をためて赤くなつた頬を押さえながら魔法使いは三月さんに問いかけた。

「まだ殴つて欲しいの？」

「なんだと！？」 僕がお前に負けるとでも

「魔法使いはそう言い返すが次第にボリュームを下げていく。僕はフエードアウトする元を一瞥し、咄嗟に眼を離した。背中に悪寒がした。こりや魔法使いの判断が正しい。

「雑さん、もう体調はいいの？」 と先ほどの雪女の如く、冷ややかな表情とは打つて変わつて最上級の温雅な笑顔を向けた。

「ええ、どこも痛くないです」 そんな顔をされると、お前も敵なんだろうとは言えない。

「そういえば自己紹介まだだつたわね、ほら、ハヤ

「おっ、おう。そだつたな」 魔法使いは立ち上がり、腰に手を当てた。

別に座りながらでも自己紹介などできるだろ？ といつ言葉は胸に秘めておこう、これも彼のポリシーなのだろう。

「俺は特別能力開発科の一年、竹須佐速雄。またの名をトリックスターと呼ぶ」

たけすさ？ どこかで聞いたことがあるのはハヤという名前だけではない気がする。その珍しい苗字を僕は脳内の検索機能を用いて

探すが、いかんせん立ち上がり数分だ、僕の脳は高性能とは言えない為、もうしばらく『だけすさ』といつ名を思い出すのに時間がかかりそうだ。

「あなたがハヤさんですか」

「おひ、これからはトリックスターと呼んでくれ。天然ツツ『マニ師』

天然という言葉が引っかかり、返事をしようかしょまいか考えていると三月さんが口を開いた。

「トリックスター？ ややこしいのよ横文字なんて、それにしつこいから却下よ」

「ガーン」

口に出して言う奴を初めて見た。効果音など口に出す奴の脳内が正常な訳がない。

「回答が遅れたわね、『めんね薙さん。』には特別寮、あなたの部屋よ」

ということは、僕と崎野さんは魔法の国などに連れて行かれず、事なきを得たということか。でも、目の前には魔法使いがいるしなたもいる。どういうことなのか全く理解不能だ。

「もしかしてまだハヤのこと魔法使いだとか思つているんじゃないでしょうね？」下から覗き込むように僕の顔を見つめる三月さん。その表情には先ほどの冷たさが残つている。

「い、いや、そんなこ、とないつすよ。うん。今日からここが僕の部屋か、思つたより狭いな」

「ははは。まだハヤくんのこと魔法使いやと思つてるんや！」と手を叩いて喜ぶ崎野さん。あなたを笑顔にできたのなら、僕の天然にも意味があつたのですね、実にすばらしい。

ちなみに三月さんのことも疑つてましたよ。

「こいつめちゃ動搖してるつー」

「つ、さい、元はと言えばあんたがあんな三文芝居をするからこんな目にあつたんぢやないか。それに引っかかった僕にも問題がある

のはこの際無視しよう。都合が悪すぎる。

「遊びのつもりだったのにさ。でもお前気に入った、はい」と竹須佐さんは僕に手を差し伸べた。一体何のつもりなのかわからないけれど、なんとなく場の雰囲気で僕は彼の手を握った。

「はい、仲直り。いやー実に単純明快だね人の心は何を言っているのか全く理解できない。人の心ほど複雑で理解できなものはないぞ。

「さつきのご無礼をお許しください。つてことでコンビニに行こうか?」

どうこうことなのはさて置き、僕は昼飯も食べていないこともあり、腹は限りなく小さな音を立て、ギュルルと氣味の悪い音を鳴らしている。これは非常警鐘といつて違いない。しかし、僕がこの場を離れるとき、崎野さんはきっと帰ってしまうだろう。うーんどうしよう。

「ね、いらっしゃるからさ、行こりや」

「どこまでも」

そういうことで僕らがコンビニへ行くとすると、案の定、崎野さんと三円さんはゴーホーム。男一人、コンビニへ向かうことになつた。僕は三円さんに手渡された部屋の鍵を指でクルクル回しながら校門をぐぐる。

「僕、あなたの名前をどこかで聞いたことがあるんやナビ……、誰でしたつけ」

「どういう質問だ? 僕は誰でもない、竹須佐速雄、通称ハヤだ、それにト……最後の辺りは無視して、そりやそうだけど、と言い、僕は彼の名前を、記憶に重ねることをやめた。これだけ考えても出てこないのなら、はつきりって思い出すことは無理だろう。

「にしても、お前本当に俺を魔法使いと思つてただなんて。傑作だ」

「お褒め頂きありがとうございます」僕は過剰に、不機嫌そうに答える。

「そのお陰で番代にビンタされたけどな」彼はまだ赤く染まる頬を右手でさすつた。

心の中でいい気味だと思いつつ、僕は、「天然ですみません」と自重した。まあフリだけど。

僕はコンビニまであと少しといつてここまで来ても、鍵を指で回しながら歩いていた。この落ちれば鍵がコンクリートと衝突し、欠けるかもしれないというスリル感と、指の周りをなでる金属の感触がなんともいえない。それになんかカッコいいだろ？

ただ回すだけだと飽きてしまうので、指を上に向けたり横に向けたりしながら難度を上げながら歩みを進める。

とコンビニを田で確認した瞬間、鍵は僕の田前でペットボトルロケットのように、綺麗に斜め前へ上がった。その放物線上、約一メートル半という近い距離に竹須佐さんは少し歩く速度を速め、後ろで鍵の位置を確認することなく、腰を少しががめ、背中でキャッチした。いや掴んではないか。そして、腰を上げる反動で鍵を僕のほうへ放り返した。

なんて器用な真似をするんだこの人は。大道芸、いやサッカー選手か。

サッカー選手？

もしかしてあんた、竹須佐速雄！！思わず僕は声を張り上げてしまつた。

「だから、何回言つたら覚えるんだ？」

いや、覚えてるけど、この場合思い出したんだ。

「何を？」

「僕、あんたのファンでした。いや、でしたじやない、です」僕は進行形で彼を心底好いている。もちろん恋愛方面ではない、生憎

僕にはそういう趣味はない。

「おっ、珍しいな、俺のこと知つてる奴なんて久しぶりだ」竹須

佐さんは得意げにやける。

彼はアイドルでも、歌手でも芸能人の息子でもない、かといって僕を見事に騙した演技力で俳優業なんてできるわけがない。

竹須佐速雄、彼はサッカー日本代表だ。正確には「だつた」というべきだろう。当時僕は十三歳、その頃、十七歳以下のサッカー世界選手権がテレビで放送されていた。その頃の日本はなかなか強く、予選リーグを突破し、準決勝までコマを進めるほどの活躍だった。その立役者がこのすぐ目の前にいる竹須佐速雄。彼は十四才なのに一世代上の代表チームに所属し、スーパーサブとして重宝された。実は言うと、決勝リーグは全て一点差の逆転勝ちであり、その全ての逆転ゴールを決めたのが彼なのだ。まさにありえないの一言だ。それも含め、中学二年生が高校二年生と一緒に試合をするなんて僕の中では考えられないことだった。それくらいこの時期の三年間は大きい。

「まさかこんなところで出会うなんて思ってもなかつたです」

「いや、別にさっきまでの話し方でいいぞ、敬語は好かないし」

そんなこと言われても、いざ憧れを目にすると、なかなかタメ口や中途半端な敬語など使えなくなる。

彼は僕の憧れだった。

竹須佐速雄は右サイドハーフだったのだ。彼のドリブルにはスピードがあり、手でボールを操るよりも華麗に操り、かといって当たり負けなどしない。そんなドリブルが好きだった。それに彼の唯我独尊振りは異常で、ボールを持つとほぼ八割以上ドリブル。相手にファールをされるが、タッチラインにボールを蹴りだされるかしない限りボールが彼の足元を離れることはなかつた。もちろんシュートはちゃんと打つ、人並みの上手さだけ。

そしてワールドカップで五人抜きした選手が彼に付けた名は、サッカーボールに取り付かれた少年だった。

しかし今はその呪縛から解けているようだ。だってこの学校に来たのならクラブなんてやつてる暇などないだろう、しかも超能力者だし。

「昔の話は恥ずいからまた違うときにしよう」

竹須佐さんはコンビニのドアを押した。

コンビニに入り一番最初に耳にしたのはいつも有線から流れてくれる「コードジックではなく、いつも授業中に聞く声だ。

「苺大福なんでお」

「で、ですからお客さん、今は七月なので在庫がないです。申し訳ないです」

コンビニの店員は理不尽なクレームに対し、真摯な対応で深く頭を下げた。

「ふー。だつたらいいわよ、自分で作るからー。あんた、あたしの作った苺大福のおいしさで他の食物を食べれないようにしてあげるんだから」とブランド物のカバンを大げさに振りながら肩にかけ、大きな足音を立てながら大またで歩き、入り口付近にいた僕の右肩と見事にぶつかった。

「痛い！ どこ見てあるいてんのよー」

どうやら怒りで周りが見えていないようだ、って苺大福ごときでそこまで昂ぶるなよ。

「 どけつて言つたのが聞こえないの？」

あれ？ まだ気付いてないのか？ こりや 重症だな。

「 薙ですよ、付き合いは浅いですけれどじたすがに覚えてるやん」というか、本田一度田の再会なんですけど。

僕の眼をじっくり見つめ「なーんだ薙くんか」と溜め息をついたかと思えば、もう一度見つめなおし「ラッキー。ちょっと外出てくれるかな？」 一体どつちなんだ。

「 何で？ 今から僕は昼食を買うんですけど」

「 すぐ終わるから。一分もかからないよ」

「 ならここで話せばええやんか」

「 超 」 僕は慌てて沖田先生の口をふさぐ。こんなところで何を言い出すんだこの女は、余計頭が痛い奴だと思われるぞ。親から貰つたそのすばらしき容姿を台無しにするなんて真似はしないでく

れ……。って、手遅れか。

僕は竹須佐さんに、手のしわとしわを合わせながら、また暑い外へ出ることになった。

「なんのようですか先生」

「ちなみに苺大福は関係ないよ」そんなことはどうでもいい、といつか夏間際の苺大福にそれほど魅力を感じない。

「超能力者、伊佐薙」

沖田先生の瞳の色が変わる。それと同時に回りを包んでいた苺大福オーラも消え、この空の下は暑いはずなのに、鳥肌が全身を包む。

「第一任務よ」

一体何をすればいいのだろう。まだ得体の知れないこの超能力、それを用いてどのような世界の悪の根源と戦つのだろう。僕は本当に迫り来る非現実に少したじろいだ。

しかし今更拒否しようなんてもう遅い。

僕は 異端者なのだから。

覚悟を決めて、口の中に溜まつてもいい唾を飲み込んだ。

「あなたには明日から三日間安田太助になつてもらつわ

もちろん僕には理解できなかつた、その人物が誰なのか。もつと一般的に言つてくれればいいのに。

シャーロック・ホームズとかね。それだとかつこよすぎるか。

その26 ヒーローまでの道筋（後編）

第4章おわりです。

その27 初任務初日（前書き）

第5章のはじまりです、お待たせいたしました。

「どう? もう見つけましたか?」

「ええ、今もちゃんと追つてますよ」

「見つからないようにしーっかりお願ひね」

はい、わかりました。と僕が返事をする最中に沖田先生は電話を切つた。

なんだか空振りみたいで少し恥ずかしい。まあ誰も僕の通話なんて聞いてないと思うけど。

僕は見失わぬよう一人の少女を目で追う。沖田先生に言われた場所にきつちりと寸分の狂いもなく時間ちょうどに現れるその少女を。そりやいつもの登校時間なんてそんな変わらないよな。

追つていることに気付かれないよう五メートルほど離れ、さりげなく視線に入るかは入らないか、ギリギリの位置に少女を置き、なるべく人の影に隠れるように進む。

少女がエスカレーターに乗ればもちろん乗るし、動く歩道に乗ればもちろん乗る。付け加えれば電車も一緒の車両に乗る。

僕は彼女を尾行している。

それは昨日のこと。

引越しが終わり、竹須佐先輩と僕はコンビニで昼食を買いにコンビニへ行くと、たまたま沖田先生に遭遇して、組織に加わってからの第一任務を与えられた。

それは三日間、市営地下鉄難波駅の四番ホームに毎朝七時一九分発の梅田方面の電車に乗る、小柄で団子のよつに髪を結んだ少女を学校まで見届ける。とのことだった。

絶対してはいけないことは二点あって、一つは少女に話しかけること。もう一つは、当たり前だけど少女を見失わないこと。

それさえ守れば何をしてもいいってことは尾行で間違いないよな。

あの先生も何が安田三郎だ、誰のことかと思つたら漫画の登場人

物じゃないか。しかも脇役だし。もつとマシな例えがなかったのかと訊ねてみたくもなるけれど、あの先生には何を言つても無駄だろうな。

なんて、こんな無駄なことを考へるのは尾行一日田だからであつて、初日はそれはそれは大変の一言だつた。いや一言じやすまい、それこそ四百時詰めの原稿用紙を二十枚書けといわれれば少し苦労しながらやり遂げるくらい、僕は緊張していた。

いつもの登校日より僕の携帯電話のスムースは一時間近く早く鳴り、睡眠時間は強制終了させられる。僕はその鬱陶うつとうしく鳴り響くアームを停止させ、もう一度毛布に体を包めた。なぜこんなに寝起きの毛布やら布団は気持ちいいのだろう、一生このままでもいいと思つてしまふほどに心地良い、それに途方もない中毒性がある。まるで誰かに催眠術をかけられているようだ、もう一度眠りなさいと……。

再び携帯電話が鳴る。

今度はスムースではない、着信音だ。僕は適当に手を伸ばし、ゆっくりと携帯電話を耳に当てた。

「ぐつどもーにんぐ！ そろそろ起きないと遅れちゃうわよ」

誰かと思えば沖田先生じゃないか、それにしても思いつきり日本語丸出しな英語だな、いくら社会の教師だからといつてもその発音はナシだろう。それに朝からそのテンションの高さは社会人としてはどうかと思うけど。

「こんな朝早くから何のよう？」「僕はすぐにでも睡眠といつ安息に身を包まれたいので、それほどイライラはしていないけれど、言葉に棘を含ませた。

「何の用じゃないでしょ、お仕事は？」

あー、と叫び、携帯電話をベッドに放り投げ、適当に髪を水で濡らしすばやくドライヤーで生乾きにさせて制服のズボンはチャックだけ閉めベルトは外したままでシャツをズボンの中に入れず金曜日

の時間割の教科書が入ったままのかばんを肩にかけ部屋の鍵もかけず部屋を抜け出した。

今から七時一九分までに難波か、ちょっと厳しいかもれない。と思つていただけどいざ難波に着くと予定時刻よりも10分程度早く着いた。

心臓の音がしつかりとくつきりと感じられる。それは時間に間に合わないから走つてきたので心拍数が上がつてゐる、なんて単純なものじやない。でもそれは少し考えるより単純なことなのかもしない。

僕は緊張しているのだ。

これから起つるかもしない出来事に。

先の見えない未来に

初めての出来事に

ただ怖気づいているだけ。

そりやそりや？ あんな念力でダンボール飛ばしたり、トラックを片手で上げるような奴らがいる組織に監視しなければいけない存在。それがどれだけ大きなものなのか僕には想像ができない。もしかしたら大阪を仕切るヤクザの娘かもしないし、中国マフィアに縁のある者かもしれない。そんなことよりももっと危惧すべきことは、その少女がもしかすると超能力者かもしれない。

ただそれだけが僕には気がかりだつた。

尾行していることを気付かれてしまつたら銃口を向けられるかも知れないし、そのまま誘拐され海外に売り飛ばされたりするかもしない。でもそんなことよりもっと僕の心を締め付けるのは、もしかすると

超能力を使われるかもしない。

こんなこと言つと笑われるかもしれないけれど、あのふざけた『ダンボールアタック』なんて技が結構トラウマだつたりしてゐる。そりや向こうは遊びの気持ちだつたんだろうけど、こつちはそんな感

情ではいられなかつた。猫がネズミと遊んでるなんて言うと最もな例えだらう。どこかの仲良しなおてんば猫さんと利口なネズミさんじゃない、もちろんナチュラルな方だ。

軽くじゅれていて噛み付かれたらこの様だ。自分の運命を呪うよ。自分が超能力者であることを呪うしかないそんな心境。

笑つている膝を見て苦笑いながら、ふと携帯電話に表示される時計を見ると七時一五分。このまま逃げ出すのもアリかな？ と思つて振り返ると、目の前に団子が見えた。

何でこんなところに？

本当の団子じゃない、髪を結つてるのか。つてことはこの少女が、それにしても小さい。

頭の上に握りこぶし程に団子を結つても一五〇センチくらいだろう、そのへアスタイルでも僕の目線にギリギリ入るくらいだ。言つておくが僕の身長も一六〇半ばなので、あまり他人に小さいなどと口にできない。けれどその僕が小さいと言つのだから本当に小さいのだ。それにその服装は……僕がよく知る制服。京都文芸高の物、それに襟元の白いライン ということは同じ学年ということか。しかし何度も小さい、これだと小学生に間違われたつて文句は言えないだろう。

と心で唱えた瞬間、少女の少し釣りあがつた目が僕の目を捉えた。慌てて僕は視線を逸らす。まだ尾行を始めてもいないこんなところで、禁止事項に触れかけては笑い事で済まされない。会話をしないなんて簡単なことだと思っていたけど案外難しいのかもしれない。まあ、僕が余計なことを考えていたからこうなつたんだけど。

これ以上ないほどの人口密度の車内。肌と肌が触れ合うほど近くに尾行相手がいる。なんて度胸のある尾行者なのだろう。いや、僕には度胸なんてこれっぽっちもない。

電車が揺れるたびに触れ合う体。その度に心臓が止まるような感覚に陥り、ゾッとする。恐らく難波駅から新大阪駅という約十五分間で僕の寿命は五年は減つただろう。

終電の新大阪駅に着き、ドアが開くと同時に人が炭酸飲料の泡のようになふれ出る。その中からひとり、その流れを無視するように早歩きし、人の泡に埋もれていく。僕はそれを見失わないように、そして不自然ではない速度で歩き、横目で少女を追う。少女は短い足を細かく素早く動かしながら速度を上げていく。僕はできるだけ足を伸ばし、かかとから地に着きつま先を蹴り速度を上げる。

それにも何でこんなに急いでるのだろう？ ちらほら見かける同じ制服の生徒は急ぐことなく人の波に溶けて歩いているのに、ただのせつかちなのだろうか？ それとも付かれていた事に気付いて僕を撒まこうとしているのか？ でもただ速いだけで僕を惑わすようには歩いてるよう見えない、やはりただトロトロ歩くのが嫌いなだけだろう、僕もそうだから気持ちはわかる。などと変な親近感を抱いて気を抜くとまた先ほどのように寿命を縮めながら登校しなくてはならないので、僕は最低限のことだけはする。先ほどのようにな少女の横に立つことのないように。

乗り換える新大阪駅ではさつきみたいな超至近距離から逃れるため、少女が並ぶ列の最後尾に並んぶことに成功し、車内でも手が届く範囲でいることはいたが、僕と少女の間には人の壁と言つものが何重にも重なつていて見つかる事はないだろう。

僕は尾行中のひとときの安らぎを、京都に向かうにつれて広がる畑のどかな風景を見つめながら過ごした。

そのどかな風景がコンクリートに包まれ始め、学校が建てれるんじやないかと思う程広い線路を通りかかると京都駅に到着した。

少女は京都に着いても忙しなく足を動かし、エスカレーターに乗り右端をすり抜けていく。僕も見失わないよう追う。エスカレーターに乗つて気づいたけど大阪じやみんな右寄りに乗つていたのに、京都だと左寄りなんだな。

駅を出て、通学路になればもう今までの緊張状態を続ける必要もないだろう。周りには同じ制服の生徒もたくさんいるし、もちろん僕も少女と同じ高校の制服をまとっているのだから彼女に着いて歩

いたつてどこも不自然はないはずだ。ここで通学路からそれた方が変な奴になってしまふ。

緊張の糸が切れると、春から夏に変わり始める風の匂いが感じられすごく清々しかった。気温も湿度もいゝ具合だし、こうやって無事、銃撃戦や超能力に遭遇することなく登校できた事をうれしく思うよ。今日は雲少ししかない晴空だし。

そんな感じなので昼食は教室じゃなく中庭に出て食べようかな？と季節の変わり目で上機嫌になつていると、僕の目の前にハンカチが一枚落ちていた。誰か落としたのかも知れないと思い、何の疑念もなくそのハンカチを手に納めると、目の前に頭上団子極小少女が僕を見つめていた。

目が合うと少女は僕の方へ歩みを寄せ「あら？ どうも」と言って、呆然とハンカチを持つ僕の手から華麗にハンカチを奪つていつた。

もしかしてばれたのかもしれない、僕が尾行者であることに。なんて間抜けな事をしてしまつたんだ、普通尾行する相手のハンカチを拾うか？ 拾わないだろう？ 華麗にスルーに決まつていて。でも気づかれてないよな、顔は見れなかつたけどハンカチを返したとき『尾行してるの？』なんて台詞を吐かれなかつたもんな。よし大丈夫、気を取り直してあと数百メートル先のゴールを目指すとしよう。

気持ちを入れ直し前方を見ると少女は一〇〇メートル程先の曲がり角を右折していた。相変わらず歩くのが速い女だ、そう言う女が嫌いだつてのに。僕は駆け足で少女を追つた。

午前中の授業を終えた昼休み。

禁止事項をギリギリ守り任務初日を終えた僕は、歩みを中庭へ向けて、あの忌々しい職員室へと向けていた。それも不機嫌に。

せつかく穏やかな風に包まれながら優雅な昼食を取らうと思つていたのに。

3時限目の社会、もちろん担当は沖田薫、の授業が終えると、教室から沖田先生が「昼休みが終わったら職員室で待ってるからね。楽しみにしてるわ」と色っぽく言つものだから、クラスの奴からは変な目で見られるし、禁断の恋やら何やら盛り上がり始末。その色っぽい声も許せないけれど、もつと許せないのは『楽しみにしてるわ』だ。は明らかに余計だろ！　あの先生の頭には一般常識といつものが大きく欠けている。

その怒りを込め職員室の扉を開くと……。いよいよ隣まで見渡したけれど、やはりいつも花を身にまとつているような女性教師はここにはいない。となると……あそこか。

僕は早歩きでその場を立ち去り、素早く隣の部屋の扉を開いた。

「ぐつどいぶにんぐ！　薙くん」

「アフタヌーンですよ沖田先生」と僕は溜め息まじりで突っ込む。

「あつーじゃあ、あの雑誌つてこんなにちわつてことなのね

もういいから本題に入つていいですか？　あなたの天然にはついていけないので。

「「」めんね。じゃあ氣を取り直して、薙くん！」

つと、またいきなり田の色が変わりやがる。どうやつたらこんなスイッチの切り替えができるんだ？

「どうだつたかしら？　あの子普通に登校してたかな？　何事もなかつた？」

「はい、なぜ尾行しなあかんのか疑問がわくわくこの普通つぶりでしたよ」

あの子の変なところと並べば妙に身長が小さことこの歩くのが速いってだけだし、変わったことも特になかつたよな？　ハンカチを落としたくらいだし。

「あの女子は何者なんですか？　うちの学校と一緒にやし。なんかとてつもない裏事情抱えてるんですか？」

「べーつに。そこまで怪しい子じゃないわよ。薙くんの方が怪しきぐらー」

つてそんな笑顔で言われても、それにそれはどういう意味なんだ？

「雍くんに危険が及ぶ事はないから安心して。ただ何かあれば報告してほしいだけだから」

その『何か』を聞きたいんだけど……。ってどうせ訊いても答えてくれないだろうな。

「あとコノカつちと天照さんのことだけど

「へつ！？」

「あれ？ もしかして忘れてたの、この薄情者」とからかいながら僕の肩を持つて揺さぶるのは別に良いんですけど、ちょっと揺らし過ぎです、これ以上は脳が揺れますから。

「正直忘れてました。崎野さんも天照がいるのかどうかも」

「初任務で緊張してたんだろうね、仕方ないつか。コノカつちはただの風邪さんで天照さんは任務中だからお休みよ

崎野さんが風邪を引いてる？ こんなところでグダグダやつてる場合じゃない、早く寮に行つてお見舞いをしなければ。

「じゃ、沖田先生、明日もモーニングコールお願ひします！」それだけ言つて、背を向けると、「ダメよ」と言う声が背中に響いた。一瞬その声の違いに沖田先生が発したのか疑問を持ったけれど、この教室には一人しかいない。さすがに教師にモーニングコールを頼むのは調子に乗りすぎたかな？

「コノカつちのところに行つちゃダメよ。風邪が伝染つて任務に支障が出ると困るからそつとしてあげて。明日には治せるようになんばるから、もちろん組織がね」と先ほどの声を忘れさせるようなワインクをして微笑んだ。

まあ、一日で治るような風邪なら大丈夫か「わかりました、大人しく昼飯でも食べときます」

「了解！」

扉を閉め教室に戻る廊下で、ふと校内がいつもとは違ひ静かなことに少し不安になりながら、初日の任務は無事遂行された。

まあそんな感じの初日だつたんだけど、本日一日田は何事もなく終われそうだ。

少しだけど、ほんの少しだけ気になつた事は、彼女は昨日ほど歩く速度が速くない事だ。昨日はそれこそ人ごみの中を矢を射るような競歩並みのスピードだつたけど、今日は人の波にきれいに溶け合ひ、同調するような速度だ。

なんだろう？ 一のギャップの激しさは、僕のように速く歩く性格ではないと言つことか？

僕は人の歩調に合わせて歩くことが苦手だし嫌いだしストレスがたまる。ゆつくりとまではいかないけれど、人と同じような速度で、よく歩けるな。少しでも、一分一秒でも早く駅のホームに着けば、もしかすると座席をものにできることができるかもしないし、電車に一本早く乗れる可能性だつてある。良いこと尽くめじやないか。まあ早く学校に着いたからといつてやることなんて特にならないんだけど。

早く学校に着く？

さうか、あの子は日直だつたのか。だとしたら急いで学校に向かう理由があるつてことだ。日直ならいつもより一〇分程早く来て学級日誌やら、黒板消しや教室の空気の入れ替えとかしなきやいけないもんな。

ちなみに昨日、尾行を終え教室の席に着いたのが八時一五分くらいだつたからこの推理で間違いないだろ？ まあ推理なんて呼べる程のものでもないけど。

でも日直の仕事をこなすなんて真面目なんだな。実際、日直の担当になつて一〇分前に来て仕事をこなすなんて、うちのクラスじゃごく少數しか行っていない。

そういうや、うちの学校つて全国でも指折りの進学校だつたな。僕

の属する学科は勉強があまり得意じゃないけれど、他の学科はそ
ではなく得意の部類に入るはずだ。イコール真面目つてことか。

勉強ができる奴が真面目なんて偏見がすぎるかもしけれど、
日本の人口の総対比で勉強ができない奴とできる奴、どっちが真面
目な奴が多いかといふと明らかに後者だらう。例外があることは言
うまでもないけれど。

でも尾行する上で、相手が真面目に口直をこなすかどうかなんて
関係ないか。こいつが朝少し早く来て日直をこなすなら、僕はいつ
もより一時間早く起きて意味不明の尾行をしているのだから、こい
つよりも僕の方が圧倒的に真面目だらう。いや、大真面目もいと
ころだ。

一日の尾行は団子頭と目が合うことやハンカチを拾うことなく
終え、もちろん彼女にも変わった動きは見られなかつた。やっぱり
朝のニュース番組の占いの結果が良かつたからだらうか？ ちなみ
に昨日は11位で今日は3位と中々良好だ。

僕は学校に着いてから、教室ではなく職員室へと向かつた。昨日
のようすに、脳が少し溶けた女教師から昼休みに呼び出さられること
を防ぐ為だ。

他の奴らはわからないが、僕にとつて昼休みは一日で最も樂しみ
にしている時間なのだ。約三十分も休憩時間があれば、十分すぎる
程雑談もできるし、運動場でサッカーやドッヂボールなんかでき
る。少し汗臭くなるだらうが、それは高校生の特権みたいなものと
思つてそつとしておいてほしい。

そんなことよりも、朝一番で先生に会つて確認しなければならな
いことは他にあるんだけどな。

何の変化もなく、ただつきまとつただけで終わった今日の尾行の
ことをどう報告しようかと考えながら職員室の扉を開けると……。
やっぱりいなか。

とぼとぼと職員室を出て、いつも不穏な空気が流れる隣の教室の
扉を開いた。

『ぐつぐつもーにんぐ。薙くん』とこつもなら間髪入れず聞こえてくるその声が聞こえてこない。けれど、沖田先生の姿はそこにあつた。

沖田先生は、僕が教室に入ってきたことに気づかず、黒板に白いチョークや赤いチョーク、黄色いチョークで何やら描いてる。一体何してんだ？

「おはよー、沖田先生！」ちょっとトーンション高めで言つてみたのだがまるで反応がない。

僕はちよつとした悪戯心で、黒板消しを右手に持ち、沖田先生が描くものを一つ消してみた。やーっと、一枚ずつ花びらを千切るようになつた。

残り一枚となつたところでやつと沖田先生と目が合つた。——が、そんな悪戯する余裕を一気に消し去るよつた目で僕を睨みつけた。

「何をしてるのかな？」薙くん

僕は沖田先生が描いた、黄色く塗られた円の周りに赤色の角が丸まつた長方形の絵をみつめながら、「一枚ずつ花びらを千切つて、乙女チックに恋占いでもしてみたんですけど……」と遠慮がちに言った。

沖田先生の顔つきが更に淵む。そんな状況の説明をしていくような場合じゃないよつた。

「すみません、ちよつとした悪戯やつたねん」

「誰と」とぼそつと沖田先生は口からこぼした。

「どうこう意味だ？」

「誰と誰の恋占いをしていたのかしら」凄みながら言ひついで聞こえやしないだらう。

でも思つていた通り、やつぱりその質問か。さて、どうせやつて「まかせう……。

「いや、ついで恋占いをやつしたわけとやつこりますよ」

「じゃあ、なぜあなたはあたしが描いたお花さんの花びらを消し

ていったのかしら？ しまじこはおじべをとめじべをとまで消してしまった勢いでしたよね」

あの絵のじこおじべとめじべが描かれていたのかは気になるとじろだけど、今はそれに対しても突つ込める雰囲気じゃない。じうじょう、全部が全部嘘なのに。僕はただ、教室に入ってきたも気づかない沖田先生に対して、かわいく小さな悪戯をしただけなのに、まさかこうなつてしまつとは。もつこの人には悪戯なんてするべきではないな。

「何で消したの？ わたと答へなさいよ」怒鳴りはしないが限りなく小さく低い声でつぶやく。こんな声を出すのならじつそ怒鳴られた方がすつきりするよ。

じつや言ひ訳の仕方によつてはえらい田に遭つやつだな。そして、どうしよ……。

あつそうか、じの手があつた。この際訊きたかったことを訊いてしまえばいいんだ。ナイス僕、ナイス発想の転換。

「恋占ことぢやうねん。実は言ひど、崎野さんが今日来るか来ないか占つててん、じうやつて」

僕は黒板に描かれた、幼稚園児でも描けるような花の青色をした花びらを一枚消して、「来る」そしてまた一枚消して「来ない」黒板を見つめながら、最後の一枚を消して「来ない」

「沖田先生、崎野さんは今日休みっぽいですね」

振り返り沖田先生を見つめると、うつむきながら体を小刻みに震わせている。どうやらやつてはいけないことをしてしまつたらしく。今にも『何で消しちやつたのよー』と言ひ証拠が飛んできそうだ。

僕はその場から逃げ出す為に、ゆっくりと後ろ歩きで出入り口まで近づき扉に手をかけた瞬間、思つてもいない声が聞こえてきた。

氣色の悪い笑い声と同時に

「やつぱりアホやであります！ 何が『来る、来ない』なよ」いくら顔が似てるからと言つて僕の口まねをするな。

「このか、ずっとじこにおつたのにな、ふふふ、と聞こえてきそ

うな程、柔らかい声だ。

その声の方向に目線を向けると、窓際の一番隅の椅子に一人がちよこんと座っていた。にやけながら。

「あれっ、何でここに？ 崎野さん、もう風邪大丈夫なん？」

「風邪？ うん、大丈夫。ばっちし」

その間は何だ？ と訊いてみたくなつたけど、まだ風邪が完治していないつてことだよな。

「しんどなつたら言つてな。保健委員の僕がすぐ案内するから」

「あり」

「雑くん！ ちょっとそこに座りなさい！」

せつかく、崎野さんが感謝の言葉を述べようと口を動かしている途中にむやみやたらと叫ぶなよ。くそ、耳がキーンと鳴り響く。

「コノカつちと那実くんはちょっと廊下に出て。雑くんとこれから大事なお話しがあるから」

二人はその声の恐ろしさに、何も言わず、すばやく席を立ち教室をあとにした。

僕だけに話す大事な話とは何だ？ と先生の話に耳を傾けていたけど、どうやら黒板の絵を消したことに大変お怒りのようで、あの花はすみれだつたの、あの花は菜の花だつたのとか、あの花たちを描くのに何分かかつたと思つてるの！ など、そのようなことですつと怒鳴られ続けた。本当に今日の占いは三位なのか？

そして沖田先生の怒りが冷めないまま予鈴が鳴り、僕はそれと同時に教室から飛び出し「予鈴が鳴つたので失礼します！」と逃げ出した。もしかすると追いかけてくるのかもしれないと思つたけれど、さすがに予鈴が鳴つたのに職員室へ戻らない程の常識外れではないようだ。

全速力で廊下を突つ走り、右カーブを曲がつた瞬間、目の前に人が突つ立つていた。僕は危うくぶつかりそうになつたので、無理矢理体を傾け、廊下を転びながらその人間を避けた。

危ないとこらだつた、もう少しでぶつかつて怪我するかもしれない

「いろいろだったな。やつぱり廊下は走ると危険だ。

「無様ね」

廊下に転がり、ゴミを払う僕にそんな言葉を吐く人間はこの世に那実っこ以外にいないだろ？

「天照さんか、もう任務終わったん？」

「そうよ。あなたはまだ途中なのよね」天照は一度も僕に目を向けることなく冷えきつた声で続ける。「いくらヌルい尾行だからといつて気を抜くと痛い目に遭うから気をつけなさいよ」

「なんだ？ お前僕を気遣つてくれるんか？」

さつきよつせらに冷えた声で、せらに絶対零度の瞳で睨みつけ、

一言「そうだつたら愉快ね」と吐き捨てた。

そんなこと言つてゐるお前の雰囲気が全く愉快そうじやないんですけど。

そうだった、こいつに訊いておきたいことがあつたんだつた。こいつことはこいつにしか訊けない気がする。

「なあ、天照さん」

僕が名前を呼んでも『何？』とも言わないし、顔もこっちへ向かない。こいつは年中不機嫌なのか？

かまわず僕は話を続ける。やりにくくにも程があるけど。

「最近、といふが昨日からこの学校、妙にいつもより静かな気がせえへん？」

「どういう意味？」

やつと反応してくれてたが、そりじゃないと話しも進まないしな。

「いや、そのままの意味だけど」

「あなた、今一年生がどこにいるか知つてる？」

何だ？ その質問は、意味深すぎるだろ。どこにいるも何ももちろん教室だろ？、学校に来て行く場所などそこ以外にないだろ？。

でも、そんな簡単なことを訊ねる天照じやないし。

もしかして、一年生全員誘拐されたとか？ 一番超能力者が多い一年生を誘拐したのかもしね。悪の組織もいちいち超能力

者を探すのが面倒だから全員を誘拐したなんて……。

「誘拐されたとか？」と言葉を発した瞬間、ものすごい速さで拳が飛んできて、田の前で止まった。その風圧で僕の前髪は少し揺れたけど、驚いた声や、ガードをするような身構えは一切できなかつた。気がつけばそこに拳が、つて感じだ。

「ふざけるの？ それとも真剣？」

「い、後者です」いつもならここで、『ふざける』と選択してさつきの言葉をなしにするのだけど、今の僕には『こまかす精神的余裕がない。それともう絶対占いを信じる気にはなれない。

「どうしようもなく痛い奴ね。生んでくれた親も頭を抱えすぎて悶^{もだ}えてるでしょうね、きっと」

なんで他人のお前が僕の親を敬う必要がある？ ほつといてくれ。それに親はもう僕のことなんて諦めてるよ。

「一年生だけど、修学旅行よ」

「修学旅行！？」もうそんな時期か、どこに行つたん

「沖縄よ」

沖縄？ 私立の高校なのに国内だなんて保護者が怒りそうだけどな。

「帰つてくるのが日曜日の夕方、それまでこの学校は妙にいつもより静かなはずよ

いちいち、嫌みな奴だな。人間ミスが付き物だらう？ 僕は少しふてくされながら教室の扉を開けた。

「遅いぞ、伊佐、それに天照。もうH.Rは始まってるぞ」

あれ？ いつの間に本鈴が鳴ったんだ？ 僕は天照の顔を見て、どうやってごまかそうか考えてると、先生の目をみつめて離さない天照が、僕といたときは全く違う態度で、仕草で、言葉で、言つた。

「すみません、遅れてしまつて。廊下を歩いていると偶然階段から彼が転がり落ちてきたもので」

天照は僕の膝を指さした。天照の目を見ると『ズボンをまくりな

『さい』と言つた気がしたのでまくると、いつの間にか膝に擦り傷ができる。さつき曲がり角で天照をよけよつとして廊下に転がつたとき膝を擦りむいてたのか。

教室からは『さすが雑』なんて言葉が飛び交つてゐるが、いちいち突つ込んでいたらキリがないのでスルーだ。

「それで保健室に行くか行かないかで少し話しをしていたら遅れてしましました。申し訳ございません」と言つて天照は綺麗な礼をした。こいつは一体どこまで猫をかぶれば気が済むのだろう。

「そういうことなら仕方がないな。早く席に着きなさい、今日は転校生が来てるから自己紹介をしなければいけいんだ」

転校生？僕は疑問に思い、席へ移動しながら教壇を見ると、髪をゆるくカールさせた女子が微笑みながら僕に小さく手を振つていた。

そうだった、崎野さんが転校生だつてことをすっかり忘れていたよ。

僕と天照が席に着くと、先生が口を開いた。

「じゃあ自己紹介してもらおうか、崎野くん」

「はい、今日からこの学校に通うことになった崎野心花といいます。先生からこの学校は色々な都道府県から来てるって聞いてるんで楽しみです。よろしくお願ひします」

顔を赤らめ、少し慌てながら小動物のような身ぶり手振りで話す崎野さんの姿は本当にほれぼれする程かわいらしい。

「そうしたら質問タイムといこうか」と先生が言つた瞬間、手が雑草のように無数にのびた。言つまでもなくほとんどが男子だ。そりや女子もいるけれど、見た感じ八対一の割合かな？

みんな気づいてないのかな？ 崎野さんが学校の近所の花屋の娘だつてことに。登校時にほとんど毎日、休むことなく店の手伝いをしていた崎野さんのこと。

先生は適当にのびる手を指差し「じゃあ加藤」と指名していく。

「崎野さんはどこに住んでたの？」

「中学校のときは高槻でそれから京都に引っ越したねん」と加藤に微笑みかける崎野さん。

おい、今のでなんだ加藤？ その顔は、恋に落ちましたと物語つてるかのようだぞ。くそ、ニヤけやがつて。

次第に手を挙げる者が少なくなつていき、口々言いたい放題になつてきた。

「好きな男のタイプは？」「何のドラマが好き？」「好きな歌手は」「嫌いな芸能人は」それに対し、崎野さんは律儀に答えようとするが、当然のよつに間に呑みこむはずもなく、教室は質問をする男子の声で溢れた。

「なぜ、昨日じゃなくて今日転校してきたのですか？」

「風邪をこじらせてしまったので一日遅れたの、だから今日自己

紹介することになつてん」

「じゃあ体調悪くなつたら言つてよ。俺が保健室に連れて行くからさ」

だまれ加藤、その役目は僕と決まつている。

「さつき天照さんに手を振つたけれど友達なんですか？」

僕にも手を振つていたぞ。

「えーっと、簡単に言えばそつなるかな？ ちなみに雑くんとなーくん、いや那実くんもお友達やよ」

その瞬間、僕と那実に男子の視線が集まつた。男つてこうだから嫌なんだよ。なんでもかんでもむさ苦しいんだよ。那実なんて気づくことなく窓から景色なんか眺めてやがる。早く気づけこの状況に、このアホ。

先生はこの異様な空気を察したのか、そこで質問タイムを強制的に終わらせ、崎野さんを席に案内し朝のホームルームは終わりを告げた。

その後、クラスの男子からは色々と質問攻めにあつたり『禁断の恋の次は浮気か』なんて訳の分からぬことを言われたり散々だつた。それ以上に散々なのは崎野さんだろ。休み時間になる度に机の周りに男子が集まり記者会見のような目に遭つてるんだから疲れるだろ。

なるほど。高嶺の花の天照より、ちょっと天然でかわいらしい転校生つてわけか。確かに崎野さんは天照よりは話しやすいよな。でも彼女にもどこか人を近づけさせない、これ以上踏み込ませない何かが漂つている気がする。まあいつもの勘違いだと思うけど。

そして昼休み。僕は保健室にいた。あの擦り傷が悪化したのだ。

これくらいどうつてことないだろと思つて放つておいたのがいけなかつたらしく、砂利がこびりついた傷口は菌だらけだつたみたいで、しまいには痛みが伴いだした。膝を水で洗い、沁みる消毒液に小さな声でうめいて、細菌からがこれ以上僕の膝に住み着かないように絆創膏を貼つて保健室を後にした。

そういえば今朝、沖田先生に尾行の報告をしていなかつたな。そのまま職員室ではなくその隣の部屋に向かつた。どうせあの先生は職員室じゃなくつてこの部屋にいるんだろう？ と思い、扉を開くとそこには崎野さんがいた。どうやら僕が入ってきたことに気づいていないらしく、机に向かい何やら手を動かしている。転校の手続きでも書かされているのかと思い近づいて机の上を見てみると、そこにはトカゲがいた。見かけによらず爬虫類は苦手じゃないんだ、つて小学生じゃあるまいしトカゲと戯れるのはどうかと思うけど。すると崎野さんはスカートのポケットに手を入れ、何かを取り出し、それをトカゲに向けて打ち込んだ。

僕は戸惑い、絶句し、ただその動きを見つめていた。

右手に持たれたカツターナイフはトカゲに向かい勢い良く刺さり、そして勢いよく引き抜き、また刺す。

この娘は何をしてるんだ？ 不気味に思い、僕は崎野さんと視線を合わせて話しをするため屈み、顔を見つめると、彼女はうつすら笑っていた。でもその笑みには楽しいやら憎しみやらそういう感情と言ひものゝ類は含まれていない気がした。僕はその顔を見つめることでやつと正気に戻り、トカゲを取り上げた。崎野さんはトカゲを取られたことに気づいていないのか、何もいない机を刺し続けるん？ 何だこのトカゲ、やけに弾力性があると思つたらゴムでできたおもちゃじゃないか。そりや本物なんて刺さないよな。僕は机に手の平を置き崎野さんに話しかけた。

「こんなところで何してるん？ トカゲのおもちゃ串刺しがゲームなんてあんまり趣味がええとは思われへんな、僕が言ひのもなんやけど。さあ教室に戻ろか」

返事はなく、崎野さんがカツターナイフで机を刺す音だけが教室に響く。

どうしようか、どうやら反応はなさそうだし、仕方ないけど沖田先生でも呼んでくるか、あの人なら彼女がこうなつた理由の少しくらいはわかっているだろう。

机から手を離そうとする直前に、刃物が身に刺さる感触を手の甲に感じた。確認してみると、やっぱり刺さってやがる。

手の甲には折れたカッターナイフの刃が刺さっていた。血がにじみ出る。

崎野さんの力が弱かつたのが幸いしたのか、それとも刃こぼれしてよく刺さらなかつたのか、両方だらうけど、そこまで深くは刺さつていない。でも今は麻痺しているだけで後から痛くなるのかもしない、そう思うとテンションが下がってきた。つて刺されたときに下がるのが普通か。

机ににじんだ血が崎野さんの肌に付くと、崎野さんは眠りから覚めたように目を大きく開き、僕の顔と傷口を交互に見て叫んだ。

「血いや！ 血が出てる！ わーっ」あの？ そろそろ突っ込んでいいでしょうか？

いや、突っ込むべきではないか、崎野さんは僕を刺したこと気にづいていないんだし、それならその方がいい。僕にとつて崎野さんに刺されたくらいじゃこれから付き合いに何の変化もない（どうやらあの様子からすると訳ありのようだし）。でも崎野さんが自分で刺したことを探るとこれから気まずい関係になつてしまふかもしれない。それは大問題だ。地球環境なんて目じやないくらいの問題になつてくる。といふことで僕は慌てながら「大丈夫、これくらい唾付けときや治るから」そう言つて教室から、崎野さんから逃げ出した。

教室を出たことは良かったとして、この傷口の手当はどうしよう……。保健室に行ってこんな傷口を見せると保健の先生が黙つてないだろう。速攻生徒指導の先生とバトンタッチされ、誰にやられたか尋問が始まることまつてない。かと言つて放つたらかしにしてみると膝にできた擦り傷どころの痛みじやないのは明らかだ。

とりあえずカッターの刃を抜いて洗面所で血を流すとするか。そう思い洗面所に足を進めようと思つたとき、肩に手を添えられた。誰だ？ もしかして崎野さんが心配して追つてきたのか？

振り返ると天照がいた。何でこんなところにいるんだ？

「手を怪我してるでしょ？ 私見ていたんだから。ちょっと来なさい」

そう言つと天照は僕の返事を待たずに、僕の手首をつかんで駆け出した。

「一体どこに行くんだよ！ それにそんな体動かしたら血が余計に出るだろ」

「いいのよ、あんたうるさいからちょっと黙つてなさい」

何が『いいのよ』だ？ お前の体ならその言い方はわかるけど、この右手は僕の手だ、お前にとやかく言われる筋合いはないぞ。なるべく校内の人気が少ないところを天照は誘導し、二人きりで合う場所としてはかなりベターな部類に入る場所へ連れてこられた。そこは体育館裏。少量の木が生えていて、東寺を見に来た観光客の声も少し聞こえてくる。けれど辺り生徒の姿はない。

「体育館裏？ 告白つてわけちゃうやろな」

「本当にあなたはうるさい。他愛のない冗談を言つ暇があれば早く右手を出しなさい」

僕はこれ以上こいつを不機嫌にさせることに危機感を覚え、大人しく右手を差し出した。

天照は僕の右手の上に手をかざし、大きく深呼吸して瞳を閉じた。こいつは何をしてるんだ？ そんなわけのわからん宗教くさいことをして治るわけがないだろう、いたいいたいの飛んでいけ、なんて子供だましで癒える様な傷でもない。

「はよ止血せ

天照は閉じていた瞳を大きく開くと、僕にかざした大きく開いた両手の平から人肌より少し暖かい、けれどお風呂だと少しぬるい程度の温風を出した。僕は思わず口を閉じる。

この風に色があるなら金色なんだろうな、と思つてゐるうちにみるみる傷は映像の巻き戻しのようにふさがり、痛みも和らいだ。

なんだこの神話的な出来事は、どこかの宗教に出てくる神ではあ

るまいし。そこで僕の手を医療器具なしで手当てしているのは普通とは言いがたいが女子高生だ。僕は何を目の当たりにしているのだろうか。

「これで傷はふさがったでしょう」

何度見ても、どこをどう見ても僕の手だよな？ 僕は天照の手にカイロ的な物が張り付いていないか確かめるために、その手を雑に握り、甲と平を何度も見直した。

だつて可笑しいじゃないか、普通の手から生暖かさを感じたんだぞ？ カイロかドライヤーくらいしかそういうことはできないじゃないか。

すると天照はその手を引っ込めて、僕を罵倒することはなく、笑つた。

「何で笑つてんねん」

「似てたのよ」笑つたのはほんの一瞬で、すぐに僕の手から逃げるように手を振りほどいた。

「師匠に、というか先生にね」

「先生？ 沖田先生か？」

「さあ、想像だけならお好きにどうぞ」そう言って天照は黒い髪をなびかせ走り去つていった。

それにしても不思議だ。これが天照の超能力か、こんなのは誰に言つても信じてくれないだろうな。見れば誰もが信じるけれど。

僕はさつきまで傷ついていた右手をじっくりと見てみたがどこにも変わりはなく、匂いもかいでもたが何も香つていない、ただ傷が引っ付いた痕だけが残つていた。なんて便利な能力だろう、今まで見た超能力の中で一番世の中のためになるんじゃないかな？ 傷口をふさぎ治したのだから癌細胞がんさいぼうとかそういうのも手を添えるだけで倒せるかもしれない。世の中じゃなくて人のためか。でもあいつは確かにあの黒猫も治したんだよな？ だとしたらそれは人以外にもためになるつて訳か。もしかすると草木にも適用できるのかもしない。そんなことを考えながらゆっくり歩いていると予鈴が鳴り、また

しても僕の昼休みは何の楽しみもなく終わってしまった。でも一部の人からすれば非常に楽しみで好奇心をくすぐられるかもしだいけれど。。

その次の授業には天照は現れなかつた。一体どうしたんだらう？僕の怪我を治してすぐに駆け出して行つたのに。教室ではないどこかへ行つたのだろうか。また任務か？ あいつも忙しいな、まああれだけの超能力と体術の能力の高さを持つていればうなずけるけど。

その後の崎野さんは特に変わつた様子もなく、いたつて普通。僕の手が怪我をしていない様子をみて、あれを夢か何かだと思い込んだのかもしれない。でも崎野さんは天照が能力者つてことは知つてるんだよな？ そこまで考えが回らないか。こちらとしても幻想の類と思つてもらうほうが助かるし。

そして放課後、寮にカバンやらを置いて着替え、僕は暇つぶしにコンビニへ向かつた。昨日はバタバタしていたので、いつも楽しみにしている漫画週刊誌の立ち読みを逃したからだ。まだ売り切れていなければいいんだけど。

部屋を出て、裏門を抜けたとき携帯電話が震えた。

クラスの奴かな、放課後遊ぼうとか？ 今日は乗り気じゃないんだけど……。

着信者表示を見ると『三月番代』と表示されている。いつの間に登録したんだろう？ あの人に番号を聞いた覚えなんてないけど。それに修学旅行中だろ？ 何の用だ？

「はい、どうしました三月さん」

「あつ、雑さん、どうも。今ちょっとといいかしら」この人の声はいつ聞いても控えめという言葉がよく似合つ。

「はい、大丈夫ですよ」

「えつと、心花さん、崎野さんに何か変わつたことはなかつたかしら？」

その言葉を聞いた瞬間、背中に氷を入れられたようにヒヤッとした

た。

なんて確信をつく言葉なんだろう。何かあつたなんでものじやない、カッターナイフで右手の甲を刺されましたよ。こんな経験一生味わえないだろう、味わいたくもないが。

「嘘をついても無駄ですよ雑さん。私は彼女のことを知っているから、じゃないとこんな質問しないでしょ」受話器から語るようにな響く三月さんの声は優しさ以外何も含まれていらないような気がした。なら言つてしまふしかないだろう。

「実はカッターナイフで手を刺されました」

「えっ！ そんなことされたの！？ 私もさすがにそこまではされたことはないわ」

「まあそれは事故に近いんですけど。僕も驚きましたよ、狂ったようにトカゲのおもちゃにカッター向けてるんですから」

「カッターねえ、いつもはハサミなんだけどね」

「ハサミ？」

「そう、植物を切り刻んでいるわ。もちろん狂ったようですが、狂ったようにな……。その言葉の恐ろしさに身震いがした。

あのときの彼女は何も耳に入らず一心不乱にカッターを振りかぶつていた。目標物を失つても。

一体彼女の心の、どこからそこまでの破壊衝動が生まれてているのだろう。

「心花さん、多分学校が怖いんだと思います」

「学校が、怖い？」

「ええ、私も詳しい事情は知らないのですが、この学校に、この組織に来る以前、中学生の頃に深い傷を負つただけは聞きました。その後は高等学校に進学することなく、学校近くの花屋で働いていたと聞きます」

そういえば超能力を使える条件として、心に普通では考えられないほどの傷を負わないといけなくて、でもそのことをよく思い出してしまつ困った脳内をしていなければならぬとかなんとか。さら

に、それに耐える心の強さを持っていなければいけないんだよな。
なんとも矛盾しまくった条件だ。

「そういうことがあつたなら話しさ早そうですね。心花さん、恐
らくまた夜が深夜辺りにあのよつたな發作を起こす可能性があると思
うんです」

「そういうことが前にもあつたんですか？」

「『』くたまいですけれど。でもその發作の法則性みたいなのがあ
つて、起こつてしまふ田のほとんどは、次の日に新しい出会い、つ
まり知らない人と関わらないといけない日だったらしいのです」

「なら、花屋の仕事なんていつも知らない人と会つてゐるじゃない
ですか」

それに崎野さんは店に行くことのない、登校途中の僕に微笑みか
けてくれた。だとしたらあの笑顔はなんだつたんだろう。

「関りの度合いが違うわ。ただそれ違う程度なら大丈夫らしいの
ですが。お店だといらつしゃいませ、ありがとうございました。そ
れと話しをしたとして少しの雑談でしよう？ でも学校に行くとな
ると違うでしよう？」

「確かにそうですけど……。つてことはこの組織の人と会つた日
もそういうことになつたのかも」

「普段ならその係りは私がしなければいけないのですが、今は沖
縄ですでの」

確かにそういう、人の心を和ましたり癒したりするには三月さん
はうつてつけだらう。清楚な話し方もそうだけど、天照のように嘘
偽りじやない、心の底から感じる品位ある優等生的な態度、それと
なんといつても人を落ち着かせるオーラは絶大だ。

「なので、私の変わりに崎野さんの衝動を抑える役目を行なつて
欲しいのです」

「僕ですか？」

何で僕なんだ？ あなたのそのすばらしい性質を僕はひとつも持
ち合わせていないぞ。面倒くさがりだし、脱力感あるし、和みや癒

しなんて言葉を一文字すら持つていなければ。

「そうです。あなたなら出来るでしょ」

「僕が人を慰めるなんて出来ると思います？」

「以前のあなたなら無理でしょうね」

笑いながら言つてゐるけど、結構ひどいこと言つてますよ三円さん。

「でもあなた好きなんでしょう？」崎野さんのこと

なんでそれを！

「見ていればわかるわ。それにあなたは先見ですから」

千件？ そんな莫大な店舗数を構えているのはあれしかないだろう。でもあなたはってどういうことだろ？

「コンビニですか？ それやつたら今向かうとこですけど」

「ふふつ、がんばつてくださいね。お土産買つてきますので」

「ホンマですか？ ありがとうございます」

それではいざれ、と言つて三円さんは電話を切つた。

結構安請け合いしてしまつた感がするけれど、仕方ないか。好い人の情緒不安定を和らげる役目、いいじゃないか、崎野さんとの関係を深めるチャンスだと思えば。

電話終了直後は楽観的でいれて気分も良かつたのだけど、コンビニで漫画週刊誌を読んでるうちにだんだん事の重大さと難しさに気付き気分が悪くなり、半分くらいで読むのをやめ寮に戻り、晩飯を食べることなく眠ることにした。本当にダメな奴だ僕は。

八時くらいに起きる予定だつたのだけれど、思つた以上の深い眠りについていたらしく、時計を見ると深夜の〇時を過ぎていた。

なにか忘れていることがあつた気がする……。なんて考えるわけもなく、僕はすぐに身を起こし、崎野さんの部屋に向かつた。

チャイムを鳴らしても反応がない、扉を叩いてももちろん反応はない。もしかしたら鍵が開いているかもしれないと思いドアノブを回すと、

回つた。

まさか、鍵が開いてるとは思わなかつたので僕は驚きながらも扉

を押し、中に入った。

部屋は暗い。やっぱりもう寝ているのか？ でも鍵を開けたまゝなんて無用心すぎるだろ。僕はリビングの方へゆっくりと足音を立てないように歩いた。

気配がした。耳をすますと呼吸をする音がする。やっぱり起きているのかな？ 手探りで部屋の電気のスイッチを探したけれど見つからず、仕方ないので携帯電話のフランクションを使って辺りを見渡した。

部屋の窓際。その隅に三角座りをしている崎野さんを見つけた。瞳は開いたままで、ただ窓の外を見つめていた。あのトカゲのおもちゃを刺しているときのようにつつすらと笑いながら。

僕の放つフランクションに気付きこけらに振り向いたので僕が「気分はどう？」なんて夕方から用意していた言葉を投げかけたのだが、無反応。ちょっとキザ過ぎたかな？

さらに近づき、手を伸ばせば届く所までくると、崎野さんは視線を僕のほうに向けた。

やつと僕がいることに気が付いたのかな？

「来ないで来ないで来ないで来ないで来ないで来ないで来ないで来ないで来ないで来ないで」 と小さな声で話すと言つより、ただ並んだ言葉を読むより、ピアノを一音だけ連続して鳴らすように発した。

「心配で、来てみたんやけど……」

「来ないで……」

その声は先ほどのように小さな声ではなく、窓が割れるくらい大きな声で部屋中を響かせた。僕はその声に驚いたと同時にドアへ駆け出し、逃げるように部屋を飛び出した。

「一体なんだつてんだ。そんなこと言われると慰めも出来ないじゃないか。」

でもあいのことを言われなくて、部屋に居続けることが出来たとして、彼女の傷を少しでも癒せることが出来たのだろうか。

自分の部屋に戻りながら、自分が人に何を出来るのだろうか、何を与えられるのだろうかと柄にもなく真剣に考えてしまった。

二日田の朝は沖田先生のモーニングコールで目が覚めた。初日と同じセリフとテンションで、僕を眠りの淵から救ってくれた。

確か今日で任務は終わりだつたよな、二日間つて言つていたから。でも最終日だからと言つてもやる気など出るわけがなく、気が滅入る一方だ。せめて尾行する意味さえ知ればもう少しやる気が出るつてものだけだ。結局最初から最後まで意味がわからないまま終わりそうだな。

僕は横田で見た二コース番組の占いが、七位だということに少しほつとしながら部屋を出た。

追尾すべき少女は昨日、そして一昨日と同じ時間にホームに来て、同じ車両の電車に乗り、ほとんど同じ時間帯で学校に着いた。

無事に最後の尾行を終え、思ったよりも感慨深くもなく、思ったよりも何もなかつたことに少し拍子抜けをした、そんなところだ。このことを一日前の自分に言つても信用してもらえないくらい普通だつたよ。

報告のために職員室へ歩いていると今最も会いたくない人と会つてしまつた。無視しようと思つたけれど、そこは僕の愛が許さない。なんてな。ただ、無視する度胸もないだけだよ。

「おつはよ、薙くん。尾行は順調？」

「そんな大声で言つたらやばない？」崎野さん

「あつ、そうやな。『ごめんごめん。コノカ危機感なさすぎやな』てへつ、という効果音が聞こえてきそうな笑顔を向け、いつも通りの天然具合を垣間見る辺りは、昨日の深夜のことは覚えていないつてことか。ここで確認の為に踏み込んだ話をしてしまつて、また絶叫されるのも嫌だしあえてスルーするとしよう。

「薙くんは職員室に用あるん？」

「いや、ちやうよ。沖田先生に朝の報告を

「そつか尾行のね。じゃ、しつかりせなあかんなあ」

「そうですね。と言いたいところだけど、尾行はNGワードだつて。

「心花ちゃん」めん待たせた？ 行いつか。あつ伊佐くんおはよ、
じゃね

「がんばつてなあ」

そう言いながら手を振つて崎野さんは脇に学級日誌を抱え、クラスの女子と教室の方へ歩いて行つた。日直のやり方でも教えてもらつていたのだろう。あの様子だと男子以外とも仲良くやれてそういう良かったよ。初日の男子からの人気振りから妬む女子もいるだろうと思つたけどそこまで精神年齢は低くなかったか。

ちなみにクラスの女子がなぜ僕のことを下の名前で呼ばないのかと言つと、単に仲が良くないとかそういう理由じゃなくて、僕と那実の見分けがつかないからだ。少し残念だけど仕方ないよな、似てるんだし。

職員室には毎度おなじみ沖田先生の姿はなく、お決まりのよう隣の教室へ向かつた。

「おつはー、雑くん。調子はどう?」

「ちょっと古くないですか？ その挨拶は」

「何？ いいじゃない、あたしが大学生の頃はすごく流行したんだから」古くても流行に乗つてなくともいいか、挨拶してくれているのだから。

「はいはい、おはよつばりこます。ちなみに今日の朝も特に変わつた様子はなかつたで」

「そうなの、そりや残念」と言つてゐるわりに、顔から『何もなくて当たり前よ』と読み取れたのは僕の氣のせいだらうか。

「それより崎野さんのことやけど」

昨日からずつとあの発作のことが気になつていて、どうすれば少しでも症状を和らげることができるだらうと考えた結果、やつぱりこの人しかいなかつた。ちょっと癪だけ。

「昨日崎野さんの変な発作を見たんですけど、何あんなことこ

なるんですか」「

「あら？ 見ちゃったの。前に言わなかつたかな、あのクラスは傷者の集まりだって」

「言いましたけど、あんな精神科に行かなきや 行けないよつなレベルのものと思つてなかつたんですよ」

沖田先生は面倒そうに頭をかきながら「精神科に行つてもダメだからここにいるんじゃないの。いざとなれば精神安定剤でも飲んだり打つたりしきやいいのよ」と吐き捨てた。

「なんちゅうこと言つねん、人を物みたいに言いやがつてアホか」「失礼ね、物なんて思つてないわよ。あなた達はこの世で一番大切な仲間よ」

さつき吐き捨てた言葉を聞いて、誰がその思いを信じれるとうんだ。

「さつきもコノカつちもらいに来たの、精神安定剤」そう言つて沖田先生はポケットからピルケースを取り出し錠剤を慣れた手つきで出し、手の平に転がした。

「これさえ飲めばある程度は収まるの。でもどうしてもつて時は、ちつと痛いけど注射しなきやだけどね」

「でも薬つて副作用とかあるんじやないですか？」

「もちろん、当然。まだ今はどういう副作用があるかわかつてないけど、体には良くないでしうね」

「そんな危ない薬与えていいんですか？」僕は必死だった、何でだろう。精神の不安定が薬を飲んで治せるならそれでいいじゃないか、例え体に支障があつたとしても。それはそれでしうがないじゃないか、それくらい重度の精神障害だといつのなら。そんなことはわかつている、だけど……。

「なら雑くんが精神安定剤の代わりになつてあげなさい」「えつ！？」

「あなたの超能力を上手に活用すればきっといい結果が生まれるはずよ」

そんなようなことを昨日も聞いた気がするけど。

「僕の能力って、超能力って一体何なんですか？」

僕の発した言葉がよほど不思議だったのか、沖田先生は目を丸め、その大きな瞳で僕を捉えて言った。

「まだ気付いてなかつたの？ てっきり気付いているものと思っていたのに。ちょっとびっくり」

その表情はちょっとビビリひじりがないだろ？ 驚愕の域まで達していると見受けれるが。

「それじゃ教えてあげる」

えつ、教えてくれるの？ ちょっと待つて、まだ心の準備とかできてないから。

「あなたは一般的に言われる予知能力者よ」

……。

一瞬空気が止まつたけれど、そんなものを止めていく場合じやない。

「よちのうりょくしや？」

よく聞く言葉だし、超能力の中でも一番知られている部類の能力じゃないか。でもその中では胡散臭い度ナンバーワンだけど。

「ある人はあなたの持つ能力のことを先見とも呼び、また予言とも呼ぶわ」

「はあ」

「何？ ボケーっとしちゃって。すごいじゃない！ 人間国宝なんて目じゃないくらいこす」この能力なのよ？ その辺わかつてるかな雑くん

「でも今までにもいたんじゃないですか？ ノストラダムスとかモーセとか」

沖田先生はその言葉を聞くと一気に表情を固くした。

「そんなの信じてるわけ？ ちなみにモーセは預けるまつの預言者です。」

いや、そんな本気で怒らなくても、確かに予言書や預言書なんて

信じてませんけど。

それにしても予言と預言の違いがいまいちよくわからないけど。

「預けるの預言って何が違うんですか?」

「神の啓示を受けるとか、そういう感じのことを言うの。雑くんは超能力使ったときに何か聞こえた? 聞こえないでしょ、聞こえたらあなたにもこの錠剤をプレゼントよ」授業中の二倍程度目を輝かせながら自慢げに言う沖田先生は、幼稚園児のようにかわいらしくもあり、憎たらしくも見えた。こんな表情をするのは、僕が超能力者だと教えてくれた日以来かな?

「もつと自分の能力に自信を持ちなさい、これ以上の超能力をあたしは知らないわ」

「はい、わかりました」全くわからないけど。

「超能力者で人助け。いいじゃない。あたしも超能力欲しかったな……」その言葉を吐いた瞬間、勢いよく僕の瞳を見つめた。

「あたしに超能力がないってわけじゃないのよ、あるんだから。あるけど、あなたのような能力が欲しかったなって言う意味よ? わかった? わかったでしょ」

そんな勢いに任せて言われるとわかったとしか言えないだろう。この人はまだ自分が超能力者だという嘘がばれていないとでも思つてるのか? でも思つてなきゃこんな真似できないか。

「わかりました、当たり前じゃないですか沖田先生は超能力者ですよ」

「その通りあたしは超能力者」と言って、手を強く丸め胸を誇らしげに叩いた。

「そういえば、今日で初任務終了ね。ご苦労様」

沖田先生は右手を僕の方に差し出してきたので、あわてて僕も握り返す。

「いえいえ、あまり実感はないのですけど無事に終わってよかったです」

沖田先生は僕の手を離し、大きく腕を前に伸ばしドッヂボールで

アウトを取つた少年のよつな顔をしながら親指をグッと立てて、
上等上等計算道理。後は任せとおいて！ 本当におつかれさま

「は、はい。お疲——」と最後まで言つ前に予鈴が鳴つた。本当に間の悪いチャイムだ、いやもしかして間が悪いのは僕か？ なんてことを考えていると、先生は僕の横を颯爽と歩き、軽く優しく頭を一回叩いて職員室へ戻つていった。

本当にこれでいいのかな、僕の初任務は。

その思いは四時限目が過ぎても拭うことはできず、崎野さんのことと絡み合い余計にわからなくなり、授業なんて聞いている余裕なんてなかつた。休憩時間も机に頬をつけ眠つてゐる振りをして、クラスメイトからの「ンタクトをさけた。そんな僕を見かけて気になつたのか、僕の前に鏡のようになつたあいつが弁当を持って一言「中庭行けへん？」と誘いをかけてきた。

兄弟仲良く昼ご飯なんて年齢じゃないだろうと思いつつ、あのことを相談できるのはこいつしかいないと思い、僕はカバンから駅の売店で買った弁当を取り出し後に続いた。

中庭に出ると、穏やか日差しと一定して肌をなでるような風が吹いていて心地よかつた。昨日より天気がいいってことはないけれど。あまり広くない我が校の中庭は道がレンガのようなもので覆われていて、その真ん中に花やら木などが植えられている。ベンチなどは全くないので、ほとんどの生徒はビニールシートを敷いて昼食を食べている。が、もちろん僕ら兄弟が、そんな準備がいいわけがなく、そのままレンガにあぐらをかけて座つた。

那実はワインナーご飯を口に放り込み、大げさに口を動かせながら飲み込みお茶を飲む。

僕も脳が少しでも働けるようにと願いを込め、箸を割つた。すると那実が口を開いた。

「弁当を食べる前に少し話しがあるんやけど。胸に突っかかりがあると飯も旨ないやろ？」

「お前はもう食つてるやないか」

「俺は突っかかりなんて気にせえへんよ。それに、俺の弁当は寮のおばちゃんが作ったからうまい。けどお前の弁当はインスタントの方がマシって言つような程不味そうな弁当や。それ以上不味なつたら食べ物ちやうやう」那実は口元に付いた米粒を親指で取り、舌で舐め取つて言つた。

売店弁当を侮辱しすぎだらう? そんなに不味くないぞ。

「だから何があつたのか喋れ。ほら、出汁巻きあげるから」

僕は出汁巻き卵を弁当のフタの上に置いてから口を開いた。言つておぐが出汁巻きをもらつたから話すわけじゃないぞ。

「崎野さんが精神不安定なのはお前知つてる?」

「もちろん、組織に入った時期はさほど変わらんじ。何回か狂つたところも見たことあるで」

あの崎野さんの姿を見たのにどうしてそうやつて平然とした顔で話せるのかよくわからない。以前からこんな奴だつたか? でもそのことは今関係ないな。

「僕やつたらどうにかできるつて。沖田先生ならまだしも三月さんにも言われたから、どうすればええんか……」

「何をどうするん?」

「崎野さんを不安定から救う方法や」僕は少し乾いたのどを潤わすために、那実の持つてきたペットボトルのお茶を口に呑んだ。

那実はあごに手を当て少し考えてから話しを進めた。

「救うか……。オコガマシイな

「はあ! ?」

「人の心の傷なんかそんな簡単に治せるもんやなんて思つてるんか? ましてやお前はまだあいつと出会つて間もない。傷を治すにはそいつのそのときの痛みを十分知らんとアカンと俺は思つ。お前にその覚悟はあるんか? ちなみに俺にはない

「あるに決まつてるやろ」当たり前のことを聞くんじゃない、ア

ホが。

「あのときみたいになつてもか」

その言葉を聞いた瞬間、にぎやかだつた周りの音、心地よかつた風の流れが消え、僕の鼓動だけが響いた。

あのときのような過ち、別れを繰り返すことになつてもいいのか僕は。そんなことをするとあの子はもう僕を許してくれないだろ。

「ちよつと言ひ過ぎた、ごめん。でもあれや、お前の傷を知つてる俺も、お前の傷の治し方はわからん、血は繋がつてゐるのに。つてことはそれくらい難しいつてことや」

こいつが謝るなんて珍しいな。それくらい僕の顔には悲壮感が漂つていたつてことか。あれからもう一年以上も経つのに、まだ忘れることができないなんて僕は本当にダメだな。

「それにこれがきっかけでお前の傷も少しあマシになるかもせえへんし」

「そりやな。オッケ。でも超能力を使つてどうやって崎野さんの傷を癒そつ？」

「あー？ まどろつこし。そんなもんに力使うなよ。お前やつたら多分普通にすれば大丈夫や」 そう言ひて那実は腕を組む。

「普通？」

「そりや。お前考えるの苦手やろ？ 直感や直感。もし超能力使つて失敗したらそのせいにするやろ」

そりやしないとは言ひきれないよな。

「なら気持ちでぶつかるしかないやろ。お前やつたら出来るなんて安っぽいことは言へんけどどうにかなるやろ」

人の一生に関わるかもしないことに『どうにかなるだろ』は『ないだろ』。まあお前らしいと言えばお前らしいけど。

「そやな、いちいち悩んでるのもアホらしくしな」

沖田先生の教えを無視することになるけど、やつぱり僕にはこっちの考えたかの方が賛同できる。超能力はもじもの為に取つておこう。それに必殺技は最後つてお約束だし。

「ちよつとくらいは考えて行動せえよ」

わかつてゐるわ。何も考へないで行動に移せる程僕は肝が据わつて
いないよ。

「ほな、よつここしょ」そう軽快に言い放つて立ち上がり、弁当
を片手に持つた。

「どこ行くねん？」まだ食べ終わつてないだりつゝ、それに僕は
一口も食べ物を口に含んでいないぞ。

「中庭で一人で飯食う男子なんかおらんやろ？ それに似た顔が
一緒に食つてたらドッペルゲンガーか！」つちゅう話しゃ「それだ
け言つと那実は教室へ戻つていつた。

いやいや、誰もドッペルゲンガーなどとは思はないだろう。まあ
男子一人が中庭で昼食をつつき合つてゐる姿は何かと誤解されそう
だがな。

僕は先ほどのちょっとした緊張感を吐き出すよつここさく溜め息
を吐いた。

たまには一人で中庭で食べるのも悪くないか。僕はそう思いなが
ら那実にもらつた出汁巻き卵を口に入れて周りの景色を見渡した。
あれ一人で飯食つてる奴なんてここにはいないぞ？ 普通に考え
ればそうだよな。一人で、しかも中庭で昼食つて不自然すぎる、ど
れだけロマンチストなんだよ、詩人か？

僕は正氣を取り戻し、慌てて弁当を持ち中庭から走り去つた。

決意が決まってからの午後の授業も、相も変わらず集中できず、結局なんて話せば彼女を癒せるだらうとこりこりで考えは止まり、そのたびに消しゴムを投げ、表なら癒せる、裏なら癒せない。なんてジンクスみたいなことをして過ごした。

崎野さんはとすると、いつもと何の変わりもなくその天然爛漫な雰囲気で、教室の空気をいつもより一倍程和ませ、また男子からは熱い視線を送っていた。

そんな彼女が精神安定剤を飲みながら授業を受けていたという事実を思い出すと胸が痛む。

結局何の打開策も思いつかないまま放課後が過ぎ、夕食を食べ風呂に入り、氣づくとまた消しゴムを投げていた。

こんなことしている場合じゃないだろ、早く部屋を出て崎野さんの部屋に行くんだ。

僕は立ち上がり、ドアノブに手をかけては座り、手をかけては座りを何度も繰り返したことだろ。この三時間で八回は固い。

また決心がつかず、テレビの前に座り直した瞬間、頭上で物が割れる音がした。

この上の部屋は崎野さんだ。

僕はすぐに腰を上げ、さつきまでこの世の物とは思えない程重たかつたドアノブを難なく回し、物音のする部屋へ急いだ。

きっとまた発作が起きたのだろう。くそつ、迷つてないで晩飯食つてから行けばこんな後悔しなくて済んだかも知れないのに。自分が立ちはせいなのか、インター ホンも押さず勢いよくドアを開け、崎野さんの部屋に入った。

「崎野さん、どうしたんですか！」

目の前には、瞳に涙を溜め、机にうつぶせになつてている崎野さんがいた。左手にはピルケース、右手には錠剤が持たれている。

「アカン崎野さん！」僕はそう思つと同時に叫び彼女のもとへ駆け寄り、右手を押さえた。

「うるさい、だまれ」

僕は驚いた。

それはいつもの言葉使いと雰囲気の違つ崎野さんに、そして何よりも右手だけで吹き飛ばされた事実に。

天照ならまだしも、あんな細い手をした崎野さんに、しかも片手で吹き飛ばされると思つていなかつた。仕方なく僕は右手に持たれた錠剤を奪うことを諦め、左手に持たれたピルケースを奪つた。

すると崎野さんは視線を僕に向け机に置かれたハサミを左手に握りしめ、嗚咽まじりで近づいてきた。ピルケースを返さないと殺すぞと目で語りかけてくる。

そして彼女は躊躇無くその左手を振り下ろし、僕の眼に突き刺さつた。

僕は物が割れる音で目が覚めた。

何だ、テレビを見ているうちに眠つてしまつたのか。それにしてもひどい汗だ、さつきの夢のせいだろうか。そしてもう一度物音がした。

こんなこと考へてゐる場合ぢやない、速く崎野さんの部屋へ向かわないと。僕は夢と同じように階段を上り、扉を開き、夢と同じ言葉を吐き吹き飛ばされピルケースを奪つた。

なんだよ、現実でも片手本で吹き飛ばされるのかよ。追い込まれると人つて怖いな。

つておい、このままじゃ崎野さんはハサミを持つて僕にめがけて振りかぶつてくるだ。

戸惑つてゐるうちに崎野さんは左手にハサミを握り、さつきの夢

の繰り返し見ていくような、それほど同じ動きで近づいてきた。

やばい、このままじゃ夢のように目を刺される。でもどうすりやいいんだ？ 避けれって言われても僕の動体視力じゃ、この至近距離から目に向かい飛び込んでくるハサミを眼で追うことすらまあならないだろう。そしたらどうすればいいんだ、この場から逃れようと思つても体は動かない。ほら足はおもいつきり震えてるし、手なんて力も入らずただ体の付け根から垂れ下がつてるだけだ。

あの夢が僕の超能力、先見だとするなら、予知夢だとするならあと五秒くらいで僕の目が潰れる。

このままじゃ僕を刺したことで更に彼女の傷が深まるかもしだない。何をやりに来たんだ僕は、逆だろ。

体が動かないならあと一つあるだろ？

やめてくれ、崎野さん！

.....。

あれあれあれ？ 声も出ない。

それは明らかに自分でもわかつた。声帯も震えていないし、器官から空氣の流れを感じなかつた。ただ口を動かしただけだ。崎野さん読心術とか使えるかな、つて使えるわけないよな。一人でボケて突つ込んでる場合じやない。どうする、どうするんだ。もう万策尽きたぞ。

夢の終わりまで残り一秒を切り、いよいよ眼球とさよならだな。なんて思つてているとあのときのあいつの声が聞こえてきた。

『雞の眼が好きだから、好きだからいいと思つたの』
と聞こえた気がした。

思いからふけなおり、タイムリミットだと気づいて右目を押されると、まだそこにはハサミが突き刺さつていなかつた。どういうことだ？ 加害者になる予定だった人物を潰れるはずの右目でとらえた。

予定加害者は僕の方に四つん這いでうつむき、息を切れ切れにして「ご、ごめ、ん、またや、つてしまい、つ……うあう」と右手

の錠剤を必死に口に押し込みながら言った。

その姿を見ると、さつきまでどうやっても動かなかつた体が勝手に動きだし、彼女の右手を押さえ、体を抱きしめた。

その体は思つていたよりも軽く、そして骨の感触が肌に伝わつた。崎野さんの息の乱れが落ち着きだした。彼女の体は妙に熱い。泣くことはそれほどエネルギーがいるのだろう。その手を首もとから背中に伸ばした。

「あつっ！」

思わずその手を背中から離してしまった。すゞく熱い気がした、ホットプレートのような。そういう熱さが崎野さんの背中から僕の手に伝わつたのだけど氣のせいだろつか。もしかすると火傷しているかも知れないと思い両手を見つめたがそんな外傷はなかつた。やっぱり氣のせいだよな、ありえないだろ背中にホットプレートだなんて。

「薙くん、ちょっとごめんやけど飲み物買つてきてくれへん？」

泣いたら喉渴いたから

どうやら気持ちも落ち着いたらしく、涙を拭つその顔にはいつも暖かさが見えた。

「わかつた、ほな行つてくる

どうやら正氣じやなかつたのは僕の方だ。彼女の声が聞こえた瞬間、一気に顔が火照りだし、さつきの自分の行動がいかに愚行なんか気付いた。そしてその恥ずかしさから僕は素早く部屋から逃げ出した。

扉を閉めると、少し火照つた体を冷ますような肌寒い風が吹いた。昼は汗が出るかもしれないって程暑いのに夜はまだ寒いんだな。そんなことはどうでもいいけど、崎野さんにどのジュースにすれば良いか訊くことを忘れた。

今更戻つて訊けないし、あの何ともいえない空気が漂つ部屋に戻れる気がしない。ここはセンスが試させると、今日一番のポイントになりそうだな。本当なら豊富な品揃えのコンビニへ行きたいとこ

うだけど、この時間に門をよじ上ると警備会社が来そつなので、僕は頭を抱えながら学食の前にある自販機へ向かつた。

——明かりが灯る自販機を見つめて何分くらい経つただろう?

本当に何を買えば良いかわからない。

天真爛漫といえばオレンジジュースって気もするけど、乾いた喉にはちょっと違うよな。だとすれば、スポーツドリンクかお茶になるだろう。でも女子ってスポーツドリンクって好きなのかな?微妙な気がする。かといって家でも飲めるようなお茶なんて買えないし、炭酸飲料なんて論外だろ。いや、でも無類の炭酸好きの可能性もなくはないか。

このままじゃ埒があかない、仕方ないから自分の好きなジュースとお茶でも買つていこうか。女子って何だかんだ言つてカロリーとか気にしそうだし。

僕は自販機に100円を入れて、グレープフルーツジュースと日本茶のボタンを押した。

ちょっと時間かかり過ぎだよな、もう五分以上過ぎてるよ。炭酸飲料を買つていないのでほとんど全速力で崎野さん部屋に戻つた。部屋に着くと崎野さんはいつも通りの笑顔で僕を迎えてくれた。しかし、ちょっと頬を膨らませて。

「ありがとー。でもちょっと遅ない?」

「ごめんごめん、部屋に財布取りにいつてたら遅なつて」と、とつさに嘘をつく。

あなたの好みがわからなくて自販機の前で悩んでいましたなんて言える訳がない。

僕は両手に持つていたジュースとお茶を机の上に置いた。

「これ買つてきたんやけど」

悩んだ結果こうなつたのだけど、これ以上の答えは見つからない。これがダメなら僕のセンスが悪かつたってことか。ちょっと、いやかなり残念だけど。

その判定結果を見ようとおそるおそる崎野さんを見ると、愕然と

した表情でグレープフルーツジュースを持ちながら震えていた。
そんなに好きだった？ そのジュース。でも震える程なんてドラマや漫画じゃないんだから。

「もういや

ん！？ よく聞こえなかつたけど。

「これも組織からもらつたんやろ？」

何のことやらさつぱりだけど。

「やめてよ、人の過去を探るなんて……。出てつてまさかの退室願いだ。

「出ていけ言つてるやろ！ 嘘つき、偽善者、コノ力を慰めるなんてただの命令やつたんやる」

命令と言えば近くなるけど、でもあくまで僕の意思で行つたんだ。それにしても彼女はなぜそんなにも怒つているのだろう？ もしかして選んだジュースが悪かったのだろうか？ それに探るつて何を？

「僕は自分で選んだジュースを買つてきただけや」

「うそ」怒りで潤んだ瞳が僕を見つめる。

「ホンマや！ そんなしようもない嘘付けへんよ」 僕も負けじと崎野さんを見つめた。睨んだに近いのかも知れない。

ちよつとした沈黙のあと、崎野さんはグレープフルーツジュースのパックにストローを突き刺し、ちゅーちゅーと音を流しながら涙を流し「やつぱり帰らんといて」と呟いた。

また泣いたよ、本当によく泣くなこの人は。言われなくても帰る気なんてさらさらなかつたですよ。

「グレープフルーツは嫌いやつた？」

「ううん。大好き」

「ほな、何で？」

泣き止んだ崎野さんは、少し長くなるけど、と語つて手に持つていたジユースを机に置き話した。

「中学校のときには好きやつた人がこのジュースおいしいでつて教えてくれてん。で、色々あつてその人と付き合つことになつたんや

けど、結局その人に振られたあげく裏切られて、コノカ学校行けへんなったねん。それからグレープフルーツを見たり、あと裏切られた日と同じ占いの順位を見たりしたら変になるねん。まだいっぱいそういうのあるけど思い出されへんくらいあるから……、それに思い出したらまた体が熱くなつて気持ちを止められへんなるし」

あの狂つた姿を想像すると、恐らくその裏切られ方が半端じゃなかつたんだろう。細かいところまで訊きたい気もするけれど、今のが僕じゃこれが限界だろ。

「でも雑くんすごいな」

「何が？」

「コノカがハサミ持つたときの顔も、出て行つてつて言つたときの顔もすごかつたで」悪戯をする子供のような声で崎野さんは言つ。

「どうこう風に？」

「それはコノカだけの秘密。でもあの人……、好きやつた人にちよつと似てたかも」と言つてはにかんだ。

そんな彼女の幸せそうに頬を赤らめる姿を見ていると、言つてしまいたくなるじゃないか。

好きだと。

「ん？ そんなことわかつてるで」

「何が？」

「今、雑くん好きつて言つたやろ。そんなん少し前からなんとかわかつてたで」

えつ、どういうことだ。僕が何か言つたのか？ ちょっと待て、何がどうなつたのか全然理解が出来ない。崎野さんに思いを伝える度胸なんて僕にあるわけないじゃないか。

「雑くん今すつごい青いで」

顔が青ざめているつてことか？ いや、今はすゞく赤いだろ。といふことは青一才つて意味か？

「心の色がすつごい青くてあつたかい」

そうだった、崎野さんは人の感情を色に例える超能力を持つていたんだった。

「青はわかるとして色の表現に暖かいって何ですか？」

「コノカにはそう見えるんやからいいやんか。青くてあつたかい、あたしが一番好きな色」

つてことは……。

「答えはちょっと待つて、まだちょっとあれやから」

あれの意味はよくわからないけど、待つてくれと言つのならいつまででも待ちましょ。少なくともあと五年は待てる心構えでいますので。それ以上悩むてことはないよな、まさか。

崎野さんの様子を見るとなんとか落ち着いたようだ。僕の無意識の告白も良いのか悪いのかわからないが、それほど動搖させなかつたし。でもこのタイミングで言つのはなしだろ。

「ほなもう遅いし部屋に戻りますね」僕は立ち上がり玄関の方へ歩き出した。

「あつ、そやね」そう言つと崎野さんはジュースをすすりながら僕の後ろについて歩き「おやすみー。また明日なあ」と微笑みドアを閉めた。

閉じたドアから「トライウマを消す為に今回の任務はがんばらないと」と小さな声が聞こえた。

鍵を閉める音が廊下に響いたことを合図にして、僕は自分の部屋へ足を踏み出した。

色々な出来事があつた任務最終日が終わり、次の朝。僕は五時過ぎに起床した。

何でかと言つと、昨日部屋に戻つてからすぐに布団に潜り、眠りについた為、携帯電話のめざましを前日の、つまり任務の為に早起きする時間帯にセットしたままだつたからだ。すっかり忘れていたよ。

それにしても久しぶりに眠りが浅かつた。まさか鳥のさえずりで目が覚めるとは思つてもなかつたよ。もちろんそのあとすぐに一度寝体制に入つたけど、思つたように寝付けなかつた。

洗面所の鏡に写つた顔の目元にうつすらと黒いふちのよつな物が付いていた。あと一日も徹夜すればスラッガ - のような目元になるな。

さて、何をしようかと、延々繰り返される近畿地方の天気予報を見つめながら考えた。

やっぱ、することといえばあれしかないよな。昨日よりも少し時間が早いけど僕は制服に着替え、カバンを持ち、昨日思い残したことを片付けに向かった。

昨日と時間が違つたからか、電車の乗り換えや、快速電車などスマートに乗り換えて思ったよりも三〇分ほど早く着いた。

あと三〇分をどうやって時間つぶししようかと考えながら四番ホームに突つ立つていると、予想外の出来事が起きた。

これは好都合なのだろうけどなぜこの時間に？ 七時一九分ではなく。少し戸惑つたけど、僕はあの三〇分と同じように彼女を尾行した。ただ一つ違うのは命令ではないということだ。

彼女が昨日までと違つたところは時間だけではなくその行動もだつた。いつもなら売店や自販機にすら寄り道しないのに、今日は駅に隣接している地下街に向かつて歩いていた。

「どういう風の吹き回しだらう。こんな早朝に開いている店なんてあるわけないのに一体何が目的なのだろうか。

「の三日間で身に付けた尾行の技術で少女を追つて、少しでも尾行をしなければならなかつた理由を見つけようと思つていたけど、こりゃいい感じで事が進みすぎでちょっと怖いくらいだ。

「の調子で少女を追つていくと白い粉やワシンantonな取引などに遭遇できるかもしね。

上手く行きすぎて、出来事に鼻歌でも口ずさみたくなるような上機嫌だった。が、やはり世の中は甘い物ではない。

地下街を歩き始めて一五分が過ぎた頃、僕は少女を見失つた。少女は間違いなくトイレに入った。それは僕の目で確認したのだから間違いのないことだ。しかし、もつそろそろ一〇分経つぞ、女子つてこんなにトイレに時間がかかるのか？ 仕方ないあと一〇分待つか。

待つてども待てども少女はトイレから出でてくることはなく、やつと見失つたことに気が付いた。

そして昼休み。僕は那実と崎野さんを連れて中庭に来ていた。

「一体何の用やねん、昼休みは貴重やろ」

どうせお前の昼休みは寝て過ごすと七割方決まつてこるべせに。

「難くん返事はもうちょっと待つてて昨日言つたやろ」

その話はしないでください、もう思い返させないでください。

「訊きたいことがあるんや」の一人ならきっと知つていいだろ

う。

「僕の尾行相手は一体何者やねん、教えてくれ」

崎野さんはあからさまに困つた顔をして、「まかすよつて僕からの視線を外し、那実は腕を組んでから少し考え、まあいいか、と適当な物言いで話し始めた。

「俺らもよくわからんけどあの子は一年の普通科三組の眞瀬明菜まさえあきなっていう奴で、数学が学年トップっていうことしか知らんわ

学年トップ！？ この学校でトップってことは日本でもトップクラスのことになるぞ。あのちんちくりんがそんな数学力を持つていたとはかなり意外だ。

「それによく学校を遅刻したり早退したりするな

「僕が尾行してたときはきつちりと時間通り現れたで」

どういうことだ？ あの子は確かに、尾行一日目は日直の仕事をするためにすごい急いで学校に行ってたじゃないか。そんな子が遅刻や早退ってなんかすごく矛盾してないか？

「その顔は信じられへんって感じやな」

那実は少し驚いた顔をして、正門の方を指差した。

「ナイスタイミングやん、ほら真瀬が遅刻してきたで」

那実の指差す方向には、この四日間の登校中に追い続けた少女の姿があった。地下街で見失つてからあの子学校に行ってなかつたんだ。だとするとあの子は何をしていたんだ？ 朝から昼まで。

「ホンマにあいつ何者か知らん？ めっちゃ怪しくない？」

「そうか？ ただのサボリ魔としか思われへんけどな」

しばらく僕ら兄弟は少女を見つめていた。確かに見た目はただのチビなんだけど、何かすごく禍々あやあや（まがまが）しい出来事を持ちかけてきそうな雰囲気がするのだけれど。

「しゃあないな、俺がちょっと話しかけてくるわ

ちょっと待て、そんな大胆発言を僕は望んでいないぞ。と止めるまもなく、那実はなんの躊躇ちうちょもなく少女に近づいた。そしてその第一声が最悪だった。

「こんなところに小学生が入つてきてはダメでしょ？ お嬢ちゃんは年といつなの、どう考へても一一歳か一二歳にしか見えないよ

おい、背の小さい奴に向かってそれは言つちやダメだろ！ 小学生はいいすぎだ、せめて中学生にしろ。

「あんた誰？ アホ？ 制服見てわからんの？ そんな観察力で今までよく生きれたな」

そう言って立ち去るのかと思ったのだが、少女は那実の顔をじっと見つめ、「あんたどつかで見た気がするんやけど気のせい?」「やばい、やつぱりこの四日間で顔くらいは覚えられていたか。どうするんだ那実? こんな危機を迎えたのはお前の好奇心という名の自業自得からだぞ。

「いや、自分がわいいなと思って。電車つておっさんばっかりやろ? だから目の保養に」
させてもらつたねん」

あいつアホか! そんなこと言つて話しかけてくれる奴がどこにいる、ほら真瀬さんも顔を赤くして伏目がちに歩いていくじゃないか、しかもすごい不機嫌そうだし。それに一番重要なのは真瀬さんが那実を僕と勘違いしていることだ。

本当に那実はアホですね、なあ崎野さん。と言おうと崎野さんの方へ振り向くと、彼女はうずくまり、両手で顔を覆つて小さなうめき声を上げていた。もしかして那実の行動が笑いのツボに入ったのか? 僕はどこにも面白さを感じなかつたんだけど。と思いたいところだけど実際は違うよな。

「どうしたん? 崎野さん」訊かなくてもわかつてゐるだろ? 例の発作だよアホ。

崎野さんは酸素を多量に求めるよつて深く短い呼吸をしながら、「目を見せて」と言つた。

僕は少し戸惑いながらもうずくまる彼女に視線を合わせるために屈み見つめた。

すると次第に呼吸の荒さがなくなつていき、崎野さんに付きまとつていた沈鬱感も消えていった。もう大丈夫かな?

僕は確認するためにあえてあの言葉を口にし、崎野さんがあの言葉を発することを願つた。

「崎野さんジュースいる?」

「う、うん。ほなグレープフルーツお願ひ」

よかつた、もう大丈夫そうだ。そんな笑顔を向けられると果汁三

○%を一〇〇%にしたくなつてくるじゃないか、つて意味不明だよな。でもそれくらいうれしいんだよ、僕は。

自販機に行くためにその場から離れた僕に、那実はついてきて、戸惑いながらでもうれしそうに言った。

「まさか薬なしで発作を治すとは、お前もなかなか役に立つやないか、やっぱり気持ちが大事やろ」

確かにそうだけど、あれも大事なんじやないか？ 那実、僕らに持つていられない能力。奇跡の産物とも言おうか？

「そうやな。でも、まさか死にかけるとは思つてなかつたよ」と今更のことだけ思い出してしまう、噴出して笑ってしまった。

それにしてまさつきの場面のどこにトライウマが潜んでいたのだろう？ まさか那実の発言や行動に何か問題でもあつたのだろうか、やっぱりこいつは要注意人物だ。

そして放課後、僕は正門をじつと見つめ、中庭の木陰で息を潜ませていた。

そんな面倒なことをする理由は一つしかないだろう？ 真瀬明菜の尾行だ。やっぱりどう考へてもあの子は怪しい。それは昼休みで確信が持てた。明らかに崎野さんと那実は隠し事をしているやつた。先見である僕の感が外れることははずがないだろうと、じついうときだけは自分の超能力を信じてみた。

その木陰にたたずみ三〇分が経過し、もしかして部活動しているのかもしれない可能性を思いつき、僕は校内を周ろうとひとまずその場を離れようと体を校舎のほうに向けた。

すると尾行初日と同じように颯爽と校舎から歩いてくる少女が見えた。あの身長、短い足をせわしなく動かす姿。真瀬明菜しかいない。

僕は待つてましたといわんばかりの気持ちを抑え、ばれないようにそつと陽の射すほうへ歩き出した。

夕暮れ近い京都の町並みは、慌しない夜の前の静けさのようにはやかで、陽の光も人の動きも緩やかに思えた。そんな中、異常と思える速さで僕は歩いていた。その原因は言わずもがな眞瀬明菜ませあきなだ。あの小学校高学年と間違われそうなスタイルから、どうすればそんなに早く歩くことができるんだ？ もう走った方が楽な気がする。歩くつて結構疲れるんだな。

京都駅に入つてもその速度は緩むことなくさらに速くなつていた。そろそろ休憩させてくれと思つたくらいにちょうどホームに着き、僕は設置されている椅子に座り電車を待つた。眞瀬明菜は四番ホームに突つ立つたまま電車を待つた。

思つていたより電車内には人が少なく、今日の昼、一度顔を合わせていることになつてるのでいっぱいのんじやないかとドキドキしていたが、結局そういう雰囲気すらなく、事なきを得て難波駅に着くことができた。

改札を抜けると眞瀬と僕は地下街を抜け、大手電器店の連絡通路に着いた。

さらにビル街の奥へ入つていくとだんだん道は狭くなり、人がすれ違えるかギリギリの幅にまでなつた。

一体どこに行くんだ？ こんな怪しい場所僕だったら絶対一人で来れないぞ。いかにも背中に絵画を背負つたような人達がうるうろしていそうな場所じやないか。

そして眞瀬は右折したところで消えた。

これだけビルが入り組んだ場所だから見失つて当たり前か、それに空ももうオレンジ色だし仕方ない、帰るか。

そう思い、来た道を戻ろうとすると、背中の方で声がした。

「おい」

僕は無視して走り去ればいいものの思わず振り向いてしまつた。

そこには一〇代前半の男性が立っていた。すぐダサい格好で。僕は思わず笑つてしまいそうだった。

下はどこのメーカーかもわからない学校指定のジャージのようなもの、上には大阪のおばちゃんでも着ないような大きな虎のイラストが描かれたシャツを着ていた。

変な奴にあつてしまつた、ここは走つて逃げるしかないと考えたけど、こんな服装で外を出歩く奴の顔が見てみたいと思い、思わずそいつの顔を見てしまつた。

それが間違ひだつた。

僕は彼と視線を合わした。しかし合わない。これは彼が僕を見ていらないわけじやなく、彼ももちろん僕と目を合わしている。しかしそこに人と人と、いや人と動物が目を合わせたときの暖かさというものが存在しなかつた。

「お前一体何者や」立ち去るつもりだつたけれど咄嗟に出た言葉がそれだつた。

何者だ？ つてどう考えたつて人間だらう、その姿かたちを見てそれ以外の生物の名を上げたほうが拍手だ。

「お前こそ何者だ」質問に答えるよこいつ。

「ちよつと道に迷つてしまつ

」

「違う、そういうことを訊いてるんじゃない。……お前、人間じやないだろう」

はあ？ 何言つてんだこいつ、どつからどつ見ても僕は人間じやないか。それはお前に返したい言葉だよ。

「僕は人間や。あんたこそこんなとこで何してんねん。関西弁と違うからこの辺の人と違うやろ？ 東京からきたんか？ それとも韓国？ 中国？ 道に迷つたなら駅まで案内したるけど

「私は異星人だ。そしてお前は人間ではない。改めて気付いた」やばい、観光客じやなくて宗教関係だつたか。

「その瞳の色は間違いなく人類のものとは違う。そういう人間を私は一体ほど見かけたことがある、お前と同じ服装をしていた」

「何を言つてゐるのか全くさっぱりなんですけど」

「そうか？ 私にはお前が異質だとはつきりとわかるが」「僕から見てもあんたは異質だとはつきりとわかるよ、そんな虎

の服どこで買つたんや？」

「これは私の意志ではない。彼の意思だ、欲しいのなら分けてやるつか」

「いるか！ ここに感情を読み取ることができないのか？ 嫌味だといふこともわからないのか？ このまま嫌味を言い続け、気分を害させて立ち去らせようとしたのだけれど、困った、どうやって逃げ出せやう。

彼はいきなり顔をキヨロキヨロと首を右へ左へ九〇度回し、微笑みながら、

「残念だ。邪魔が入つた。まだどこか出会おう、私達と最も近しき存在」と言つて路地を走つていった。

邪魔つてなんだよ、それにあいつと僕が近い存在？ 最近の宗教勧誘はああいう捨て台詞を吐くのか？ にしてもあいつ全然口から発する言葉と表情が一致しなかつたな。

世の中には変な奴がいるものだと思い耽つて、角を右に曲がるとまた声をかけられた。

次は一体誰だ？ 宗教の次は占い師か？

「探したで、うちが二人になれる場所に案内したつて言つのにどこ行つてたん？」

最悪だ、さつきの宗教勧誘の男よりも会いたくない奴が現れた。

「どちらをまでしたつけ？」

腕を組み、不機嫌そうな表情をして横田で見る眞瀬明菜はどこか堂々としていた。

「四日間も付きまとつてどちら様もなによ？ それに昼も会つたやんか」

「いや、あれば僕じゃなくつて」

「わかつてゐるよ、あんたじやなにつて」とくら一

何だよかつた、僕じゃなくって那実がやつたってわかってくれていたんだ。つておい、何か今、僕の最近の努力を無価値にするようなこと言わなかつたか？

「ちょっと待つて」

「何よ、人が機嫌よく喋つてゐるのに」

何だ、機嫌よかつたのか？ じゃあ、その田つきの悪さは生まれつきつてことか。そんなことよりも、「今、四日間付きまとつてるとか何とか言わんかつた？」

「めでたいあなたも。ほな、なんや自分？ 尾行ばれてへんと思つたん？」

僕が小さく首を縦に振ると、眞瀬は「鉄板や！」と言つて引き笑いをしながら大きく手を叩いて喜んだ。こいつ僕がどれだけ傷付いているかわかつてないだろ。

「もうひとつ質問やけど、何で僕、僕と違つてわかつてゐるのにあんな真似したん？」

「あんたがどんな顔するかちょっと氣になつてな。それも面白かつたで、鉄板までは行かんけど」

てことは、この四日間まんまと僕は眞瀬明菜の手の平の上に転がされていたつてことか。見た目もそうだけどやることもいけ好かない奴だ。

「どの辺で僕が尾行してて気付いた？」

「うん！？ うち早く歩いたり遅く歩いたりしてたやろ？ それにもんまとあわせてついて来るなんて」

「日直じやなかつたん？」僕は自分の推測違いに驚き、思わず声を大きくしてしまつた。その声に少し驚き眞瀬は体を少しビクッとさせたが、すぐに堂々とした姿勢と瞳で僕を睨んだ。

「はあ？ うちがそんなことするわけないやん面倒くさい。てが、余りにもバレバレすぎて拍子抜けしたわ。つてあんた、もしかしておとりやないやろうな」

おとり？ 何のだ？

「実はひひの予測やけど、あんた以外にもつりを付けてる奴があるねん」

「自意識過剰と違うんか?」

「アホか! それよりあんた誰に命令されてこんな面倒くさいことやってたん?」

「沖田先生」

つて言つたらダメじやないか僕。これは組織の任務だつたのに。任務中にはられるならまだしも、全くのプライベートだし、自分の勝手で行なつたことじやないか。どうしよ……。

「あいつね……」としばらく僕とその斜め上辺りを交互に見つめながら難しい顔をして、いじらしく「ヤツと笑うと「そういうことか」と言い、今度は斜め上の幻像を見るのをやめ、僕だけを見て、「ほなまた明日」と言つて駆け出していく。

あいつは一体何をしたかつたんだろう?

つておい、置いていくなよ、僕は適当にお前について来ただけだから全く道がわからないんだぞ、空もほとんど陽を灯していないし。結局僕は大阪のビル街を一時間ほど迷い、寮に着いてからは帰りが遅いと耳が機能停止をするほど叱られた。

散々な一日だった。どこが一二星座中七位だ、ここ最近で最悪だつたじやないか。つてことはこの埋め合わせに同じ星座の奴が得をしているつてことか?

そう考えるとイライラして寝付けず、それをなだめるため、あの異星人とかアホなことを言つていた宗教勧誘の奴の虎のシャツのイラストを思い出しながら眠りに付いた。

やつぱり最後まで最悪だ。

その33 四日目の異星人（後書き）

第5章終わりです。ここまでお疲れ様でした。
つぎはいよいよ最終章です。

その34 真瀬明菜の事情

大阪のビル街でさよつた翌日、とっくに朝のホームルームも終わり、一時間目が始まる時間だつて、いつのに僕は職員室の隣、例の部屋へ沖田先生に呼び出されていた。

校内放送があつたのは朝礼前の予鈴が鳴つたくらいだつた、スピーカーから鬱陶しいくらいはつらつとした沖田先生の声が聞こえてきた。

「一年生で特別寮に住んでいる人は早く私のところに来てください。すなわち、天照さんと那実くんとコノカつちと……えつとえつと、あつそうだ雑くん！ 雜くん雑くん。その四人は職員室の私のところに来てね」

ツツコミ担当が何人必要なのか指折りして数えなければならないような、馬鹿放送の指示を受けて僕ら四人は職員室ではなく、もちろんその隣の部屋へ向かつた。

「雑くん忘れられてたなあ」

そうですね、あまり言わないで下さい、結構ショックですから。崎野さんは僕の非常に奇天烈なタイミングで放たれた告白を気にすることなく、いつもと何の変わりもなく会話をしてくれている、ありがたいことだ。もしかしてこういうことに慣れているのかもしれないなんていう考えは今すぐ捨てろ、僕。

対照的に僕の方は告白から二日経つたというのに会話は出来ても目を見ることはあまり出来ないでいる。情けない限りだ。

「やっぱりお前つて影薄いねんな」

「やっぱりてなんや！ 誰が影薄いねん、濃いつちゅうねん、めちゃめちゃ濃いつちゅうねん。保健委員なめんなよ」

「ほら、保健委員やつて影うすつ！ 図書委員と双璧をなすぞお

前

「今すぐ保健委員をやつてる人間に謝れ」

中には将来介護や医療の仕事に就く為の勉強としてやっている人もいるかもしないのに何てことを言つんだ、ここにはやつぱり失礼極まりない。

「天照沙希も思つやろ？ 雜は影薄いつて」

僕らの前をスタッフと先を行く天照からは、話しかけてくるなどいうオーラが惜しみもなく振りまかれている。空気を読めないという言葉と那実、つまり僕の兄は同意語である。

「いいじやない。影が薄いと言つことはそれだけ他人から求められていないと言つことでしょう？ なら恨みを買うこと売ることもない。実にうらやましいわ」

それは褒めているのか？ そんなわけないよな。自分の存在感を棚に上げてアホにしゃがつて、こいつ奴は絶対良い死に方しないんだ、そうじやないと世の中不公平すぎる。

でもこいつに限つては良い死に方も悪い死に方も関係ないとかいそうだから全く張り合いがない。

サバイバルナイフで斬り付けるような言葉を吐いた天照は、職員室の隣の部屋の扉を開いた。

「来たわね、おっはよー。遅いからもう一度放送しようかと思つちやつたよ」

語尾に八分音符が飛び交うような明るい声で沖田先生は朝の挨拶をした。もう一度放送なんて絶対にやめてくれよ、あんたならもう一度やつても僕の名前を忘れそだからな。

その若年痴呆症教師の隣を見ると、昨日僕をコンクリートジャングルに置き去りにした団子頭が座つていた。この二人何の関係？ それに僕らに用つて何なんだ？

「この子は一年五組の眞瀬さん。ねえねえマセマセつて呼んでもいい？ ダメ？ ならいいわよ。まちやあきは」

「まちやあきつて何やの？ それも嫌！」 すかさず眞瀬のツツコミが飛ぶ。よつぽど嫌なんだなそこまで勢い良く突つ込むつてことは。

「てふてふみたいに眞瀬明菜を言つたらこつなるのに……。本人が嫌がつちゃ仕方ないわね。このマセマセの両親を助けてほしいの」そう言つて沖田先生は、かばんからA4サイズで印刷された二〇枚ほどあるプリントを取り出し、クリップでまとめ僕らに一部ずつ配つた。

その書類の一番最初には、親指程の大きさの字で「眞瀬家救出計画」と書かれていた。

眞瀬明菜の親が兄弟に何があつたのか？ そうだとしても何故僕らがこいつの親を助けなくちゃいけないんだ？ つておい、お前らもなんとか言いやがれ、書類を読んで『なるほど』何て言つてる場合じゃないぞ。

そこである異変に気付いた。

「崎野さんどこいったん？」この教室に着くまで一々口一々口しながら僕らの後ろを着いて歩いていたのに。

「心花やつたら教室に入る前に『トイレ言つてくる』って行つたで」教えてくれるのはいいが崎野さんの声真似をするのはやめてくれ、そういう似ていらない物真似を平然と出来るのが大阪人の悪い癖だぞ。それに気色悪すぎる。

崎野さんはトイレか……。そついえば昨日の発作が起きたときも眞瀬がいたよな、もしかしてこの一人は因縁の仲とかそう言つ類のものなのか？

「ちょっと聞いてる！ 雉くん」

「あつ、聞いてなかつたです」今はそれどころじゃないつてのに、まあいい、あとで崎野さんか眞瀬に訊けばいいことか。

「しつかりしてよね、もう一回言つわよ。いちいち言つの疲れるし時間かかるから、日曜日のことはその紙束に書いたからちゃんと頭に入れておいてね。わかつた？」

「はい、わかりました」

「じゃ、解散！ さつさと授業に戻りなさい若人よ」「自分から呼んでおいてその言い方は非道だろ。

そう言つて立ち上がつた沖田先生に対し、那実は思い出したというような顔をして、「かおるちゃんつて一時間目七組で授業ちゃうかつた?」

「こちらも口元を押さえ思い出したという顔をして、「忘れてた、じゃねー」と勢い良く教室を飛び出していった。

朝からこのハイテンションと、どたばたした雰囲気に僕は少し疲れ、伸びをして、さあ眞瀬に事情を訊こうかと正面を向くと、そこには誰もいなかつた。慌てて教室中を見渡すが那実や天照でさえいない。あいつら鍵閉め嫌だからつて先に教室へ戻りやがつて。

この教室には人情を持った人間がいないことを改めて思い知られた。

そして昼休み。僕は弁当を片手に持ち、一年五組の教室に來ていた。もちろん理由は眞瀬と話をするためだ。教室の入り口付近をふらふらしていると後ろから声をかけられた。

「こんなどこで何してんの? 伊佐羅」

「お前を待つてたんや、眞瀬明菜」

「あんた飯食つた?」

「いや、ほれ」僕は右手に持つていた弁当を彼女の目の前に差し出した。

「うちも弁当持つてくるからちょっと待つて」

そう言つて彼女は教室に入つて、自分の席に座り弁当を取り出した。すると三人ほどの女子が眞瀬を取り囲み何やら話を始めた。

「明菜どこで」「飯食べるの?」

「ごめん、今日は連れがあるから」と言つて眞瀬は僕を指差した。

「もしかして彼氏?」

「そんなわけないやん、あんな気の抜けた顔の奴」

その女子達の反論を待つたが「だよねー」などという声しか聞こえてこなかつた。メガネと化粧の濃い女と異常にエクステをつけた女、僕はお前たち三人の顔を一生忘れないだろう。

「ほな、行こか」

「お前のせいです」く飯が不味くなりそうだけどな」

「ふーん、ほな食べらんかつたりええやん」

「いっは本当に人をイライラさせる」といふ顔でいふ。呼び出しだ方は僕なのだから何も文句を言えない、それを逆手にとつて言いたい放題言いやがつて。自分の娘がこう育つてしまつたら、間違いなく家にいる時間は減るだろうな。

そして僕らは体育館裏で食事をすることになった。薄暗く人気のないところでの食事なんて好んでする奴はいないので、昼休みでもここは誰もいない。

中庭で食事することも初めは考えたが、昼休みに男女一人で食事するなんてなると、馬鹿な高校生なら喜んでよりもしない噂を流すだろう。崎野さんとの噂なら僕も全然かまわないけど、こいつとの間に噂が立つことは我慢ならない。それは眞瀬の方も同意の上だつた。なのでこいつも、飯の皿さが半減するよつた場所で朝食をとることに文句を言わなかつた。

「で、話つてなんなん?」

「お前の両親に何があつたねん? 沖田先生からもうつたプリントにはそういうことは一切かかれてなかつたからな」

書かれていたことは日曜日に誰が何を担当するかと書つことだけだ、それ以外の詳細なことについては全く書かれていなかつた。

眞瀬は弁当箱を開き「い、い、い」とやと言つて、弁当の中を見せた。

そこにはただ、トマトが一玉入つていた。白米すら入つていない。トマト弁当?

「どういふことだこれは。家が農家? 両親が喧嘩中? はたまた親子喧嘩? これだけだと深すぎて何もわからない。」

困つた顔をしている僕を見つめ、浅いため息をつき、今まで見せたことのない哀しい表情をしながら言葉を続けた。

「うちのお父さん最近リストラにあつてな、そこまでやつたらそ

んなに困らんかったんやけど、うちのお父さんちよつと頑固つて言うかなんていうか、自分の力不足で会社をクビになつたつて信じられへんかつてん」

「能力以外でクビになる理由なんて年齢くらいだろ？ それ以外は？」

「うちのお父さんはまだ四〇代入つたばつかりやから年齢は関係ないと思つ。話は飛んだけど、うちのお父さんはリストラの理由を守護霊のせいやとか悪い悪霊に憑かれてるとかそういう風に考えたねん」

あちやー、最悪のパターンだ。気持ちはわかるけど。で、それで金がなくなつたつてことは、

「靈感商法つて言うんかな？ 電話帳でそういうところ調べて、家族で行つたんやけどな。初めて行つたときはそんなに高くなかつたねん、しかも御札もタダでくれたし。それでうちのお父さんも調子乗つたんかわからんけど、体調が悪くなつたとか、今年から花粉症になつたとか、そんな理由でもそういうとこに通い始めて」

靈と花粉症がどう関係するのか、是非お前の父親と語り合いたいところだ。

「拳句の果てに靴の紐が切れたとか黒猫を見た、くらいのことでも通い始めて。そういうしてて内にお母さんもはまりだして。そうなつたらもう誰も家計をセーブできへんなつて……。今、家の中にはようわからん掛け軸みたいな家系図とか、ありきたりなでつかい壺とかお経とかそういうのだらけになつてもうて、今はその借金でいつぱいや」

たまにテレビとかでそういう事件を見たことがあつたけど、それは演出か何かで決して本当の出来事ではないと思つていたけど、実際にこれほどまで見事に騙された人がいるなんて思つてもなかつたよ。やはり人は追い込まれると怖いな。

「それを僕ら四人が助けるつてことか」

そんな洗脳されきつた大人を子供四人が救えるのかちよつと不安

だし、身の危険も考えなければいけないな。靈なんかいない、なんて言つて逆上され、サクッと刺されるなんて、可能性としてすごい高いだろ？特に那実なんかそういうこと何も考えずに言つてそうだな。

「頼む、お願いします。この通り」

眞瀬はそういうながら弁当を膝元からのけで、土下座をした。こきなりの行動に僕は驚き、どう答えればいいのか戸惑つていると、眞瀬は何を勘違いしたのか涙を流しながら、身の上話を続けた。

「このままやつたらうちの妹の弁当もこうなつてまうねん」「妹……。それは僕にとって、僕ら兄弟にとって現実に限りなく近い夢のような存在だ。

「妹の弁当はまだトマトやないんか？」

「当たり前やろー。せやからうちの弁当が質素なんや。いやいや、質素とかそういうレベルじゃないだろ？ その弁当は、ギヤグ漫画でも出てこないぞ。

「こんな弁当持つて行つたらあの子も、うらみみたいに友達減つていくねん」

「どうこうことだ？」

なぜ弁当がトマトだけだと友人が減るんだ？ 逆に面白い奴がいるぞつて寄つてきそうなものだけだな

「男やつたら面白いですむやろ？ けど、女やつたらそういうかんのや。だいたいトマト入つた弁当食べる奴と一緒にお昼食べたいと思つ？」

そんなこと思う女がいれば僕はそいつを禁めるね。

「やあ…だからうちも最近はこそりとつて昼休みに抜け出して、ひとりで弁当食つてんねん。最近は付き合つて悪いつて言われてしんじいねん」

「でもお前さつと昼飯一緒にどうへ。みたいなこといわれてなかつた？」「…

しつかり覚えている。あのメガネと化粧とエクステだ。憎い、憎

すぐさるトリオだ。

「あーあいつら、最悪やねん。あれは嫌味」

「嫌味？」

「そう、あのメガネかけた子おつたやろ？ あの子がうちのトマト弁当叩きしたねん。それからああやつて三人で昼時になつたら一緒に食べへんつて言つてくるねん」

なんて性根の腐つた奴なんだ。あんな大人しそうな顔してるので、人間なんて見た目でわからないものだなやつぱり、天照や沖田先生みたいに。

「ホンマにお願い！ うちのことはどうなつてもええねん。ただ、親は、いや、妹だけでも普通に生きて欲しいねん。このままやつたらあの子中卒やねん」

中卒はちょっとかわいそうだな。僕のような高校生活を送るならまだしも、普通の高校生になるなら助けてあげたいところだ。

それに、国を守るとかそういう大きすぎる問題じやないから、僕のようないふ凡々な人間にはこいついう任務はもつてこいかもしれない。やつてやるうじやないか、お前の家族を救つてやるよ。僕らの家族のように不幸になるなんて耐えられないしな。

「ところで、お前、僕らが何者か知つてるん？」

「ん？ あんたらの親つて坊さんとか靈能力者なんやろ？ その人達に来てもらつて洗脳を解くつて沖田が言つてたで」

そういうことになつてるのか。あの先生の考え方なんだ。

「わかった、できるところまでやつてみる」

僕が自信満々に言つと、眞瀬は涙を拭つて姿勢を崩し、僕の隣に座つて、大きな口を開き豪快にトマトをかじり、涙交じりでありがとうと呟いた。

何だ、愛想が悪かつたり口が悪かつたりしたけど、その身長と一緒にくらいかわいらしいし、素直なところもあるんじやないか。そう思つたのも束の間。

「あつ、その出汁巻きつまそつ！ ちょっともううな」と言つて、

僕の出汁巻きに箸を伸ばし、すばやく奪い去り小さな口へ押し込まれた。

「ところでお前崎野さんと何の関係？」

眞瀬はリストのように、出汁巻きを頬に蓄え、「そんな奴知らんで」と言つてから慌てて口に入つたものを飲み込んだ。

「まあー、もう一個頂戴！」

「誰がやるか、アホ！ 調子乗るなー！」

やっぱりいけ好かない奴だ。

その35 天照沙希の願い

そして土曜日、僕は一日の半分を寝て過ぐした、これは惰眠を貪つていたわけではなく、ちゃんと沖田先生が書いた書類に書かれていた命令だ。

一番最初のページ大きく『明日は深夜行動となるので惰眠を貪るよう』に、最低でも八時間は眠れ』と書かれていた。

といふことはやはり僕の一二時間睡眠は惰眠だつたつてことか。そりやそうか、朝飯はもちろん、昼飯も食わず、ボーッと新喜劇を見ている僕を、惰眠を貪ると言わずなんというのだろう。しかしあれだけ眠つたというのにまた眠気が……。

僕は部屋の呼び出し音で目を覚ました。

時間を確かめるためにカーテンから外を眺めると、うつすりと暗い。何時間寝てたんだ僕は？

呼び鈴も一度や一度鳴るくらいなら居留守でもしようかと思ったが、指で数え切れないほど鳴るから、何か騒動が起きたのではないかと思い、心は慌てているが、体は眠つたままなのでやらりのうりと寝癖のついた髪を搔きながら扉を開けた。

「あら、睡眠中だつたの？ ちょっと失礼するわ

僕の返事を待たず、勝手に上がりこんだのは自由三昧といつ葉がもつとも当てはまる女だ。

「珍しいな、お前から僕の部屋に来るなんて」

「あなたからあたしの部屋に来ることが今まであつたかしない命に関わる出来事が起きても行くかどうか迷つてしまつた、お前の部屋なら。

「で、話つてなんや」

天照は僕の部屋を見渡し、「新聞は？」と訊いてきた。

「ないよ

「じゃ、ニュースは見た？」

「新喜劇やつたら見たで」

僕の言葉を無視して、そばにあつたテレビのリモコンを持ち、電源を入れ、民間放送からに国営放送にチャンネルを変えた。

「この放送局ならもうすぐニュースくらいやるでしょう」

天照の予想も空しく、三〇分後にやつて「ニュース番組が放送された。

綺麗で可愛い女性のニュースキャスターではなく、いかにも有名大学卒業ですと云う雰囲気の男性がニュースを読み上げる。こういうところを見ていると国営放送だつて気付かれる。

「今日の午前一時くらいに沖縄県でアメリカ兵同士による暴行事件が起きました、死者は出ておらず」

僕はニュースを見ることをやめ、天照に事情を聞くことにした。

「これがどうしたんや?」

「あなた今、一年生がどこにいるか知ってる?」

「……沖縄だ。でも事件が起きたのは深夜のこと、修学旅行生とは何の関係もないんじゃない?」

「この事件を起こさせたのは間違いなく組織の一年生と、本居よ「そんなことができるのか?」

「超能力を使えるのよ? これくらい容易いことじょうね、しかも六人もいるんだから尚更よ。せうて言えば本居もいる、あいつは相当頭が切れるから」

確かにあの先生は頭が切れそうだ。いかにも数学教師つて雰囲気がするけど、実は社会担当なんてところがさらにそう思わせる。

でも、何でアメリカ兵にそんなことをさせる必要があるんだ?

「近年、沖縄ではアメリカ兵による事件が多発してるでしょ、その警告じゃないかしら。初めはジャブ程度にしておいて、次やればストレートを放つ。そういうこと」

いわゆる脅しつてやつだな。世界一の軍事力を持つアメリカに何てことするんだうちの組織は、国専用の警察、その言葉の意味を考えさせられるよ。

「でもずいぶん危険なことをするんやな」

「そうね、確かにその通りよ。だからあなたの部屋に来たわけ」いやいや、『だから』の意味がさっぱりわからないんだけど。

僕が訳がわからないという顔をしてると、天照はさつきまで視線を不安定にさせていたのに、急に僕の眼を見て話した。その顔は決意に満ちている。そんな気がした。

「あたしと仲間になつてくれない？」

「そういう意味じゃなくて、この組織とは別の一人だけのチームいきなりなんてことを聞くんだこいつは？ それに今でも一応は仲間だる。

「そういう意味じゃなくて、この組織とは別の一人だけのチームよ

「何でお前と二人だけのチームといつのを組まなあかんねん。僕は面倒なのは嫌いや」

お前と一人で行動するなんて考えるだけでも身震いがしてくる。恐怖だ、これなら靈山にひとり置き去りにされたほうがまだマシだ。

「お願い。あたしはただ、これ以上、組織の人間を失いたくないの」

「どういう意味だ？」

「あなたはまだこの組織に入つて間もないからわからないでしょうけど、これくらいは知つてはいるでしょ？ この組織に属していた人間の中でこの学校を卒業した人間が一人しかいないことを」

そんなこと初耳だぞ、なんだよそれ。ということはこの学校の七不思議であつた、特別能力開発科の生徒が毎年いなくなるつてのは本当だつたつてことか。

「その顔だと知らなかつたよつね。これは本当の話よ、この組織にいる人間はほとんど狂つてるようなものだからそういう死に値する出来事でも平氣でできてしまつのよ。まるで戦時中の特攻隊のようなものね」

「狂つてるつてどういふことだ？」

「宗教よ」

宗教。そのいかにも怪しい響きに僕は戸惑つた。いつたいこの組織と宗教に何が関係するんだ？

「一年生や二年生はどつぶりその世界に浸かってしまつてゐるわ。人をコントロールする手つ取り早い方法は、その人間の心に神を与えることよ。あたし達が属する学科には過去のトラウマを持った人ばかりよね。それはもちろん、あたしもあなたも含め。そういう人間はもう心にガタがきて、ひどいことが自分の周りに起きてしまつと精神崩壊に近い状態に陥るの」

「『そういうこと』とは例えば？」

「例えも何も必要ないわ。ただ一つ、友人や仲間を失うことよ」

その言葉に言葉を失つた。

呆然とする僕のことを気にせず天照は続ける。

「失い傷付いた心に宗教の教えを説くのよ。そうすればもうその教えから抜け出すことは難しいわね」

「その宗教つて有名なん？」

「信者の数は日本国民の六%と言われてゐるわ。名を『大和神道教』聞いたことくらいあるでしょ？」

聞いたことも何も、たまにテレビでも取り上げられる新興宗教じゃないか。芸能人やスポーツ選手からも信仰者が多く、この国じや誰しも名前くらいなら知つてゐるだろう。それに京都で行われる世界的に有名な花火大会『大和花火の祭典』もその宗教が主催だと聞いたことがある。

「日本国民の六%つて何人や……」

「約七一〇万人よ」

「埼玉県の人口くらいいるのか！？」

「暗算は出来ないのにそういうことは知つてゐるのね。確かに数にしてみると多いわね」

「そうなのか……、埼玉県と言えば日本でも五番目の人口数だぞ。そんなに多いのか。それに六%ということはクラスに約一人程いる計算になるのか。そう考えるとびっくりだな。ということはクラス

に一人は埼玉県民がいるつてことか？

そんなわけないか、と視線を天照の方に向けるとすこい形相で睨んでいた。今にも殴り回して無理矢理にでも仲間にするという顔だ。

「あたしは真剣に言つてゐるのよ、しつかり聞いてくれる？」

「何で僕なんだ？ 別に那実でも崎野さんでもええやんか」

「まず第一にあなたの能力よ、予知能力を駆使すればみんなを救えるかも知れないわ」

また超能力かよ。そんなものに頼つてたらいい大人にならないぞ。便利なものに頼つていてはダメなんだよ。どこかの猫型ロボットに甘えた少年は例外つてことを、この年になつても気付かないのか？

「それにあなたの能力は特別だから、組織も必死であなたのことを見守ると思うの」

何だよ、やつぱり超能力関係かよ。守られているから危険なことをしても大丈夫だというのか？ なら命綱をつけて東京タワーに上れるか？ 絶対無理だろ。理論上は大丈夫としてもそんな危険なことをする勇気など僕には持ち合わせていない。

「あなたは信じるものがない、そしてこれからもきっとそうなはず。だから宗教にも関係しないと思うの。それに、その超能力を身につけた理由、それがあなたを仲間にしたい一番の理由よ」
「未来を見たいと思つた理由。

そんなこと誰だつて思つてるだろ？ 那実は未来なんかわかつてしまつて死んでしまうと言つた。けれど僕はそうではないと思うた。それが理由か？ そういうことではないような気がするけど。

「わからないつて顔ね。返事はこの任務が終わつてからでいいから。よい結果を祈つてるわ」

天照はそういうと立ち上がり、静かに歩き玄関に行くと、振り向いて僕の顔を見つめ「あなたとあたしならきっと救えると思うの。みんなの傷ついた心も、みんなの身の危険も。そのことを考えて」

それじゃ、と天照はドアノブに手をかけた。部屋から出て行こう

とする天照に僕は思わず聞いてしまった。

「天照さんは宇宙人なんていると思う?」一昨日のことが何故だかずっと頭から離れない。

そんな突拍子もない質問に天照は面倒くさそうな顔もせず、真剣なまなざしで、「さあ、でも宇宙が本当に広大なら可能性はあるかもね」それだけ言って部屋に戻つていった。

最後の会話は必要かどうか分からぬけど、あいつから頼み「」とをされるなんて、生きている間にあると思つてもなかつたよ。でもこれから任務だというのに迷わせてどうするんだ?

身を挺してみんなを守るか、挺さずに自分の身を守るか。

みんなを守りたいのはやまやまだけど、さつきの「ユースを見る限りこの組織はすごく危険なかもしねない。平然とアメリカに喧嘩を売るような組織だぞ、といつかあの行為はどちらかといふとテロ行為に近いように思う。そんな危険な立場に置かれ、自分ではなく他人を守る余裕などあるだろ? はつきり言って自信がない。きっと自分のことでいっぱいいっぱいだろ。

日常さえ、いっぱいいっぱいで生きているのに、そんな状況に置かれれば自分を守ることもままならないだろ。すまないが天照、この話は断らせてもらつ。僕はまだ死にたくないのだ。

思つていた以上に考え込んでいたのか、時計を見ると十一時を回つていた。確か集合は十一時に裏門だったよな。僕は若干慌てて出発の準備を始めた。

集合時間五分前に裏門に着くと、みんなはもう沖田先生の乗用車に乗り込んでいた。

「雍くん、ギリギリじゃない。早くしないと間に合わないから」と沖田先生は運転席の窓から上半身を乗り出し、手招きをした。慌てて車に飛び乗る。助手席には天照、後部席の左には崎野さん、中央は那実、そして右に僕は座つた。

僕が席に着いたことを確認すると、沖田先生は勢いよくアクセル

を踏み、それによりエンジン音はけたましい音を上げ、遠慮なく深夜の静寂を包んだ。こりや地域住民から通報されても文句は言えないな。

僕たちは京都の右京区にある、嵯峨トンネルへ向かっている。

そこは近畿地方でも有名な心霊スポットで、色々な噂がある。例えはトンネルの手前にある信号が青だと女性の靈がボンネットに落ちてくるとか、トンネルから黄泉の世界につながっているとか。あとトンネルを越えたところにあるカーブミラーに自分の姿が映らなければ、帰りは事故に遭うとか……。

なぜそういう噂が多いかと言つと、そのトンネルの上には江戸時代の頃、首切り場、いわゆる罪人の処刑場があつたらしい。

……考えると鳥肌が立つてきた。

「よう知つてゐるな雑くん

そりやうですよ。インターネットを駆使して色々情報を集めましたから。

「雑はビビリやのにそつこいつの好きやもんな

ビビリは余計だ。でも好きなことは確かだ、そつこいつ心霊スポットとかは。でも何だかちょっとのどが渴いてきたぞ、これは緊張の表れか？ 体も少し震えている、武者震いとかいうものだろうか。

「実は怖いから先に情報だけでも知つていないと不安だつたんじやない？」

何だそのもつともらしい理由は。僕は別に怖くなんかない、暗いところが嫌なだけだ。といふか、あんた僕と話すよりもすることがあるだろ？

「もう一時間以上経つてゐるで沖田先生。学校から嵯峨トンネルまで約一〇キロやのにどれだけ時間かかつてゐんですか？」

「うるさいわね、あたしは悪くないの。この子頭が悪いのよ！」

カーナビが付いているといふのにどうやつて道に迷うんだ？ 目的地設定もあつてゐるし、本当にこの人は自分ひとりで生きていくのだろうか。

「那実、お前地図見るの得意やろ？ 機械の代わりに案内したつてよ」

「お前がしたらええやん」

「俺は地図見ることができへんねん」

「方向音痴」

「ふるさい！ それを言われると何も言えないじゃないか。そうですよ、僕も方向音痴ですよ。何が悪いと言うんだ、そんな地図如き見れなくとも生きていける。目的地に迷いながらでも着けるならそれで十分じゃないか。」

ちなみに天照は「どうと、何も文句を言わず、ずっと外の景色を眺めている。そんなにじつと見つめて何かいるのか？」少し不気味だからせめて前を見てくれないか。

崎野さんは「コノ力車酔いするからちょっと不安やー」とか言いながらも、大人しくする雰囲気は皆無で、平然と僕らと話をしている。全然大丈夫じゃないか、ちょっと心配していたのに損したよ。もしかすると車酔いするのは天照の方か？

その後は那実の指示により、無事嵯峨トンネル付近まで近づいた。やはり僕の判断が正しかったな、なんて満足感に浸つていると、生き茂る木の間から人が出でくるような気がした。

まさか、幽霊なんて人の恐怖心が生み出す幻。感動錯覚という言葉で科学的に証明されるのははずだ。変なシミや落書きを人や動物と見間違えるのはパレイドニアって言われている。

心でそういうことを理解していてもやはり怖いものは怖い。ほら、今だつてドアを叩くような鈍い音が聞こえたじやないか。やっぱりそういう気持ちが強くなると、普段気にならない音とかが聞こえて、それをラップ音などと聞き間違えるんだよな。

「わあー！」思わず僕は声を上げてしまった。

だつて間違いなく今、音がした。ドアを叩く音が間違いなくしたよ。

「先生ー サイドミラーー！」

思わず目を向けたサイドミラーには車を追いかけてくる人影が見えた。これが噂のジェット婆と言う奴か？

もう僕はパニック状態だった、何が起こっているのか全く理解ができない。明らかに聞こえたラップ音、確実に見えた靈体。次々と起ころる心靈現象。やつぱり噂は本当だったのか、そういうばさつき信号を青で通過した気がする。

沖田先生は僕の声でサイドミラーを直視すると車を急ブレーキさせた。お陰で後部座席にいる僕たちはシートベルトに締め付けられる。

急ブレーキをしたってことは異常事態だよな。何なんだこのどんでもない展開は。もしかしてこれから超能力者対惡靈なんてシネマ的出来事が始まるんじゃないだろうな？

僕は出来るならこの恐怖に失神していたかったが、残念ながら心臓は全力疾走をした後よりも早く圧縮を繰り返し、眼を覚めさせた。

僕は寒気がするし、悪い予感しかしないので、全く車から出る気はなかつたのだが、那実が早く開けるといひのドアをスライドさせた。

「はあつーーー」

スライドさせると、そこにはおつさんの顔があり、じつと僕を見つめた。

何でこんなところに、こんな時間に人が出歩いてるんだ？ 幽靈だろ？ 幽靈しかいないだろ！ はやく靈を捕まえる掃除機みたいなのよこせ、那実！

「何アホなこと言うてんねん。」この人は今日のゲスト、奥村安大さんやんか。どうも大妙院那波と申します。本日はお手柔らかにお願ひします

那実が何やら物騒な名を名乗ると、その中年の男性に手を伸ばした。

「ええ、私もこの日を待ち望んでいました。よろしくお願ひいたします」

「一体」の一人が何をよろしくするのかと言つと、沖田先生に渡された資料によるところになつてゐる。

「この僕の目と鼻の先にいる奥村安大さんは最近知名度が上がりつつある靈能者で、その若干の知名度を巧みに利用し、多くの利用者に法外な金額を請求してゐるらしい。そしてこれから何をするかといふと、新米靈能者対有能靈能者の対決を行つ訳だ。新米靈能力者は那実のことと、設定では十六歳という若さで靈能者になり、様々な惡靈も退治した靈能者業界きつての秘蔵つ子とされている。これからどうやってこの自称靈能者と偽装靈能者が勝負して、その後眞瀬明菜の両親を救うのかは書類には書かれていなかつた。ほとんどが白紙で、ただ僕の名の横にカメラマン役としか書かれてい

ない。

まあだいたいの想像はついたけどな。

「はい、いくわよ。三……二……」天照はカメラの画面に自分の手だけを映し、数を降順に数えていく。数が少なくなるとともに声のボリュームを落とし、天照の手が画面から消えると沖田先生が声を上げた。

「みなさんこんばんわー、みんなの六等星沖田薫子です。今日は京都心靈怪奇事件簿の五〇回目の放送を記念して、こちらのゲストをお呼びいたしました」何だその怪しく古くさく堅苦しい番組名は。それに心靈スポットだろここは？ そんなにハイテンションでいいのか沖田先生？ いや司会の沖田薫子さん。六等星についてはあえて突っ込みますにいよ。」

「なんとあの超大物霊能力者、取材できぬラーメン屋のようにテレビ出演を拒んでいた奥村安大さんに来ていただきました。今日はよろしくします奥村先生」沖田薫子はそのへんのアナウンサーよりも手際良くマイクを奥村に向けた。

なんだこのテンポの良さ。もしかしてこの人、一人で練習していたんじゃないだろうな？

「よろしくお願ひします。おつと、ここは怪しい靈氣を感じます。まあ私が付いているから安心ですがね」と言って小さく奥村は笑つた。

一体何がおかしいんだ。怪しい靈氣を感じてゐるのなら少しぐらい動搖しやがれ。

「先生はこの番組はよくご覧になられていますか？」

「ええ、もちろん。毎週欠かさず観てていますよ。実にいい番組です」

何で当たり障りのないコメント。といつかこいつはアホか？ こんな番組放送されているわけないだろ。

「そしてもう一人のスペシャルゲスト、靈能者界のホープ。ちま

たで天才少年靈能者として名をはせていく大妙院那波先生です。本日はよろしくお願ひします

「よろしくお願ひします。今日は良い怨靈日和ですね」なんて縁起の悪いことをいいやがる、つて奥村、うんうんとうなづくな。

「本当ですか!? そう言えば少し寒気がします」とうれしそうに話す沖田薰子からは、全く恐怖という言葉を思い浮かべられない。

「最後になつちゃいましたけど、今日もよろしくね京野花さん」

「もちろんです。ちょっと怖いけど今日はスペシャルなのでがんばつちやいます!」と見事にアイドルという役柄をこなす京野花こと崎野さんにも恐怖心は微塵みじんも感じられない。僕の隣で何も言わず照明を持ち佇む天照の方がよっぽど顔色も悪く気分悪そうだけだ。こいつの場合、そういう現実的じやないことは信じやつにないから顔が青白いのは車酔いの影響だよな。

何だか番組的にも、そして任務的にも成功するのか不安なオープニングだ。

せめて自分だけでもしつかりしければと思い、カメラを肩に担ぎ直し、左手で眼鏡をくいっと上げた。

なぜ眼鏡なんてかけているのかというと、その童顔と大妙院那波と瓜二つの顔を隠す為だ。カメラマンとスペシャルゲストが同じ顔なんて明らかに怪しいだろ?

「この靈能者一人にはここ、京都でも有名な心靈スポット、嵯峨トンネルで幽靈探知＆除靈対決を行つてもらいます！ ルールは三〇分間でいかに多くの幽靈を探知し、除靈を出来るかを競つてもらいます。勝つ自信はありますか奥村先生！」

「もちろん、私にまかせれば三〇分で最低でも六体は除靈できるでしょう」話し終わるとまた薄気味悪く笑う奥村。

どうでもいいけど、三〇分で六体が多いのか少ないのか基準がわからないのだけど。

「それはすごいですね、さすが大靈能力者です。で、大妙院那波先生は何体程除靈できますか？」

大妙院那波は何も言わず静かに指を七本立て、奥村を睨みつけた。何の演出だそれは。

「これは若さ故の宣戦布告なのか、それとも圧倒的自信からでしょうか？ 気になるところです！ ところでコノカツちじやなくて花ちゃんはどちらが勝つと思いますか？」

うつかりでもコノカと言つ名前は出しちゃまずいだろ。

「えつとー。あたしは同年代の大妙院先生を応援したいんですけど、やつぱり相手が奥村安大先生だから勝つのは厳しいと思います。なので奥村先生の勝利だと思います」にしても本当に演技上手だな崎野さん。これが全て茶番だと知っているのにそこまで感情豊かに話せるなんて。もしかしてこの子、普段もキャラ作りしてたりして。

「カーット」といきなり隣で照明を持つていた天照が声を張り上げた。お前は一体何役なんだ？

「一時前まで少し休憩しましょう」それだけ言つと天照は照明器具を持ち沖田先生の乗用車に小走りで乗り込んだ。

僕も大きさの割に異様に軽いカメラを置き、道路に座り込んだ。すると奥村が出演者一同の輪から抜け出し、僕の方へ近づいてきた。一体何のようだ？

「どうも、今日はお世話になります。奥村です」

「いえいえ、こちらこそ。まだ若いスタッフばかりで何かと迷惑をかけるかもしれないけどよろしくお願ひします」

「私の方こそ、まだテレビ出演はこれで二回目ですので。お互いギター同士、手を取り合いましょう」

ただの気色悪い中年男性かと思つていたけれどちゃんと挨拶してくれるし、感じも良さそうだ。この男が本当に法外な靈感商売を行つているのだろうか？

と少し疑つた自分が馬鹿だった。

奥村は僕の耳元に顔を近づけ、小さな声でいやらしく呟いた。

「それにしても本当にいいんですね？ あの沖田さんでした？ あの方と一夜を共に過ごせると語るのは、思つていたよりも綺麗

な方なのでちよつと確認をですね」

やつぱりこいつ最低だ。もしかしてその愛想の良さも、番組出演もそれが理由なんじやないだろ？な。でも大人なんてこんなものなんかなと思つてしまふのも事実。

「そこでの……、なんていうんですかね」中年のおっさんにもじもじされるとこれほどまで気持ちが悪いとは思つてもなかつたよ、いいから早く言いやがれ。

「私は沖田さんよりどちらかと云ふと、京野さんの方が好みなのでその辺り、ご検討お願いします」

「うわっ、本当にビックリだ。こいつエセ霊能力者で詐欺までして口ワコンときたか。こんな奴に騙された人々を思うと言葉にならなによ。

「なぜ僕に言つんですか？」

「だつてさつき車に乗つた人がプロデューサーさんでしょ？ あの人目つき悪いしこんなこと言つと何言われるかわかつたものじゃないから。どうかあなたの方から伝えといて下さい。もし断つたら、放送をやめていただきたいとも忘れなく」

そんなことを眞面目な顔をして言える奥村に違う意味で尊敬の意を表し愛想笑いで返すと、彼は満足そうな気味の悪い笑みで、また出演者の輪に戻つて行つた。

奥村が僕の元から離れたことを見計らつたようなタイミングで天照が照明器具を引っさげ、車から出てきた。

天照はもしかしてこのことを計算して車に戻つたのかと一瞬疑いたくなるような絶妙なタイミングだ。いくら何でもそこまで推測力はないだろう。

「ああ始めるわよ」僕の隣に来て天照は青白い顔を引きつらせて笑つた。お前が幽霊なんじやないかと突つ込みたくなる程、その笑顔は不気味だつた。お前気分悪そうだけど、何気に楽しんでないか？

天照の一言で集まつた出演者一同は、それぞれの定位位置に立ち、いよいよ本番が始まつた。

「では丑三つ時になつたと同時にスタートしますね。準備はいいですか？ 奥村先生、大妙院先生！」

本当にこの人のテンションは、ここを靈の集まる場所だと忘れさせてくれる。心靈スポットへ遊びにきた友人としては頼もしいが、心靈番組の司会としては最低だな。

沖田薰子の問いに奥村は数珠を八の字に振り「よろしいです」と典型的な靈能力者のように振るまい、大妙院はポケットから扇子を取り出し、扇ぎ、余裕の笑みを浮かべた。

「準備は整つていいよつなので始めたいと思います。一時まであと五…四」

沖田薰子は左手を田の前にかざし、腕時計の秒針を慎重に読みあげる。

「それではスタート…」

一人の靈能者もじきは、よーいどん！ と小学生のかけっこのように駆け出さず、ゆつくりと暗いトンネルの中へ入つて行った。奥村は靈能者として仕事をしているからこいつの場所には慣れているだろうけど、那実の奴は怖くないのだろうか？

トンネル内には意味不明な落書きが描かれていて、氣味悪さを助長させる。しかもトンネルには全く明かりが灯つていないのに、靈能者一人には懐中電灯すら渡されていない。沖田薰子いわく、靈視できるなら暗闇なんてどうにかなるでしょう、というとんでもない理由だったのだけれど、糸がつた工セ靈能者一人はそれを承諾した。靈視が出来るからと言つて何故暗がりを歩けるのか理由は全くわからないと突つ込みたいところだけれど、僕の役割はカメラマンだ。

靈能者以外はトンネル内部にいても意味がないので、トンネルの入り口で彼らが靈体を発見するのを待ち、呼び出されるとその靈能者に近づき撮影開始することにした。

「今気付いたんやけど沖田先生、じつて有名な心靈スポットやのに何でこんなに人が少ないん？ さすがに日曜日でも二組～三組くらい普通あるやろ」

……おい、聞いてるのか？ もしかしてこの先生のことだ、役になりきっているからその役名を言わないと返事しないとかじやないだろうな。

「沖田薰子さん？ 聞いてますか」

「あら、薙くんどうしたの？」

予想的中、本当に面倒くさい性格をしているよ。

「聞いてたやろ、何でなん？」

「交通の規制をしているからよ、これくらい容易いわ。何たつてこのー。薙くん、みんな！ 行くわよ」

トンネル内には中年男性の声が響く。何も知らない人が聞けば十

分心靈現象と間違えるんじゃないかといつよつな不気味な声だ。

僕らも慌てて沖田薰子について走り出した。

トンネルの真ん中まで行くと、道路の中央辺りに奥村が立ち何やらお経のようなものを唱えていた。

「どうやら奥村先生が靈を発見したようです！ どうですか先生？」

薰子は靈と対話中の奥村に対し声のボリュームを落とすことなく遠慮なく訊ねる。

「この世に靈が本当に実在して、本氣で除靈をやつにきてこの対応をされると僕なら間違いなく怒るけどな。」

「はい、ここに子供の靈がいますよ。今事情を訊いてみますので奥村は大げさに『ハ』と『カ』を叫び、数珠を大きく振り回す。

「この女の子は、親子で近くにある愛宕山へハイキングに来ていたそうですが、途中で迷つてしまつたそうです。結局両親とも会えず、山で息絶えてしまいました。今もこの子は両親が来ることをこの靈が集まるトンネルで待つてます。」

なんとこうありきたりな設定なんだろう。そんな話しさは今まで何度も聞いただろうか。どこかの名犬を少しもじつて話しているだけじゃないか。

隣で泣き声が聞こえたので振り向くと、京野花さんが涙を流していた。その本気で泣いているのか？ もしそうだとしたら、どこかの芸能プロダクションへ行つた方がいい。きっと快く迎えてくれるだろ？

「おつ、奥村先生！ 早くす、す、救つてあげてくだひやい、かわいそうれしゅよ」おいおい。こんなとこりで迫真の演技が拌めるとは思つてもいなかつたぞ。

「わかりました。その涙はきつとこの子を救うでしょう」

戯言は言いからはやく除靈しろ。どうせ適当にその数珠を振り回して適当な言葉を並べて終わりだろ？

案の定、奥村は僕の想像と全く同じ行動し、彷徨える魂を求めて

トンネルの奥深くまで歩いて行った。

すると今度は那実の声が聞こえた。全く忙しい。どうせ見つけた
フリなんだからもう少し間を与えてくれよ。

「大妙院先生も靈を発見したようです！」いつまで薰子のテンシ
ヨンが続くのか不安だつたけど、それも余計だつたよ。きっと死ぬ
までこの状態を保つていられるんだろうな。

僕らはさつきと同じように走り、大妙院の元へ向かう。
すると大妙院の手元が赤く光つた。もしかして火の玉？　と一瞬
でも思った僕がアホだつた。

「おつと、大妙院先生、それは一体なんでしょうか？」

「これは靈探知機です。俺の靈力を使って作動させてるんだけど
ね」

なにが靈力だ、明らかに電力だろ。それにお前が赤く光らせてい
るのは僕があもぢや屋で買つた携帯ストラップじゃないか。確かに
靈探知機能付きとは書いてあつたけど、一一〇〇円でそんなもの発
見できるならオカルト研究者も苦労しないよ。

「たつそくですが、すごい大物釣り上げちゃいましたよ

「どういうことでしょつか？　大妙院先生」

大妙院は扇いでいた扇子を閉じ、正面に魔法陣を描くように振り、
三〇メートルくらい離れた奥村に聞こえる声で、

「靈の行列を発見しちゃいました。ざつと三〇体と四つと二つで
しうね」と言つた。

おーおい、そりやさすがにやりすぎだろ？　遠くから「何？」と
言つ声が聞こえてきたじやないか。そりやセオリーとしては一体ず
つ見つけて除靈するものだからな。やつぱりこいつはアホだ。

「それでは除靈するのに時間がかかるのではないでしょつか？」

「いえいえ、僕ほど靈力が高ければこれくらいの怨念と数なら三
分もあれば十分です」

大妙院がそんなことを言うから、奥村も「ここには五〇体もいた
ぞ！　私もこの数なら三分で十分だ！」と言い出したじやないか。

もうやつてられん……。

沖田先生もすっかり飽きたのか崎野さんと一緒に山手線ゲームを始めた。

「絞殺！」「銃殺！」「溺死！」「刺殺！」

別に山手線ゲームはいいのだけど、お願いだから心靈スポットで死因をお題にするのはやめてくれないか。氣味が悪いじろですまない。

しばらくトンネル内には死因を言い合つ女性の声と靈の数と除靈の時間を叫び合つ男性の声が響き合つた。

制限時間三〇分が経ち、トンネル外へ出た僕たちは奥村対大妙院の靈能力対決の結果発表を行つことにした。

まあ結果は見えてるけどな。

「それでは、結果発表ー！ 千一一対一億三千三十で大妙院先生の勝ちです」

そりや そりや、那実の奴、終了時間を見極めて、最後の最後に一億二千人とか言い出すんだもんな。それまで二十体さで負けていたけど、なんという大逆転劇だろつ。

沖田先生も山手線ゲームしながらちやつかり数を数えていたんだな。聖徳太子かと突つ込みたいところだけ本当にすういでの突つ込めない。

でもこれじゃドラマも何もありやしないだろつ。最後の方はお互い数を言い合つてただけじゃないか、これが本当の番組ならどうなつていたんだろうかと思うと寒氣がする。

「まさか大妙院先生が勝つ何て思つてなかつたです。絶対奥村先生が勝つと思つたんですけど」

京野花さんは本当に悲しそうに涙を溜めて言つ。

「ですよねー。奥村先生、敗因はどこにあると思います？」

おいおい、この人一応有名な靈能力者だろつ。そんなプライドを傷つけるようなことしていいのかよ。ほら、暗くても顔が真つ赤

だとわかるぞ。

「人を馬鹿にするのもいい加減にしろ！ 何が一億人だ！ そんなに靈がいるわけないだろうが、このエセ靈能者が！」

人のこと言えるのか？ 確かにあんたの方が靈能者らしいけど、それはあくまでらしいだけであつてそうではないだろ。

那実は閉じた扇子を振り、音を立てて広げて扇ぎ、悟るように奥村の怒号にもとれる質問に対し答えた。

「なんで一億人がありえへんの？ 人は死ねば幽靈になるんやろ？ その中の何割が現世に残るか知らんけど、この場所に恨み、やりきれなさを持つたまま死んだ人が靈になつて現れるんやつたら、人類が生まれてから一億人くらいおつても不思議やないやろ」

確かにその考えには頷けるけどこのトンネル付近で一億人は多すぎだろ？

「だまれだまれだまれ！ そんなに靈界は単純じゃないんだよ！ 死んだことのないお前に何がわかるつて言つんだ？ せめて死んでから言えよこいつ。

あくびをしながらそんな言い合いを見ていたのだが、那実がとんでもないことを言い出した。

「そしたら見せたるわ。幽靈を」

はつ？ お前いつからそんなことをできるようになつたんだよ。奥村も何言つてんだこいつ、つて顔してるじゃないか。いや違うだろ奥村、お前はそんな顔してはいけないだろ、一応靈能者の肩書き持つてるのだから。

那実は呆れ顔の奥村を気にすることなく、自信満々の顔で大きく目を開き、親指と中指を擦り合わせ乾いた音を響かせた。

その瞬間トンネルの方から白い女性のような形をしたモヤのようなものが僕の前を通り、立ち止まり肩で息をして煙のように消えていった。

あまりに唐突な心靈現象で僕は驚きすぎて声も出ず、その光景の一部始終を見送った。

「奥村さん、これで信じてくれたか？」

奥村は背骨を抜かれたようにその場に座り込み、顔を靈が消えた場所に向けてただ呆然としている。

「これで、わかつたやろ。あんたのありえへんくらい高い靈感商売をやめて、更にその人達の洗脳を解くんやつたら、さつきおつた靈をあんたに取り憑かせへんようにするけどどうする？ 多分取り憑いたらあんた死ぬやろな、散々こいつらを金儲けに使つたんやら

奥村は首だけを大きく立てに振り、声を挙げて泣きながら情けない声で謝罪の言葉を吐いた。

「まさか本当にいとは思つていなかつたんです。『ごめんなさいごめんなさい、もうしないから！』

これで一件落着か。でもさつきの白いもやはなんだつたんだろう？ 明らかに靈のよう見えたんだけど、どうせ組織が作つた何かだろうな。

僕らは腰を抜かした奥村を置き去りにして、その場を後にした。

「任務大成功ね、みんなお疲れさま。あいつ前から嫌いだつたのよね、下つ端のくせに調子のつて」沖田先生は今日一番の上機嫌で僕らを褒めてくれた。まだ一日が始まつて三時間程だけど。

「下つ端つてなんですか？」

「あつそりか、薙くん達は知らないか。あいつうちの組織と関わりの深い教団がよく仲介している靈能者なんだけど、大したホットリーディングも出来ないくせに依頼者からぼつたくるから苦情來ていたらしいの。だからちょっとお仕置きをね」

教団というのは『大和神道教』と考えて間違いないだろう。この任務にそう言つ意味があつたのか。

「じゃあ、失礼やけど眞瀬の両親を救うつてのはおまけやつたんか」

「違うわよ。この任務名を忘れたの薙くん？」『眞瀬家救出計画』

だつたでしょ。まあ今からママセの家に行くから着けばわかるでしょ」

「どういふことだ？ もしかして眞瀬もこの組織と関係の近い人物だつて言うのか？ 着けばわかるのなら考えるだけ無駄か。そんなことよりも聞かなければならないことがあるだろ。」

「那実。今僕らに見せた女人の人の幽霊みたいなの、あれ何やねん？」

「あれ？ あれはただ、あのトンネルに肝試しに来た大学生の女で、鳥の鳴き声を心霊現象と勘違いして、慌ててトンネルから抜け出したんや」

「いやいや、僕の目の前で消えたんだぞ、それを普通の出来事みたいに言うな。」

「そんなこと聞いてるんちゃうねん、あれをどうやって見せたのか聞いてるねん」

「俺の超能力や、お前が予知なら俺は？」

「そんなこと訊かれても、僕が予知能力ならお前も同じ顔してから予知能力か？ でもあんな人のモヤなんて出せる能力じやないだろ？」

「ホンマにお前は鈍いな」

呆れて溜め息をついて話しを続けた。言いたくないと言つ気持ちがすごく伝わってくる。これは面倒とかそう言つ類ではないと何となく気付いた。

「俺は過去を見れるねん。詳しく言うと人が残した強い気持ちを物を通じて読み取つたり具現化する超能力や。半径三メートルくらいまでやつたら読み取つたのを俺以外にも見せることが出来るみたいや。この範囲は回数を重ねるごとに広くなつてるな」

「すごい超能力じやないか。思い出を読み取る能力か……。でも絵画のように描いた人の思いだけじゃなく見た人の思いも強い場合はどうなるんだ。」

「上書き上書きで、強い気持ちが残つていくねん。さつきのトン

ネルの場合は比較的最近の出来事で気持ちも結構強かつたから簡単
に読み取れたわ」

でもすごい汗だぞ、あの涼しい山道で滴るほど汗をかくなんてと
てもそれが簡単だとは思えないけど。

「いや、一番インパクトある思い出を探してたらついこいつって
もうてん。でもよかつたやろ?」

確かにすごく驚いたけど、その為にそこまで疲れるなんてお前は
本当にアホだな。おい、汗が僕に付くからちゃんと拭けよ。

「あー? 失敗せえへんようにがんばった俺になんちゅうつ口訊く
ねん!」

アホにアホと言つて何が悪い? 久しぶりにやるか口喧嘩でも。
臨戦態勢の僕たちを察したのか、沖田先生が停戦を求めてきた。

「もう、せつかく大成功なんだから仲良くしなさいよ。マセマセ
に報告が済んだら、ご飯でも食べに連れて行ってあげるから」

「あたしハンバーグがいい! カレーと目玉焼きのん」

さつきまで眠たそいつとしていたのに、ご飯をおじつとも
うえんくらいで目を覚ませるなんて精神年齢はいくつなんだ崎野さ
ん。まあ天照のように何の反応もなく外を眺めてるのは愛想がな
さすぎるけど……、だからやめてくれないか? じつと外を眺める
のはちよつと不気味だからや。

「マセマセの家まで三時間くらいかかるから眠つていいわよ」

「だから三時間……、何か嫌な予感がするんだけど。

「真瀬の家つてもしかして泉州方面?」僕はあえて遠回しに言つ
てみたが、その行為は瞬間で意味をなくす。

「堺だよ。ほら、薙くんの住んでいた近所だつた気がするけど」
的中。

でもあんな奴聞いたことがないぞ、いや近所つてだけだから隣の
中学かもしれないのに知らなくて当然か。那実は聞いたことある
か? と訊ねようと思つたが、小さな寝息を立てていたのでやめた。
汗を流しながら眠る那実を見ていると、超能力を使うと体に負担

かかるんだと言つことが伝わってきた。

それにしても眠れるかな僕は。なぜかすゞい胸騒ぎがあるのだけ
ど、きっと氣のせいだらうな。

窓から見下ろす京都の街並はすゞく綺麗で、統一されたネオンの
色が輝き、ここに教団やら組織や偽靈能者なんて氣味の悪い存在が
いることを一瞬でも忘れさせてくれた。

目を覚まし外を見ると、空は少し明るく、懐かしくも見慣れた街並が広がっていた。

その角を曲がると、この前行った大仙公園があつて、更に信号三つ先を右に行くと僕の実家がある。けれど、今からそこに向かうのではなく、あくまで用があるのはその近所にある眞瀬家だ。久しぶりに我が家を眺めたい気持ちもあつたけど、それはまたいつでもできるだろう。あと二ヶ月もしないうちに夏休みだし、そのときまで楽しみに取つておこう。

隣では崎野さんと那実が寝息を立てている。もちろん天照は起きたままだ。

「天照さんは眠たくないん？」

「人がいると眠れないのよ、だから眠たくないと言えば嘘になるわ」

それは実に神経質だな。僕なんてどこでだつて眠れるし、どの時間帯だつて眠れるのに。少しお前にそういうところをわければ僕の睡眠バランスがとれるかもしれないな。

こんなことを話している場合じゃない、もつと大事なことを訊かなければいけなかつた。

「沖田先生は異星人だ、とか名乗るファッションセンスのない見た目二十歳ちょっと過ぎの男つて知つてます？」

「知らないわ、そんな変な人。でも宇宙人と言わずに異星人と言つてる辺りに魅力を感じるわね。何星かしら？」

そんなの知るか。異星人の存在なんて、自分の妄想と現実の区別がつかなくなつた精神異常者ことを呼ぶのだろう？

「いや、出身は知らんけど。眞瀬が僕以外にも尾行されている可能性があるって言つてたから、もしかしたらそいつかと思って」

「へー。その異星人は気になるけど、マセマセを尾行してる人が

いるのは今に始まつたことじゃないわよ

それははどういうことだ？ もしかしてボディーガードか何かが四六時中見張つているとか、ある秘密結社の重要情報を握つているとかそういうことなのか？

「ほら、着いたわ。ここがマセマセのお家よ」

またもや急ブレーキで止まられシートベルトに締め付けられた。この衝撃でも寝ていられるその一人に、危機察知能力なんてものがあるのだろうか？

車から出て、沖田先生が人差し指で示す先、眞瀬家を見つめた。それは家と呼べる物ではなく、どちらかといつてビルに近かつた。それも小さい4階建てほどだ。

場所は僕らが通つていた中学校の校区とは違い、その隣の校区だった。

沖田先生はさつそく電話を耳に押しあて、眞瀬に連絡を取つている。

「あれ？ どうしてだろ、さつき電話したときほかに出たのに、どうかしたのかな？」

何度も電話を切り、かけ直しているが繋がらないらしい。こんな時間だから一度寝でもしたんじゃないかな？

「仕方ないなあ。那実くん起こしてくれる？ 一度目の出番よ

僕は車に乗り、生まれたての子犬みたいに力なく眠つている那実に「でばんですよー」と言いながら体を揺さぶり目覚めを待つたが、一向に目を開く気配が感じられない。こいつ死んだのか？ 最終手段で耳に息を吹きかけるとやつと目を見ました。

「キモつ！ お前やつたんかい。心花やと思つて起きたのに最悪の目覚めや」

いいから早く沖田先生のところに行け、何やらまた超能力の出番らしいからな。

僕と那実は再び車から降り、那実は沖田先生の元へ行き何やら話しが始めた。

暇なので眞瀬の家を観察していると、何やら胡散臭く怪しげな看板が見えた。

『眞瀬易占 堀支部』易占つて箸みたいなのをジャラジャラして占つやつだよな。何で眞瀬の家が占いの館なんだ？ それに両親が詐欺にかかり一家は破綻寸前だよな。占い師のくせに靈に頼るなんて一体なんて不届きものなんだ。でも眞瀬は言つてたよな、お父さんが会社をクビになつたつて。じゃあ、その後にこの占い屋を作つたのか。でも、どこかつじつが合わない。

「早く乗つて雍くん！ 急ぐわよ」

思つていていた以上に声を張り上げた沖田先生は素早く車に乗り込みエンジンをかけ、発進させた。おいおい、まだ僕乗つてないぞ。那実がドアを開けてくれていたので、僕は走り出す車に飛び乗つた。どれだけ一刻を争う事態なんだ？ セッキまでのほほんとした雰囲気が一気に消し飛んだじゃないか。

「これから大阪空港に向かうわ！ 本当にしてやられたわよ」

「何があつたん？」

——沖田先生に訊ねるが全くの無視だ。状況説明するくらいなら車のスピードを少しでも上げたいつてところか。那実は崎野さんを起こし、今の状況とこれからすることの説明を始めた。

「眞瀬家には眞瀬明菜がおらんかった。数分前まで電話をしていたにもかかわらず。そこで俺があいつの家の玄関の過去を読み取つたんやけど、そこでわかったのは……騙されたんや」

騙された？ 全く話しの流れがせっぱりなんだけど。ほら崎野さんも、天照でさえ呆然としているじゃないか。

すると運転中の沖田先生が不機嫌に吐き捨てるように説明を付け足す。

「マセマセは普段隠しているけど結構有名な占い師なの、それこそ易学から星座占いまでおこなつちゃう天才さん、それが一つの顔。もう一つが組織の情報部としての顔を持つ。占いつて言つてみれば先を読んだりすることではなく相手の心をいかに読むか、そして

どれだけその心にあつたアドバイスを言葉巧みに説明するかと言うことだと思うの。マセマセはそれがすごく上手だから人を騙してとんでもない情報を集めたりして、情報部で欠かせない存在になつて、組織でもすごい頼りにされてたの。そんなマセマセがあたしたちを裏切るなんて」

沖田先生はひどく落胆した表情だった。よほど眞瀬のことを信用していたのだろう。でも組織を騙すなんてあいつってすごい奴なんだな。

「裏切ることはわかつてたわ」わかつてたのかよ！　じゃ、その顔は何だよ。

「でもまさかこんな形で裏切られるとは思つてなかつたのよ。こつちだつてマセマセが怪しいかもつて思つていたから大仙公園にピクニックがてら、那実くんにマセマセの家に隠しカメラつけてもらつたり、天照さんにマセマセの家に占いさせにたり、雑くんにみんなの動きを目立たさないようにカモフラージュとしての尾行もしてもらつて、さらに監視のプロが五人と三年の三人でマセマセを見張つていたのに、ここまで注意してたのにどうしてなの」沖田先生はイライラを抑えられずハンドルを強く叩いた、おかげで車が揺れる。やっぱり僕の尾行はバレること前提だつたのかよ。あんなに真剣にやらず適当でやればよかつたよ、といつても後の祭りか。そりやうだよな、素人に尾行をさせる程この組織は甘くないって話しだよ。

「あいつは相当この組織を恨んでる。それが読み取つたときには『いいわかった。あんな強い気持ちは初めてや』

那実は柄にもなく、通り魔に殺されかけた一般人のように顔を恐怖心をまとい、足をふるわせている。

「お前大丈夫か？」

「それより一年生や、あの人らがヤバい」

「わかつてゐるわよ！　だからこんなに飛ばしてゐんじやない！」

「何で一年生が危険やねん」

「まだわかんないの？ バカ」と久しぶりに天照が言葉を吐いた。

「今、眞瀬側には三年生の超能力者が見張っているでしょ、そして今あたし達が向かっているのは大阪空港。一年生が修学旅行で利用した空港よ。よく考えてみて、組織の中核を担っている超能力者が一番多いのは一年生よ、その一年生がいつもより無防備でいるし、昨日の事件で力を使っているから万全の状態ではないでしょうね。もちろん携帯なんて空の上じゃ繋がらないから連絡も出来ない。あたしならまとめて超能力者を撃退するこのタイミングを狙うわ。あいつは組織の情報をほとんど握っているから本当に危険よ」

「じゃあ警察は？ 僕らが国専用警察ならあいつらだつて助けてくれるじゃ」

「もう応援は呼んであるわ。一年生の予定到着時間は九時一〇分。道が混んでいなきや間に合うけど大丈夫かしら」

「なんでそんなにこっちに着く時間が早いん、普通夕方とか違うの？」

「事件を起こした場所にいつまで留ませたいとは思わないでしょ危険だから。それがまさか、帰ってきた方が危険だなんて笑い事にならないわよ！」そのイライラが十分伝わるハンドルさばきで僕らは重力を奪われる。

これから起きる出来事が不安で車の中は沈黙に包まれた。

こんな荒い運転をしていたらいつか事故するんじゃないかと不安になつたけれど、何にも人を轢いたり、車と衝突したりすることなく、ガードレールにドアが擦り、傷が付く程度ですみ、伊丹市に着いた。

伊丹市に入ると那実と沖田先生は突然慌ただしくなつた。那実は携帯電話を片手に沖田先生に「そこの角を右！」やら指示を出している。恐らく電話相手は三年生の誰かが眞瀬を見張っていた組織の人間だろ？

「この辺やで」現場の近くに着いたのか那実がそういうと、また

急ブレーキで車を止めて、真っ先に沖田先生が飛び出した。一人で行動するのはまずいんじゃないか？と思つた瞬間、聞いたことのないような重たい音が響き、思わず口を閉じてしまった。

口を開くと胸から血を流す沖田先生が倒れていた。

何かの間違いなのだと思ったかつた。いつもテンションのメータをぶち壊しながら生きていて、ありえないくらい数の花をいつもまき散らしてくるくせに騒がしい沖田薫が一ミリも動かず、ただ血を流しコンクリートにうつむせになつてゐる。実際の出来事なのでよくわからないので、近寄つて確認したかつたがそんな勇気など僕にはなかつた。

僕らはどこから飛んでくるかわからない銃弾におびえながら、うつむせになる沖田先生の横を通り過ぎた。一瞥もせずに。

崎野さんは涙で前が見えないらしく、ふらふらと走つてゐるので僕が手を引く。

「こんなとき」「ごめんな」
「るるる」と、何も言わず走れ。と言いたかつたけど、今それを言つてしまつと僕の気がおかしくなりそつだからギリギリまで出てきた思いを絡み付くタンと一緒に飲み込んだ。

那実が携帯電話で会話をしながら先頭を走る。恐らく詳細な位置を訊いてゐるのだろう。

角を曲がるとそこには銃を構えた男性が五人程いた。まるで僕らを待つっていたかのように一斉に銃弾を放つ。

僕らはギリギリ壁に身を隠すことでその銃撃から免れた。すると天照が那実の携帯電話を引っ取り、地面に叩き付け、カカト落しで粉碎した。

「何すんねん！」

「こうこうときになに落ち着かないでどうする。通話相手も私たちの敵よ」

そうだよな、行くところ全てに銃弾が飛んでくるなんて、とんだおつちよこちよいの誘導人だよ。

「でもそれやつたら先輩のところに行かれへんで」

「先見がいるじゃない、初めからそうしておけばよかつたのよ」

えつ？ 僕ですか。

「あなたには先の出来事が見えるんでしょ、なら一年を助けたいつて思うならたどり着くはずよ」

そんなこと言われたつて僕は未来の見方なんてわからないんだぞ、いつもいきなり見えるんだから。なんて逃げてられないよな、この状況で。

「どうなつてもしらんからな」僕は先頭に立ち、直感の赴くままでに、来たことのない住宅街を地図も見ずに駆け出した。

これでもし、先輩達の元に辿り着いたつてどうするんといつんだ。沖田先生は応援を呼んでいたと言つていたが、さっきの曲がり角にいた奴らのことを考えると、もしかしたら応援もやられているかもしない。だとしたらこの四人で助けなくちゃいけないと言つ」とか。

天照は回復ができる武術の使い手、那実は過去を見れる、崎野さんは感情を色で読み取れる、そして僕は先の未来が見える。このパズルを上手くはめ込めば最悪な状況を開拓できるとは到底思えない。そして直感で左の角を曲がるとそこは地獄絵図が広がつていた。

五メートル先の十字路で、一年生と思われる制服を身にまとつた男女が、武装した数人に囲まれ、たじろいでいた。そして武装者が一斉に射撃を始めた。僕らはただ、それを眺めることしか出来なかつた。その圧倒的恐怖に。

銃声が鳴り響く中、男子と女子が一人ずつ立つていた。これは奇跡でも目撃しているのだろうか、男の方は銃弾をまともに体に受けているが全くの無傷だ。女の方は全ての銃弾を避けている。

いつ一人がやられてしまつてもおかしくない状況に那実はたまらなくなつたのか、ためていた力を爆発させるように、一気にその男女の元へ向かい走つて行つた。

「くつそお、これでもくらえ！」

那実は武装者に恐れることなく近づき、指で乾いた音を鳴らした。すると男達は一斉にしゃがみ、そして気絶した。一体どれだけ恐ろしい過去をあの人達に見せたのだろう。

一年生を救つたかに見えた那実だったが、次々とわいてくる武装者に何も出来ず、あげく囮まれ銃声と、那実そして残り一人の一年生の叫び声が響いた。

僕は胸の奥が熱くなることを感じていた。まさかこんなにもあつけなくやられるなんて、あの那実が。

いつも訳の分からないことを言って、僕を困らせたり怒らせたり、希望を与えてくれた、唯一血のつながった存在だったのに。家に帰つてお母さんに何て言えばいいんだ。見殺しにしましたよ僕だけ死ねないで、と言えというのか。そんなアホなことが出来るか。

でも本当に熱いぞ、まるで隣から火が噴いてるようだ。

その熱さの元をたどると、隣で人が燃えていた。

誰かを考えないでもわかつた、僕の肩くらいまである身長、それだけが全てだつた。

崎野さんあなたが何故そんなにも惨い殺され方をしなくてはならないんだ。きっとあなたの人生は裏切りの連続だつたのだろう、何となく雰囲気でわかつたよ。その作られた笑顔も涙も、全ては裏切りの人生から逃れる為だつたのに。結局こうなつてしまつたんだね。さよなら最後の人。

僕はもう足で立つ力をなくし、燃え盛る崎野さんのよこで座り込んだ。それと同時に武装した人たちが銃を構え、僕を取り囮む。

もう終わつたか。やつぱりこんな学校来るんじゃなかつたよ、人生楽はしない方がいいな。やつぱり上手い話しなんてなかつたんだ、平々凡々な中学生が国内最高基準の高校に進学できるなんてこれくらいのリスクがないとダメだつたんだ。

僕は目を閉じ終わりを待つていたが、終わりを示す銃声が待てども待てども聞こえてこない。気になり目を開けると僕の両隣には念力使いの竹須佐先輩と筋力のリミッターを外せる三月さんが立

つていた。

「おまたせしました。これで、残つたのは私たちだけと言つ」とハサウエイになりましたね」三月さんは肩で息をしながら言つ。

ちょっと待つて、今氣付いたけれど天照はどこに行つたんだ？
三月さんはさつき残つたのは私たちだけとか言つていたけど……も
しかして。

「天照は俺たちをかばつてくれた。あいつには本当に感謝だ」

竹須佐さんは田を武装者達に据わらせて、大きく息を吸いこんだ。
するとどこから来たのか、銃が空を舞い竹須佐さんの「ハツ」とい
う声とともに発砲され、みるみるうちに武装者達を倒して行く。さ
すが念力。こういう場面でこれ以上、役に立つ能力があるだろうか。
三月さんはというと筋力のリミッターを外し、ものすごい俊敏性
で地面を軽やかに蹴り銃口の定めをつけさせないスピードで進み、
凄まじい蹴りやパンチを繰り出し、武装者達をコンクリートに叩き
付け、鈍い音を響かせる。

「佳代はスマートじゃないなあ」

「あら？ ハヤに言われたくないわ」

囮んでいた武装者達を一気に倒すと、二人は背中合わせで立ち微
笑した。

あつとこう間に数十人も倒したのだから、もしかするとここから
脱出できるのかもしない。

そんなことを思ったのも束の間、現実はそれほど僕たちに甘くは
なく、後ろや前からは先ほどの倍以上の武装者達が銃を構え現れ、
一斉射撃。

あのとき、道案内などせず逃げればよかつたんだ、一年生など放
つておいて。

そうすれば一年生だけでも生き延びれたかもしれないのに。とん
だ予知能力者だよ。僕はひょつとして死神かもな。

倒れ行く竹須佐先輩と三月さんを見つめながら悠長にそんなこと
を考えてしまった。

頬がヒリヒリする。そつか人つて死ぬと頬が痛むのか、死んでからも人間というものはよくわからないな。

「うなつてるんやつたらさつさと起きひ

那実の大きな声と同じくらいう音がでる勢いで、那実に頬をぶたれた。

「あれ？ みんな生きてる」

そうか、大阪空港に着くまであまりにも静かだったから気付かなかいうちに寝ていたのか。

といひことはさつきの出来事は……。

「その顔やと未来でも見て来たよつやな

緊迫した車内の中、それを打ち壊す、場違いな童謡の着信音が響いた。

「はーい沖田です。あつ案内してくれる？ ジヤ、ちよつとあたし運転だから代わるね」

沖田先生は携帯電話をこちらに差し出し、那実が手を伸ばす寸前に僕はその携帯を奪い取り、電源を切つた。

「何てことするの薙くん、一秒でも早くあの子達を探して救い出さなきやいけないのよ」

僕は夢の記憶を辿る。確かにこの発信者は僕たちを一年生の元へ案内せず、敵の陣地へ誘導していたはずだ。

僕は携帯電話を指差し、「こいつも裏切り者です、さつき見た夢で、この電話のおかげで沖田先生が死んだで」

「うつそ、それは危ないわね。薙くんの予知能力なら間違いないわよね。で結局最後はどうなったの？」

沖田先生はドラマの最終回のあらすじを聞くよくな気軽さで訊ねてきた。これを言つた後、動搖して車をぶつけなきやいいんだけど。僕はアイコンタクトで天照にハンドルを持つように指示した。

言ひづぞ、もしかするとこにが一年生を助けるかの十字路になるかもしれない。

「全滅です」

あれ、何の反応もなしですか？ 沖田先生の顔をのぞくと田がうつりで前なんか見えていないのがすぐにわかるくらい動搖していた。僕は慌てて沖田先生の頬を叩き、ハンドルを握る。どうやら天照に送ったアイコンタクトは通じなかつたようだ。

「ほなどうしたらええねん、全滅を免れる為にはこのまま京都に帰るしかないんか？ 二年生を見捨てて」

「ちょっと待って、今から夢を思い出すから

「早くしてよ雑くん、時間はお金じゃ買えないのよ

「ひむわい、ちょっとくらい黙れ、一番最初に飛び出して死んだくせに。

確かあの地獄絵図では一年生四人ほどが武装者に囲まれていてたんだよな、ということはその人たちを助けるのはほほ無理と言つことか、じゃあ、残るは三月さんと竹須佐先輩か。

あの一人はどこから来たのだろう、目を開くと隣にいたのでよくわからない。一瞬でいい、一瞬の未来を見たい。

「天照、僕を手刀して眠らせてすぐに起こしてくれ

理由を聞かれると思つていたが、そんな間もなく僕の首に衝撃が走り氣絶した。無意識で適当に一人の場所を案内するには少し危険すぎる、だからちゃんと映つた未来が必要だ。

田を開くとそこは何もない路地で、さつきの地獄絵図のような住宅街が嘘のようだつた。耳を澄ますと発砲する音や人の叫び声が聞こえる。僕はその方向へ足を進めず、脳内に竹須佐先輩と三月さんを思い浮かべ、音とは逆の方向へ全力疾走した。

三分ほど走り右へ曲がるとそこには神社があり、ついでではないけれど竹須佐さんと三月さんが必死の形相で武装者と戦つていた。やつと見つけた。ここはどこなんだ？ 周りを見渡すと『岩屋神……。

僕は天照に睡眠から目覚めるツボと言つむのを押され目を覚ました。ギリギリ一人の場所を特定できてよかったです。

「竹須佐さんと三月さんは岩屋神社にいます」

「他の一年生は？」

「敵に囲まれて救うのは厳しいと思つ。といつか助けに行つても囲まれて終わりやつた」

僕が平然と言つと沖田先生は涙を流しながら声を抑えるように泣いていた。

那実の地図案内により五分もしないうちに、やつきの夢で見た道路に着いた。後少しで岩屋神社だ。

「この辺やで、ほらあそこに鳥居が見えるやつり？」

その声と同時に天照は車から飛び降り、外に出て僕を手招きした。えつ！？ そんな危険なことするのか？ でも僕しか現場を見ていない訳だから仕方ないか。

決心し、車から降りようとすると鳥居から一人の男女が飛び出してきた。竹須佐先輩と三月さんだ。

沖田先生は一人を見つけるとものすごい瞬発力で声を発し「こつちよ！ 早く！」と車を停車させて、一人を車に乗り入れた、しかし、扉を閉める瞬間に銃弾が飛び込んで竹須佐先輩の胸を打つた。

「おい、竹須佐先輩。しつかり」車は急発進し、その勢いでさらに竹須佐さんと密着する。

いくら揺さぶっても反応はなく、全身の力が抜けたように僕の膝の上にのけぞっている。

そんな状況なのに那実も崎野さんも興味はなさそうな顔をしている。いつの間にか助手席に座っている天照も一緒に車に飛び込んできた三月さんでさえも、ついでに言つとさつきまで皆を助けられなことを知り、泣いていた沖田先生すら一警もせず運転をしている。

「おい、竹須佐さんが死ぬかもせえへんのに何でみんな無視なん

「大丈夫よ」

沖田先生は今までに聞いたことのない落ち着いた声でそう呴いた。

「この子達は超能力者よ、殺すなんてもつたいたいでしょ？」だからあいつらは麻酔銃で撃つて捕獲する。人体実験の為に」

「マジですか？」人体実験なんて言葉を本気で口にした人を見たのがこれが初めてだ。というか当たり前だよな、そんな法律違反。

「だから死ぬ方がマシかもしないわねもしかすると、どんなことされるかわかったものじやないし」

その言葉に反応したのか、三月さんが那実の膝の上で暴れだした。「ダメ、薰先生！ みんなのところに行かない、大名くんや橙芽、それに尚や梓玖はどうするの？ 見殺しにするわけ？」

いつも清楚で落ち着いた雰囲気の三月さんがこんなに取り乱すなんて。そりやそうだよな、仲間が拉致されるのを見過すことになるんだ、これくらいが当たり前かもしれない。

「死なないわよ」沖田先生は涙を流して呴く。

「無理矢理にでも止めてや」

天照の軌道が見えるほど綺麗な手刀によって三月さんは氣絶した。ナイフ判断天照。確かに今の状況じやこれ以外方法はないよな。僕の目の前には竹須佐先輩と三月さんが背中合わせで窮屈そうに座りながら寝息を立てていた。

「きやつ」今度は何だ？ やつと一段落したと思つたのに。

声を出した崎野さんの方を向くと泣きそうな顔で、「なんか後ろから物音がした」と爆弾発言をした。

もしかして後ろから武装者がよろしく！ とか言つて出てくるんじゃないだろうな？

「まだこの辺りは危険だからもうちょっと都合に出てからトランクを確認しましょ」

沖田先生は先ほどの悲しみの表情を忘れさせるかのような笑顔をこちらに向け、涙を拭つた。

今までにどれだけの生徒がこのようない日に遭つてきたのだろう。そして彼らを幾度となく失つてきた沖田先生。彼女が超能力者だと

言い張る理由が少しわかつた気がした。

しばらく車を進ませ、吹田方面に向かう国道に出ると快調に飛ばしてきた車を一旦停止させた。

「じゃ、確認しましょうか」

その声を合図に僕らは車から出て、トランクの前に集まつた。竹須佐先輩と三月さんはぐつすりと眠つてゐる。くそ、あの銃弾が僕に当たればこんな緊張感を味あわないでよかつたのに。

天照以外、みんなでトランクに手をかけ、「いつせいのーで」で勢いよく開け、一目散でその場を離れた。

トランクの前で立つてゐる天照が何やら口を動かしている。トランクの中に知人でもいるのだろうか？

隣にいる沖田先生にどうしたのか訊こうと思い、首を横に向けると、巻き戻しをするように沖田先生は戻つて行つた。もしかして、安全つてことか？

「あづくー！ 大丈夫だつたの、よかつたー」

その声に反応し、那実も崎野さんもトランクへ近づく。

するとトランクから上半身を出したショートヘアの女子が現れた。予想通りというべき制服をまとつてゐる、ということはこの人も超能力者か。

「沖ちゃんだ、よかつた助かつたんだね。沖ちゃんの車だと思つて適当にトランク開けて飛び乗つたんだけど」

思い出した、この人は確か夢の中で見たぞ。乱射された銃弾を華麗なステップで避けていた人だ。僕も小走りでトランクへ近づく。

「えー、助けられたの佳代もハヤも。ありえないよ！ あんなに敵がいたのにどうやつたの？」沖田先生は僕を指差した。

「那実に似てるってことはあんたが雍ね。ということは先見かあ。思つてたより便利な能力なんだね。本当にありがと、マジうれしいよ」と子供のような無邪気な笑みを浮かべると「ねむー」と言つてトランクの中へ沈んでいった。

「さすが直感力の灘梓^{なだあづく}玖ね。運命すらも直感で変えてしまうなん

て。その代償として三田は田が覚めないでしょ「うなだれ」や「うつむく」天照はトランクを閉めた。

「上筒くん生きてる？」よかつた。もうマヤマセの追跡はいか
ら学校に戻りなさい、危ないから。わかつた？うん、じゅね

再び車は走り出す。絶対安全を誇る京都の中心わが母校。京都文
化芸術大学付属高等学校に向かって。

学校に着くと、とりあえず眠っている一年生をそれぞれの部屋に
運び、それを終えるとみんなは食堂へ行き昼飯を食べて、後は眠つ
て過ごすだろう、色々あつたからな今日は。

でも僕の一日はまだ終わっていない。最後の締めをつけに行かな
くてはならないのだ。

飯も食わず、睡眠の誘惑を押し切つて体育館裏へ向かった。

「何時間待つた？」

「うーん、約三時間と二〇分かな？」体内時計やけど
伸びをしながら事件の顛末の中心にいた高校生もどきは、そのい
け好かない目で僕を睨んだ。

「でもよく三人も助けられたあの状況から、うちはすっかりあ
んたらだけ逃げ出すんかと思つたけど

意外と超能力者同士の絆は深いってことだらうな、僕は除け者気
分だけだ。

「もう会うことはないやろ？ほなホントやらじーールドなんかの
話術は使わんと腹わつて話そか」

「いつ気付いたん？うちの得意技やつたのに

「体育館でお前が『妹』っていう言葉を発したときや、あれは正
直ぐつときたけど、その反面怪しいとも思つたな

「やっぱやりすぎたか、でも一でも言わなあんた同情してくれ
そつになかったからな」そう言いながら眞瀬は木の枝を鉛筆代わり
にして地面に円のような物を複数描き始めた。

「あの家族の話しさはホンマやつたんか

「半分ホントで半分嘘かな？」

「どういつ意味だよ、それは。」

「一応血は繋がってる親やで、あんたのよつこ血の繋がりのないよつのじやなくつて。でも幸福感はなかつたな。いつつもいつつも占いの勉強ばっかりさせられて。うちの家、江戸時代に有がつた占い師の末裔みたいでな、ホンマよつやつたで」

お前の苦労話なんてどうだつていい、早く両親の説明をしやがれ。
「あんたもせつかちやな。そうやな、あんまりゆつくりしてると間もないし、チャツチャと話そか」

眞瀬はズボンのポケットからタバコを取り出し、口にくわえた。

「一本どう？」

「いるかボケ。時間ないんとちやうんか」本題にいつとは気が合わない。

「こいつとは？ みんなとやろ、あんたの場合」

「こいつ心を読んでくる辺りが一番嫌いなんだよ。」

「ほな、本題いこか。うちの両親がリストラされたつていうのは間違いじやないねん。うちの占い屋は日本でもいっぽいあってな五店舗くらいかな？ 最近売り上げの伸びへん堺支店、つまりお父さんが経営してる店やけど、店長交代しろつて言われたねん、一番先祖との繋がりが濃い偉いさん」。ほんで実力だけやつたら日本では一番あるうちが若くして店長になつたねん」

「すごいんだなお前」見た目は小学生か中学生だけだ。

「あんたもチビやん、まあええけど。で、あたしと交代したら売り上げがドンドン上がつて、それでお父さん自信喪失して、友達の靈能力者にみてもううになつたねん」

「嘘をつけ」そんなに上手い話しがあるわけないだろ。

「えつ！？」

そんなわざとらしく驚いた顔をするな、お前の正体が分かつていればこんな話し信じる氣にもなれないよ。

「どうせお前の話術でそういう方向に持つていつたんやろ？ ほ

んで沖田先生に助けを求めることで組織の中核になつて超能力者の行動をバラバラにさせて一気に壊滅させようと思つたんと違う?」

「おー、やすが未来予報士」タバコを指で挟んだまま小さく手を叩き、いやらしい笑みをこちらに向ける。

「妹は? もしかしてこれが事件の発端ちやうんか」

あの傍若無人で恐れを知らない那実が、眞瀬の過去を読み取つて震える程の恐怖を覚えたほどの強い恨み。

「やうやけど、正確に言えば妹じゃないな、何でつて妹はうちやもん」

どうこりこじだ? 妹は妹で姉じゃないぞ、もしかして身長的なことを言つてているのか?

「姉ちゃんは三年前にここの高校通つてて、あんたらと一緒、超能力者やつたねん。でもある日、組織の幹部にいきなり裏切り者とか言われて。そつから逃げるよつに暮らしてたんやけど結局見つかつてどつか連れて行かれたわ」

なんでそんな奴の妹を情報部なんかに入れたんだ?

「気付いてなかつたんやろな、うちが姉ちゃんの妹やつて。名字変わつてるし、うちかて過去の痕跡消すようにがんばつたから」

といつことは妹の人生が無茶苦茶になると言つていたのは本当の話しだつたんだな。こいつのことだから三年間恨みを晴らす為に必死に試行錯誤してきたのだつ。

「結果的に三人の超能力者と変なおつさん五人くらいしかしばかれへんかったけど、気持ち的にはスッキリや」

「お願いがあるんやけど、捕まえた一年生には人体実験とかせんといてほしいんやけど」

「それは無理や、捕らえたのはうちじやなくつて手助けをしてくれた組織やからな。あんたら結構、敵多いから氣をつけりや」

まさか悪の手下が正義の味方に注意をするなんて思つてもいなかつたよ。

「お前もな」僕が嫌みでそう言つと「ありがと」と嫌みで返し眞

瀬は立ち上がった。

やつとこれで眠れるか、と思ひながら振り向くと体育館の脇から崎野さんが現れた。銃口をこちらに向けて。

「崎野さん、どうしたんそんな物騒なもん持つて」

「止まれ眞瀬明菜！ あんたのおかげでコノカの人生が狂つたんやからな！ あんたを追つてこの学校入つて、やつとチャンスが來たわ！」

どういうことだ崎野さん？ 「冗談と思つていたけど、その充血した眼と瞳孔が開ききつた目を見る限り、もしかしてまた例の発作か？ ということは眞瀬はやっぱり崎野さんのトラウマに何か関係していたのか。

「うちこの子の顔しか知らんけど……。もしかしてこの子があんたの言つてた崎尾さん？」 崎野さんだけだ。

「あんたの占いであたしは友達から裏切られて好きな人にまで裏切られた……死ね！」

それはハつ当たりじゃないのか？ ちょっとは落ち着けよ。と言う前に崎野さんは引き金を引き、鼓膜を突き破るような重い音がした。崎野さんは発砲の衝撃に耐えられなかつたのか、体を吹き飛ばされ、頭を強く打ち起き上がろうとしなかつた。

こんなに余裕をかまして崎野さんの姿を眺めている場合じゃないな、さよなら眞瀬。

と言いたいところだけど、素人が発砲して、目標体に当たられるはずもなく、その銃弾は眞瀬の隣にいる僕に向かっていた。本当に、弾がゆっくり見えるよ。すごいんだな人間の追い込まれたときの力つていうのは。

なんて感心してる場合じゃないどうやつて避けようか。もしかして体は早く動くかもと思い、動かしてみたが全く動かない。そりやそうか、見ることだけに集中しているんだからそうなるよな。

僕の人生にふさわしいよ。流れ弾に当たつて死亡、しかも愛する人の。

死を覚悟した瞬間、その銃弾目がけ人が飛び込んできた。その瞬間スーパースロー・モーションは終わる。

「大丈夫か天照」

僕の前へ飛び込んでそのまま倒れたのは天照だった。思わず呼び捨てしてしまつたじやないか。

天照は僕をかばい銃弾を腕の当たりに受け、辛そうな顔をして「大丈夫」と言って気絶した。

そそくさと逃げようとする眞瀬に僕は最後の質問をした。

「なんで僕ら一年を先に殺さへんかったねん、せめて僕だけでも殺してたら復讐は成功したやろ！」

眞瀬は立ち止まり、上半身だけをこちらに向けて、うつむきながら答えた。

「そこにある天照以外はシロートみたいなもんやからな一年は、だからどうでもよかつたねん。あとは……青春の悪戯かもせえへんな」

そう言って小学生のような天才占い師は、僕に暖かい温もりを、それ以外には大きすぎる傷を付けて去つて行つた。

最終話 超心理的青春

占い師兼組織情報部員による復讐劇を中途半端に留めた一日後。もちろん僕は通学していた。

那実も遅刻しながらも授業には出席していて、崎野さんと天照は一日連続の休みだ。この一人については現在入院中で、組織運営の病院で治療中だ。そこには三月さんも入院していると沖田先生から聞いた。

僕と那実は食堂に向かっていた。昨日竹須佐さんと約束したからな。

「今日は何食べる？ またラーメンか」

「続けて一緒にもん食べたらあかんって気分になれへんか？ そやな今日はうどんや」

結局麺類かよ。確かに味と太さとかは違うけど成分は一緒だぞ。せめて米類にしろよ。

食券を買い、那実は食券を食堂のおばちゃんに渡しに、僕は席取りのため食堂をフラフラ歩いた。

「こつこつち、那実」

「あつ、竹須佐先輩、どうも。といつか僕は雑ですよ」

「そんな普通なツツコミするなよ、わかってるわかつて。ちょっとといじつただけ」そう言って竹須佐先輩はうどんをすすった。あんたもうどんかよ。隣を見るともう一つ空の器が置かれていた、形を見る限りこちらもうどんだな。

「あれ？ 誰かおつたんですか隣。もしかして上筒先輩？」

「いや、上筒さんはまた任務に行つたよ、残りの三年もな。そこはアズが座つてたんだけど、今アイス荒らししてるよ」

アイス荒らし？ 僕は気になつてアイス売り場へ近づいた。

そこにはアイスの山を手で掘りながら「これは違う、いやこれも

違う」とか呟くアズこと灘梓玖さん^{なだあずく}がいた。

「どうも灘さん、何してるん?」

「おっ先見くんこんちは」そう言ひつと灘さんは僕の耳元に近づき小さな声で「直感で当たりを探してるの。ちつと待っててくれ、今は三つ見つけたからあと一つだよね」

超能力をこんな軽い気持ちで使つてもいいのだろうか? 僕は呆れながらも一応礼だけは言つて、さつき取つた席に着いた。正面にいる一年生も腕を正面に伸ばし手を開きそれを上下に動かしている。すつごい怪しいな、おい。

その手の先を見るとティッシュが空を舞つていた。
いくら何でもやり過ぎだる、確かに風に乗つて飛んでるよう見えるけど、食堂内にはそんな風は吹いていないぞ、吹いているのは扇風機の風ぐらいだ。

「先輩、こんなところで能力使つていいんですか?」

竹須佐先輩は集中した面持ちを崩さずに答えた。

「こりうりう日々のトレーニングが大事なんだ、こいつはちょうどいい重さだしね能力的にも物質的にも。それにサッカーでもイメージトレーニングが大事だと言うだろ? あれといつしょだ」

サッカーと超能力を一緒にするなよ、あんたは物の区別が出来ないのか。全く一年になると超能力に対してもルーズになるのかな、この一人には危機感が足りない気がする。

それにしても那実の奴、どれだけ時間かかってるんだ? 食券渡してからおばちゃんがすぐ料理を作ってくれるだろ、それなのにかれこれ五分は戻つてこないぞ。

僕は再び席を立ち、那実がいる冷水機に行つた。

「いつまで待たすねん、アホが」

那実はコップを左手に持つて指を鳴らし、また違うコップと持ち替えて指を鳴らし、それを繰り返していた。

もしかしてこいつも超能力の乱用か?

「ちよつと待てよ。今かわいい子が使つたコップを探してくるんやから」「こつはやっぱり最低だな、そんなことに能力を使うなんて。

「おつ、これは食堂で彼氏と一緒に飯食べてるときに一年の牧瀬さんが使ったコップやんか、これはキープと」

キープなんてしなくていいから早く行くぞ、そうじゃないと灘さんが超能力を使って当てたアイスが溶けるじゃないか。

「早くせえや、お前のうどんものびるぞ」

僕が那実を急かすとコップを冷水機の横に置きポケットから食券を取り出した、しかも一枚。

こいつは本当にしようもない奴だ、呆れて物も言えないよ。食欲より性欲かよ。この変態野郎。超能力を与えてくれた科学者の方達もこの姿を見ると嘆き悲しむだろうな。

仕方なく僕は那実の手から自分の食券だけを取り、丼コーナーへ向かつた。

「おばちゃんビビンバお願ひ

「はいよ！」と震う声が響き、一分も経たないうちにビビンバは完成し、僕の目の前に置かれた。

「特に大盛りだからね、雑くん」

「マジで？ ありがとうおばちゃん」と言いたいところだけど、この人はおばちゃんじゃないんだよな。歴史の先生なんだよな。僕はあえて突っ込まずに無視をした。

「あつ 雜くん。いつもみたいなツツコミ! ちょうどいいよ」

もう面倒くさい、はやくまともな人間が一人でも戻つてきてくれないかな？ 三月さんとか三月さんとか三月さんとか。

もう僕一人じゃこんな日常からはみ出した奴らをコントロールできないよ。人と違うところはせめて超能力だけにしてくれ。

そんな憂鬱な昼休みをなんとかやりきり、授業は寝たきりで、放課後を迎えた。

僕は素早くカバンを担ぎ、寮には戻らずそのまま京都駅へ小走りで向かつた。行き先はもちろん病院だ。

そこは病院と言つても診療所くらいの大きさだ。理由は組織の人間しか利用しないから病室を何十室も作つても意味がないからだ。

しかし見た田は綺麗で、そこからは組織がそれほど古くないといふことが考えられる。

扉を開けると、切望の一人が楽しそうに会話をしていた。

「あつ、雑くんやありがとーお見舞い来てくれて」

「毎日面倒なのがありがとーいざこます、電車に乗ってわざわざここまで来てくれて」

一応一人は精神に支障をきたしているといつ理由で入院しているが、そんな雰囲気をまるで感じさせない。どちらかといつと学校にいるあいつらのほうが精神異常者だと思つてしまつ。

精神障害を起こしている一人を一緒に部屋に置くなんて危険じゃないかと思つていたけれど、一人の心のバランスがすぐくいいらしく、同室で治療中のことだ。三月さんの明の心、崎野さんの清の心、それらの状態がよくなつてはやく共に高校生活を送れることを望んでいますよ。

しばらく話をして、みんなでりんごを一個食べ終わり部屋を出た。

そして一番奥の部屋の扉を開く……がやはりいない。

あいつは本当に、一昨日腕を撃たれたんだからむづ少しつらい安靜にしてるよな、傷口が開いても知らないぞ。

「あら雑さん、天照さんならいなわよ」

「三月さん、あいつまた出歩いてるんですか？ 腕の怪我まだ治つてないのに。でもあいつやつたら自分で治せるか」

「それは無理よ」そう言って三月さんは口を手で覆つて微笑んだ。

「あの子は自分のことが嫌いだから治せないのよ

どういう意味だそれは？ まあいい、とりあえず向かうとするか。僕は三月さんに一度目の別れの挨拶をして病院出て、あの公園に向かつた。

全ての始まりの場所へ。

木々が揺れる小さく遊具もない子供ですら近寄らない公園。

そこを好むのは一匹の黒猫と容姿と性格が正反対な女子高生だけだ
る。

「おい、病院抜け出して何してるねん」

「別にいいじゃない、あたしの体でしょ。あなたに心配される必要はないわ」ベンチに座る天照はそう言つて膝元にいる黒猫をそつと/or>する。

「関係あるよ。お前があのとき僕の代わりに銃弾当たつてなかつたら、僕は今頃チーンやつたで」

「命の恩人に対する物のいい方かしらそれが」

カツコ付けたこと何て言わなければよかつたよ。本当にこいつはいちいちわざらわしい。

「崎野さんのことやけど許したつてくれへん、あの子も抱えてる物があるやろうし」

「別に恨んでもいいし、怒りもしてないわ。言つたでしょ？」

あたしは比較的あの子を好いているつて

そう言えばそんなことも言つてた氣がするな。お前以外と心が広いんだな、よかつたよかつた。

「ところで天照、言い忘れてたことあつたけど」

「何？」

「お前、仲間になつてほしいつて言つたやん」

「ああのことね。別にいいわよ、あたし一人で出来る限りするわ。あんなものをほとんど初任務で見つまつたら、そう言つ氣持ちを無くすのもわかるわ。それにあなたは」

「違うんや天照、聞いてくれ。こんな僕ですよ、よかつたら

何を緊張しているんだ僕は。相手は天照だぞ、顔はよくつても性格は最悪……でもないか。

「事件の中心人物を逃がすよつた僕でもよかつたらその仲間になつてもええ……で」

風が心地よく吹き、天照の長い髪がなびく。

「そういうところがいいんじゃない」

やつと僕の田を見て話したかっこつ、やつと笑つたなっこつ。僕
わざつこつ顔を見れると思つとこわからせりやつてやわつと思つよ。

「やわしへ、雑」

やつ詰えば崎野たんに田の返事聞くの忘れてたよ。毎田答えが
怖くてビクビクして過いすのが嫌だから今田いわはと思つたけれど
……まあ、こいか別にこのままでも。やつと、いの田常は続くんだ
わつし、僕と天照がいる限り。

大丈夫、きっと出来るだらつ。国を守るじとも、敵を守るじとも、
仲間を守るじとも。今ならそんな気がする。あの笑顔を思い出せば、
それだけでどうにかなるだらうなんていい加減な気持ちになる。や
つぱり単純なかな人の心つて。

決して最高の幸せとは言えないけど、思つていた以上に辛いけど
でもどうにかなつそつだ、普通の高校生もやつてゐるじとは違つても
思つてこじとはきっと一緒にだらつ。

ずっと続けばいこと思つこんな青春が、……超心理的青春が。

最終話 超心理的青春（後書き）

全40話、じこまで読んでいただき本当に感謝しています。
何かと問題点があつたでしうけれど楽しんでいただければこれ以上
の幸せはありません。

この物語には続きがありますし、伏線も沢山含ませていますが、いつ
たん終了とさせてもらいます。

またいつか青春超能力者達が活躍するときを待つていて下さい。
本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0675d/>

超心理的青春

2010年10月9日05時08分発行